
暴拳な天使と優しい悪魔

レオノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暴拳な天使と優しい悪魔

【Nコード】

N5819H

【作者名】

レオノ

【あらすじ】

自然の力を操る自然魔術士の主人公と超能力者たちが、殺人鬼に立ち向かっていくというストーリー。赤月市には、昔から特殊能力者が集まっていた。そこで主人公、幸乃はちょっとだけ変わった生活のんびりと送っていたが、あることがきっかけで邪殺屋という殺し屋になってしまう。幸乃ともう一人の殺し屋の少年は、平気で人を殺す少年を追うことになるが、幸乃はそのせいで次々と大切なものをうしなっていく。陰陽師、イズナ使い当等の魔術士ができます。《現在第二部です》 幸乃たちは日本でいう邪殺屋、エクソ

シストと呼ばれ、外国へ進出し、エクソシストと協力して殺人鬼を追うこととなる。しかし以前よりさらに裏切りにあったり、殺人少年と幸乃の間に絆ができてしまったりと前より状況が悪化し、幸乃はどんどん闇に転がり落ちていく。そして特殊能力を持っていない人間たちも関わってきて、世界までをも巻き込んでいく。

序章（前書き）

下手くそな文章ですが、立ち寄ってくれた方、ありがとうございます。

序章

午後一時。

ある中学校の校舎内に、少年はいた。ちょうど学校は昼休みの時間である。いつもなら昼休みは生徒たちの喧騒に包まれているが、不自然なことに今日はそれがなかった。

中学校は恐ろしいほど静まり返っていた。少年が廊下を歩く音しかない。

学校中は粘り気のある空気と鉄のような異臭に包まれていた。少年はそんな学校内に、あるはずの姿を探していた。

少年はやがて、足を止めて耳を澄ました。

この階のどこから、声がする。少女と見られる囁き泣きが、かすかに聞こえてきた。

少年は足元に視線を落とした。床は赤い液体で見渡す限りてかてか光っていて、その中には生徒たちが転がっている。

この学校にいるものはある一人を除いて、ほとんど死んでいるのだ。

ずたずたに切り裂かれたり、喉笛を何かに噛み付かれたり、内臓を引きずり出されたりしている生徒たちの体。

そして、少年はその一人を探していた。生き残っているのその一人を。

廊下に倒れ切り裂かれて血を流す生徒たちには、少年はもう見向きもしなかった。ただ、血のカーペットが敷かれた廊下をひたすら進んだ。

少年はようやく、三年六組の教室から啜り泣きを聞き、中に進入した。

やはり皆、死んでいる。窓ガラス、天井にまでも血が飛び散っていた。ここが特にひどい。

少年はそんな中で、薄笑いを浮かべた。心底愉快そうな笑いだつた。啜り泣きが聞こえてくる教壇に歩を進める。

少年が歩くたびに床に広がった血液がはねる。その音は教室にや

けに大きく響いた。

噉り泣きがぴたりと止んだ。

少年は教壇の前で足を止め、身をかがめて教壇の下を覗いた。

教壇の下にいたのは少女だった。ひざを抱いてうずくまり、恐怖と涙がにじんだ目で少年を見上げている。頬には涙がとめどなく流れていた。少女のひざや腕にはいくつものあざがあった。

「誰……」

少女がか細い声で言った。少年は何も言わず、物珍しそうに少女を観察している。少女はその態度に怯え、訊かれてもないことを訴えるようにまくし立てた。

「わ……わたしは何もしていないっ……気がついたら皆……皆死んでいたの……わたしじゃない、わたしは何も……」

激しく頭を振る少女に、少年はにやつと笑いかけた。

「すごいな」

少年は血まみれの教室に一瞥を投げた。少女が愕然としたように目を見開く。そのうち体を小刻みに震わせ、つぶやく。

「わたしは……わたしがっ……こっ殺したのよ……きっと……。
すごくなんか……すごくなんか……ないっ……」

少年はその言葉を鼻で笑った。

「すくない？すごいだろ、皆殺しにしたんだから」

「殺しは悪いこと……」

「殺したのはお前の能力だよ」

少年はさえぎり、少女の腕を掴んで教壇の下から引っ張り出そうとした。少女は抵抗したが無駄に終わり、引っ張り出されて惨状に向き合わされた。血まみれの教室から顔を背けようとする少女の頭を、少年は無理矢理教室に向かせた。少女がもぐくの少年は無視する。

「こいつらを殺したのはお前じゃない。お前の能力」

「わたしの……能力……？」

「そうだよ。すごいだろう。化け物みてえだな」

少年はあっけらかんと口にした。少女は一層蒼白になった。

「化け物……」

震える唇でつぶやく少女から少年は手を離し、黒板の前を往復してひとつの体を蹴り飛ばした。そのまま教室の出入り口に向かいながら、一変して吐き捨てるような口調で言った。

「化け物だよ。俺も。お前も」

少女はその背中を放心したように見つめる。少年は続けた。

「化け物なんていないほうがいいな」

少年はたたずむ少女に向き直った。少年の手にはいつの間にか黒い札のようなものがあつた。少女はそれがただの紙切れではないこ

とを本能的に悟り、身の危険を感じて一歩下がった。

「だからお前も死にな」

言い捨てられた言葉には、狂気と憎悪が含まれていた。

第一話：赤月市

わたし高橋幸乃^{たかはしゆきの}は親友の井上加奈^{いのうえかな}と学校の屋上にいた。

現在中学三年生。今年は受験だけど、まだあんまり気にしていない。加奈だって肌のお手入れとかに忙しく、勉強はあまりやっていないという。そのおかげで加奈はとても綺麗なのだけ。

屋上に吹き付ける風が私のセミロングの髪をなでる。加奈のロングヘアは微風でもさらさらと揺れた。

加奈は久しぶりの散歩に大はしゃぎだった。

「ねえー、早く行こうよー」と加奈がわたしの腕を引っ張り、快活に笑う。私も笑い返して、

「ちょっと待って、今風を起こすから」

と加奈を静めた。目を閉じて前に両手を伸ばし、加奈が私の腕にしがみついたのを確認して、私は風を呼び寄せた。風が私たちの周りに渦巻き、さらに重力も操って質量を減らすと体が20センチほど浮いたのを感じた。

目を開くと片手をさつと上に振り上げた。ぶわつと風が下から吹き上げ、私と加奈は空高く飛び上がった。落ちる前にうまく風に乗り、空中をすべるように進む。

わたしは自然の力を操れる、自然魔術士なのだ。自然のものならほとんど何でも操れる。風を呼び寄せ、空を飛ぶことはたやすい。私と加奈はこうしてよく、空で遊ぶ。

「久しぶり、やっぱ気持ちいいっ！」

加奈はわたしたちの住んでいる田舎町、自然の美しい赤月市あかつきしを見下ろしながら叫ぶ。ちなみに加奈は霊視能力者だ。透視や、人の心を見透かしたりすることができる。ここ赤月市にはなぜがそういう特殊能力を持った人たちが集まっている。

わたしたちは今、隣町の少しだけ都会のデパートに、買い物に行くところだった。隣町といっても結構遠く、山を越えなければならぬ。でも空を飛んでいけばあつという間についてしまう。

わたしたちは夏の始めの風を楽しみながら、雲の上まで上がった。赤月市の人に飛んでいるところを見られても問題はない。皆特殊能力を持っているので、そんな光景は珍しくもなともない。しかし、隣町の人に見られたらさすがにやばかった。

赤月市の人たちに特殊能力があるということは公にはおあやけされていないのだ。政府とかなら知っている。理由は特殊能力を悪用した事件が、ごくたまに起こるからだ。そういうとき、警察たちは捜査に困るので、政府はいちおう知っているのだ。知っているといってもほんの一握りで、最高機密だ。特殊能力を持っている人は赤月市民だけではないけれど、それも少ないと聞いている。

やたらに能力を使っではいけないのだが、ばれなければそれでいいとわたしは内緒で使っていた。しばらく下の雲の流れを見ていたが、加奈がふと思い出したように言った。

「ねえ幸乃、今朝の新聞の第一面のニュース、見た？」

「あー！見たよ見た」

第一面に載っていたニュースというのは、調布市のとある中学校で、生徒と教師のほとんどが虐殺されたという事件だった。わずかに生きていた生徒もいたがまだ昏睡状態らしい。なくなった方の死亡推定時刻はほぼ全員同じ。体中が切り裂かれ、見る影もなかったという。犯人は不明らしい。

そういえば約二ヶ月前、同じような事件が起こった。ほかの中学校で少年グループの八人が殺された。犯人の見当はついている。その日から行方が分からなくなっている、犯歴のある少年だ。過去に

犯した犯罪は殺人。仲のよかった子を階段から突き落として殺した。少年の行方はいまだ不明だ。

そして公にはなっていないがその少年の失踪後、相次いで全国に散らばった特殊能力者たちが殺害されているらしい。その少年も実は特殊能力の持ち主で、政府や警察は同一犯と睨んでいる。今回の事件もそうかもしれない。

わたしは言葉に怒りを込める。

「ひどい事件よね」

「本っ当許せない。最近の嫌な事件の犯人といい、皆逃げちゃうんだから。死刑よ！」

と、加奈は恐ろしいことを言う。しかし今回の事件の犯人は、はつきり言っただけならいいと思う。人間とは思えない残酷さ。許せない。

風がにわかに熱を持ったのであわてて怒りを静めた。能力は感情に反応するのだ。私たちはこんな感じで、普通とはちょっと違う生活を送っていた。

隣町が見えてきた。わたしたちはデパートの屋上の真上に行き、雲に隠れた。すばやく降りなければ誰かに見られてしまう。

わたしはわたしたちを支えていた風を消し、重力を元に戻した。あつという間に落下し、そのスピードをさらに速くした。地面すれすれで風を起こしてふわりと降り立つと、急いで店内に入った。屋上は関係者以外立ち入り禁止なので誰もいなかったのだが、屋上から店内に入ってきたところを店員に見られ、叱られてしまった。

わたしたちはそのあと、洋服を見たり、文房具を見たりした。デパートの一階のファーストフード店で、ポテトとハンバーガーも食べ、気がつけばもう夕方だった。

「そろそろ帰ろっか」

わたしの提案に加奈は賛成した。なので再び店員に見つからないように最上階に行った。息を呑むような美しい夕日が目に飛び込んできた。

「わー！綺麗ー！」

わたしと加奈は屋上のフェンスをつかんでオレンジ色の夕日に見とれた。夕日を見るなんて、とっても久しぶり。

徐々にあたりが暗くなっていく。

完全に沈むまで夕日を眺めていたかったのに、ふと向かいのマンションの屋上に誰がいることに気がついた。夕日を見ているのかなと思ったが、夕日には背を向けていた。逆光で顔は見えない。

なんだろうと見ていると加奈が突如わたしを引っつかんで伏せた。

すぐ下で爆発音がした。

第二話：デパート崩壊

私はぎょつとして悲鳴を上げた。デパート自体がぐらりと揺れたのを感じ、私と加奈はもう一度悲鳴を上げて身を寄せ合う。

夕日に背を向けている人がやけに気になって、私はそちらを見た。

どうやら同じ年くらいの少年らしく、その少年の肩には何か動物がしがみついている。少年はマンションの屋上のフェンスに飛び乗った。絶妙なバランスでしっかりと立っている。能力者かなと思いきや、立て続けに札のようなものを、私たちのすぐ下の階に飛ばした。

札の空気の摩擦音。直後の爆発音と爆風に私と加奈は三度悲鳴を上げ、噴きあがる黒煙から逃れるように転がった。

何かが破壊されるすさまじい音がした。さらに続く爆発音。

何？どうして…？

「幸乃！」

加奈が叫び、私をつかんだ。黒い煙が立ち込めるほうを見ている。加奈はそのある一点を指差した。少年のいる方向だ。

「あいつよ！あいつがやっている！」

加奈は霊視能力で黒雲を通して少年が見えるのだ。

もう一度、さつきより下のほうで爆発音がした。私は振ってくる小石などから腕で顔をかばいながら立ち上がった。下は大混乱だろう。さつきから客の絶叫が聞こえる。

私は少年を止めるべく、前に出た。風で黒雲を吹き飛ばし、視界を晴れさせる。

さつきの少年の姿が見えた。夕日はもう沈みきって、逆光ではなくなっただけ少年の顔もしっかり見えた。

少年は薄ら笑いを浮かべて破壊されたデパートを見下ろしていた。ぱっと見、優男だった。凡庸な顔立ちで、肌は異様に白い。その目の目と髪は栗色と黒の中間ぐらいの色である。優しいと思った瞳には、殺意と狂喜がきらめいている。その肩には薄茶色の毛並みのミニチュア・ダックスフンドがしがみついている。微風にふわふわの耳の毛をなびかせ、気持ちよさそうに目を細めている。

少年の唇が動いて何かを唱え、空中から黒い札を取り出した。デパートの二階あたりに狙いをつける。

あいつは特殊能力者だ。日本魔術士の黒陰陽師だ。

私はその札を投げるのを止めようとして、突風を吹かせ、少年に当てた。

少年はフェンスの上でバランスを崩し、危うく落ちそうになったがなんとか踏みとどまり、顔を上げてこちらを見た。目が合う。

「幸乃下がって！」

加奈が少年の殺意でも読み取ったのか、叫ぶ。私が出がったと同時に少年が札を投げつけてきた。目の前が爆発したが、突風をその地点に当てて爆風を防いだ。

私たちははって屋上の隅に逃げた。爆発したところの地面はなくなり、下の階がちらと見えた。黒こげだった。

なんてことを…ひどい。

「自然魔術士と霊視能力者が、てめえら」

ぎくりとした。

声の上から降ってきたのだ。

恐る恐る上を向くとフェンスの上にさっきの少年が立っていた。私たちが氷のような冷たい目で見ている。学生服のズボンとYシャツを着ていた。

私はぞっとした。

この少年は、異常だ。コイツはイカれてるんだ。ダックスはこぼれそうな大きな目で私たちを見つめ、少年のYシャツに必死にしがみついたが、とうとう少年の背中にずり落ち、哀れっぽく鳴いた。少年は背中に片手を回してダックスの背中の毛を掴んで持ち上げ、片手に抱いた。

「答えろ」

少年が低く命じる。ダックスは場違いなほどかわいいが、少年のペットだと思うと、そっちもイカれて見えた。私は勇気を振り絞る

と食って掛かった。

「そうだよ！にしてもなんでこんなことを…」

「なら死ね」

少年の目が笑った。

右手の中指と人差し指を立てて手刀を作ると、「きゅうきゅうにょりつりょつ急々如律令」と唱えた。その呪文の前にもほかの呪文を付けていたが、私には何を言っているのか分からなかったし、そこまで頭がさえていなかった。かろうじて陰陽師の呪文だと認識したくらいだ。

指の間に二枚の呪符と呼ばれる黒い札が現れた。

あれは…死の呪符だ。私は直感した。あたったら死ぬ。

私と加奈は怯えて何もできなかった。少年は怯えきるわたしたちを満足げに見、さっと札を飛ばした。

死ぬ…っ！

目を固く瞑った一瞬後、ばちばちっという電気のような音がした。ダックスが警告するように甲高く鳴く。

え？と目を開くと私たちの目の前に人型の紙がひらひらと落ちた。二枚あり、黒い呪符が張り付いている。少年が舌打ちし、フェンスの外側にジャンプした。少年のいたところに一枚の白い札が横切る。

少年は空中にとどまると私たちを恐ろしい目で睨んだ。私たちを殺すことをあきらめきれないのか、さらに死の呪符を飛ばしてくる。

しかし私たちはその前に誰かに引つかまれて、宙に浮いていた。私たちをつかんでいる方も少年だった。二人とも少年と呼ぶと分かりにくいのでこちらは少年Bと呼んでおこう。

少年Bは私たちに無言のまま白い呪符を貼り付けた。手を離すと私と加奈はゆっくり降下していった。その間に少年が飛ばしてくる呪符を、少年Bはすべて払いのけてくれた。

少年B…こっちは陰陽師だ。

地面に足がついた。空を仰ぐと少年と少年Bが戦っていた。少年Bのほうが強い。少年はすぐに追い詰められた。白い呪符が当たるたび、体に傷がついて血がほとばしる。少年はそれでも、自分の腕

の中でうずくまっているダックスに傷がつかないように、守っているように見えた。

少年Bの勝ちかと思いきや、少年の腕のダックスが甲高く吠えた。その鳴き声とともに黒い半透明の巨大な犬が出現し、牙をむき出して少年Bを襲った。

…え…。どうしてただの犬があんなことできるのかな…。

少年Bが身をかわしたときにはすでに、少年はダックスとともに消えていた。

第三話：邪殺屋

私は我に返り、破壊されたデパートを見上げた。すでに救急車や消防車が来ている。けが人が担架に乘せられた運ばれてくる。血まみれで皆意識がない。

「お母さん！」と叫んでいる子供がいる。女性が泣き叫んでいる。小さな子供が大声で泣いている。

あたりは誰かを呼ぶ声と、泣き声に満たされていた。

ひどい…。

私の目に涙がにじむ。加奈はすでに泣いていた。

そういえば少年Bは？上を見たがない。

後ろから肩を小突かれ、ぎくりとして振り返った。少年Bだ。長身で、いかにも女子にもてそうな顔立ちをしていた。しかし眼光は鋭く、冷たい。

「お前ら、無事か？怪我は？」

少年Bが尋ねた。その声は低く、澄んでいた。

「していないよ」

わたしと加奈が同時に言った。

「あの、さっきはありがとう。あなたは大丈夫？」

「俺は平気だ」

少年Bはそっけなく言うと、突如私たちを引つつかんだ。どこかの路地に連れて行かれ、少年Bはようやく私たちを離す。

向き合ったかと思うと、怒ったように言い出した。

「自然魔術士の女！お前邪殺屋じやせつやだろ？何で仕事をしないんだよ？」

じゃさつや？わけが分からない。きょんとしていると少年Bは盛大に鼻を鳴らした。

「お前、しきたりを破るつもりなのか。ならばこの場で始末してやる。しきたりを守らない奴は俺が許さない」

少年Bは身構えた。私はあわててちよつと待つてよ、と叫んだ。

「何よそれ？意味わかんない！邪殺屋つて何よ！」

「そーよそーよ！」

加奈はいまや怒っている。

「幸乃にわけの分からないことを言わないでよ！なんなのあんた？」

「誰かって？ふざけるな。俺は邪殺屋だよ」

「だから何なのそれ？そつちこそふざけないで！」

少年Bは眉をひそめた。私たちをしげしげと観察する。

「マジで知らないのか」

「知らないよ」

わたしは首を横に振った。

「聞いたこともない」

すると少年Bは人を馬鹿にしたように笑った。そして、また突然こんなことを言い出した。

「お前の親に会わせろ」

「…え？」

「親だよ。今すぐ」

「どうして？なんで親に会わせなくっちゃならな…」

「うるさい！」

少年Bが大声でさえぎった。

「早くしろよ。俺を連れて行け」

私は少年Bが怖くなって急いで風を呼び寄せた。

第四話：しきたり

私の家は一軒家で三階建てだ。家の前に着くと少年Bは私から離れた。加奈は不安そうだ。

私はおずおずと二人を家に入れた。この少年Bは命の恩人だけけれど、名も知らないし、信用できなかった。

少年Bは勝手に奥に上がりこむと、お母さんがいると見られるリビングに向かった。シチューのにおいがする。

「いい匂いー」

加奈が鼻孔をくくんさせた。

私と加奈はリビングに駆け込んだ。少年Bはリビングの入り口に突っ立っていたので私たちはその背中にぶつかってしまった。少年Bは気にも留めず、エプロン姿のお母さんとにらみ合っていた。

お母さんはまだ若く、優しい。お母さんは私と加奈を見る。加奈が会釈するとお母さんはにこっと笑った。

「加奈ちゃんいらっしやい。幸乃、部屋に行ってなさい」

「お母さん？この人と知り合いなの？」

お母さんは答えない。少年Bは失せろというように私たちを見たが、私たちは失せず、リビングのソファに座った。

お母さんは少年Bに座つてと椅子を指差した。少年Bは従順に座る。お母さんはその向かいに座った。

「それで？」

少年Bが言った。表情は相変わらず冷たい。

「なんでしきたりを破ったんだ？」

「しきたりなんて捨てたわ。ずっと昔にね」

お母さんがぴしゃりと言った。

「私の生まれる前からすでにそうだったのよ。あなたたちの一族

が現れた悪人どもをすべて排除してくれたからね。もう何世紀も出る幕がなかったのよ。私たちが出る幕はないということで、このしきたりはやめたのよ。今回もそうしてくれるんでしょ」

「馬鹿なことをぬかすな！」

少年Bががなりたてた。

「やめただと…よくもそんな…」

とお母さんをものすごい剣幕で睨みつける。

「ねえっ」

私は割り込んだ。

「なんなのしきたりって？」

お母さんは説明してくれた。

「あなたには言っていなかったわね。わたしたちの一族とこの子

の一族わね、悪い特殊能力者が出てきたら、排除するという仕事を代々担っているの。通称邪殺屋と呼ばれているわ」

「へえ」

初耳だった。

「私たちは仕事をしようとしたけどね、この子の一族が私たちが出てくる前にどんどん悪者を倒していったのよ。それで仕事がなくなっただの」

お母さんが少年Bを見た。

「あなたはまだ仕事をしているようですが、幸乃にはさせない。あなたと違って幼いころから能力の訓練をしていないんだから、危険よ。さあ、出てってちょうだい」

「あっそう。勝手にしろよ」

少年Bは立ち上がって吐き捨てた。

「言っておくが、俺はその幸乃とやらが殺されかけても助けない

からな」

お母さんの血相が変わり、加奈と私は硬直した。

「殺される？どうして幸乃が狙われるのよ？」

「あいつを攻撃したからだよ。俺が追っている、黒陰陽師をな」

少年Bは平然と言った。

「あいつは必ず来るぜ。でも俺は助けない。しきたりを破ったのが悪いんだ」

と、これ見よがしにリビングの入り口に向かう。お母さんはあわてて立ち上がるとその前に立ちふさがった。

「何があつたというの？」

厳しい口調だ。答えてくれなきゃ帰さない、それぐらいきつい声。少年Bは嘲笑するように答えた。

「デパートが爆破されたんだよ。で、偶然そこに居合わせたこいつらが、それを止めようとでもして、攻撃したんだろう。でもって、殺されかけたこいつらを、俺が助けたのさ。しかし二度はないと思え。じゃあな」

行こうとした少年Bを、またもやお母さんが引きとめた。

「待つて」

「なんだよ」

少年Bが胡散臭げに振り返る。

「その敵ってまさか、生徒虐殺の犯人なの？」

「違う。そいつは行方が分からないし、顔も分からない。俺が追っているのは二ヶ月前の少年グループ殺しの犯人だ」

私はショックを受けた。あの少年が。あのダックスをペットにしているあの少年がそうだったなんて！

「アイツは分かりきったことだが、イカれている。なぜか特殊能

力者を殺しまくるし、無関係な奴まで殺す。止めなければこれから先もずっと殺し続ける」

「そいつが幸乃を狙うと言っの」

「そうだよ」

「そんな！」

私は悲鳴を上げた。少年Bは嘲笑う。

「せいぜい逃げ回れ。アイツは逃げ足が速いからな、当分は捕まらない。お前は地下にでも逃げればいい。あとお前も。霊視能力者」

「いやだよ！助けてよ！」

「ならしきたりを元通りにしろ」

少年Bが鋭く言い放った。

「邪殺屋になると言え。そしたら守ってやるし、俺が鍛えてやる」

お母さんは蒼白な顔で私を見た。私はソファから立ち、震えながら少年Bに一步近づいた。

「何をすればいいの」

「まずは能力の特訓。そのあとは現れた特殊能力者の悪人を殺しまくるんだ。一生な」

「そ…そんな…」

「殺すなんて、嫌だ。」

いくら正義でも殺すのは嫌だった。怖いしそれに一生だなんて…重すぎる。

「そうね…」

お母さんが吐息をついた。

「幸乃が狙われるのなら仕方がないわ…しきたりを元に…」

「いやッ！」

私は絶叫した。加奈、少年B、お母さんがびっくりして飛び上がった。

「一生殺し屋なんて、嫌だよ。私は人殺しなんかになりたくない！ 平凡な、ちょっと不思議な力を持った人間で十分だよ！」

もう泣きそうだった。

「私はならない…絶対ならない！出てってよ！」

「そうかよ。勝手にしやがれ」

少年Bはそっぽを向いた。最初から期待もしていなかったらしい。

「奴は当分この赤月市に留まると思う。ここは靈力に満ちているからな。いつ襲ってくるかわかんないぜ。ま、俺の知ったことじゃ…」

「あたし…」

加奈がか細い声で言った。少年Bが黙って、加奈を見る。加奈は立ち上がっていた。

「あたし、手伝いたい」

「は？」

「あたしは霊視能力じゃなくて、攻撃も何もできないけど、あなたの手伝いをしたい。無差別に、ヒトをたくさん殺すなんて、許さない！」

加奈の怒りの声に、少年Bの表情が動いた。明るくなったのだ。

「マジか？」

「ええ」

「危険は知つての上だな」

「勿論よ」

加奈は決然としていた。お母さんは心配そうだ。

「加奈ちゃん、大丈夫なの？」

「はい」

加奈がうつむいた。

「理由もないのに家族を知らないヒトに殺されるなんて、ひどいことじゃないですか。さっき、デパートでそう人たちの心が見えました。辛くて、悲しくて、死にたくなるほど苦しい。そんな思いを、もう他の人たちにさせたくないんです。だから……」

「全くそのとおりだな」

少年Bが同意した。

「あの野郎、ヒトの妹を殺しやがって……」

私たちは息を呑んだ。少年Bは口をつぐみかけ、目をそらして続ける。

「妹だよ。奴に殺されたんだ。妹は邪殺屋だったんだ。妹はアイツを追いつ、俺は生徒虐殺の容疑者の手がかりを探していた。ついこの間のことだ。妹が殺されたのは」

少年Bは私たちが沈んだのを見て決まり悪くなっただけ。のん気そうに伸びをすると加奈を見た。

「まあいい。じゃお前、明日から訓練するからな。俺は宿でも探して…」

「宿なんてないわよ」

加奈が言った。

「田舎だもん」

「じゃあ泊めろ、誰か」

「あたしの家は親がなあ」

「じゃ、あんたの家はどうだ？」

少年Bがお母さんを見た。

「もし泊めてくれるなら、その女（私のことをあごでしゃくつた）を守ってやるよ」

少年Bは利用できる者はとことん利用するらしい。でもこれには大賛成だった。

少年Bは加奈に向き合う。白い呪符を渡しながら言った。

「窓とかに張って寝ろ。もしも奴が来たとき、結界が守ってくれる」

「ありがとう。あ、あたし、井上加奈っていうの」

「ふーん、よろしく。俺は土屋弘つちやひろしだ」

「よろしくね、じゃ、あたし帰るわ」

加奈は私の肩をぽんと叩いた。

「大丈夫。あたしに何ができるかわたらないけど、幸乃のことを死なせやしないわ。幸乃のことはあたしが守る」

「ありがと加奈」

加奈はこうして帰っていった。

「それにしても」

お母さんが土屋弘に尋ねる。土屋弘は勝手にソファに座ってくつろいでいる。

「なぜ敵は赤月市に？」

「さあね。俺の推測だがアイツは特殊能力者をすべて消す気じゃないかね」

「何ですって」

「だからこそ、少しでも早く奴を捕まえたい。そのためにも誰かに手伝ってもらう必要があった」

お母さんは黙ってシチューを三人分よそりはじめた。お父さんは今日は出張で帰ってこない。

「それに、あっちにも味方がいるし」

土屋が椅子に移動し、運ばれてきたシチューを今にも食べようとする。

「味方？」

お母さんがぎよっとする。

「あなたの親とかは？手伝ったりしないの？」

「あいにく、病気で動けないんだ。なんていうのかな、邪殺屋を恨んでいる奴から呪いをかけられたらしくて、今一人で邪殺している。味方は恐らく犬神使いだ」

土屋は話を中断し、シチューを食べ始めた。私も座って食べた。

少し惨めだった。断つたらずかつたかな。加奈は逃げずに殺人犯を捕まえたいといった。私は逃げてしまった。怖かったから。

でも、とりあえず土屋弘は私を守ってくれるといった。

安心だ。

そう思っていた。

第*話

*

*

*

少年とシェパード犬は赤月市を囲んでいる山の中にいた。

少年は傷だらけで、体中から血を流していた。おぼつかない足取りで、木につかまりながら前に行く犬を追いかける。少年には今、傷を治せるだけの力はなかった。犬はたまに少年がついてきていることを確かめるように、何度も止まっては振り返り、倒れそうになるとその体で支えた。

もう月はいり、視界は悪い。少年にとっては辛かった。

やがて犬は足を止め、不安そうに鼻を鳴らして前に開けた場所を眺めた。

神社の境内である。

少年は犬を追い越し、石畳の地面にひざをついた。肩で息をし、頬の血を手の甲でぬぐう。犬はソレを労わるように、おずおずと寄り添った。少年はその犬を一瞥し、かすれた声で命じる。

「神社の中を見て来い。誰もいなかったら休むぞ」

犬はまるで人間のようにこくんとうなずくと、急いで本殿のほうにかけて行った。

犬が見えなくなった後、少年は犬を行かせたことをすぐに後悔した。

誰か来たのだ。鳥居の向こうから現れ、こちらに気がついたのか近づいてくる。背は低い。

恐らく巫女だろうと少年は思った。緋袴ひのはかまという赤い袴をはいていることから、そう思ったのだ。

少年は警戒しようとしたが体に力が入らず、力尽きて倒れた。

巫女ははじめたように少年に駆け寄り、脇にしゃがみこんだ。

巫女は子供だった。何歳かはよく分からないが、その小さな体から靈力を感じる。

巫女が軽く息を呑んだ音が聞こえた。こちらの正体に気がついたらしい。しかし何のつもりか、巫女はこっちに手を伸ばしてくる。

少年はかろうじて意識を保ち、ポケットに入れておいた黒い呪符を握り締めた。

触るなど言いたかった。触れたら殺すぞと脅してやりたい。こいつは化け物だ。俺と同じ力を持っている。特殊能力を。能力を持っている人間は俺が殺してやる。

呪符を取り出す。巫女に貼り付けるべく、少年は腕を上げようとした。

「待つて」

巫女がそつとその腕を抑え、あどけない優しい声を出した。呪符を少年の手から抜き取り、こう言う。

「今、手当てをしますから…」

と、澄み切った声で。その言葉に少年は驚いた。

信じられなかった。この巫女は自分の正体を知っているにも関わらず、自分を手当てしようとしている。

身の危険は感じなかった。いつもはこんなことないのだが、少年は少しだけ安堵する。

犬が転がるように戻ってきた。

巫女は犬を見ると、悲しげに微笑んだ。

第五話：情報

土屋弘が来てからしばらくたった。朝起きると必ず顔をあわせるが、会話はほとんどしなかった。土屋は学校の行き帰りを送ってくれ、放課後になると加奈を訓練するためにどこかに出かけていく。

放課後は一人、暇だった。吹奏楽部の夏のコンクールのための練習も、あまりはかどらない。私は少し寂しい思いをしていた。

一方で加奈は元気だった。訓練の時のことを面白く話してくれたり、叱られたときのことを話してしょぼんとしてたりした。でも加奈は役に立てることがうれしいようだった。

今のところは何も起こっていない。

私が部活のとき、二年の後輩にクラリネットを教えていると、まだ部活が終わっていないのに、加奈が立ち上がった。

「どうしたの？」

私は加奈に声をかける。

「あのね、奴の手がかりが昨日見つかったの。今日その周辺を探しに行くんだ。だから幸乃も早く帰ろう。送っていかなくちゃ」

「私はいいよ。最後まで部活をやっていく。今日は送ってかなくていいって土屋にいつて」

私は笑みを搾り出した。加奈は、えっ、と声を上げる。

「だ、だめだよ。もし幸乃の身に何かあつたら……」

「いいの。大丈夫。私だっていちおう自然魔術士だし」

「でも」

「いいの。後輩にクラリネット教えたいし。いつてよ」

少し突き放すような言い方になってしまった。加奈はとぼとぼ土屋弘の元に行った。私は吐息をもらした。やっぱりちよっと、寂しかった。

今日は久しぶりに一人で帰る。と思っていたのだが、下駄箱のところで知った顔を見つけ、その人呼んだ。

「優介っ」

優介……田中優介とはわたしの幼馴染で、大金持ちだ。この田舎に派手な日本風の豪邸をどっかりと建てて、ひととき目立つ。大金持ちになった理由は、宝くじで連続で億単位の金を当てたかららしい。せこいことに、優介が未来予知して当てたのだ。すごく嫌味な奴だけど、顔立ちが整っていることから女子によくもてる。

優介は前髪をかき上げながらふっと私を見た。

「なんだ君か」

相変わらず気取った口調だが、優介にはそれがあっていて、それじゃないと逆に不自然になる。

「なんだ、って余計だよ。ね、一緒に帰ろうよ？」

「僕は別にかまわないが。いつもは井上と帰っているじゃないか」

「い……いいでしょ別に。いいから行こう」

私は優介を押して学校から出た。

古い商店街を抜け、周りに畑しかない田舎道に出た。ここはいちおう通学路となっているので、前後には生徒がいて、能力遊びとかをしている。優介は畑を見ながら、

「この前デパートで爆破事件があつたな」

と言った。私はぎくりとしたが、

「うん、それが？」

と訊く。優介は私に目を転じた。

「君はその場にいたらしいな」

「うん……どうして知っているの？」

「イズナだよ」

優介はスクールバックにキーホルダーのように取り付けている竹筒を手に取り、ふたを開けた。中からねずみぐらいの大きさの、二つの尾の狐が出てくる。この魔法生物はイズナという。優介はイズナ使いという、日本魔術士なのだ。

イズナ使いは未来を見通したり、呪いをかけたりできる。そして、他のイズナ使いに呪われた人から取り付けているイズナを退けることができ、時には富をもたらしてくれるらしい。

「何か不吉な予感がしたからイズナをそっちに行かせていたんだ。デパートを爆破した犯人、黒陰陽師のことだがこの間、友人がそいつに会ったそうだ」

「えっ」

私は足を止めた。優介は手のひらでイズナを遊ばせながら私を見た。

「どうして私に？」

「君は邪殺屋の血筋だろう。それに他の邪殺屋もここに来ているそうじゃないか。教えてやろうと思ってね。近くの場所を破壊され

るとはつきり迷惑だ。早く捕まえてくれ」

なるほど。優介には何でもお見通しというわけだ。優介はさつさと歩き出したので、私は慌ててついていった。

「ねえ、そいつのこと、何か知っているの？」

「いや。興味がないから知らない」

「そう……」

「じゃあ僕は急ぎの用事があるから先に行くぞ」

「うん……ばいばい」

優介は足元にイズナを放つと、何か呪文を唱えた。イズナが小さく鳴くと、足元から白い炎が吹き上がり、それが消えたときには優介とイズナも消えていた。無論地面には焦げあとはない。私はのろのろ歩いた。

優介の友人があの子に会った。加奈たちに言わなくちゃ。でも優介はその友人が誰なのか言わなかった。誰なのだろう？聞き忘れ

てしまった。

「幸乃先輩！」

二年の後輩に話しかけられ、びっくりした。美春ちゃんだ。明るくて、元気な女の子。走ってきたのか、少々息切れしている。

「一緒に帰りましょうよ」

「いいよ」

美春ちゃんが私の横に來るとにこにこした。

「ね、先輩。今一緒にいた人って、田中さんですよ？一番もてる男子ナンバーワンの！ひよっとして彼氏ですか？」

「違うよ。幼馴染なの」

私は笑って否定する。美春ちゃんといるとたちまち気分が明るくなった。

「美春ちゃん、夏のコンクール、がんばろうね!」

「はいっ!でもまだ先ですよ?二泊三日ですし、今からでもわくわくしちやいますね?」

「だよねだよね」

「ん……」

美春ちゃんがいきなり笑顔を消した。私はどうしたのと首をかしげる。

「先輩……何か邪悪な気配がしません?すごく近く……」

言葉はそこで途切れた。美春ちゃんが甲高い悲鳴を上げて、突然何かにはじかれたかのように右の畑に吹っ飛び、美春ちゃんはやわらかい土の上に倒れこんだ。

「美春ちゃんっ?」

私は慌てふためき、そっちに行こうとしたが不意に体が浮いた。何がなんだか分からないまま10メートルほど引き上げられる。体

はぴくりとも動かなかった。

目の前に、あの人殺しの少年がずっと現れた。最初は私には気にもとめず、下のほうをじろじろ見ていたが、やがてこつちを見た。恐怖のあまり、私は瞬きもできなかった。そんな……！ よりにもよって土屋たちがついていないときに現れるなんて！

少年は残忍そうに笑った。肩にはやっぱりダックスがしがみついている。前のように半分ずり落ちていて、引き上げてくれというように少年の耳元でやかましく吼えた。少年は無視した。

「この前はよくも邪魔してくれたな。お前」

低くも高くも無い声のトーン。人をぞつとさせるような狂気に満ち溢れていた。私はまだ硬直していた。

「せつかくあのデパート全壊にしてやろうと思ったのによ。お前がいなけりや土屋弘とかいうストーカー野郎にボロクソにされることもなかったのに」

少年が私を検品するように眺める。そして、ふと気がついたようにちよつと目を大きく開く。

「お前邪殺屋だな。あの馬鹿野郎の仲間か。どうりで気に入らねえわけだ」

少年は下で悲鳴が上がったのでそちらに一瞥を投げた。帰りの生徒たちの声だろう。私はかろうじて確認した。

「ぶっ殺してやるよ、てめえ。バラバラにして、下の連中に内臓ぶっかけてやるか？」

少年がいかに悪人のようににやつと笑った。優男っぽいのに、ぜんぜん優しくない。恐ろしい。怖い。

少年がポケットから黒い呪符を取り出した。

「本当はこの呪符、木とかを切るのに作ったんだけど、特別に前に使つてあげるよ。木を切るように人間を切ったらどうなるか、見るのが楽しみだぜ」

少年が私の腹に呪符を貼り付けようとした。

第六話：襲撃

感情が能力に反映した。畑の土がぶわっと浮き上がり、目にも留まらぬ速さで少年に向かってきたのだ。

少年は真顔になると私から飛びのいた。私は落下したが、風を起こして何とかアスファルトの道に叩きつけられずにすんだ。

少年は手刀を作るとその手を掲げた。

「朱雀・玄武・白虎・勾陳・帝久・文王・三台・玉女・青龍」

手刀を四縦五横に滑らせながら少年がそう唱えた。畑の土が静止した。バラバラと下に落ちる。

今の呪文は九字だ。一般的には『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』が用いられる。今の九字は古く、鎌倉期に使われたものであると伝えられている。

私はともかくその時点で逃げ出していた。逃げなきゃ…！

少年は怒鳴り声が追ってくる。

「逃がすかよッ！」

雲霧雷電・霹靂今下・急々如律令！
うんむらいでん
へきれきこんか

ぱりぱりつとすさまじい音を立てて私のすぐ近くに雷が落ちた。
雷まで黒かった。

私は悲鳴をあげ、頭を抱えながら疾走した。

黒い影が私の目の前に降り立った。私はつんのめって止まる。

ダックスだ。私を止めようとしても言うのか、立ちふさがる。私は
脇を通って逃げようとした。

犬が真つ黒い光を放って、むくむく膨れた。みるみるうちに大き
くなり、シェパード犬…警察犬の種類の犬になった。

私は戸惑ってしまつて隙ができた。犬が私に飛び掛ってきて、ま
ともに胸にぶつかった。私はおかげで押し倒された。犬が勝ち誇つ
たように吠える。私は犬をどかそうと大暴れしたが、犬の体重が重
くてとけられない。

少年はきつと近くまで来ている。死ぬ。殺される。

「助けてっ！」

私はいつの間にか叫んでいた。

シェパードは私を鋭い目つきで睨みつけ、私ののだるなをかもつと口を開いた。鋭い牙が並んでいる。もうだめだ…！

「待てよ」

少年の声がすぐ近くでした。シェパードの動きが止まり、多分ご主人様のほうを見た。

「そいつは俺の獲物だ。どけ」

犬は怒ったように吠えまくり、前足で私の肩の辺りをこする。少年はまるで犬の言葉が分かるように応酬した。

「うるせえよ。晩飯やんねえぞ」

犬がまた吠えたかった。

まさかの仲間割れかと思いきや、私の足のほうから炎が襲ってきた。ただし、私すれすれで、犬は私から飛びのくと、あわてて伏せた。

私は炎が消えるとチャンスとばかりに飛び起きた。走ろうとしたが私の前に優介がいたので正面衝突しかけた。

優介の手の平にはイズナがいて、少年のほうを向いていた。

「何だてめえ？俺の邪魔をするな！」

少年は案の定、ぶちギレた。

優介は少年が飛ばしてきた呪符のほうにイズナをむける。イズナが真っ白い炎を呪符に向かってはいた。呪符は燃え尽きてしまった。

少年はふと優介を見つめ、愕然としたように目を見開いた。

「まさか…田中優介か？」

え……。知っているの……？

私は優介にしがみつきながら、優介の横顔を見つめる。優介は嫌味たらしく笑った。

「そうさ。何で知っているんだ？」

「知ってるに決まってるだろうが！」

少年は半ば怯えたようにわめいた。

「くそっ……じゃあお前はその女が殺されるのを防ぎに来たってわけか？」

「それは偶然だ」

優介は平然と言った。

「外が騒がしいから見に来たんだ。僕の家が近いんだ。戦いならよそでやってくれ。壊されたらたまったものじゃないからね」

嫌な奴だ。

少年はその言い草に啞然としたが、すぐに気を取り直した。

「ほう。ならいい。てつきりてめえを敵に回したと思ってあせったぜ！噂どおりの奴だな…馬鹿犬、ひとまず撤退するぞ」

少年はダックスの姿に戻って、あわてて自分の方にやってくる犬を片手で受け止め、つむじ風とともに消えた。

私はへなへなと座り込み、今頃わつと泣き出した。

第七話：邪殺屋入会

私は家にすっ飛んで帰った。あの少年の残忍さといい、犬の変化といい、怖かった。私は廊下を歩いていたら土屋弘を弾き飛ばし、ソファに座っていたお母さんに抱きついた。

涙がかけれるまで泣き叫び、嘆いた。

ようやく泣き止んで、いまさら抱きついていた人が加奈だという事に気がつく。加奈は私をずっと抱きしめてくれていた。

「ぎゃあぎゃあ、うるせえなあ」

土屋がほざいた。

「うるさい！」

私は机の上にあった水の入ったコップを引つつかみ、コップごと土屋に投げつけた。どうなったかは見ず、ティッシュで涙と鼻水を拭く。やっと落ち着いて椅子に座った。加奈が私の隣に座り、優しく声をかけてくれる。

「何があつたの？幸乃」

「加奈…」

私はまた泣きそうになったが、必死に話した。

「あ、あいつが私を殺そうとしたの。いきなり襲ってきて…でも…」

「何イ？」

土屋弘が髪から水をしたたらせながら身を乗り出した。

「奴がいたのか？石橋が？」

「石橋…？」

「デパートを破壊した犯人の名前だよ。石橋健いしばしけんっていうんだ」

「…そうよ。その石橋が…でも…」

「あーあ、お前が一人で帰るなんていうから、そういう目にあうんだぞ、分かってんのか？」

「うん…でも…」

土屋弘は加奈を見た。

「あの野郎、俺らが来るってことを察知して逃げたんだな。どうりで手がかりが消えているわけだ」

「うん。ねえ、幸乃はどうやって石橋を撒いたの？」

よくぞ訊いてくれた。私はそれがいいと思ったのだ。

「あの…優介が助けてくれたの」

「え？あいつが？」

「ユースケえ？」

土屋がひっくり返った声を出した。

「ユウスケってあの？田中優介？」

「うん。ねえ、なんで石橋も、土屋も優介のことを知っているの？」

「あいつは有名人なのさ」

土屋が興奮したようにソファアの周りをぐるぐる回り始めた。

「日本魔術皆で知らねー者はいねえよ」

「どうして？」

「あいつ、特殊能力者で日本最強なんだよ。あ、世界でもほとんどそうかもな」

「え、ええええええええ？」

私と加奈はマヌケな叫び声を上げた。私は口を両手で覆う。

「そうなの？そうだったの？」

「そう。知らなかったのかよ。馬鹿じゃねえの」

土屋は呆れたように言った。

「そいつの友達かよ」

「幼馴染なの」

「ふうん」

「ねえ、私、能力鍛えたい」

私はさすがに言った。

「教えてよ。もう、一人じゃ歩けないよ」

「嫌だね」

土屋は口角を上げて笑った。加奈は驚いたように土屋を見る。土屋は足を止め、私を見据えた。

「俺は石橋を捕まえることに協力する奴にしか能力の鍛え方を教えない。護身術を教えている暇なんて、ないんだよ」

「捕まえるだけで殺しはしないの？」

「いや、抵抗したら殺す。最終手段だな」

「そんな…」

「教えてほしくば邪殺屋になるんだな」

土屋は笑みを消し、ソファーに座ってふんぞり返った。加奈は尖った声を飛ばす。

「何だよ？ ひどい！」

「こいつに護身術を教えている間に、他の人がたくさん死んでも

いいのか」

加奈はぐつと押し黙る。私は土屋弘から目をそらした。

どうしよう。このままじゃ私、石橋健に殺されちゃう……。でもだからといって殺し屋になってもいいのかな……。いくら悪人でも人間だ。だけど生かしておけばたくさんの人が死ぬ。

「幸乃……」

加奈が私の肩を抑えた。

「無理しなくたっていい。いくら人殺しでも殺すのは怖い。でも、それなら殺さなければいいじゃない。説得すればいいのよ。いくらひどい奴だって必死で説得すれば分かってくれる。ね？」

私は元気付けられた。決然として土屋を見る。

「私、なるよっ！ 邪殺屋になる！」

「はい、決まりー」

土屋はそっけなく手を叩き、立ち上がった。

「明日、お前ら学校休みだよな。朝早くから訓練開始するぞ」

加奈が帰ったあと、私はふと、優介の友人が石橋健という気違いに会ったといっていたことを思い出した。それを土屋に告げると土屋は表情を険しくした。

「何？もつと早く言えよ！会った奴は誰だ？」

「さあ。聞いてないよ」

「聞け！今すぐ！」

私はあわててケータイ電話を引っつき、優介に電話をした。優介はすぐに出てきた。

『君か。何か用か』

いかにも面倒くさそうな声だ。

私はてきぱきと問いを飛ばす。

「ねえ、デパートを壊した奴に会った子って、誰？」

『ああ… 赤月神社の神主の娘だよ』

赤月神社とはとても古い神社で、山の少し中のほうにある。

「娘さん…？」

『ああ。巫女だ』

「学校には通ってるの？私たちの学校に」

『通ってはいいるが今は休みを取っている。巫女の霊力を鍛えるために修行中だ。夏休み前には戻るといつていたから約一カ月後だ』

「それまでは会えないの？」

『ああ。修行中だからな。名は山口愛だ。やまぐちあい悪いがもう切るぞ』

優介は一方的に電話を切った。

土屋に報告すると、結局一ヶ月待つということになり、この話は終了した。

私はテレビをつけてニュースを見始めた土屋にある質問をした。

「ねえ、何で石橋は特殊能力者を殺すの？」

「さあな」

土屋は私のほうを見ずに言った。

「知らねえよ」

「そ」

私はとても気になった。

「…ん」

土屋の口から一文字出た。テレビのほうに少し身を乗り出す。

「どうしたの」

私は土屋の視線を追い、テレビ画面を見た。殺人事件のニュースだ。夫婦が殺されたようだった。場所は調布市…調布市？

「調布市って！」

私は思わず立ち上がった。

「生徒虐殺事件があったところじゃない！」

土屋は画面を食い入るように見つめている。死因は不明。外傷は多数あったがどれも致命傷ではない。

「生徒虐殺の容疑者と、同一犯じゃない？」

私は土屋をさつと見て大声を出した。

「…いや…犯人は恐らく石橋だ」

「どうしてそんなこといえるの？こんなに近くで起こったのに？」

「だって死因は不明だって書いてあるじゃないか。死の呪符は痕跡は何も残らないから、必ず死因は不明なんだよ」

「なら偶然？石橋が調布の人を殺したのは？やっぱり生徒もアイツが…？」

「しかし今考えても仕方がない。とりあえず奴を捕まえればすべて分かることだ」

土屋はテレビを消すとソファーに寝そべった。寝る気らしい。なんとのおんきな奴かと私はあきれ返った。

第八話：殺人鬼の犬

「きゃああつ！」

私は木の根っこにつまづいてひっくり返った。すかさず土屋弘の怒号が飛ぶ。

「てめえ、やる気あんのかよ！敵に後ろを見せるな！周囲にもつと気を配れ！」

私と加奈は山の中で敵から身を守る訓練をしていた。私は土屋が飛ばしてくる呪符をよけて、たまに呪符のほうに攻撃を飛ばす。加奈は軽やかに呪符をよけ、心配そうに私を見守った。

風速を調整したり、水を呼び寄せ自由自在に操ったりした。そのような訓練を三時間ぶっ通しでやり、私は土屋に休ませてくれと泣きついてようやく休憩時間となった。

私と加奈は背の低い草の間から突き出した岩の上に座り込んだ。くたくただ。汗びっしょりで、いくら水分を補給しても足りない。こんなに疲れたのは初めてだ。

私は加奈にこっそり訊いてみる。

「いつもこんな感じなの？」

「うん。そうだよ。でも強くなると思っていると嬉しいかな」

「そっか」

「でもまだまだだな」

土屋は聞いていたらしい。木の上に座って話しかけてくる。

「石橋はあんま強くないけど、お前はまだまだ力不足だ」

「え？強くないの？」

私は眉をひそめた。

「てつきり化け物みたいに強いのかと思ってたんだけど」

「化け物だよ、あいつは。強くはなくてもあいつは死の呪符を使

う。死の呪符に一回でもあたったらアウトだからな。ある意味では最強だよ」

なるほど、死の呪符を使っていたから強く見えたのか。

「しかも奴には味方がいるし、捕まえにくい。ちっ、あいつ、誰なんだよ……」

土屋は悪態をつく。私は眉根のしわをさらに深めた。

「味方ってあの犬？ たかが犬でしょ？」

「たかが、じゃねえよ」

土屋が苦笑した。

「ありや、人だ。犬じゃねえ」

「人？ 犬でしょ」

「人が犬に化けているんだよ」

土屋が馬鹿を見るような目を私に向けた。

「犬神使いだ。犬に化けたり、自分に取り付いている犬の霊を操ったりなどができる。奴の犬は恐らくメスだ」

「そんなことできるの」

「できるわ」

「メスってさ」

加奈が身を乗り出し、人差し指をあごにあてた。

「彼女じゃないの？人殺しとなった彼とともに道を歩もうと決心した、彼氏思いの彼女！アイツが肩に乗せているのも彼女を信用しているからよ！ああ、そういうのなんかいいな。うつらやましい」

「違う」

土屋が加奈の空想を平然とぶち壊した。

「アイツが肩に乗せているのには理由がある。犬神使いは宙に浮くことができないからだ。あいつは俺が来るとすぐに逃げる。もし石橋が犬を下において一人で浮いていたら、逃げるのが遅れちまうだろう。それを恐れて肩に乗せているんだ。ダックスだと軽いし、肩に乗せるのにちょうどいいからな」

「ふうん、頭いいね」

加奈は皮肉をいうように言った。

「アイツがなぜあのメス犬を信用しているかは不明だ。ってかあの犬、いつの間にかいたんだ。ついこの間、いきなり……」

土屋は急に口をつぐんだ。考え込むような表情をし、ぎょっとしたように目を見開いた。

「まさかあの犬……」

「何？」

私と加奈は同時に言った。

「生徒虐殺の犯人かもしれない」

「え　　っ？」

「事件の起こった次の日から一緒にいたし。そう、お前らと始めてあった日だ。俺は調布市あたりからずっとあいつをつけていたんだ」

「そんな……」

「今朝の新聞に載っていたけど、虐殺事件が起こった中学の生徒が一人、足りないらしい。生徒の身元はすべて分かっているようだし、その消えた生徒が誰だか警察は把握しているはずだ」

土屋はそういうと訓練はこれまでだと告げた。

「俺は警察のお偉方に会って、いろいろ調べてくる」

「知り合いがいるの？」

「まあな。特殊能力がからんだ事件を調査している組織が警視庁にあつてな。犯人を捕まえるのはたいてい俺がしてやってるから知り合いなんだよ」

そついい残すとさつさで行ってしまった。

私たちは顔を見合わせ、自主練習を始めた。

第九話：転校生

休みが明け、私と加奈は最強の優介を盾にしながら登校した。優介は朝からイズナを肩に乗せている。優介とイズナは大の仲良らしい。土屋はまだ帰ってきていないので、私たちは優介といえるのだ。

生徒は中学三年は十五人ほどしかいなくて、全校生徒合わせたら40人ちよつとしかいなかった。

がらんとした教室は風とおりがよく、涼しい。私と加奈は二列に並んだ席の前の席に、隣合って座った。

クラスの田舎のギャルは朝からうるさい。

わたしはその中の一人のギャルが、転校生がどうのこうの言っていることに気がついた。

「転校生？来るの？」

私が一人に尋ねると、ギャルは、うん、と言った。

「てか、朝いきなり先生に言われたー、どんな子だと思う？珍しい

くなくない？」

先生が来た。若い女教師、山下先生に続いて、女の子が入ってきた。女の子は雪のように白い肌をしていた。目はせわしくなくきよきよとしていて、前髪は目にかかっている。ポニーテールは低めの位置で、さらさらだった。

加奈は少し顔をしかめている。先生は黒板に女の子の名前を書いた。

《宮村 小夜子》
みやむら さよこ

先生は一人だけ笑顔で、クラスに呼びかける。

「お父さんの仕事の都合で急に引っ越してくるようになった、宮村小夜子さんよ」

クラスの反応はない。宮村さんは怯えるように青白い顔のまま、クラスを見ようとしなかった。後ろの席のギャルが「暗あゝ」といったのが耳に入った。

宮村さんが加奈の隣の席に着いたと同時にチャイムが鳴って、十分休みの時間となった。

加奈はわたしをつかむと廊下に出た。私はいぶかしむ。

「どうしたの加奈」

「……あの子、変よ」

加奈が眉をしかめたまま言う。

「変な……なんというか……異様な霊力を感じるの……」

霊力とは特殊能力者が無意識のうちに発する気のようなものだ。
特殊能力者は体に流れる霊力を使って能力を使うのだと言う。

「ええ？」

私はともかく驚いた声を上げた。

「邪気に近いけど……違う……」

「それって石橋の仲間ってこと？」

「分からないわ、探りを入れてみましょう」

私たちが教室に戻ると、クラスのドS男子たちが宮村さんにちょっかいを出していた。

「ちよつと！よしなさいよあんたたち！」

加奈が怒鳴ると男子は首をすくめ、さっさと失せた。私と加奈は笑顔で宮村さんに声をかけた。

「あたし、井上加奈っていうの」

「私は高橋幸乃だよ。よろしくー」

宮村さんはすごく小さな声で「よろしく」といった。おずおず顔を上げて私たちを見る。

私は笑顔のまま続けた。

「宮村さん、どこから引っ越してきたのー？」

「岩手……」

調布市ではなくてすこしほっとした。

「岩手がー。じゃあじゃあ、家どこにあるの？」

宮村さんは細い指で赤月神社の方向を指した。

「ふーん。そうなのー」

どうやら本当のようだ。すらすら答えているので恐らく。

あのあたりにはアパートもあるので、そこに引っ越してきたのだろつ。

「それにしてもこの辺に引っ越してくるとは珍しいわね。お父さん仕事何しているの？」

加奈が探りを入れると、宮村さんは相変わらず表情のない顔で答

えた。

「不動産の仕事。隣町の大山市で仕事をしているの。赤月市家のほうが大山市の家よりも安かったから、ここにしたの……」

「あー！なるほどね！」

加奈は私をちらと見て、かすかに首を傾けた。

多分大丈夫。

私は安心しきり、宮村さんに部活のことを話した。

「ねえ宮村さん、部活入る？」

「……まだ決めてないかな……」

「じゃあさ、吹奏楽部にしない？まあもうすぐ引退なんだけどね……。あのね、夏にコンクールがあつてそこでマネージャーみたいな役割をする人がいなくて、ちょうど困ってるんだ。よかったらやらない？」

「いいと思う！ 私たちも吹奏楽部だから、ね？ 入ろうよー」

加奈ものつてくる。宮村さんはそのりがおかしかったのか、くすつと優しく笑ってくれた。

この子、案外綺麗だなー。

私は宮村さんと仲良くなりたくなった。

そして放課後にはすっかり仲良くなっていた。お互いのことを名前呼び合うくらいまで。

小夜子はよく笑う子で、みんなの前に出るときとは大違いだった。

部活を案内しているとき、チューバという金管楽器がふわふわとひとりでに浮かんで、目の前を通った。

私と加奈にとっては珍しくもない光景だが、小夜子は勿論初めてだ。ひゃつと小さな声をあげ、愕然とする。私たちは噴き出して、笑いながら特殊能力のことを話した。当然、市外の人には話さないように、と念を押した。小夜子はとっても驚いたが、素直に、

「すごい」

といった。

「いいなあ。わたしにもそんな力があつたらいいのに」

「今度さ、私たちと空中散歩しない？風でさ」

「いいの？」

「勿論」

「わあい！ありがとう！楽しみにしてるね」

小夜子はにこつと笑った。

「わたしはそろそろ帰るね。今日はありがとう！」

「んーっ。そっかー。残念」

加奈は本当に寂しそうだった。

「じゃあね」

「ばいばーい」

私と加奈はその後、クラリネットの練習をし、帰ろうとすると校門の前で土屋弘が立っていた。数人の女子がきゃーきゃー騒いでいるが、土屋弘はまるで興味を示さない。私たちに来いと合図をする
と、私たちは帰路に向かった。

「早かったじゃない」

加奈がそつけなく言う。

「で？何か分かったわけ？」

「ああ。すごいことが分かった」

「え？何々？」

私は興味をそそられ、身を乗り出した。

「この前、調布で夫婦が殺害されただろう？」

「うん」

「その夫婦と生徒虐殺事件が繋がった。生徒が一人行方不明になつてただろ。その生徒は殺された夫婦の娘だ」

「えええ？」

私と加奈は顔を三秒見合わせた。

「中学三年生。名は宮村幸子^{みやむらちゆきこ}だ」

「ちょっと待って、宮村？」

私は大声を上げたが、あわててボリュームを下げた。

「宮村って、小夜子と同じ名字じゃない！」

「小夜子？誰だよ」

土屋が鋭く私を見る。

「転校生よ！今日来たの！」

「偶然か？石橋が隠れているこの市に、偶然、失踪した殺人犯の娘と同じ名字の女が現れるなんて……」

「偶然に決まってるわよ。だってあの子、すっごく優しいし。名前だって違うし。あの狂った馬鹿な石橋があんな子をパートナーにするわけないもの。ってか幸子って子が犯人だって間違いないわけ？」

加奈が怒ったように、でも不安そうに言った。

「ああ……にしても小夜子か。気になるな。今会えないか」

「無理よ」

私がぴしりといった。

「家知らないし」

「そうか」

土屋がため息をつく。

「今度、会わせろ」

「うん。分かった」

私と加奈は土屋の眼光に少し不安を覚えた。

第十話：犬神

夏休み前日。私と加奈と小夜子は放課後、屋上から舞い上がった。空中散歩だ。

小夜子は最初、怖がって私にしがみついていたけれど、途中からなれて、大いにはしゃいだ。

「すごい！楽しい！」

「小夜子お。はしゃぎすぎだよ」

「だってこんな体験、夢みたいなんだもん！赤月市に引っ越してきて、よかったー」

「男子たちがウザいけどね」

加奈がとってつけたように言うと、私たちは「言えてるー」とけらけら笑った。

「あ、ねえねえ、夏のコンクールっていつから？」

小夜子が小首をかしげる。これには私が答えた。

「夏休みが始まって、一週間後だよ。合宿楽しみー！小夜子は楽器運びとかだけだけど、私たちの演奏、しっかり聴いてね」

「勿論よ」

小夜子がぐっと親指を立てて、ふわりと笑った。

強い風が吹き、バランスを崩しかける。小夜子はあわてて私にしがみついた。隣で加奈が息を呑む。赤月神社のほうを見ていた。私たちも視線を追ってみてみると、一人の少年がいた。

知った顔だった。

石橋健だ。神社の境内を横切ろうとしているようだ。ダックスフンドは石橋の後ろにちょこちょこついていつている。

唐突に犬がこつちを見た。目が合う。

ま、まずい！

犬はきゃんきゃん吠えて石橋健のふくらはぎに突進し、興奮したように暴れた。

「かわいい犬だねー」

小夜子のはんきに言った。

逃げないと……。

石橋はこっちを見たが、大して興味を示さなかった。どうでもいいような視線を私たちに投げ返してくるだけだ。

犬は吠えまくと妙に変な泣き声を上げた。

ゴォツと風が起こり、私の前髪を吹き上げる。そして、銀色の半透明のシェパードが犬の中から飛び出し、こっちに猛速で向かってきた。

私と加奈は思わず悲鳴を上げかけ、必死で風を起こしてジェット機のように逃げた。小夜子はきょんとしていいる。

「どうしたの?」

「あれはね……敵なの……」

「敵?」

小夜子はわけが分からないという顔をしていたが、説明している暇はない。

「幸乃! 追いつかれるわ!」

加奈が叫んだ。

ってまだ追ってきてるの?

あのシェパードはたぶん、石橋の犬の犬神使いが呼び寄せた、犬の霊だろう。なのでどこまでもついてくるというわけだ。

「あつ、痛いっ……!」

小夜子の声がした。

とっさにそつちを見ると小夜子の腕にシェパードが噛み付いていた。

霊なのに噛まれると痛いのかな。

ともかく私と加奈はシェパードを引き離そうとした。しかしその前にシェパードは消える。

私たちは地上に降りると、小夜子に声をかけた。

「小夜子っ！大丈夫？」

「え？大丈夫だよ？全然」

「そう……よかった」

「あはは、心配症だね幸乃ちゃんは……」

小夜子の体がふらりと傾いた。

「?!」

加奈が小夜子を支える。

「小夜子っ?どうしたのっ?」

私はずっと蒼ざめた加奈にあわあわしながらたずねた。

「どうしたの!」

「大変……犬神にとり付かれていますわ!」

第十一話：赤月神社へ

私は小夜子と加奈をその場に残し、近くにあった優介の家にとっさに駆け込んだ。

チャイムを何回も鳴らして優介を呼ぶ。

優介は不機嫌そうにのこのこ出てきた。

「君は本当にせっかちな。チャイムを鳴らすのは一回で充分……」

「優介っ！助けて！」

私は涙目になりながら優介の胸倉を掴んで揺さぶった。

「来て！」

私は文句たらたらの優介を力ずくで引っ張って、二人のところに連れて行った。

小夜子の意識はなく、さっきより蒼白になっていた。

「宮村じゃないか」

優介は平然と言った。

「動物霊にでもとり憑かれたのか？」

動物霊にとりつかれると、その人は生命力を徐々に吸い取られていき、早くお祓いしないと最悪の場合死に至るといふ。

「ええ、犬神よ」

「犬神？」

優介は眉をしかめた。

「犬神って……」

「いいからどうにかできないの?」

優介はなぜか不審そうだったが、肩にいたイズナに何か命じた。イズナは優介の肩から駆け下りるとどこかに走っていった。

「何したの？」

私は尋ねた。

「巫女に除霊を頼んだ。君たちは早く宮村を赤月神社に連れて行ったほうがいい」

「赤月神社？冗談じゃない！あそこにはさっき、いかれた石橋がいたのよ！」

「石橋とは黒陰陽師のことか。あいつならもう失せた」

「どうして分かるの」

優介はその質問には答えなかった。踵を返すともう一匹イズナをどこかにはなつ。

「土屋弘という邪殺屋には、イズナが伝える。呼ぶつもりなんだ

るっ」

「う……うん。ありがとう」

優介はそのまま角を曲がって消えた。

「行きましょう」

私は加奈が小夜子を背負うのを手伝うと赤月神社のほうに歩を進めた。

しかし私たちはいちおう女の子なので、すぐに疲れてしまう。能力を使おうとしたのだが、下手に使ってまた石橋と遭遇したら困るので風は使えない。

ようやく赤月神社の石段の下にたどり着いた。階段は長い。

幸運なことに、上ろうとした直後、土屋弘が現れた。

「お前ら」

私たちは呼ばれて、振り返る。

「あつ！来てくれたの」

加奈はいまやはあはあしていた。

「その背中のが例の宮村小夜子か」

土屋は小夜子をあごでしゃくった。私は土屋弘を怒鳴りつける。

「そうよ！どうでもいいから早く上につれてってあげて！」

土屋は肩をすくめ、小夜子を加奈から受け取った。土屋は軽々と小夜子を抱き上げるとあつという間に階段を駆け上っていった。

私たちも後を追うと、ちょうど本殿に土屋が消えるところだった。

私たちも本殿に転がり込もうとしたが、出てきた土屋にぶつかってしりもちをついてしまった。土屋は身振りで静かにしると示し、お賽銭箱の横の、木造の階段に腰を下ろした。

小夜子の中にいるようだ。中からは何かを唱える声が聞こえる。
おそらく除霊の真言か何かだろう。

私たちも座り込んだ。

あたりは鬱蒼とした木々に覆われ、巨大な御神木がある。境内に
敷かれた石畳はところどころひび割れ、その間から雑草が生えてい
る。むしったあともあった。

ざわざわと葉ずれの音がする。

気持ちいい。優しい風と暖かな日差し。

私はいつの間にか眠りに落ちていた。

「終わりました」

私は美しく澄んだ声に目を覚ました。

振り向くと、ツインテールの綺麗な少女がいた。三つか四つ年下なのか、背が低い。背が私の首あたりまでしかない。赤い袴をはいていて、それがよく似合っている。きっと小夜子にとり憑いた犬神を払ってくれた巫女だろう。

巫女は、

「宮村小夜子さんは無事です。意識はまだ回復しませんが、じきに目が覚めるでしょう。その間にお茶でもいかがですか？」

「いる」

土屋は即答した。

「それと君に話を聞きたいんだけど」

私と加奈は顔を見合わせ、土屋を見た。

「何のこと」

私が尋ねると、土屋はまじまじと私を見た。

「忘れたのか。田中優介が言っていたじゃないか。石橋に会った友人がいるって。それって君だろう」

土屋が最後の言葉とともに巫女を見る。巫女は少しだけうつむいた。

「……健のことでしょうか」

私は石橋のことをファーストネームで呼ぶ人であったのは初めてだったので、驚いてしまった。

巫女は「上がってください」というと、本殿の奥に入っていくた。

土屋は私たちに目配せすると、巫女のあとに続いた。

第十二話：表と裏

奥の和室には小夜子が寝かされていた。

顔色はよく、穏やかな表情だった。私たちはほっとして、和室の中に進入した。そしたら土屋がぱっとこっちを向いて、怒ったように言った。

「おい、畳の縁^{へり}を踏むんじゃねえよ」

土屋は私を睨みつける。私はきよとした。

「どうして？」

「踏んじゃいけないって決まりなんだよ。餓鬼のころから親父に言われてた。お前、そんなことも知らないのか」

「知るわけないでしょ。作法とかに興味ないもん」

私は口をへの字に曲げた。

私と加奈が畳の上に正座すると、土屋は胡坐をかい、出されたお茶を片手で掴んでぐつと飲み干した。いやな奴だ。姿勢ぐらい正せと怒鳴りつけてやりたい。

土屋は私の心の声には当然気がつかず、巫女を見た。

「で、君が例の山口愛？」

「はい」

山口愛ちゃんは素直にうなずいた。最中もなかを出すと、私たちと向かい合って正座をする。

私と加奈は最中もなかを食べながら二人のやりとりを聞いた。

「それで、田中優介から聞いたんだけど、石橋健と会ったそうだな」

「はい。会いました」

愛ちゃんは今は顔を上げて、淡々と言っているものの、どこか悲しげだった。

「健がどうかしましたか？」

「アイツとはいつ会った？ってか、何かされなかったのか？殺されかけたとか」

「いえ。怪我をしていましたから。あつたのはデパート爆破事件の日の夜です」

「ふうん」

土屋はじろじろと愛ちゃんを観察した。愛ちゃんはその視線を避けるように立ち上がって、私たちに背を向けた。花瓶の花の手入れをはじめ。

「彼が何かしてきたんですか」

「まあな。君さ、石橋のこと名前で呼ぶけど、友人かなにかか？」

「いえ。そついうわけではありません、けど……」

「けど？」

「私が彼の怪我の手当てをしたんです」

私と加奈は驚愕で目を見開いた。土屋は平然としている。愛ちゃんが続けた。

「健がどういう人なのか、なぜ怪我をしたのかは見た瞬間に分かりました。でも、放っておけなかったんです。あなたたちはそれを咎めに來たのでしょうか？」

「いや。そういうわけじゃねえよ。そこまでの情報は……」

「どうして止めなかったの！」

加奈が突如叫んだ。

「アイツが人殺しだって分かってて手当てをした？何それ！どうしてよ！あんた、アイツの仲間なの？ねえ！」

「私が巫女だからです」

愛ちゃんはこっちを向いた。凜とした声に加奈はひるむ。正座をする両手をひざの上で合わせた。加奈は勇気を取り戻し、もっと叫ぶ。

「理由になっていないわ！ちゃんと答えなさ……」

「黙れ。うるさい」

土屋が本当にうるさそうに頭を振った。

「巫女はな、清濁合わせて飲むんだよ。昔は違ったが、現代の巫女はそうなんだ。人のする行動を咎めることはできるが力づくで止めてはならない。束縛は許さないんだ。それに、止めようとしたとしても、この巫女サンの実力では無理だ。巫女としての霊力は強いが、巫女の術は攻撃には向かない」

「詳しいんだね」

私は素直に感心した。土屋は鼻を鳴らすと愛ちゃんを見る。

「ともかく君はアイツに殺されなかった。なぜだ？あいつはすべての特殊能力者を消そうとしていると思っていたんだが」

「確かに最初は殺そうとしていました。でも私はそれを止めたんです。もし私が殺されて、彼がそのままだったら死んでしまうと思ったから。彼は手当てを拒みませんでした。ちゃんと傷が治ったら、元氣よく出て行きましたよ。お礼も言ってもらいました。ありがとうございます」と

私たちはそろって目をむいた。傍から見ればさぞかし滑稽な光景だろうと思った。しかし愛ちゃんは笑わなかった。

信じられない。あの、狂った能無しの、馬鹿野郎の石橋がありがとうと言った？冗談も甚だしい。

しかし愛ちゃんは真剣だ。

「確かに彼は人殺しですが、私と話をしているときはそうは見えませんでした。ごく普通の中学生でした。明るくて、おもしろい、優しい人です。本当は温かい人なのだと思います」

「嘘だろ！」

土屋は怒り狂ったように畳をばんつと叩いた。

「だってあいつは、人殺しなんだ！無関係の人まで殺す、殺しに飢えたもはや人間とは思えない化け物だ！」

「そうだよ！」

わたしも訴えるように言った。

「私のこと殺そうとしたんだよ！すつごく怖いんだよ。化け物だよ！そう、化け物！」

愛ちゃんは寂しそうに微笑した。

「それは分かります。けれど、人には裏があるんです。本当の自分はいつも裏にいる。私にはそれを見抜く力が少しだけあるんです」

愛ちゃんは小夜子の隣に来て、薄いシルクのような布団をかけなおした。

「彼の過去が知りたいのなら修験山しゅげんざんへ行ってください。そこに彼のいところがあります。修験者になるために修行中です。ほら、目が覚めましたよ」

私と加奈が小夜子をのぞきこむと、小夜子が目をゆっくり開いた。

「小夜子、大丈夫？」

加奈が小夜子が身を起こすのを手伝う。

「加奈ちゃん。わたし……どうしちゃったの？」

「よかった……無事で……」

「うん？」

小夜子が困ったように笑った。

愛ちゃんが事情を話すと小夜子は納得し、帰る時、愛ちゃんは鳥居の下まで見送ってくれた。

「気をつけてお帰りください、修験山は一週間後の吹奏楽部の夏のコンクールの宿のすぐ裏です」

「え？どうして知っているの？コンクールのこと？」

わたしが訪ねると、愛ちゃんはかわいらしい笑みを浮かべた。

「いちおうわたしもその中学の二年生ですから……」

二年生！もつと年下かと思っていた。

わたしたちは愛ちゃんに手を振って別れた。石段を降りるとさわやかな風がわたしたちに吹き付けた。

「宮村小夜子……宮村……小夜子……」

さつきから土屋弘はわたしの家の中を行ったり来たりして小夜子の名前をつぶやいている。

「どうしたの」

わたしはうるさいので声をかけた。土屋はため息をついて足を止めた。

「あいつ、やっぱり違和感ある」

「勝手に言っていれば。とにかく小夜子は石橋の仲間じゃないんだからね。だってその犬神使いに呪いかけられたのよ?」

「そうだよなあ。考えすぎか?」

「そーよっ!」

「でも不安だぜ」

土屋弘は心の底から不安そうだった。

「あいつのことをもう少し調べたい。なあ、夏のコンクールがどうのこうのとか言っていたけど、それに宮村小夜子も来るのか」

「うん」

「俺も連れてつてくれよ」

「ええー」

「あいつも手伝いで行くらしいんだろ。俺だっていいじゃねえか」

「うーん。聞いてみるよ」

私は唇を噛んだ。

こいつ、小夜子に何かしたりしないだろうか。

「とりあえず、一日目の夜は修験山に行つて、石橋のいところ会
う。いいな」

土屋はそう言い放つと、今日の夕食は何かとそそくさとお母さん
がいるコンロのほうに向かった。

お母さんと土屋は結構仲がよい。お父さんは土屋が私に手出しし
ないか心配らしいが、そんなことは万に一つありえない。

「お、野菜スープだ」

土屋は深鍋を覗きながらうれしそうに言った。

初めてこいつを見た奴は、実は殺し屋なんて心の片隅にも思わな
いだろう。

第十三話：朝のバスの中で

午前五時三十分。

私たちは学校の前にいた。今日はコンクール前日で、今からバスに乗って五時間のところにある宿に向かう。

朝は涼しくて気持ちがよい。

私たち吹奏楽部員と手伝いでき来ている小夜子と土屋は今、バスが来るまで学校の前で待機しているところだった。

私と小夜子と加奈は、校門の前に立って一人考え事ばかりしている土屋を眺めた。その周りにはやはり女子が集合している。他の吹奏楽の男子の嫉妬の的になったのは確かだが、誰も土屋にちょっかいを出そうとはしない。いちおう皆特殊能力者なので、ただならぬ気配を感じているらしい。

「土屋弘君って、私たちと同じ中学三年生なのに、大人っぽいね」

小夜子はひそひそ言った。

「前会ったときはよく見ていなかったけど。そっかー、幸乃ちゃんのことかー」

「うん」

土屋弘は私のいということになっていた。バスが来て、私たちはリムジンバスに乗り込んだ。

まずは女子からで、私と加奈は後ろから二番目の二人席に座った。小夜子は一番後ろの広い席だ。小夜子は手伝いできているので、一番後ろの席ともとから決まっていたのである。この席順だといつでも話せるし、いいと思ったのだ。

小夜子の隣には他の数人の手伝いの女子が座ろうとしたが、土屋弘がしゃしゃったせいで座れなくなった。

「あー、俺座っていい？俺もとはこの学校じゃないし部外者ということで一番後ろの席がいい」

とちょっとした愛想もなく言ったのだ。普通ならなんだこいつ、という目を向けられるだろうが、あいにく土屋は女子がほれやすい要素を持ち合わせていた。

女子は

「えー？じゃあ土屋君も他の席と一緒に話そうよー」

と甘えた声を出した。しかし土屋は妥当な意見を言った。

「いや、俺つまんない男だしやめとくよ」

と。全くそのとおりだと思った。

土屋の後ろにも何人か男子がいる。私はコイツが邪殺屋だと皆に言っておいたので、男子たちは仕事について聞いてみたいようだ。加奈はすかさず通路に立ちふさがる。

「ちょっと。女の子が座っているのに来てんじゃないわよ」

「うるせえ。俺が何の目的で着たんだと思ってんだよ」

土屋はひそひそ声で応酬した。

加奈はしぶしぶどいたが、土屋と小夜子の間に巨大な荷物を置い

た。しかし土屋は平然とそれを床に落とした。

「ちょっと！」

加奈はカンカンになった。荷物を拾おうと身をかめたがそれを見かねた小夜子が優しく押し戻した。加奈の荷物を拾ってくれる。優しい子だ。

「小夜子ありがとう」

「うん。いいの」

小夜子はおずおず立ち上がる。

「あの、皆が座るならわたし、他の席に行くよ」

「小夜子っ？」

わたしは座席の背もたれをつかんで後ろを見た。

「だめだよ！小夜子が先に座っていたんだから！こんな奴に席を

譲る必要なんてないよ!」

「いいの」

小夜子は土屋の脇をとり、先生のほうに言ってしまった。他の席に座ると許可をもらうらしい。

土屋はやれやれ、というように肩をすくめ、小夜子が座っていた席に座り、じろりとわたしたちを睨んだ。

「お前らのせいだ。黙って座らしてくれば、あいつは逃げられなかったのに」

「何、逃げられなかったって」

「あいつが俺が詮索しようとしていることに気がついて逃げたのかもしれないじゃないか」

「親切心から席を立ったのよ、分かってんの? ねえ!」

加奈は声を荒らげた。わたしも文句を言おうとしたが、男子にさえぎられてしまった。

「何の話してんの？宮村のこと？あー、あいつ暗いからさ、いなくなつてよかったよ」

「黙んなさい！」

加奈がその男子の頭を拳骨でぶつた。加奈は怒っていた。

「あんたのようなクズ野郎に、小夜子の何が分かるのよ！引つ込んでなさい」

「なんだとてめ……」

「静かにしてよ」

私はぴしゃりとさえぎった。

「あのさ、土屋。小夜子は犯人の一味じゃないよ。お願いだから夜部屋に忍び込んだり、変態みたいな行動はしないでね」

「しねえよそんなこと。俺は変態じゃねえ」

「それは知っているよ」

バスが動き始めたので、私は席に座りなおした。小夜子が一番前の席の、先生の隣に座っていた。土屋の舌打ちが後ろからはっきり聞こえた。

そのままバスでしばらく走ると高速道路にさしかかった。

土屋はさつきからずっと静かで、私と加奈は怪訝に思った。振り返ってみると土屋は皆を無視してじっとしていた。霊力が放出されているのを感じ、私は止めようとした。小夜子に何か仕掛けるつもりかと思ったのだ。しかしその直後、バスが激しく揺れ始めた。

私はあわてて座りなおす。

「何このゆれ」

加奈は声を上げる。車内はざわついていた。高速道路だし、がたつくところなんてないのに。

やがて揺れが止まり、普通に走り出した。

なんだっ たんだろう。

ブブツ、と車内放送のスピーカーから音がした。

きっと今のゆれのことで運転手が何か言うのだろう。

『あー、先ほどの揺れで皆様不安になられたと思いますがー、ご安心くださいーい、当バスは皆様の安全をー、保障、しまーす……』

そういった声は、運転手の声ではなかった。少年の、聞き覚えのある声。

「この声……石橋っ？」

私は立ち上がって、スピーカーに向かって叫んでいた。

第十三話・朝のバスの中で（後書き）

第十四話：敵か味方か

車内のざわつきが止まった。一瞬、すべての声が消えたかと思っ
たがすぐにスピーカーを通じて石橋の声がした。

『あー、今誰か呼んだ？ピーンポーン。正解ー』

「何でっ？」

私は大声で問う。土屋を振り向くと、土屋は立っただまますピーカ
ーを凝視していた。

『おい、土屋弘。聞いてるかー？』

石橋の笑いそうな声が土屋を呼ぶ。土屋は何も言わないので、石
橋は続ける。

『聞こえているようだから言わせてもらっぜ。てめえ、もう俺を
追ってこないでください。俺の邪魔をしないでください。直接言お
うと思ったんだがお前は暴拳だから殺されかねない。だからスピー
カーを通して言う。分かった？邪殺だかなんだか知らないけど、俺
は悪人じゃないんだよ。巫女サマから聞いただろう。俺はあったか
くて優しいごく普通の中学生だ』

「俺の妹を殺したくせに、そんなことぬかすな」

生徒が一瞬ざわついた。石橋はそれを無視した。

『あの、俺を狙ってた女のこと？ああ、あれ、お前の妹だったのか。あはは、悪い悪い。知らなかったよ』

「お前、そんなことを言うためにこんなことしたのか」

『違う』

石橋はあつさりしていた。

『てめえらを殺しに来たのさ。そのバスぶつとばしてお前ら全員あの世に吹っ飛ばすって魂胆よ。バスぶつとばして全員あの世に吹っ飛ばす。お、なかなか面白くないか？』

石橋が、例の人を不快にさせるような、『くくくくく』という笑いをした。

皆はしらけていたが、一人の女子が、きゃーっ、と悲鳴を上げた瞬間、バスの中は大混乱に陥った。

運転手は運転を続けている。加奈は霊視能力で運転席を見ると、土屋にささやいた。

「運転手は気を失っているわ。ハンドルはのっとなられている!」

「ああ」

土屋は落ち着き払っていた。私は窓から外を覗いた。30メートルぐらい離れた上空に石橋が浮かんでいた。

「あそこにいる!」

私は声を飛ばしたが、土屋に下がれと言われた。

「うるさい生徒たちを気絶させてくれないか。 宮村以外」

「どっやって?」

「電気だよ。スタンガンみたいに」

私は皆が気絶する程度に電気を流した。皆は自分の座席にどつと倒れこんだ。

小夜子は一人、立ったまま怯え、蒼白だった。石橋は生徒たちが気絶したことに気がついたらしく、むっとしたような声を出す。

『おい、なんで気絶させた？つまんねえな』

「うるさいからだよ、ところで本当にバスを爆破させる気なのか？」

『お前が結界を張っているせいで30メートル以内に入れない』

「じゃあ結界破ってやるからさ。爆破しろよ」

「え……」

私と加奈は愕然とした。しかし土屋には考えがあるようだ。とにかく信じよう。

土屋が結界を破ったのを感じた。しかし一向に爆破されない。小夜子は怯えきり、窓の外をしきりに気にしている。窓の方に向かってうとしたので、私は危ないと思い、小夜子のところに走った。引張って加奈たちのところに戻り、加奈と両脇から掴んだ。

「おい石橋くん。爆破しないのか」

土屋がわざとらしく言った。

『やめとくよ』

え・・・・・・・・？

『お前がそんなにあっさりしているわけがない。なにか考えがあるんだろっ』

「そうだ。お前が爆破しないのは、中に仲間がいるからだろ」

土屋は窓の外の石橋に言った。

『仲間？』

「そうだよ。そういえばお前、いつもの犬はどうした」

『犬？あの馬鹿犬ね。いるじゃないか。よく見るよ』

石橋は背中に片手を回すと何かを掴んで私たちに突き出して見せた。手のひらにはいつものダックスフンドが乗っていた。

「それは幻影を使って俺たちに見せているのか」

『違う』

「嘘をつくなよ」

『嘘じゃねえよ』

「仮にそれが幻影だとしよう」

石橋は黙って、犬を腕に抱いた。

「お前がバスを爆破できない理由は、さつきも言ったが仲間がいるからだ。お前はその仲間を、爆破する前に外へ助け出すつもりだった。ある特定の席に座れとでもいったんだろう。でもお前は助けられなかった。理由は、その席にその仲間がいなかったからだ。それにいまや仲間を助け出すのは不可能。俺の仲間に挟まれているし、下手すりゃ殺されかねないからな」

『へーえ。それは誰だ？お前の言う、俺の仲間とやらは。ここからじゃよく見えねえんだ』

「こいつだよ」

土屋が小夜子の腕を引っつかみ、私たちから引き離れた。私と加奈は「ちよつと……」と言って、同時に毒づいた。

土屋は小夜子を石橋のほうに突き出した。小夜子はわけが分からないという表情をし、石橋は啞然としている。土屋は自信満々に言い放った。

「こいつだろ！本名宮村幸子、犬神使いで生徒虐殺の犯人。お前の犬だ」

石橋は腕の中の犬と小夜子を見比べるように交互に見た。そのうち嘖き出し、笑い出した。

『はあっ？そいつが俺の仲間だと？ふざける、そんな女は知らないね。あーあ、お前意外と馬鹿か？そいつを殺したいのなら勝手に殺せばいいだろう。ずっとそうやってほざいてるよ。あははっ、面白すぎ！』

スピーカーからがんと石橋の高笑いが飛び出す。うるさい。大迷惑だ。

『気の毒な小娘だ。俺の仲間とみなされて、敵扱いか。本当に哀れだぜ。かわいそうだからつれて帰ってあげようか？女とかいっぱい集めてさ、ハーレム男になったらいい笑い話になるよな？』

「黙れ！」

土屋弘は怒り狂った。

「お前の嫌味にはうんざりなんだよ！とつと失せろ！消えちまえ！」

石橋は一人で狂ったように笑いながら消えてしまった。

小夜子は呆然としている。土屋は小夜子を突き放した。小夜子はよろめく。加奈が支えた。

ちょうどサービスエリアに着き、生徒たちや運転手はおきて、外に行って頭を冷やしに言った。私たち四人だけが残る。

加奈は土屋を怒鳴りつける。

「何よ……結局あんたの言っていることはすべて間違いだったじゃない！小夜子は石橋の仲間なんかじゃない。これで分かったでしょう！小夜子は人殺しじゃない！もう小夜子をそんな目で見ないで！」

加奈は小夜子を引っ張って外に飛び出した。

私と土屋だけが残る。

「間違っことだっであるよ」

私は慰めたがそんな必要はなかったようだ。土屋はゆっくり頭を振る。

「間違いなんかじゃねえよ」

土屋の握り締めた右の拳が開かれた。

そこにはくしゃくしゃになった黒い紙があった。黒陰陽師の呪符だ。

私は息を呑む。

「それ、どこで」

土屋は答えない。

それをポケットに突っ込むと私の脇を通って外に向かった。

第十五話：殺人鬼の過去

宿の近くのホールで合奏の練習をしているとき、土屋弘はいなかった。

そして、合奏練習をし終わって宿に戻り、外でカレーを作っているときも。

今日は特別な日ということで、食事は皆で作ることになったのだ。カレーにはリングをすりおろしたものや、チョコレートをひとかけら入れたりした。カレーはすごくおいしく、私は二杯もおかわりしてしまった。土屋は結局夕食のときも戻ってこなくて、もう寝る時間になってしまった。

私と加奈は寝室でそわそわした。

修験山に行くのかな？

窓の外の闇で何かが動いた。凝視していると白い美しい鳥だった。何かをくわえている。窓を開けて受け取ると紙だった。和紙だ。広げてみると、『宿の入り口』と書いてあった。土屋弘の字だ。

私たちは布団の中に枕を突っ込んでおき、そっと部屋を抜け出し

た。

宿の入り口に行くと、土屋がさっきの白い鳥に手を差し出していた。鳥はその手に降り立ち、光を放って消えた。その手には鳥形の紙が残る。

式神だ。

土屋はそれをポケットに突っ込むといつもどおりに陽気に話しかけてきた。

「ずいぶんと遅いじゃないか。てっきり行かないのかと思ったぜ」

「どこに行っていたのよ。ずっといなかったでしょ？わたし、探したんだよ」

「ちよつと修験山を見に行っていたんだよ」

私たちはその後、すぐに修験山に入った。

夜の山は薄気味悪く、視界がものすごく悪い。

草が腰の辺りまであり、あっという間に足が傷だらけになってしまった。

木の上で三人で休んでいるとき、加奈はとうとう唇を尖らした。

「ねえ、まだなの？どこにいるか分かるの？」

「知らねえ」

土屋弘はあっさりと言った。

「どこかの洞窟で瞑想しているか、または寝ているか。洞窟と言えば岩壁。岩壁のあたりのどこかにいると思うぜ」

私たちはまた歩き始めた。

やがて私たちの目の前に岩壁が現れた。

とても高く、どのくらいあるのか分からない。

私たちは岩壁に沿って歩き、洞窟らしきものを探したが、どこにもない。本当に洞窟なんてあるのだろうか。

私は疲れ果てて、なんとなく上を見上げた。すると、上のほうに洞窟らしき穴があることに気がついた。私は土屋の背中を小突く。

「ねえ。あれは？」

土屋は穴を仰ぎ、肩をすくめた。すうっと大きく息を吸ったかと思つと

「誰がいるかー？」

と叫んだ。

山奥なのでさほど迷惑ではないだろう。

洞窟の中から誰かがひょこつと顔を出した。

「喝ッ！」

いきなり怒鳴られ、私たちはびっくりして飛び上がった。甲高い少年の声だった。

しかも怒っている。

「神聖なこの修験山で、夜間に叫ぶ不屈き者は一体誰だ！」

「あー、悪かった」

土屋は声を抑えた。少年は身を乗り出し、私たちを目を細めて見下ろす。

「何者だ」

「邪殺屋だ」

「邪殺屋？それが俺になんの用だ」

「石橋健のいとはお前か」

「石橋健ッ！」

少年は怒りをあらわにした。声を必死に押し殺し、続ける。

「あの忌々しい外道の、一族の恥さらしがなんだ！」

「追ってるんだ」

「さっさと捕まえろ！」

「あ、その、情報がほしいんだ。赤月市の巫女が、アイツの過去を知りたくばここに来いって……」

「愛か？その巫女とは？」

少年は今度はうれしそうになった。

「愛はあの下種^{けす}に会ったのか」

「で、教えてくれるのか」

「いいだろう。入れ」

少年は洞窟の奥に引っ込んだ。私たちは顔を見合わせると、洞窟まで能力を使ってあがった。

少年は私と背が同じくらいで、ひとつ年下らしい。ぼろぼろの衣を着ている。

洞窟は結構広く、中は涼しい。洞窟の中で焚き火をし、私たちは向かい合って座った。少年は自己紹介をする。

「俺は修験者の佐野健吾だ。さのけんご 石橋健のいここに間違いない」

私たちも自己紹介をすると、佐野はうなずいた。

「邪殺屋はまだ仕事をしていたのか。ぜんぜん捕まらないからやめたかと思っていた」

「ついこの間まで一人で仕事をしていたんだから、仕方がないだろ」

土屋弘はむっとふてくされたように言った。

「それで？さつさと教えるよ。石橋の過去を。アイツはなぜ特殊能力者をすべて消そうとしているんだ？なぜ、少年グループの八人を殺したんだ？あ、それとその事件の前に親友も殺したらしいけど」

「親友？」

佐野は苦笑したような顔をした。

「親友？殺した？あいつは親友を殺してなどいない」

佐野はきつぱり言って、私たちは顔を見合わせた。私は、でも、と声を上げる。

「ニュースでやっていたじゃない。仲のいい子を殺したって！」

「奴は冤罪だ」

「何？」

土屋は驚いたように顔をしかめ、胡坐をかいた。私たちは佐野を

注視する。

「それは本当か」

「ああ。気がつかなかったのか？あの外道が階段から突き落とすという間抜けな殺し方をするとでも？少年グループは死の呪符で殺したのに？どう考えても不自然だろう」

佐野は鼻で笑った。

「アイツは親友を裏切るなんてマネはしない」

「じゃあ誰が親友を殺したんだ？」

「その、少年グループ八人だよ」

私たちは愕然とした。佐野は焚き火の火を見つめながら続ける。

「親友は突然そいつらにいじめられ始めたんだ。石橋は当然怒った。放課後その八人を校庭に呼び出し、石橋はずっと待っていたがいつまでたっても来ない。そこであいつは校舎に入って八人を探した。そのとき見つけたんだ。階段から突き落とされ、死んだ親友を。」

石橋は階段の上から見つけたから、第三者から見ると石橋が突き落としたように見えるよな。そのタイミングで隠れていた八人が出てきて、警察に、人殺しがいる、みたいに言ったのさ。あいつは否定したが無駄だった。あいつは特殊能力者だし、目撃者もいたということでその事件はあまり調べられず、石橋は逮捕された。特殊能力者は信用が薄いからな」

「ひ……ひどい」

私は同情してしまった。佐野は一瞬私を見、続ける。

「まあな。でもそのあとが大変なんだ。石橋はようやく少年院から出てきた。でも親友の親は怒り狂っていたんだ。石橋がやったと思いついて、どう手を回したか知らないが、ある連中に金を渡して石橋に嫌がらせをするように命じた。それが偶然にもあの八人グループだった。八人は金をもらいながら家にまで嫌がらせをしたのさ。石橋は八人が親友の親を力モとして使っていることを知った。たぶん影で、いい力モだ、とでも言っていたんだろう。石橋はカンカンになって、八人に自首しろと迫ったが、だめで……」

「皆殺し、か」

土屋はぼそりと言った。佐野はこくんとうなづく。

「そうだ。そしてアイツは殺し始めたのさ。あ、そうそう、親友がいじめられた理由は、石橋が陰陽師だったからなんだ。化け物と仲良くしている、ってさ」

「え、あいつは黒陰陽師でしょ」

私は思わず口を挟んだ。佐野はかぶりを振る。

「前はただの陰陽師だった。あいつはああなる前はかなりの正義だったからな。でも心が憎しみに満たされると黒陰陽師になってしまった。能力は感情に反応するって知っているだろう」

「うん……」

石橋が正義だったなんて、信じられない。

「何で特殊能力者を殺すんだ？」

土屋はちっとも同情していない。

「能力者は関係ないだろう」

「それは自分が陰陽師だから。その力があつたせいで親友は死に、自分の人生が破壊された。特殊能力そのものへの復讐なんだ。無差別に人間を殺すのは化け物扱いしてくる普通の人間への復讐。あいつは自分が化け物であるということを誇りに思い、憎んでいる。あの野郎は自分のような特殊能力者は排除されるべきだと信じ込んでいるのさ」

しばらく沈黙が続いた。

能力そのものへの復讐。そんなのなんの意味もないのに……。

私は唇をかんだ。土屋は沈黙を破る。

「これ、調べてくれないか」

ポケットから黒い呪符を出す。あのとときの呪符だ。加奈は身を乗り出す。

「何よそれ」

土屋はシカトした。佐野に渡す。

「これは石橋の呪符か」

「そうだ。何のために、誰に作ったのかを知りたい」

佐野はうなずくと洞窟の奥に戻り、呪符を手を持った。胡坐をかき、印を結んで真言を唱え始める。

「ねえ、何なのあれ」

加奈はしつこく食い下がったが土屋は完全に無視していた。15
分ぐらい立つと佐野が立ち上がって、私たちの前に戻ってきた。

「この呪符は護符だ」

と呪符をひらひら振ってみせる。

「作った相手は女。14〜5歳だ。犬が見えた。用心深く術をかけてあるからこのくらいしか分からない」

「そうか」

土屋が立ち上がった。呪符を受け取り、ポケットにしまいこむ。

佐野は土屋を見据える。

「それは石橋の仲間から盗んだものか」

「恐らく」

「……誰のことよ」

加奈の声が震える。土屋は淡々と佐野に話しかける。

「奴の仲間で間違いないと思うか。修験者の意見が聞きたい」

「間違いないな。これを持っていた奴は絶対石橋の仲間だ。速やかに始末しろ」

「分かった」

「それって小夜子のことじゃないわよね？」

加奈が泣きそうな声を出した。土屋の胸倉を掴み、揺さぶる。

「ねえっ！違っわよね？答えなさいよ！」

「うるせえな」

土屋は加奈を振り払った。すぐに佐野に目を転じる。

「佐野、悪いが龍神を召喚して宿まで瞬間移動させてくれ」

「お安い御用だ」

佐野は再び印を結んで真言を唱え始めた。私は立ち上がるとお礼を言った。真言を唱え終わると私たちの周りに風が渦巻く。龍神の姿は目に見えないらしい。

私が佐野に手を振ると、佐野は振り返ってくれた。

突風が吹き、私は目を閉じた。

第十六話：殺意

私たち赤月中学吹奏楽部員はときどきしていた。今は舞台の椅子の上に座って指揮者の先生を見ていた。そう、今はコンクール本番だ。練習ではない。観客席の生徒はしんとしていた。

舞台の袖からは小夜子が見ている。私と目が合うと、がんばってと親指をぐつと立て、にこつと笑った。私はうなづく。土屋弘はというと、小夜子の後ろの方で、私たちではなく小夜子を凝視していた。演奏などどうでもいいと見える。

私たちの演奏は大成功だった。とっても緊張していたけど、小夜子が穏やかな表情で見えてくれたので落ち着いた。見事金賞をとり、私たちは大喜びだった。でも次の大会へは進めず、残念だったけどとてもいい思い出になった。

小夜子はバスの中でいっぱい私たちをほめてくれた。

「すごかったよ！皆うまいね、わたしも吹けたらいいのになー」

「今度吹いてみる？」

「ええー！いいの？やったあ！楽しみにしてるね！」

「あたしがしっかり教えてあげるからさー」

「ありがと加奈ちゃん！」

私はそんなやりとりをする二人をみて笑っているんだけど、土屋のことが気になった。土屋は朝から一言も口をきかない。私はたまに小夜子に向けられる視線に明らかに不穏なものを感じていた。

夜。

私たちは風呂に入ったあと、後輩たちと遊んだ。女子は土屋といたがったが、なぜか姿が見えない。

加奈は気にしていない。後輩の部屋で皆でトランプをした。内緒でテレビも見た。

ばば抜きで、私は一番になって飛び上がった。小夜子は部屋にいたものの、話の輪には入ろうとしなかった。そのうち立ち上がって声をかけてくる。

「……わたし、寝るね」

「えー？もう？小夜子もやろうよ！」

「いいの。わたしがいても……」

「？」

「わたしはいてもいなくても同じだから。じゃ、おやすみ」

小夜子は出て行ってしまった。加奈は心配そうだ。

「どうしてあんなこと……」

「加奈先輩、別にいいじゃないですか」

私は後輩を見た。加奈も見た。

「だって、その通りじゃないですか。何にしゃべんないし、ってか暗い？」

「だよねだよね」

「だからアイツのことはほっといて、ね！きゃはは」

「最低！」

私と加奈は同時に叫んだ。後輩たちはビクツとする。

小夜子をそんな風に言うなんてひどすぎる。私は初めて後輩に憎悪を感じた。

「なんでそんなこと言えるの？いわれた人がどれほど傷つくか分かっているの？」

「幸乃のいう通りよ！あんたたちってフツーにそういうこと言える人たちだったんだ？しかもアイツ扱い！年上なのに！」

「……すみません」

「誤るのなら小夜子に謝りなさい」

加奈がピシツと言った。加奈は友達思いだ。私たちは後輩たちを連れて、小夜子の部屋に向かった。小夜子の部屋は一人部屋だ。私たちの部屋とは離れている。

小夜子の部屋につくところには私と加奈と後輩たちは元の仲良しに戻っていた。

*

*

*

小夜子は自分の部屋の前にいた。ドアは閉まっている。

ドアを開いて中の和室を覗くとそこにはある姿があった。

案の定、土屋弘である。女子の部屋に勝手に入ったことをなんとも思わないのか、平然と和室の真ん中で胡坐を書いていた。

「土屋くん？」

小夜子はびっくりしたような声を出す。土屋は開いたドアをあぐでしゃくった。

「入ったらとつと閉めろ」

小夜子は急いでドアを閉める。

「どうしてここにいるの？」

小夜子が大人しげな声で尋ねると、土屋はそれを鼻先でせせら笑った。

「ふざけるのはよせ。分かりきったことを言っなよ」

「……え？」

「お前、スパイだろ。石橋に命じられて俺らを見張っているんだろ」

「……何のこと？」

「だからそういうの無し。素でいこうぜ」

「素って……これが私の……」

「素、か。はッ、大量殺人犯がそんな弱い本性かよ」

小夜子が黙った。土屋は続ける。

「こっちは証拠つかんでんだよ」

土屋はくしゃくしゃになった黒い呪符をこれ見よがしに振って見せた。

「これ、お前が石橋から護符としてもらったやつだろ。これを身につけていれば、万が一俺たちに正体がばれたとしても、貼ればすぐ逃げられるっていう呪符だよな。でも残念だな。今は俺が持っている」

「なんのこと」

小夜子の声がにわかに苛立った。大人しげな顔にちらりと、負の感情がかすめる。土屋はそれに元氣付けられたかのように、嫌味つたらしく言った。

「お前は敵だろ。そんな大人しそうな面しているくせに、中身は化け物ってか。石橋もよくまあ、手の込んだカムフラージュをしたもんだな」

「カムフラージュ？」

小夜子が少しだけ肩を上げた。

「カムフラージュなんかじゃ……」

土屋の言葉に反応し、応酬したことで、土屋には自首と受け取られた。土屋はたちまち有頂天になる。

「カムフラージュなんかじゃ？へえ、なんだよその先は？カムフラージュなんかじゃないってか？なあ、宮村。あいつの仲間でもないのに何でそんなことが分かるんだよ？」

小夜子はギクリとして身を固めた。白い頬に一筋の汗が伝う。冷や汗だった。

「つまり自首って受け取っていいわけ？ 答えるよ、宮村小夜子。いや……幸子、かな」

小夜子の顔が誰が見ても分かるぐらいに蒼白になった。その目に様々な感情が渦巻いている。土屋はその時点で、小夜子の心のうちを見抜いた。間違いない、というか間違うはずもないが、こいつが石橋の仲間だ。土屋は立ち上がると早速小夜子の腕を引っつかむ。小夜子は一瞬、抵抗するようにもがいて後退しようとした。ここにはいるはずのない誰かに助けを求めるように、大きな目が部屋の中をうろつく。

土屋はソレを見て、ますます気分が高揚した。いい気味だ。奴がこの女の死体を見たら、どんな顔をするだろう？ バラバラにして、見る影もないほど目茶目茶にされたのを見たら。土屋は小夜子を部屋の奥に突き飛ばした。小夜子は勢い余ってしりもちをつく。土屋は見下ろしながら低く言った。

「宮村幸子。死んでもらうぜ。俺は黒陰陽師じゃないから死の呪符は作れない。つまり一瞬では殺せない。多少痛いだろうな。悪いな」

その声は歓喜に満ちていた。いや、狂喜に近い。小夜子は思い切りかぶりを振った。小夜子は本気で怯えた表情をしていた。

「わたしは石橋なんて人、知らないっ……」

「今更、遅えよ^{おせ}」

土屋が怒鳴る。

「一回自首したくせに、そんなことを言っただけで助かると思ってるのか？」

小夜子は訴えるように言う。

「違うの、あれは単に……」

小夜子は必死で弁解しようとした。土屋はそんな小夜子を怒鳴りつけた。

「うるせえ死ね！
切断刀裂^{せつだんとうれつ}、短時臨終^{たんじりんじゆう}、急々如律令^{ききくきりうりつりよう}！」

土屋の右手のひらに白い呪符が現れた。かすかに黒っぽかった。
小夜子は恐怖で目を見開いた。本物の恐怖だった。

「や、やめて……っ」

第十七話：殺意…2

*

*

*

私たちは中から激昂した土屋の声を聞き、小夜子の部屋に飛び込んだ。

中には土屋がいて、今まさに小夜子に呪符を投げつけようとしているところだった。

私は土屋に突進して土屋をひっくり返した。呪符が上にはじけとび、天井に細長い巨大な爪あのようなあとをつけた。加奈は怯えて動けないでいる小夜子を抱きしめている。

土屋は怒り狂っていた。

「てめえら何しに来た！失せろ！」

とがなりたて、小夜子を睨みつける。石橋と同じ、殺意に満ちた目をしていた。

加奈は叫ぶ。

「やめて！小夜子が怯えているじゃない！」

「うるせえ！ぶつ殺してやる！」

小夜子に飛び掛ろうとしたので私は土屋にしがみついて必死で止めた。

私は泣いていた。土屋が怖かった。石橋のように狂気し、復讐に燃えている。土屋は冷たいところもあるけど、優しくかった。そんな人が石橋のようになってほしくない。

ドアからは先生たちや生徒たちが集まり、ざわめいている。土屋は肩で息をしながら、暴れるのをやっとやめた。私はおそろのおそろ土屋を離れた。先生は尖った声を投げた。

「土屋くん！何しているの！女子の部屋で……っ！」

「ひっこんでろ！」

土屋は先生に叫ぶと小夜子を恐ろしい剣幕でにらみ続けた。睨み殺そうとしているようだった。

「あんた最低！」

加奈が大声でいい、恐ろしい剣幕で土屋を見た。私までぎくりとした。

「どうしてそんなむごいことをしようとするの？小夜子を殺そうとするなんて……。これじゃあ石橋と一緒にじゃない！」

「同類にする気かよ」

「同類よ！小夜子はこんなに怯えているのに……。ひどい。あんたってこんなことをフツーにできる人だったんだ」

土屋の息遣いがすうつと浅くなった。小夜子と同じように蒼白になっっていた。

「土屋、あんたには失望したわ。邪殺屋とかいって、実はあんたが悪人なんじゃない？」

「加奈」

私は加奈を止めようとしたが、加奈はやめない。

「勘違いもいいところよ。小夜子は何もしていないのに。こんな素直な子を殺人鬼と思うなんて、どうかしているんじゃない？いくら妹を殺されたからって、疑った人を片っ端から殺そうとしないですよ。証拠もないのに。あんたなんか……」

「黙れ」

土屋の体が小刻みに震えた。

「お前に……なにが分かるんだよ……」

そういった声は聞いているほうも辛くなるほど苦しげだった。土屋の感情がひしひしと伝わってきた。

悲しみだった。

「石橋とその仲間なんて……死ねばいいんだよ……」

加奈がびくんと肩を震わせた。霊視能力で何かを見たと思われる。蒼ざめながら土屋から目をそらす。

土屋は立ち上がると入り口の生徒たちを押しつけながら外に飛び出していった。

私と加奈は部屋に戻った。この人はさっきの騒ぎに気がつかなかったのか、眠りこけていた。

加奈はいまだに震えていた。

「加奈？」

私は加奈に寄り添うようにして座った。

「どうかしたの？」

加奈は私を見る。

「あたしいやなの見ちゃったの……」

「どんな？」

「アイツの過去……」

加奈の霊視能力は人の過去を見抜くほど強くなっていた。

「その……土屋の妹が死んだときの記憶よ……」

私は唇をかんだ。土屋の妹が死んだとき。そんなの見たら私なら眠れなくなる。

「土屋は妹に助けを求められ、走ってた。石橋に襲われたから、助けてって。妹の能力の方がアイツより上だった。でも石橋の不意打ちで……。土屋は駆けつけたんだけど……。そのときにとどめを刺された。石橋は笑って失せた。妹はずたずたで……。そこらじゅう血まみれで……」

「もういいよ……」

私は頭を振って涙を流す加奈を抱きしめた。

なんて無慈悲な男か。殺して笑っただと？言語道断だ。冷血でひねくれ者。非人情な狂人。正義のときがあつたなどとは笑わせる。

加奈は私の腕の中で小さく言った。

「あたしね……分かった。小夜子が……石橋の仲間かもしれないってこと……。小夜子が本当の自分を隠しているってこと。前にあの子の心を見た。苦しくて、辛そうで、悲しそうだった。そして確かに、邪があつた。残酷な邪、が。でもあたし、認めたくなかった。だって小夜子は……友達なんだもん……。認めろって方が無理よ……」

加奈がわっと泣き出した。わたしもつられて泣き出した。

私の頭の隅に小夜子の上品な優しい笑顔がよぎる。

のどの奥が焼けたかと思うほど苦しかった。

確信してしまった。

小夜子は敵で、石橋健の仲間だ。

すべて偽りの姿だったのだ。あの笑顔も、あの性格も、あのしゃべり方も。

小夜子、どうして……。

涙で歪んだ景色の中に、小夜子の歪んだ心が見えた気がした。

第十八話：裏切り者

小夜子は帰りのバスの中で、いつものように明るく笑っていた。

土屋はぼんやりと窓の外に視線を放り、昨日のことで先生に叱られようが何も感じないように無反応だ。

「合宿面白かったねー！中学校最後の夏休み、最高！幸乃ちゃんと加奈ちゃんのおかげ。ありがとう！」

「うん」

私と加奈は必死に笑みを作る。

小夜子はハイテンションで誘ってきた。

「ねえ、今度赤月市で夏祭りがあるでしょ？一緒に行けないかな？」

「もちろんいいよ」

私は平静を装った。

「毎年市内のほぼ全員が集まるんだよ。皆浴衣着て、綿菓子とかを食べるんだよ」

「へえー！楽しみだなー」

「両親も来る？」

私はさりげなく探りを入れた。小夜子はあっさりうなづく。

「二人とも早く赤月市の人たちと仲良くなりたいてって言うてるし、来ると思うよ。よかったらよろしくね」

小夜子がにこつと笑った。

素直な笑み。

私にはそうとしか見えなかった。

学校につくと、私たちと小夜子は別れた。

私たちは土屋の姿を探し、田んぼの近くで見つけた。

「土屋！」

私たちは土屋に駆け寄る。加奈はうつむきがちで言った。

「ごめんね。その、昨日の……」

「別に」

土屋はそっけなく言った。

「分かればいい。で、犯人の一味だって認めたわけか」

「ええ……」

「次会うのはいつだ」

「一週間後の夏祭りのときね」

「それまで会う約束は」

「してないわ」

「なら今追え」

土屋からの唐突の任務だった。

「追跡して、やつらの住処を確かめろ」

私たちはあわててきた道を引き返し、小夜子がいつも帰っていく方向へ向かった。

小夜子は拍子抜けするほどあっさりと見つかった。

駄菓子屋にいた。

赤月市の数少ない店のひとつで、古い木造建てだ。私と加奈も、よく来てお菓子を買う。

小夜子はそこでスルメやらなにやら買い込み、店を出てきた。

私と加奈は土屋からもらっていた呪符を体に貼り付け、しみこませた。これで他人には姿が見えないはずだ。私と加奈同士なら見える。

小夜子は田舎の道をのんびりと歩き、優介の家の前を通過した。

赤月神社の前に来ると、石段の上のほうをまぶしそうに見上げ、足を止めた。

小夜子はそこを上り始める。

私たちも音を立てないように後に追った。

小夜子は石段を登りきると、大きく伸びをしてキョロキョロし、不安そうに石段の方を眺めたりした。

小夜子はその後、急いで神社の本殿の裏に回った。

私たちは木の陰に隠れながらそっとついていく。

小夜子は裏に曲がる手前で足を止め、呪文めいた言葉をつぶやいた。小夜子の横に、犬神と見られる半透明のシェパードが出現し、先に裏に回っていった。

小夜子はそれを追うように裏に行く。

私たちも行ってみると、まず愛ちゃんがいた。

竹箒で境内を掃き、小夜子を見ると笑って見せた。小夜子は軽く会釈をすると、ぐるぐる回っていた犬神に手を伸ばし、呼び寄せた。犬神はじゃれつくように小夜子の手を舐めたあと、煙となって消えた。

神社の縁側には石橋健がいた。座り込んで、呪符を縁側に並べて何かの確認をしている。

小夜子を見ると、ふんと鼻を鳴らした。

「お前かよ」

小夜子は肩をすくめた。

やはり。小夜子は石橋の仲間だ。心の準備はできていたけど改めて確信させられ、胸が痛んだ。加奈は唇を噛み、こらえている。

石橋は呪符をかき集め、ポケットに突っ込んだ。胡坐をかき、小夜子を買ってきた袋をじろじろ眺める。小夜子は石橋に近づくとその袋を差し出した。

石橋はそれを受け取ると、スルメを食べ始めた。

なんだか異様な光景だった。あのいかれた殺人鬼がのんきに神社の縁側でするめを食べている。小夜子はその１メートル隣に腰を下ろし、そわそわしていた。愛ちゃんは不安そうに石橋の方を見ている。何か言いたげだが、いうことができないようだった。でも私たちは咎めることはできない。

愛ちゃんは巫女だから。

「それで？」

石橋が小夜子を見やった。

「ばれたのかよ。あの邪殺屋どもに」

「……たぶん」

「なんで」

「石橋がくれた護符をいつの間にかとられた」

「はあ？」

石橋はひっくり返った声を出した。立ち上がると、小夜子に怒ったように言う。

「あれほど気をつけろといったのか！この間抜け！」

石橋は小夜子の頭を平手で叩いた。小夜子は文句を言おうとしたのか口を開きかけたがやっぱりやめて、ぼそぼそ謝った。

「……ごめんなさい」

石橋はその場を行ったり来たりして腕を組み、小夜子を眺めた。

「まあ、起こったことを嘆いても仕方がない。気にするな。あー、ここに来て何一つ進歩していないじゃないか。いつそ外国行っちゃうか」

小夜子はちらりと行きたそうな顔をした。石橋は軽くため息をついて縁側から降りて愛ちゃんを見た。

「邪魔したな」

「はい……」

愛ちゃんが手を振ると石橋は小夜子を見た。小夜子を見ると、そこにはかわりにダックスフンドがいた。ダックスはスルメが入った袋をくわえると石橋に持ち上げられ、あっという間に消えた。

私たちは自分にかかった術を解き、暗い気持ちで土屋を呼びに戻り、土屋が赤月神社の周りを見たいと言い出したので、再び赤月神社に行った。

さっきの縁側には優介がいた。愛ちゃんと並んで座り、お茶をすすっていた。

第十九話：大切なもの

優介は私たちを見ると、なんだ君たちかというような顔をした。愛ちゃんは優介になにか相談をしていたらしく、すこし元気がない。

私は愛ちゃんの隣を指差した。

「座っていい？」

愛ちゃんがうなずいたので私と加奈は座った。土屋は立ったままだ。優介とじろじろ見合っている。

「君が例の邪殺屋か」

「田中か」

「そうだが。ところでここに何しに来たんだ」

「ここに小夜子と石橋がいたでしょ」

私は切り出した。土屋はただその周辺をかきまわりたいだけだっ

たらしいが、私はどうしても二人に言いたいことがあった。

「らしいな」

優介は湯飲みを置いて私に目を転じた。

「山口が言っていた」

優介の湯飲みにはイズナが群がり、加奈が「きゃーっ！かわいい！」と、興奮した。

私は続ける。

「愛ちゃんは会ったんだよね」

「はい」

愛ちゃんはわたしたちがいることに気づいていたのかいないのか、驚かずに言った。

「いましたよ」

「仲、いいのかな」

私は挑むような言い方をしてしまった。愛ちゃんは肩をすくめる。

「そういうわけでは」

「小夜子が石橋の仲間だったこと、知っていたの？」

「君たち今頃気がついたのか」

嘲笑するような嫌味ったらしい声は、勿論優介だ。私は驚いて目をむいた。

「知ってたの？」

「ああ。宮村が犬神にとり憑かれたときがあっただろう。そのときすでに気づいていた」

「どうして？」

「あいつは犬神使いだろう。犬神使いはこの辺では宮村しかない。それに憑いた犬神は宮村になついていた。だから恐らく自分で自分を呪って、演技をしていたんだろう」

「じゃあそのとき石橋と一緒にいた犬は、幻だったんだね」

「なぜそうしたかは分かっているだろうが、宮村が敵ではないということを強調するためだ」

優介はイズナに白い小さな何かを与えながら言った。イズナはむしゃむしゃとそれを食べる。加奈はもつと興奮した。

私は二人に言いたかったことをそつと告げた。

「……二人に……協力してほしいの」

加奈が顔を上げ、土屋はこっちを見た。

「だって殺人犯だよ？少しでも早く捕まえたいの！お願い、協力して！」

「断る」

優介はごく普通の口調で言った。私は一瞬呆然としてからすぐに立ち上がって食って掛かった。

「どうしてよ!」

「僕は関係ないからさ。冷たい奴と思うだろうが別に構わない。僕は素直だからこの際はつきり言っておこう。僕にとって赤の他人などどうでもいい。ただ大切なものを守るだけで十分だ」

「ひどいっ!」

腸が煮えくり返る思いだった。

「どうして?何でそんな……」

「じゃあ聞くが、赤の他人が亡くなったら、君は悲しむか」

私は口をつぐんでしまった。

「痛くも痒くもないだろう。それと同じだ。僕がしゃしゃったまねをして、家族に危害が加わったら嫌なものでね。悪いな」

「よ、よくも……」

「よせ」

土屋が優介に迫ろうとした私を止めた。私の体は怒りで熱を発していた。

「こいつの言うとおりだよ。こいつはあくまで大切なものを守りたいんだ。責められねえよ。俺だって邪殺屋じゃなければ、そう言っただろう」

「気が利くじゃないか、弁護してくれるなんて」

優介が立ち上がるとイズナが肩に駆け上った。

「僕は失礼するよ」

そう言い残すと優介は颯爽と失せた。愛ちゃんがすぐそこまで見送りにいく。

確かに優介の言うとおりだけど認めたくなかった。自分の醜態を見せられるようで。

唇を噛み、戻ってきた愛ちゃんを見る。

「愛ちゃんは」

「私は……」

愛ちゃんは視線を落とす。土屋が再び弁護した。

「やめろ高橋。前に言っただろう。巫女はどちらの方にも味方になれないんだ。俺と同じでおきてがある」

おきて、か。

悔しくてならなかった。誰も協力してくれない。

愛ちゃんは神社の奥の部屋に入っていた。すぐに戻ってくると、私と加奈に何かを差し出した。

手には桃色の綺麗な花飾りが二つ、乗っていた。花びらは五枚で、浴衣に合いそうだった。

「これをかわりに受け取ってください」

私は受け取ると、愛ちゃんを見た。

「これは……？」

「巫女の霊力をこめた、お守りです。身が危険にさらされたとき、一度だけ守ってくれます。夏祭りにこれをつけていってください」

「あっありがとう！」

私は少しでも協力してくれた愛ちゃんに感謝した。涙が出るほどうれしかった。愛ちゃんはあどけない笑顔を見せてくれた。

その笑顔は、可愛かった。そして、きりつとした巫女の顔だった。

第二十話：夏祭りの夜に

「おまたせー！」

一番最後に走ってきたのは小夜子だった。夏祭りの夜、私と加奈は、小夜子と夏祭りが開催される公園の入り口で待ち合わせをしていた。

私と加奈はできるだけ自然に笑って手を振る。

小夜子は紫色の地に、花火模様の浴衣を着ていた。帯は赤くてとても似合っている。髪はポニーテールではなく、自然に流しっていて、綺麗だった。

加奈は紺色の地に朝顔の浴衣でいつもよりはるかに大人っぽく見えた。私は青い地にトンボの絵というお気に入りのお気に入りの浴衣を着ていた。

「ごめんね！待った？」

小夜子があはあしながら言った。下駄を履いているので大して走れないので、余計に疲れてしまったようだった。

「ううん。今来たばかりだよ」

私は平静としていった。加奈もにこにこと言う。

「そうだよ小夜子。浴衣、とっても似合うね！」

「ありがとう！加奈ちゃんや幸乃ちゃんもとっても似合ってるよ！」

小夜子がつこりした。私たちの髪の毛を見ると、目を輝かせる。

「わーっ！おそろいの髪飾りだー！綺麗！」

そう。愛ちゃんからもらったものだ。

私たちは人々が溢れ返った夜店のほうへ歩を進めた。ちょうちんがぶら下がり、お神樂が聞こえる。いつもはなにもない寂しい公園は、楽しいお祭りの場へと変化していた。

小夜子は石橋とつるんでいるとは思えないほど明るかった。人々の間をすいすい進み、金魚すくいだ射的だとはしゃいだ。

でも私たちは今日、小夜子を詰問して石橋の居場所を教えてもらわなければならない。

絶対言わせると、私たちは誓ったのだ。

小夜子が綿菓子をばくついているときも、そのことだけは忘れなかった。

ラムネを飲んで、射的をした。射的でお菓子を当て、三人で食べた。

下駄でちょこちょこ歩いていると、愛がひのはかま緋袴をはいてお餅を配っていた。

私たちはそちらに歩み寄った。

「愛ちゃん！」

「幸乃さんたち」

愛ちゃんが私たちを見ると大きく手を振ってきた。他のお客さん

たちと話したりして愛ちゃんもそれなりにお祭りを楽しんでいるようだった。

「お祭り楽しいね！」

私は愛ちゃんにお菓子を分けてあげながら言った。愛ちゃんはお礼を言いながらお菓子を食べ、おいしそうにうなずいた。

愛ちゃんはいつもは澄ました感じだけど、今日はごく普通の女の子だった。

学校の生徒たちとはしゃいだりしていて、私の胸がなんだか温かくなった。

私たちもお餅をもらい、三人でお餅をばくついた。

「んー！おいしー！」

小夜子は子供のように飛び跳ねた。私たちはその姿に笑って、ふざけあった。

その途中、加奈がふと、かばんから時計を出し、ゆっくり笑みを

消した。

私をひじで小突き、時間を示す。

八時三十分。

私と加奈が公園の裏の森で土屋と待ち合をせした、ちょうどその時刻だった。

加奈は暗い顔で小夜子の肩を小突いた。

小夜子は見えていた金魚すくいから目をそらし、ん？と加奈を見た。

「なあに？」

「ちょっと……お話があるの。きてくれる？」

加奈は小夜子を引っ張り、約束の場所へと向かった。私もあわてて追う。

小夜子是不穏な空気を感じたのか、不安そうだ。

私はそれを励まそうと小夜子の手を握った。

「大丈夫。大丈夫だからね」

小夜子の手は冷たかった。

小夜子は温かく笑い、握り返してきた。

小夜子といられる最後の夜かもしれない。

闇夜の中で、小夜子は明るく笑っていた。

公園の裏の森は気が全くなかった。森の入り口は暗く、視界が悪
い。

入り口の木の根元には土屋が座り込んでいた。私たちはその前で止まる。小夜子是不安そうに唇を噛み、そわそわする。

小夜子は土屋の右側の木を背にして、ちょこんと首をかしげた。

「それで、お話ってなあに？」

私は加奈と土屋をちらりと見、ゆっくり小夜子と向き合い、目を合わせた。そうしなければ、泣いてしまう気がした。

私は押し殺した声で

「……石橋のことよ」

と切り出した。

小夜子は今度は逆の方向に首をかしげた。

「……石橋？石橋さんって誰かな？」

小夜子は案の定、しらばくれた。私は小夜子に迫り、この子は殺人犯だと自分に言い聞かせた。

「知ってるんだよ！」

そう強く言うと、小夜子はびくんと肩を上げた。私は構わず続ける。

「小夜子は犬神使いなんですよ？石橋の仲間なんですよ？私たち、小夜子が石橋と一緒にいるところ、見たんだよ？お願い、石橋の居場所を教えて！」

「なっ何？幸乃ちゃん？何のことなの？」

小夜子は動揺している。演技とは思えない。

加奈は決意したのか、きつと小夜子を睨む。ものすごい剣幕で怒鳴る。

「演技したって無駄よ！幸乃の言ったとおり、私たちは小夜子が石橋と一緒にいるところを見た。しっかり見たのよ！あんた、人殺しなんですよ？学校の生徒や両親を虐殺したんですよ？」

小夜子は加奈の剣幕にひるんで、後ろの木に背中をつけた。顔は一層蒼白で、怯えている。

「わ、わたし人殺しなんかじゃないよっ！どうしてそんなこと言うの……」

「嘘をつかないでよ！」

加奈が小夜子の肩を掴んだ。

「言いなさい。あいつはどこにいるの！」

「言つてよ！」

私も一緒になって言った。

小夜子は全く口を割らなかつた。ただ、痛い、とか、やめて、とか言い続けて、涙を流し始めた。

そしてとうとう、土屋が苛々しながら立ち上がった。小夜子に近づきながら、こう吐き捨てる。

「なかなかの演技力だな、お前。そんなに石橋をかばいたいのかよ」

小夜子は涙でぬれた目で土屋に目を向ける。

私と加奈は小夜子を離すと土屋を見た。

「どうしたの？」

「どけよお前ら。俺がやる」

「だめ！」

私と加奈が同時に言った。土屋がやったら、下手したら小夜子は殺される。何をするか分からない。

土屋は無視した。ポケットから呪符を探り、出した。私はなおも訴えた。

「やめて！そんなの使わないでよ！」

「なぜだ？」

「土屋、あんた、犯罪者になるよ。いいの、それでも！」

「あいにく人は三人殺してるんで」

「その上に、さらに罪を重ねないでよ！」

「なんとも言え」

土屋は私と加奈の間から、小夜子の右腕あたりに呪符を投げた。

呪符が小夜子の右二の腕に当たったと同時に、そこから血飛沫が上がった。私たちの浴衣を、小夜子の血がぬらす。

小夜子の浴衣が破けて、生々しい傷があらわになった。

その傷はまるでナイフ切りつけられたかのように長く、肉がえぐれ、骨が見えそうだった。えぐれたところからはどくどくと血液が流れていく。

小夜子は声を上げなかった。唐突すぎて、なにが起こったか分からないようだった。

そして何が起きたのかを悟ると、恐怖で目を見開き、二の腕にできた傷を左手で押さえる。

へたり込んでしまった小夜子を、土屋は怒鳴りつける。

「おい！とつと言えよ！もう傷つけられなくては、答える！」

小夜子は震えるばかりで何も言わない。

土屋はそんな小夜子を平然と傷つけた。右腕の次は左腕、と傷つける場所を次々と変える。

土屋は小夜子が傷ついてもなんとも思わないらしい。

私と加奈は身を寄せ合っていた。

土屋を止めたい。なのに体は強張り、声さえも出ない。

小夜子はいまや泣き叫んでいた。

「やめて！どうしてこんなことするの！ひどいよ、加奈ちゃん、幸乃ちゃん、土屋くん……私をいじめて楽しいの？」

「うるさいっ！さっさと吐けよ！殺すぞ！」

小夜子は右腕と左腕の傷を抑え、うなだれてしゃくりあげた。

このままでは出血多量で死んでしまう。

「ひどい……ひどいよっ……。わたしはなにも、していないのに……。どうして傷つけるの？私が邪魔なの？」

「そうだとも。この殺人女め。お前なんて死ねばいいんだよ。でもその前に奴の居場所を言いな。石橋の居場所を」

「石橋なんて人、知らないっ……」

本当に知らないのでは。

わたしはそう思い始めていた。誰かが私たちをはめようとしているのでは、と。石橋が、石橋とその誰かが会う場面を幻影で見せて、本当の裏切り者から気をそらせようとしているんじゃないか……？

私は土屋を止めようとした。

「待つてよ土屋。もうこんなことやめてよ！小夜子は犯人じゃないかもしれないよ！」

「今頃なにいつてやがる！俺はやるぜ。用が済んだらコイツはこの場で始末する」

「そんなことしないでよ！」

「……もういいよ。幸乃ちゃん」

小夜子が震える声で言った。嗚咽を漏らしながら、必死に声を絞り出している。

「幸乃ちゃん、無駄な演技はなくていいよ……。どうせ皆、私

のことなんかちつとも心配してないんだよね……。幸乃ちゃんも、加奈ちゃんも、わたしなんか死んじゃえって、思っているんでしょ？……仲のいいふりをして、陰ではそんなふうに思ってた……。前の学校でもそうだった。皆私を煙たがるんだ。変だと思ってたよ。誰にでも嫌われる私に、いきなり仲のいい友達ができるなんて……」

「ちょっと待って小夜子！私たち、死んじゃえなんて思っていない！」

「嘘つきっ！もういいよ、私なんて生きてる価値ないんだ！殺したいなら殺せばいいよ！」

小夜子はそういうと、涙をぼろぼろ流した。

「ふうん。それがお望みなら、殺してやるよ！」

土屋は怒ったように叫んだ。呪文めいた言葉をつぶやくと、手のひらに現れた呪符を、小夜子に飛ばそうとした。

私と加奈は同時に叫びかけた。

「やめ……っ」

しかし言い切ることはできなかった。他の声が頭上から振ってきて、わたしたちの声をさえぎったからだ。

「ここで会ったが百年目だな、おい」

冷やかな声とともに、土屋が今まさに投げようとしていた呪符が、右のほうにはじけ飛ぶ。

私たちは小夜子のことを一瞬忘れ、空を仰いだ。

奴だった。

石橋健が腕を組んで空中に浮かび、私たちのことを見下ろしていた。

第二十一話：裏の顔

しばしの間、沈黙が流れていた。私たちは突っ立って石橋を見上げ、石橋は黙ったまま土屋に視線を固定している。

「くふふ……はは、あはははっ！」

最初に沈黙を破ったのは、小夜子だった。いままでうずくついていた小夜子が、突如石橋に匹敵するほどの狂った笑い声を上げたのだ。一人でけたたましく笑い転げ、私たちを指差す。

「今頃気がついたの！お前ら遅すぎなんだよ！わたしなんかにだまされてたなんて、だっせえ！きやははははっ！」

今までの小夜子とは全く違った。

優しい上品な小夜子はどこかに消えうせ、代わりにそこには悪魔がいた。

あまりの変わりように、加奈と私は愕然とした。

土屋だけはうれしそうだ。

「ようやく本性を現しやがったか。だったらもう、容赦はしねえから……」

「待てよ」

石橋がさえぎった。いまだに笑い転げる小夜子を見やると、尖った声を出す。

「おい。うるせえぞ」

小夜子は我に返ったような顔をして、なにかつぶやくと黙りこくり、元の大人しい小夜子に戻った。

小夜子はやはり裏切り者……。今までののはすべて演技だったのだ。さっきのも、全部全部。

土屋は冷静に石橋を見上げている。

「それで？何しに来た」

「俺のワンコを返してもらおうと思ってよ」

小夜子をあごでしゃくる。

「そいつ、いつもは大人しいんだぜ。いつも黙っているんだが、こういうときになると豹変するんだ。そこをどけよ。宮村、今日は楽しいお祭りだからさ、帰りに夜店にでも寄って……ん？」

石橋がかすかに身を乗り出し、うずくまっている小夜子を目を細めてみた。

「土屋弘。お前宮村に何やった？血まみれじゃねえか」

石橋はどうやら、小夜子が拷問されていたことを知らなかったらしい。土屋は誇らしげに胸を張る。

「お前の居場所を突き止めるために拷問してやったんだ、なんだ知らなかったのか？いいタイミングだったな、あと一瞬遅ければ、殺しちまってたよ」

石橋は表情こそ変わらなかったが、かすかに声に怒りが帯びた。

「ひでえ。なんてことしやる。女の子をいじめるなんて最低だな」

「黙れ、ガキだろうが女だろうがぶっ殺してきたくせに」

「それ言ってる」

石橋は大真面目にうなずくと、吐き捨てるように言った。

「そこをどけよ。三対二でやり合おうじゃねえの。それとも、土屋にそんな度胸、ないか？」

「ふざける」

土屋は石橋を睨みつけると、私と加奈を押して、怪我した小夜子から離れた。小夜子はさっきのまま全然動いていなかった。

石橋は私たちと小夜子の間に結界を張ると、小夜子側に降り立った。小夜子はちょっと悲しげな顔をして怪我した腕を石橋の方に差し出し、石橋はしゃがみこんで傷口を調べた。

「むごいな」

そっけなく言うと、呪符を空中から何枚か取り出し、小夜子に渡して足の傷の方に貼り付けるように言った。小夜子が自分の足に呪符を貼り付けると、傷は呪符とともにしみこむように消えていった。石橋は小夜子の腕の方をせつせと治し、最終的には痕が残るだけになった。

小夜子は何か一言つぶやくと、かすかに笑った。皮肉なことに、以前私たちに向けていた優しい笑顔で悪意の欠片もなかった。それに対し、石橋は文句みたいなことを一言つぶやく。ただの中学生だった。小夜子は浴衣の下にあらかじめ黒い服を着ていたらしく、浴衣をその場で脱ぎ捨てて、下ろした髪をゴムで結い上げた。小夜子の体が黒い光に包まれたかと思うとみるみる縮んでいき、光が消えるとダックスの姿になっていた。

しゃがんだ石橋の背中から肩に駆け上る。石橋はのんきに呪符を補給して、ポケットに突っ込んでいた。

ようやく立ち上がると、私たちに向き直る。

「待たせたな。さあて、始めようか。邪殺屋共」

私はいまさら怖くなってきて、思わず土屋の腕を掴んだ。

「どうしよう」

土屋と加奈が私を見る。

「何がだよ？」

「私、戦えるかな……」

「訓練の通りにやればいいさ。井上は、奴が姿を透明にしたりしたら、どこにいるか教えてくれ」

「わかったわ」

戦うのは怖いけど、やるしかない。私たちは再び二人に向き合い、身構え……二人が消えていることに気がついた。

「……あれ」

「い、いないわ！」

加奈と土屋が同時に目をむいた。その光景がおかしくて嘖き出しそうになったが、すぐにそれどころではないということを悟った。祭りをやっている方向から悲鳴が聞こえたのだ。

急いでそっちに向かうと、夜店から火柱が上がっていた。人々は大混乱し、我先にと公園の出口に殺到している。何かが破裂するような音が続き、火の勢いは増していく。すべての夜店が爆発し、あまりの音に私と加奈は悲鳴を上げた。その後も爆発音は幾度も続く。

人の群れは、もつと悲鳴を上げた。そんな中に、黒い呪符が容赦なく降りかかる。石橋がどこにいるかは特定できず、土屋はともかく人々の頭上に白い呪符を投げて結界を広げた。

黒い呪符はさえぎられたけど、人々は相変わらず混乱している。転んだ者はどんどん踏みつけられていく。

炎の光で夜空は赤くなっていて、赤い夜空に石橋が浮いていた。十メートルほど上空で、気味の悪いにやにや笑いをして人々を見下ろしている。

土屋はすかさず石橋に声を飛ばした。

「石橋！汚いマネを……！」

石橋はたった今私たちに気がついた。

「ん？おや、もう来たのかい？汚いマネだと？はッ。俺がお前を相手にすると思ったのか？だとしたらお前はよほどの間抜けだ。俺はあつという間に袋叩きにされちまうだろうが。それはごめんなものでね。そこでいくらでもわめいてな」

「なんだと……」

土屋が怒りで顔を赤くした。

私たちはその隙に、さつさと浴衣を脱いだ。私たちもこんなことを予想して、あらかじめ下に体操服を着ていたのだ。下駄も脱いで、かばんからスニーカーを引っ張り出してはく。

私は急いで近くにあった水道場に行き、蛇口を全開にして燃え上がる夜店のほうに水を噴射した。しかし炎は消える気配を見せない。

土屋は加奈を呼んで、人たちに踏みつけられた人を助けに行かせた。

石橋に呪符を投げるが結界を張っていて、呪符は跳ね返ってくる。

私のほうは夜店の炎が消えなくて、ヒステリックに叫んだ。

「消えないよ！」

土屋は汚い悪態をついた。

右方で誰かが悲鳴を上げた。とっさに目を転じると、愛ちゃんと同級生を見られる女子が二人、いた。一人の女子が躓いたらしく、愛ちゃんが助け起こそうとしている。すぐ横には燃え上がる夜店があり、今にも崩れてしまいそうだ。

そのバランスがとうとう崩れた。

運が悪いことに、愛ちゃんたちのほうに倒れていく。愛ちゃん以外の女子が悲鳴を上げ、愛ちゃんは目を閉じている。私も思わず悲鳴を上げた。

土屋はなぜか動かない。

三人がいきなり消えた。夜店が一瞬後、三人がいたところに倒れる。

土屋が動いた。夜店が倒れたところから十メートルほど左のほうに、呪符を投げたのだ。何も無いと思っていたのに、何かにぶつかった。その何かが吹っ飛び、後ろの木に激突する。

私は目を疑った。

愛ちゃんたちの命を危険にさらした張本人が、三人を助けていた。

石橋は木に背中をしたたかぶつけたようだった。眉をひそめてひっくり返っている。その腕の中には三人がいて、愛ちゃん以外が泣き叫んでいる。愛ちゃんは恐怖のあまり、震えていた。

石橋は三人を右側に押しのけると、立ち上がろうとしている。

ダックスは石橋の肩から転がり落ちたみたいで、石橋に迫る土屋に吠え立てている。人間語にしたら汚い悪態が聞けるだろう。土屋は足を止め石橋に問うた。

「何のマネだ？」

心底驚いている。私も同じだった。石橋は怒り狂ったように叫ん

だ。

「お前こそなんのマネだ？なぜ助けようとしなかった？くそつたれが！」

石橋が死の呪符を投げてよこしてきたので、私は悲鳴を上げて伏せ、土屋はそれをはじいた。

「特殊能力者を全部消す気なんだろう？なんでそいつらは助けたんだよ？」

石橋は答えなかったが、答えは明白だった。自分を助けたことがある巫女がいたからだ。土屋も答えは悟ったようだが、それでも納得いかないらしい。

「特殊能力者はすべて消すって言うてたくせに、巫女は助けるのかよ。まあいい、殺してやるよ。墓穴を掘ったな、巫女を助けたおかげであばらでも折ったか」

馬鹿だな、土屋はそうつぶやくと、ただ石橋を殺す呪符を投げた。最後の最後に人助けをしたので、悪態をつく気が失せたらしい。呪符は空気の摩擦音を発しながらまっすぐと殺人鬼に飛んでいった。石橋の顔に、死への恐怖が走った気がした。

ようやく石橋がいなくなる、と思った。石橋が消え、世の中に平安が訪れる、と。戦いが終わると思うと嬉しくて、わたしは泣きそうになった。

しかし呪符は石橋に当たる寸前で、瞬間移動したかのように消えてしまった。

私は困惑し、土屋の袖を引っ張る。

「ねえ、何で消えちゃったの？」

「アイツだ」

土屋は憎々しげに石橋の傍らを睨んでいる。そこには相変わらず砂まみれの犬がいた。ダックスだ。

石橋は小夜子を忘れていたようで、嬉しそうに「おう、お前がいたんだった宮村」と言い、ひざを抱いて、観客席に回った。

ダックスが黒い光を放ち、人間の、小夜子の姿に戻った。

小夜子は私にニコニコと笑いかけていた。

第二十二話：友達だったのに…

私は今更ながら激しい悲しみを覚えた。

小夜子はいつものように笑っていた。なのにその明るい笑みは、むしろ不気味だった。

土屋が小夜子に呪符を構える。

小夜子が散歩でもするような足取りで石橋をかばうように前に立ちふさがった。小夜子は自信に満ち溢れていた。

私は土屋が呪符を投げようとするのを押さえ、一步前に出て小夜子に叫んだ。

「小夜子！私、戦いたくない！もうやめよう、こっち側について！」

小夜子は無視して、軽く両手を広げ、何かを呼び寄せ始めた。得体の知れない寒気が、私たちを襲う。私はそれでもなお、叫び続けた。

「もうおしまいにしよう！殺し合いなんていやだよ。私、小夜子がちゃんと友達だって思ってたよ！戻ってきてよ！石橋は、人殺しなのよ！」

小夜子が私を見た。寂しげに笑ってみせる。

「わたしだって……人殺しだよ？」

わたしは思わず言葉に詰まる。

「学校の皆と、両親を殺したの。皆……皆、わたしなんかより先に死んでいくの。両親も……学校の皆も……」

「お前が殺したんだろうが！馬鹿野郎め！」

わたしは土屋が叫ぶのを力づくで押し戻す。

「わたしは小夜子の味方……ううん、幸子の味方よ！」

幸子とは小夜子の本名だ。

「私たちは大切な友達。そうでしょ？」

「友達……？」

「そうだよ！友達！」

小夜子は一瞬こちら側につくと思われた。だって笑ったから。でもそれは、狂気の笑みだった。

「あはは…… 幸乃ちゃん、わたしをあんなに責めたくせに、そういうこと言うんだ？ 散々痛めつけて、その土屋くんがわたしを傷つけるのを止めようとしなかったくせに……」

「だ、だってそれは……」

「幸乃ちゃん、知らないなら教えてあげるよ。人間はね、裏切るんだよ？ 自分さえ良ければいいって、思ってるんだよ？ たとえ親友でも、親でもあつという間に裏切る。なぜなら、人間は馬鹿だからだよ。悪循環を繰り返して、簡単なことも難しく考えて、それに卑しい。そうでしょ？」

「違うよ……」

「ふうん、そっか。幸乃ちゃんみたいな綺麗事を言いまくる奴には反吐が出るよ。だから死んでね」

「死ぬのはそっちだ！」

土屋はわたしを押し戻しながら怒鳴り返した。

土屋が呪符を放つのと同時に、小夜子が青白い半透明の何かを放つ。

その二つがぶつかってはじけた。小夜子はその時点ですでに他の攻撃を放っていた。両手をわたしたちに向けて、青白い風を吹かせたのだ。

その力は石橋の力とは比べ物にならないほど強く、油断していた私たちはあつという間に吹き飛ばされた。わたしは思わず目を閉じる。しかもなぜか、体中に激痛が走っている。

地面にうまく着地し、目をこじ開けてぞっとした。

血まみれになっていた。体のいたるところが切り裂かれ、血が風で後ろに吹き飛ばされていく。

このままでは死んでしまう。

そう思った瞬間、体がふわりと暖かくなった。唐突に風がやみ、今できたばかりの傷さえも消えていく。

な、なんだ？

私は立ち上がりながら乱れた髪を直そうと紙に手をやり、愛ちゃんにくれた髪飾りがなくなっていることに気がついた。

そっか、守ってくれたんだね……。

私は心の中で髪飾りにお礼をいい、石橋の傍らに立って、まだ震えている愛ちゃんを見た。お礼を言おうとしたのに、私はまた吹っ飛ばされて仰向けに倒れこんだ。

立ち上がろうとしているのに、体に力が入らない。

よく見ると、私の体に何かのしかかっていた。

犬だった。不透明の黒い犬が二匹、私の体にのしかかっている。どけられず、私は土屋に助けを求めようとした。

しかし残念なことに土屋も捕まっていた。

小夜子を油断しすぎて、隙ができまくりだったようだ。いつもはこんなことないのだが、さっきも色々なことがあって疲労していたのだろう。

私の隣にひっくり返った土屋は黒い犬をどかそうともがいていたが、やがてあきらめた。

犬はどかない。体は動かない。もうおしまいだ。

私はもう半ベソをかいていた。

小夜子が歩いてきて私達を見下ろす。

冷たくもない、暖かくもない、ごく普通の瞳で。

「油断したのが悪いんだよ。わたし、まだ能力使い始めて三ヶ月ぐらいなのに」

「たつた？」

土屋が横で素っ頓狂な声を上げた。

右足を引きずりながら視界に石橋健が現れた。例の気味の悪いにやにや笑いをしている。

「どうだてめえら。こいつ、けっこうやるだろ？俺より俺の下っ端の方が強いなんて、皮肉だなあ？」

「くそっ……。なんで強いんだよ、そいつ！」

「ここの公園には犬神使いが使える犬の霊が大量に集まってるんだよ。あ、犬神と犬の霊の違い、分かる？分かるわけないか。俺もこの前まで知らなかったんだから」

石橋が心底愉快そうに笑った。

「さあ、殺してやるよ。忌々しい邪殺屋共。妹の所に飛んできな」

石橋が空中から死の呪符を二枚取り出した。

わたしは恐怖を押し殺しながら石橋の傍らから私達を見ている小夜子に叫んだ。

「小夜子お願い！やめてっっていってよ！」

小夜子は何も言わない。

「命乞いなどするんじゃないよ！邪殺屋としての名誉を……」

土屋が怒ったように声を荒らげるがわたしは無視した。名誉などどうでもいい。

「小夜子、どうして？どうしてこんなことするのよ？なんで皆を殺したのよ！小夜子の親も、生徒も、なんにも悪くないのに！」

「悪くない？」

小夜子がおぞましい化け物でも見たように目を見開いた。

「悪く、ない？」

「そうだよ、そうなんですよ？」

「違う、悪いのはすべてあいつらよ。異様な感じがする、気味が悪いとか言って、生徒はわたしをいじめたし、親はわたしを虐待した！」

小夜子が拳を硬く握っていた。

ぎよつとした。

「毎日毎日暴力されて……。親によく言われたよ。生まなきゃ良かった、死んでしまえ、ってさ。学校ではトイレとかでいろんなことされたよ。それである日、気がいたら皆死んだの。わたしの中の犬神が発動したの。能力覚醒ってことね。そのときまで自分の能力のことなんて知らなかった。両親は散々痛めつけて石橋に殺してもらった。あはは、いいザマだったよ」

「だからって、石橋の仲間になるの？それっておかしいよ！」

「石橋はわたしを殺すために会いに来たんだよ。ちょうど能力が覚醒した、その時に。殺されるって覚悟したけど、殺されなかった。

わたしと石橋に意外な接点があったから」

接点？

大人しい小夜子と、前はかなりの正義だったがイカれてしまった石橋と、どんな接点があると言うのだろうか？

わたしはとにかく、なおも訴えるように言った。

「私たちのこと、解放してよ！お願いだから……！」

「どうして？」

「まだ死にたくないからだよ！」

「なおさら殺したいね」

石橋が冷ややかに言い放った。

「無駄話はやめにしろ。こいつらはもう殺すから。分かった？」

石橋は物分りの悪い子に言うように言った。小夜子は「分かった」とうなずいた。

石橋は死の呪符を空中から取り出した。嬉しくてたまらないというように顔を輝かせている。こんなに嬉しそうな石橋は見たことがない。殺すことに喜びを感じている石橋が恐ろしい。石橋がわたしたちの上でこれ見よがしに呪符をふり、額に貼り付けようとした。

万事休す。

もうだめだ。

人生十四年。同じ歳の男子に殺されるとは最悪の人生だ。

今まで知り合った人々に心の中で別れを告げた。

さよなら皆……

「「させるかあああああ！」「」」

遠くで誰かが吼える声が聞こえ、わたしは反射的に目を開けた。

な、なんだ？

公園の入り口に、わたしの学校の生徒たちが怒りに肩を怒らせながら立っていた。先頭には加奈がいる。加奈が呼んできてくれたのだ！

誰かが念動力でいまだに燃えている夜店を持ち上げ、石橋たちにぶつけようと飛ばしてきた。

しかも複数の人がやったらしく、四つも飛んできた。

二人は完全に面食らった。しばらく呆然とし、やっと反応して石橋が小夜子を掴んでよける。小夜子は身を縮め、必死で石橋に合わせて走り、石橋は苛々と何かを叫び、向かってきた夜店を呪符で弾き飛ばした。

わたしたちにのしかかっていた犬が消え、体が自由になった。頭上に夜店が飛んでいくのを感じた。わたしは感激して「皆っ！」と叫んだ。生徒たちが数人駆け寄ってきて、わたしたちに、大丈夫？と声をかけてくれる。

攻撃している生徒たちは支離滅裂に石橋と小夜子に夜店やら水塊やらを放っていた。さすがに石橋も参ったらしい。

石橋はよけるのをやめて、逃げることにしたようだ。

ダックスに変化した小夜子を腕に抱えると、私達を睨みつける。

「覚えてるよ、今度思い知らせてやる」

という捨て台詞とともに、森の中の闇に消えた。

私はとうとうこらえていた涙を噴き出させ、子供のように泣きじやくった。

本当に、死ななくて良かった。わたしは走ってきた加奈にしがみついた。

加奈は暖かい腕で、わたしをしっかりと抱きしめてくれた。

第二十三話：悲しみ

あの出来事からもう2週間がたとうとしていた。

あの事件で、死者3人、怪我人15人も出てしまい、私たちは落ち込んだ。

いまは加奈と土屋で畑の脇に座り、アイスクャンディをしゃぶっていた。

わたしは紺色の山の連なりをぼんやりと眺める。

「時間が巻き戻せたらいいのにね」

加奈が浮かない顔をして言った。

「時間を巻き戻せたら、全て無かった事にできるのに」

「ゲームじゃないんだから、できるわけねえ」

土屋が残りのアイスをかじりとり、近くにあった金網を編んで作

ったゴミ箱にアイス棒を投げ捨てた。

「時間を巻き戻せる特殊能力者なんて今まで聞いたこともない。恐らくいないだろうな」

「ちえ。あたし、なんだか疲れちゃった。小夜子のこと、石橋のことも。ね、幸乃」

「うん」

小夜子を思い出すだけで胸が痛んでくる。

土屋は立ち上がり、ジャージの後ろの砂をはたき、ふとわたしを見た。

「高橋お前、カタがついたら邪殺屋やめるのか」

「分からないよ、そんなの」

「あ、そう」

「土屋は続けるの？」

「俺はな。一生殺し屋さ」

なんと惨めな人生だろうか。一生殺し屋として生きていくんじゃあ、楽しみもほとんどないではないか。

わたしは尋ねてみる。

「殺し屋は辞められないの？」

「言っただろう。もう三人殺したんだ。後戻りはできない。それに、辞めるつもりもない」

「その三人の命は救うことはできなかったの？」

土屋は黙りこくり、何も言わなかった。少しだけ苦しそうな顔になったのをわたしは見逃さなかった。

土屋は悪い人を殺した。

それはいい事なのかな。良い殺しと悪い殺しなんて、あるのかな。わたしには殺しは殺しで、どれも同じようにしか見えない。

わたしと加奈もアイス棒をゴミ箱に投げ捨てた。それとほぼ同時にケータイが鳴り出す。

優介からのメールだ。

絵文字も何もない、そっけないメール。

『今日から十月の終わりまで、外国に行く』

と書いてあった。わたしは目をむいた。

そんないきなり……。どうしたと言うのだろう。わたしは返事を返す。

『どうして？ 10月には体育祭とかもあるじゃん！』

『全て休む。なぜかはいずれ話す』

以上だ。

優介はケータイの電源を切ったようで、もうつながらなかった。

なんて野郎だ。

わたしは乱暴にケータイを閉め、ポケットに突っ込んだ。

三人で歩いていると、夏祭りが行われた公園にたどり着いた。

公園の砂は黒くこげている。夜店はもうなくなっているが、公園は荒れていた。

その一角に、愛がいた。

御幣をかかげてなにやら唱えている。

近づいてみると、愛はわたしたちに気がつき、御幣を下ろした。

愛とは夏祭り以来、一度も会っていない。愛はすっかり元気だった。

「幸乃さんたち」

「何しているの？」

「この公園に住んでいる動物霊たちと話をしていました」

「そんなことできるの？」

「はい。しばしここを離れるので、その前に動物霊たちを沈めておこうと思って」

「ここを離れるって？どっして？どこに行くの？」

「はい。外国に少々」

「いつから？」

「今日の午後からです」

「優介と一緒になんだね」

「はい」

愛はしゃがみこんで、焦げて黒くなった砂を手にとった。

「この前ここで健たちが暴れたので、ここの動物霊たちは怒っています」

「だろーな」

土屋はむっとしたような顔をして、倒木に座った。愛はこうべをたれる。

「犬の霊以外はカンカンです」

「どうして犬の霊は怒っていないの？」

「犬神使いが小夜子さんがいたからです。小夜子さんには皆すぐなつくんです。優しいそうですよ」

「……小夜子が？」

「はい。本当の自分はいつも裏にいるんですよ」

愛が微笑んだ。

「この間はここにたくさん犬の霊が集まっていたから、小夜子ちゃん、強かったんです。わたしはよく覚えていないんですが、この犬の霊が、僕らが助けてあげた、って言っています」

「犬の霊と犬神って何が違うの？」

「犬神はいつも術者についている霊です。主人の身が危険にさらされたとき、勝手に発動して守ってくれるんです。でも犬の霊は術者に呼ばれない限り、発動しないんです。小夜子ちゃんの犬神は、シェパードですね」

「そうなんだ」

わたしはしゃがみこんで砂に触れた。

「……わたし、小夜子が虐待とかされていたなんて、知らなかった

た
」

言葉がぼろりと口からこぼれ出た。

「いつも元気だったし、親のこと話していたし」

「あたしも」

加奈がわたしの横にしゃがんで、砂に円を書いた。

「……全部、演技だったんだね」

「本当にそうでしょうか」

愛が優しい声で言った。

「演技なら、あんなに笑ったりできないと思いますよ」

「そうかな……」

「はい」

わたしと加奈は愛を見る。

「愛ちゃんは許せるの？石橋たちのしていることに」

「許せるとか許せないとか、巫女の世界にはないんです。全ての人を受け入れる、それが巫女ですから」

全ての人。

人殺しでも、いかれた人でも。

わたしには無理だ。

愛のように果てしなく広い心なんて、絶対に持てない。

なのにどうしてだろう。

小夜子を思うと胸が痛い。

自然と涙がこぼれてきた。

小夜子……。

気がつけば、私と加奈は一緒になって泣いていた。

第*話：2

季節はまだ春だった。

五月の空気が教室の窓から流れ込んできて、俺をくすぐる。窓側の席なので、そこから、校庭で体育の授業、サッカーをやっている生徒たちを眺めた。一番過ごしやすい季節、イコール、一番眠たくなる季節である。

俺の名前は石橋健だ。ありふれた名前、どちらかというと、頭はいいほうだった。

授業中にもかかわらず、眠くなっていた。授業は国語。今、先生が黒板に何かを書いている。そこらじゅうで私語が起こり、寝ている生徒もいた。国語ほどつまらない授業はない。国語なんて、漢字を覚えればそれで十分、という思いしかなかった。

クラスのお調子者が下品なジョークを飛ばして、その話題同様下品な笑い声を上げていた。俺はその生徒の声を意識から締め出し、ぼけっとしていた。すると、後ろから肩甲骨辺りを叩かれたので、我に返った。

後ろに顔を向けると、親友、北条光明^{ほつじょうみつあき}の屈託のない笑顔に向かって、半ば不機嫌になって訊ねた。

「なんだよ光明」

「いや、別にイ。お前が寝ちやったのかなって思ってた。今授業中なのに」

光明は、その名の通り、輝くような笑みで答えた。女子なら卒倒するだろう。俺は鼻を鳴らした。

「お前よく眠くならないな。俺なんてもう、眠くて眠くてマジでやばいわ」

「陰陽師も眠くなるんだ？」

「ったりめーだろ。人間なんだから」

陰陽師でも人間なんだよ、と俺はしっかり言って、光明はおかしそうに、「はいはい、わーってるよ」と応酬した。俺の隣の席の少女が、話を聞いていたのか、くすくと笑った。

「そうだよ光明くん。わたしだって眠くなるもの」

少女は長い髪を微風にかすかなびかせながら、小首をかしげた。
光明は今度はふてくされた。

「ちえっ。羨ましいねえ。二人には力があつてさ」

などといって唇を尖らせる。俺はその意見に反対した。

「でも、化け物扱いされるし、ちょっとやだな」

と、眉をひそめる。

「どうせなら、ただの人間に生まれたかったぜ」

「そうかよ」

光明は不意に黙り、悲しそうな顔をして哀願するような目を俺に向けた。

「なあ、俺のいとこが今、すごく大変なんだ。人助けと思って、助けてやってくれない？」

「なんだよ？」

俺は光明の話に耳を傾ける。

「俺のいところ、宮村幸子って言うんだけど、学校でひどくいじめられているらしいんだ」

そういう人なら、前に自分の力で助けたことがある。それにさらに拍車をかけるように、光明が続けた。

「親からも虐待受けてて、メシもろくに食わせてもらえないらしい。このままじゃあいつ、死んじゃうよ。見てらんないよホント……」

光明は悲痛に言っつて、その“宮村幸子”の両親に向かって小さな悪態を吐き捨てた。俺も同感だった。

「マジかよ？最悪だなそれって」

俺は苛ついた。どこかでそんな風に人が傷ついているなんて、信じられない。しかもソレが、親友のいところなんて、なおさらだ。

「分かった。助ける」

俺は一瞬で決意した。光明が俄然、身を乗り出す。

「本当？」

「ああ。簡単なことさ。俺を誰だと思ってんだよ。そのいじめる奴と、両親の頭から邪な心を消すだけで終了。あっという間だ」

「さっすがー！」

光明は本当に嬉しそうだった。

俺は光明にその宮村幸子を救う、と約束した。

なのにその日から光明はいじめられ始め、それどころではなくなってしまうた。

その三日後、俺はいじめている八人の少年を校庭に呼びつけた。しかし来なかった。

俺は校舎の上階に上り、八人を探しに行った。しかしやはりなく、俺は仕方なく下に戻ろうとした。そのときに階段の上から見つけた。階段の下に誰かが倒れているのを。

俺は最初それが誰だか分からず、呆然と立ち尽くした。

凝視しているうちに分かった。

それは俺の親友だということを。

駆け寄ろうとしたがそのタイミングでどこかに隠れていた八人が飛び出してきた。

その中の五人が「人が死んでいる」「人殺しがいる」と、騒ぎ、叫びながら校舎を走り回り、残ったうちの一人が110番に電話をした。あとの二人は俺を嘲笑っていた。「化け物が」そう言われた。

俺は少年院に送られた。

全てに絶望した。

警察に、自分はやっていないと言っても、聞き入れてはもらえなかった。動機はなぜか俺と光明が喧嘩して、カツとなった俺が階段から突き落としたということになっていた。俺はその後、自ら警察の話に合わせて自首した。だんだん自分が殺したような気がしてきたのだ。そして、そんな気が夢にまで入り込んできた。光明を殺す夢を、何回も見た。怖かった。自首すれば、そんな夢は見ないので、そう思った。だからさっさと言った。非情そうな声で、いかにも殺人犯のような顔で。親友を殺した、と。

少年院は地獄だった。

少年院の低脳そうな連中に目をつけられ、女になれとかわけの分からないことを言われたり、リンチを食らったりした。やり返したら、独居房送りにされた。しかもその後も、光明を殺す夢を見続け、俺は半ば発狂して医療少年院というところに送られそうになった。

ようやく出てきたときはもうくたくたで、家に引きこもりっぱなしだった。当然のことだ。俺は死にたかった。どこにも居場所がなかった。リストカットに明け暮れ、肌を”死”と刻んだりして遊んだ。気晴らしには、ネットでどうでもいいサイトを見回った。

そして、あの、俺をはめた八人が、光明の親をカモとして利用していることを知った。

俺は怒り狂って、そいつらを学校の屋上に呼びつけやめろと迫っ

たが、逆に殴られた。俺はその暴力に耐えた。その八人グループのリーダーはかつての友人だった。なのでそのうち、やめてくれると思った。でも無駄だった。そのリーダーが一番俺を殴った。

抑制はいともたやすく破れた。腹が立った。コイツラがたまらなく憎かった。

なので俺は八人をその場で始末した。平然と。

気がつけば俺は陰陽師ではなく、黒陰陽師になっていて、俺の中の何かが変わっていた。

俺は死んだ八人を見て、馬鹿みたいに笑いまくった。爆笑した。

ざまあみろとしか思わなかった。自業自得とはまさにこのことだ。

その瞬間から俺の中の善の心は死んだ。そう悟った。

殺すのが面白かった。死体を見るのが楽しかった。さっきまで動いていたものが、あることをすると壊れたおもちゃのように動かなくなる。人間はなんて脆いんだと、俺ははつきり面食らった。

でもおもしろいからもつと殺した。

復讐も含めて。

俺の脇で鼻を鳴らすようなくしゃみの音がして我に返る。

今は夜だ。いつものように結界を張って、野宿をしている。

俺は過去を振り返るのをやめて、くしゃみをしたものに目をやる。
俺の脇には身を丸め、眠りこけるダックスがいた。

宮村幸子。いや、小夜子というべきか。

幸子という名は改名後の名である。幼いころは小夜子という名前だった。

宮村小夜子によると、虐待を受け始めたころに改名させられたらしい。嘲笑うために、“幸せな子、幸子”と。

手を伸ばし、ダックスの耳の毛に触れると、ダックスは頭を振ってまた寝た。

こいつは光明のいとこだ。光明が助けてほしいと俺に頼んだ、あの。

殺す寸前に気がついた。血でぬれた制服についた名札。光明に似た少しかだけ切れ長の、優しげな目。あと一秒遅かったら、殺していただろう。俺は人殺しの女を引っつかんで、勝手に連れ出した。宮村小夜子は抵抗しなかった。ただ泣きじゃくっていた。

俺は殺すどころかつれてきてしまったのだ。

光明と一緒にいる気がした。俺のような化け物と、一緒にいてくれたあいつが。

もし天国があるとして、光明が俺を見ているとしたら、きっと失望していると思う。

人殺しと化し、この哀れな少女を巻き込んでしまった俺に。

全てが虚しく思えた。

恐ろしい虚無がたまに俺を襲う。

俺の心はどす黒い。底のない森閑とした闇が俺の中の正義を殺し、その闇に光が差し込むことは一生無い。

できることなら時間を巻き戻してほしい。俺が生まれる前まで巻き戻し、全てに超然とできる人間になりたい。

しかし人間というものには必ず、悔やんでも悔やみきれない過去がある。

嘆いても遅いのだ。

過去を気にしても仕方が無い。それなのに過去がどうだとか騒ぐたわけは人間だ。

俺は悪魔に生まれたかった。

人間に生まれるぐらいなら、俺は悪魔がいい。

頭上に見える星空は、優しく、そして冷たかった。

第二十四話：夏の終わりに

夏は終わりに迫っていた。夏休みは終わり、学校が再開した。

土屋は常に警戒態勢に入っており、最近では学校周辺を探っていた。

校内をうつろつくことも許可されたので、土屋はほとんどわたしたちと一緒にいた。

一方で、優介と愛は長い休みをとっていた。愛によれば、外国の特殊能力者たちとなんらかの会合があるらしい。二人の居所は一緒だ。

今のところ、石橋たちの動きはない。手がかりも何も。夏祭りの日から、二人はぱったり行方をくらましていた。

そして今、体育館の中で優介と愛を除く全校生徒約六十人が集合していた。

真剣な面持ちでステージに立つ私と加奈を見上げている。

私の額からはぼたりと汗が落ちた。

マイクを口元に寄せ、私は話しはじめる。

「夏祭りに悲しい事件がありました。赤月市民が三名犠牲になったあの夜のことについて話したいと思います」

皆は興味津々で身を乗り出す。私は気持ちを落ち着かせ、語りかけた。

「犯人を見た方は多いと思います。私と同じ、十四歳の少年です。少年の名前は石橋健で、黒陰陽師です。彼は少年グループ八人殺人事件の犯人、その他多くの命を無差別に奪いました。石橋の共犯者の宮村小夜子はかつて、私たちの仲間、この学校の生徒でした。彼女は調布市生徒大量虐殺事件の犯人で、犬神使いです。そして、その二人は私たちまでも殺そうと企んでいます」

ざわつと生徒たちに動揺が走った。中には怯えて震えるものもいた。加奈が沈め、私は続ける。

「私たち赤月市民は危機に直面しています。私と、そのこ（体育館の出入り口に座り込んでいる土屋を指した）土屋弘は邪殺屋です。そして、井上加奈さんとともに小夜子と石橋を全力で追っています。が、いまだに捕まりません。人手がもつと必要です。赤月市を守るために協力してください。怖いと言う方はいいです。責めたりしま

せん。協力してくれる人は私たちに声をかけてください」

私と加奈は、よろしく願いします、とお辞儀した。

質疑応答の時間をとると、次々に質問が飛んできた。「なぜ殺すのか」「相手は強いのか」などなど。

私たちはできる限り答えたが、答えられないのもあった。

「どうして石橋は小夜子といるのか。特殊能力者は全て消す気なのではないのに、なぜ小夜子は殺さないのか」

といった質問だ。

土屋でさえもお手上げだ。

考えてみればそうだ。

なぜ石橋は小夜子をそばにしている？気を使っていたし、土屋が小夜子を傷つけたことを知ると、怒りまでした。心配の素振りも見せていた。

やはり彼氏彼女の関係なのか？

それとも、石橋は小夜子に何らかの借りがあるのか？

いや違う。小夜子はこういていた。

『私と石橋に意外な接点があったから』

と。

謎はまだたくさんある。

私たちの呼びかけには皆に大きな効果をもたらした。

全校生徒が協力したいといってくれたのだ。

私たちは放課後になると校庭で能力の練習をした。

コーチは私と加奈、土屋だ。

そんな中で私たちには学校行事も迫っていた。体育祭と文化祭だ。その練習もあり、目まぐるしい日々が瞬く間に過ぎていった。

ある日の休日のことだった。

いつものように校庭で皆で能力の練習をしていると、一匹のイズナが私の肩に駆け上ってきた。

驚いて、イズナをまじまじと見る。優介のイズナだ。でも優介は外国にいるはずじゃあ……？

イズナはしばらくくんくんと鼻を動かしていたが私の目を見ると、なんとしゃべった！

『おい、聞こえるか』

優介の声である。私は目を瞬き、イズナを手の平に乗せた。イズナは私を見上げる。

わたしは答えた。

「優介？聞こえるよ。優介は他のところからイズナを通して話しているんだよね？どこにいるの？」

『外国だ。ところで、あの黒陰陽師は捕まったのか』

「え？まだだよ？」

『……そうか』

優介は考え込むように黙ってしまった。

な、なんなのだ？今まで興味ゼロで、他人事扱いしていたくせに。私は少し肩を上げた。

「何よいきなり」

『そいつが日本にいる外国の魔術士を何人も殺したんだ』

「ええっ？」

『特殊能力者だから狙われたんだろう。おかげでその血族がカンだ。早く捕まえろ』

「そんなこと言っただって……」

『このままでは日本魔術士と外国の魔術士の間で戦争が起きる』

「どうして？」

『一人の日本魔術士が暴れたことで、外国の魔術士たちに大きな影響を及ぼしているだろう。しかもそいつはいつまでもたっても捕まらない。ということで日本魔術士全体が共犯、つまり邪教とみなされる。すると、エクソシスト、外国の邪殺屋のような感じの奴らだが、そいつらが黙っていない。邪教自体を破滅させようとする』

「え……まさか、外国の邪殺屋が日本魔術士全員を殺そうとするって事？」

『そうだ』

「そんなっ！」

私は叫んだ。近くにいた土屋と加奈が振り返り、寄ってくる。

事情を話すと土屋と加奈はすつと蒼ざめた。土屋はイズナをむんずと掴み、私からひったくった。イズナは苦しいのか、キーツと甲高く鳴いてじたばた暴れるが土屋は気にも留めない。

優介の苛立った声がする。

『イズナをいじめないでくれないか。そいつは……』

「戦争が起こる？」

土屋は大声でさえぎり、怒ったようにわめいた。

「お前だってそれは嫌なんだろう？ならとつと戻って来い！お前がいれば石橋なんてあつという間に捕まるんだから……ッ！」

『僕の妹が監禁された』

私たちは息を呑み、黙った。

『エクソシストどもが、日本魔術士全体が邪教と証明された暁には、最初に弥生^{やよい}を殺すといってきた』

弥生とは優介の妹のことだ。まだ八歳だ。

「でもどうして？ どうして弥生ちゃんなの？」

『奴らは僕が邪教の教祖だと思っているのさ。日本で一番強いから。しょせん連中が僕を捕まえることは不可能だ。だから教祖の妹として弥生を捕まえたんだろう。低脳な奴らだ。痴愚で無知な能力に乏しい馬鹿な連中だろう。僕は今、この場を動けない。だからできるだけ早く黒陰陽師を捕まえて、身柄をこっちに渡せ。それで弥生は解放される。無理に取り返すことはたやすいが、ごたごたは起こしたくないものでね』

「愛ちゃんは大丈夫なの？」

『山口は平気だ。巫女だし、神聖な人物として奴らは手を出してこない。事情聴取されているだけだ。そのイズナは君に預けておく。』

捕まえることができたらいズナに報告しろ』

それきり、優介の声は聞こえなくなった。土屋はイズナを離れた。イズナはあわてたように私の肩にジャンプし、うなじの辺りでうずくまって震えた。

土屋は思い切り悪態をついて、校庭の砂を蹴散らした。

「石橋の野郎！外国人まで殺してんのかよ！」

「落ち着いてよ！」

私は落ち着かないまま叫んだ。

「石橋は絶対捕まるよ！」

「どこにいるかも分からないのに？」

「探せばいいよ！」

「どうやってだよ！もしアイツのために戦争なんて起きたら……」

土屋は突然口をつぐみ、生徒たちを振り向いた。生徒たちは不安そつに練習を中止する。土屋はがなりたてた。

「赤月市全体をくまなく探して奴らを見つけれ！」

「今？」

「そうだ、今すぐ！三人一組で行動し、見つけたら報告しろ。俺が行くまで手を出すな。行け！」

生徒たちはわっと広がり、校庭から飛び出していった。

私と加奈、土屋だけが残る。土屋は疲れ果てたかのように、どさつと座り込んでしまった。私は土屋の隣にしゃがんだ。

「大丈夫？」

そつと尋ねると、土屋は横目で私を見た。

「俺は平気だ。一刻も早く奴らを捕まえないと……」

土屋は最近疲れている。

私は感じ取っていた。土屋は無理しているということを。私は土屋の背中をぼんぼん叩いた。

「ねえ、少し休んだほうがいいよ」

「なぜだ？」

「土屋は最近疲れてるよ。だから、ね？」

「石橋と宮村が捕まってからな。でないと田中の妹が殺されちゃう」

「だけど……」

「石橋と宮村のせいだけで、人をたくさん死なせるわけにはいかないんだよ」

土屋は顔を上げ、前を見据えた。

「あんな狂った連中のために、戦争だなんて。馬鹿らしいぜ。なんで俺らも邪教とみなされなくちゃならねえんだよ……」

「エクソシストと話をつけられないの？」

「悪者は誰でも自分は無実だと言っさ」

私は絶望的になった。

「じゃあやっぱり早く捕まえるしかないの？」

「それが殺すか。殺して死体をエクソシストの方に送り、調べさせる」

「……そう……」

私と加奈は顔を見合わせ、ため息をついた。

あの二人を捕まえなくては。

殺すことになったらどうしよう。

石橋はともかく、小夜子は……。

小夜子……。

私はどんより曇った空を見上げた。

結局手がかりは何一つ見つからず、私たちは仕方なく帰路を歩いた。

私たちは石橋たちの先を読もうとした。

「えーつとお。石橋たちが最後に来たのは夏祭りのときよね？」

加奈が人差し指をあごに当て、斜め上を見た。

「じゃあ、もう一ヶ月以上も姿を現していないということね。どこへ行ったのかしら」

「次来るのは夏祭りのときみたいにな、人が大勢集まる時じゃないかな？」

私はいいい意見だとばかりに身を乗り出した。

そつだ。奴らは赤月市民を皆殺しにしようとしているのだから、市民が集合するときに来る可能性が高い。少し考えれば簡単なことだ。

「じゃあいつかな。市民が集まるときつて」

私は首をかしげる。加奈もだ。

すぐに思いついた。

「……体育祭」

土屋が私を見る。私は説明した。

「体育祭には市民がいつぱい集まるの。といつても赤月市の人口は少ないんだけど。市民のほとんどが、毎年集まるよ」

「いつだ」

「五日後よ」

「連中はそのこと知ってんのか」

「小夜子がいたからね」

加奈が悔しそうに腕を組んだ。

土屋の表情は険しくなった。

「五日後に来る可能性が高いつて事か」

私の心は不安に満たされた。

「五日後……」

私は反芻し、暗い気持ちになった。

雨が降り出したのはその直後だった。

第二十五話：親友

どしゃぶりの雨。

私と加奈は私の部屋のベットに腰を下ろしていた。

二人でぺちやくちやとおしゃべりをしていたのだ。

土屋はリビングの床で、帰ってきたとたんに寝た。土屋はどこでもお構いなしに寝るので邪魔になる。この前など廊下で寝ていた。不眠症らしい。

加奈はさっきお母さんが持ってきた醤油せんべいを食べながら言った。

「ねえ幸乃。もし石橋が捕まったら邪殺屋続けるの？」

「んー。分からないな」

そつえば最近よくそのことを考える。

土屋のように一生殺し屋で過ごすか。それとも平凡に暮らすか。

もし殺し屋になったら、一生趣味とかできなくなってしまうし、それどころか家庭ももてない。土屋の場合、『家庭？そんなのどうでもいいや』だそうだ。ただし邪殺屋存続のため、子は作るつもりらしい。それだけのためで、実際家庭などいらないと言っていた。

でも私には温かな家庭とかがほしい。

平凡に暮らせばそれがもてるけど、悪い特殊能力者を捕まえないとすればという使命感もある。

どうしよう。

分からない。

私はうつむくと、加奈は寂しげに笑った。

「幸乃。無理しなくてもいいんだよ。邪殺屋のことは土屋に任せ
てさ。幸乃は平凡に暮らしてもいい」

「でも……」

「石橋を捕まえたならそれだけでもすごいじゃない。土屋みたいに
なんなくともいいよ」

私はこくんとうなづく。

加奈はとっても優しい。一緒にいると心が落ち着いてくる。

「幸乃」

加奈の真剣な声に私は思わず姿勢を正した。

「なあに、加奈」

「五日後、もし二人が現れたら、絶対生きて帰りましょう」

「勿論」

「絶対勝つわよ」

「ええ」

加奈はいきなり温かい腕で私を包み込み、しっかりと抱きしめた。

私は驚いたが、ちゃんと受け止める。

「加奈……？」

「幸乃……私、怖い……」

加奈の声は恐怖で震えていた。

「幸乃や、大切な誰かが、死んでしまうんじゃないかって……」

「大丈夫よ」

私は抱きしめる腕に力を込めた。

「私たちにはたくさんの仲間がいるもの。土屋だっている。誰も死なせやしない」

「幸乃……」

加奈は顔を上げると精一杯の笑顔で言った。

「ありがとう」

私にもこつと笑った。

しかし現実はそう甘くない。

それを嫌というほど思い知らされるのは、五日後のことだった。

第二十六話：運命の体育祭

いよいよその日が来た。

ぞくぞくと市民が校庭に集まってくる中、私たち生徒は昇降口で最後の打ち合わせをした。

「もし奴らが現れたらまず、市民たちを結界で守るように。混乱しないように念動力士が誘導してあげて。安全な校舎に」

加奈が呼びかけた。

「攻撃班は固まらずに散り散りになって攻撃して。固まったらあつという間にやられちゃうから。石橋たちは容赦しないから、こつちも容赦なしで攻撃するのよ」

生徒たちの返事を聞くと、私と加奈は土屋を見た。

「作戦はこのくらいかしら」

「ああ。そうだな」

土屋は浮かない顔で重々しくうなずいた。

そのまま教室を出て行ってしまう。私は不意にあることに気づき、土屋を追った。

「ねえ土屋」

「なんだよ」

土屋はすでに四階に続く階段に上っていた。階段の上から私を見下ろす。

「土屋は、石橋たちが捕まったら、赤月市から離れちゃうの？」

「当然だろ。次の仕事はいつ来るか分からないからな。もう行くぞ」

「……うん」

土屋が離れちゃうなんて……。土屋は私にとって兄のような存在だった。いなくなるならとっても寂しくなってしまう。

「幸乃。行こ。そろそろ入場だよ」

加奈に後ろから呼ばれたので、私はうなずいた。

吹奏楽部の金管楽器のファンファーレとともに私たちは校庭に入場した。

ファンファーレがきちんと決まると、やっと、よしっという気持ちになった。

校長の挨拶が終わると、早速第一の競技が始まった。一年生のリレーだ。スタートの合図のピストルが鳴るたびに、私たちはビクツとした。石橋たちが来るかもしれないという恐怖からだった。

二年、三年とリレーが続き、綱引きもやった。綱引きには保護者も参加した。私たち白組は負けたけど、楽しかった。

私と加奈は大いに盛り上がり、笑いながら午前中を過ごした。それは皆も同じだった。

お昼ごはんの時間になったときには、すでに石橋のことなんて頭

の片隅にも無かった。

私と加奈はお昼ご飯を食べようと土屋を迎えに行った。ご飯は皆で集まって食べるのだ。

「土屋あゝ！食べよう！」

加奈がハイテンションで言う。土屋はたった一人、不安そうだった。体育祭を楽しんでいた様子は無い。

「おい、そんなのんきで大丈夫なのか。奴らのことは不安じゃないのか」

「えゝっ？もう来ないよ石橋なんて。だって午前中、何にも起こらなかったじゃん。ね、早く行こう！」

私と加奈は土屋を引っ張った。

このとき、土屋だけは死神の吐息を感じていた。

死神は最初から私たちのそばにいたのだった。

石橋健と宮村小夜子は学校の屋上にいた。

周りには特殊な結界がはってあり、気配を察知されたり、姿を見られる心配は無い。石橋自らが考えたオリジナルの結界だった。

体育祭でにぎわう校庭を眺めながら、小夜子は不安そうに屋上のフェンスをゆすった。

「大丈夫かな？こんなにいっぱい人がいるよ。石橋、やられちゃわない？」

「平気平気」

石橋はフェンスの上に腰を下ろしながら余裕の笑みを浮かべた。

「俺を誰だと思っているんだよ。別にお前は来なくて良かったんだぜ」

「いいの。わたしも見たい」

小夜子は人々が恐慌する姿を見たいと思っていた。そして、石橋のそばにいたかった。一人でいると、自分が殺した人々の亡霊が来る気がして、怖かったのである。石橋は亡霊などいないと、断固言いき張るのだが。

それに小夜子は、自分のことを守ってくれる人のそばにいたかったのである。いままで誰も守ってくれなかった自分を、初めて守ってくれた。最初は不信感でいっぱいだったが、いまは安心している。石橋より強い人がやってきて、小夜子を守ってくれるといったとしても、小夜子は石橋を選ぶだろう。

「それでもいいけど」

石橋は小さく鼻を鳴らして、邪殺屋の自然魔術士がリレーで必死に走る様を眺め回した。

自然魔術士は途中で転びかけ、白組の人間が「がんばれー！」と叫ぶ。

体育祭の何が面白いのだろうと、石橋は不思議に思った。ただ運動をするだけではないか。かつては自分も楽しんでいた体育祭は、

もう愚かなものにしか見えない。

「光明がいたら、わたしたちのたくらんでいる事を止めようとしたかな」

小夜子はぽつんとつぶやいた。石橋は肩をすくめる。

「恐らく。ってか、絶対な。でも光明はもう、星になっちまったじゃねえか」

「そうだけど……」

小夜子は複雑な表情をした。つられて石橋もそんな表情をした。

「死んだ奴の事を考えたってどうにもなんねえよ」

小さく言つと、晴れ渡った空を仰ぐ。

そつと空気のおいをかぐと、死の臭いがかすかにした。

「屋上に誰か来るよ」

小夜子が石橋の背中を軽く叩いた。

屋上の入り口から生徒たちの足音が聞こえる。

石橋はフェンスから飛び降りて小夜子の脇に来た。

小夜子はすぐさまダックスの姿に変化する。石橋はダックスを持ち上げると、空中に掻き消えた。

私たちは屋上に飛び出すと、生徒皆で校庭側のフェンスに駆け寄り、校庭を見下ろした。

先生たちが下から合図を送ってくると、私はフェンスの網目から手を突き出し、水を指先から噴出させた。

すかさずサイコネシストたちが空中に水をとどまらせ、水を操

ってさまざまな形に変えながら、下の観客を喜ばせた。

特殊能力の芸は、体育祭の目玉といっても良いほど人気があった。

私たちは特殊能力でいろいろな芸を披露し、最後には屋上から校庭に軽やかに飛び降りた。空中浮揚ができない人はそれをできる人に手伝ってもらった。

次に赤組白組で特殊能力を使って応援合戦もやった。ここでは特に盛り上がり、みんな大はしゃぎした。

いよいよ体育祭も終盤に迫ってきた。

あたりは薄暗くなってきて、快晴だった空には雲が出てきてしまった。

一番最後の競技は赤白対抗リレーだ。赤と白の得点はほぼ同点で、どちらが勝つかはこの競技で決まる。

私たちは絶叫のような声を上げながら、応援席から応援した。

全ての競技が終了し、結果発表。緊張の一瞬だ。

結果は私たち白組が勝利し、私たちは抱きあって喜んだ。

校長の言葉が最後を締めることになっていたので、私たちは校庭に並んで座った。

くたくただ。早く家に帰ってシャワーを浴びたい。

校長は元気に呼びかけた。

「本日この赤月中学校の体育祭に来てくださった皆様、本当にありがとうございます。そして本校の生徒たち、お疲れ様。今日無事に体育祭が終わったことにほっとしております。明日からは連休になります。しっかり体を休めてください」

わっと拍手が起こった。

本当に良かった。無事に終わって。私は笑顔で加奈を振り向き、そう言おうとした。

加奈の顔は紙のように真っ白だった。ぴくりとも動かず、表情が消えていた。

「加奈？」

私は加奈の肩を掴んで揺さぶる。

加奈はある一点を見つめていた。

私はその目線を追い、屋上を見上げた。

屋上は次の瞬間、すさまじい爆発音とともに、上に向かって吹っ飛んだ。まるでクラッカーのように。

悪夢の始まりだった。

第二十七話：悪魔

屋上の残骸が一直線に私たちに向かって落ちてくる。

誰も何が起こったのか理解できず、ただ呆然として動けなかった。

土屋だけが動いた。大きな残骸に教室の窓から呪符を飛ばし、空中で木っ端微塵にしたのだ。細かい残骸だけが降りかかってくるので、怪我はしなかった。

土屋は教室の窓から私たちが動かないことに腹を立て、怒鳴った。

「おい！何してるんだ？とつとと動けよ！」

土屋は教室の奥に引っ込んで行った。その直後、そこに黒い呪符が投げ込まれ、爆発する。

それで我に返った私たちは、わっと自分の持ち場につこうとした。

しかし遅かった。人々に容赦の無い攻撃が襲っていたのだ。

無数の死の呪符がどこからとも無く現れて人々に降りかかる。人々はその呪符に当たり、ドミノ倒しのように倒れていった。

信じられなかった。人々が目の前で次々と……。

私は愕然とたたずんだ。生徒たちは役目も忘れて逃げまどっているのに、私だけ馬鹿みたいに。

私のすぐ脇で、しゅつと風が渦巻いた。ただならぬ気配を感じた私はとっさに飛びのいた。一瞬だけど、そこに石橋が現れた。死の呪符を貼り付けようとしたらしい。舌打ちをし、また消え去る。

私は吹き上がる恐怖を押し殺しながら、「土屋あつ！」と絶叫した。

生き残った人々は校舎に逃げ込んでいる。倒れた人は、糸の切れたマリオネットのようだった。

生きている人間より、絶命している人間のほうが多い。

降り注ぐ死の呪符は止み、代わりに強風が校庭に吹き付けた。空には黒雲が垂れ込めて、今にも雨が降りそうだ。枯れ葉が私の目の前を次々と横切っていく。

校庭の隅に生えた木には生徒たちが隠れていた。

私の傍らに土屋が現れた。倒れた人々に目を走らせ、驚きで目を見張っている。そのうち怒りで顔が上気し、へたり込んだ私をさっと見た。

私は動けず、腰を抜かしていた。

土屋は私を力づくで立たせようとして、引っ張った。

「立てよ！こんなところにいたら、死ぬぞ！」

「嫌っ！」

私は泣き叫んだ。土屋はそれでも引っ張る。

「やめてよ！」

私は叫ぶ。土屋は怒鳴り返してきた。

「俺らが止めないと、もつと人が死ぬ……」

「誰も、死んでなんか、いない！」

風が吹き荒れ、砂埃が舞う。

全てを否定したかった。何が起こったかは分かっている。でも信じたくない。それぐらい、非現実的だった。

吹き荒れる風の中で、一人の少女が五メートルほど前方に立っているのに気がついた。

土屋の動きが止まる。

小夜子だった。ポニーテールを風になびかせながら、こっちをじっと見ている。

「さっ……小夜子！」

私は叫ぶ。土屋は私を離すと小夜子に掴みかかろうとした。小夜子はすばやく飛びのくと、私たちに向かって可愛らしくにこっと笑

い、空を仰いだ。

「いい風だね」

そう言った。土屋はいまや怒り心頭していた。

「風？何が風だ！ふざけやがって貴様！」
きさま

「ふざけてなんかいないよ。わたしは」

小夜子は平然としている。私は足を踏ん張り、立ち上がると訴えた。

「ねえ、もうやめてよ！こんなことしないで！」

「こんなことって、どんなことかな？ねえねえ、私の事なんかほつといて、生徒さんたちを助けてあげたら？早くしないと死んじやうよ」

生徒たちを見ると、死の呪符に追いかけられ、必死に逃げているところだった。

土屋と私は走り出した。

土屋は生徒たちに護符を飛ばし結界をはる。結界は死の呪符をはじいた。私は炎を指先から出して、その呪符を焼き払う。

その隙に、小夜子は攻撃を仕掛けてきた。

犬神を放って私に突進させたのだ。

犬神に突進され、私はひっくり返った。

犬神と犬の霊が透き通った姿で、私にのしかかろうと襲い掛かる。

私はすぐに手を犬の霊たちに突き出すと、突風を起こした。犬の霊に足を噛まれたのを感じたが、耐え、風を送り続けた。犬の霊たちはしばらく抵抗していたが、とうとう吹き飛ばされて煙になっ
て消えた。

立ち上がって噛まれたところをしてみる。傷はたいしたことは無く、大丈夫そうだ。土屋は私の身を案じて戻ってきた。傷の程度を見ると、すぐに小夜子に目を戻す。

「幸乃ちゃん！やるねー！」

小夜子がにつこりした。

「わたしも負けないようにがんばるよ！」

その直後、学校が背後で轟音を建てて崩壊した。子供が砂の山を壊すみたいに。

そこには学校の半分ぐらいの大きさの柴犬が二匹いた。青い半透明だ。私と土屋はぎょっとしてあとじさった。

犬は二匹で戯れているのか、学校を瓦礫の山にしながら転がったりして遊んでいる。一匹が大きな瓦礫をくわえて、振り回し、ふと離れた。

それはこちらに飛んでくる。このままでは押しつぶされる！

私は両手を前に出し、まず水塊を、次に炎を放った。ドンツという音がして瓦礫が粉々になった。水蒸気爆発を起こしたのだ。

水蒸気爆発とは、何千度もの熱で一瞬にして水が蒸発するとき起きる。

犬たちは私たちに気がつく、遊んでくれとでも言うのかジャンプしてきた。土屋が私を引っつかんでそれ以上のジャンプをし、間髪を容れず犬をよける。犬の背を越すほどのジャンプで、私は啞然とした。犬が校庭に下りたとき、校庭にははっきりとした地割れが起った。

犬の鼻を蹴って、飛びのく。犬はきやうんと哀れっぽく鳴き、前足で鼻をこする。もう一匹が鼓膜が切れるほどの泣き声をあげると私たちに噛み付こうとした。これもよけ、土屋は叫ぶ。

「高橋！」

土屋と私は空中に立った。私はおどつきながら土屋を見る。

「あの犬をどうにかしてしずめろ！」

「どうやって！」

私はヒステリーを起こしそうになった。犬は学校から出て、住宅

街に入り、家を壊し始める。

土屋にも分からないようで、眉をひそめる。

「どうやって……。そ、そうだ。俺が犬をひきつけるから、お前は術者の宮村をつぶせ」

「どこにいるの！」

「あそこだ」

土屋は校庭のさっきの場所を指差した。

小夜子はしゃがみこんで、犬たちをじっと見つめていた。犬は小夜子のことは絶対に踏まなかった。

土屋は壊れた学校のフェンスのそばに降り立った。ここから小夜子までは百メートルぐらいで、小夜子は私たちに気がつかない。

「あそこまで行けるか」

「やってみる」

やらなくちゃ。

強い使命感からそう思った。

土屋は「気をつけろ」と言い置くと、上空に戻っていった。

その方向で、すさまじい爆発音がして、校庭にいた犬がはじかれたようにそっちを見た。激しく吠え立てながらその方向に向かう。

小夜子は今、一人だ。今がチャンス。

私はフェンスの影から走り出て、しゃがみこむ小夜子の、元親友の方へ一直線に向かった。

第二十八話：悪魔…2

私は小夜子のいる方向へ走った。全速力で、必死で。

小夜子。小夜子ののやっていることは間違っているよ。石橋みたいに残虐になっちゃだめ。

薄暗い中、小夜子の白い肌は闇にぼんやり光って見えた。

小夜子は五十メートルぐらいに迫った私にようやく気がつき、ぱつと立ち上がった。

さつと巨大犬の方に手のひらを向ける。犬が私のほうに走ってくる気配がした。私のすぐ横に、巨大犬の前足が叩きつけられ、私の体が一メートルも飛び跳ねた。そのままくしゃくしゃと仰向けに地面に倒れる。急いで立とうとしたが、犬の顔が私に覆いかぶさるようにそこにあつた。

私の体は恐怖で硬直する。

犬は私を一噛みする気が、巨大な口をがばつと開けた。

今度こそ終わりか。でも小夜子を止めないとならない。どうしよう。

ああっ、神様！

犬の牙が私の体に触れた瞬間、私の中の霊力がその牙に流れ込んだ。電流と化した、霊力だ。

犬の体に流れ込み、感電死したのか、ぱんつと音を立てて煙になった。

やった。犬に勝ったのだ！

自信が見る見る湧いてきて、私は飛び起きて、小夜子に向かい合った。

小夜子はその時すでに次の攻撃を放っていた。

犬の霊が私の周りにあふれかえったのだ。

私はぎよっとして悲鳴を上げた。

犬の霊に炎をむけるが、次々と溢れかえってきてきりが無い。足とかに噛みつかれ、激痛のあまり涙が出て、誰もいないのに助けを求める。足の傷口から血液が滴り落ちていく。私は逃れようと大暴れした。

小夜子はそんな私を見て、ぞっとするような笑みを浮かべていた。

私は小夜子が悪魔に見えて、反射的にそちらに大量の水を噴出した。

小夜子は私が動けないと思っていたようで、水をまともに受けた。そのままかろうじて残っていた学校の外壁に頭から衝突しそうになる。そうになったら恐らく即死だっただろう。

でもそうはならなかった。

狂った野郎がいたことを忘れていた。

今までどこにいたのやら、どこからともなく現れて小夜子を引っつかむと脇によける。石橋と小夜子は勢いあまって二人して地面に転倒した。

私の周りの犬の霊が消えたとき、やっと巨大犬を倒したらしい土屋が戻ってきた。足から血を流す私を助けおこし、呪符を貼って怪我を治してくれた。

土屋はすぐに石橋たちのほうを見る。石橋は服についた砂をはたきながら、小夜子とこっちに向かってきた。石橋は小夜子に何か文句を言い、小夜子はしょぼくれている。小夜子はびしょぬれのはずなのに、不思議にも服は乾いている。

土屋は石橋に殴りかかろうとしたが、力づくで押し返された。土屋の怒りは当然収まらない。

「てめえ！お前自分が何をしでかしたのか分かっているのか？市民を大量に殺したんだぞ！」

「うるせえなあ。分かってるよ、そのくらい」

石橋は私たちの三メートルぐらい前で足を止め、得意のにやにやをした。

「ところで土屋くん。君はえらく不機嫌そうだねえ。一体どうしたんだい？ボクでよかったら、話してくれないかなあ」

「うるさい！お前の皮肉にはうんざりだ、お前なんかな、死ねばいいんだよ！」

土屋は激昂した。

「お前らなんかのせいで、エクソシストどもが日本の特殊能力者を全て消そうとたくらんでいるんだ。どうしてくれる！」

「エクソシスト？はー、エクソシスト、エクソシストねえ。な、宮村、お前エクソシストってなんだか知ってる？」

小夜子は首をふるふると横に振った。

「知らないってよ。自覚はなかったんだ。だから、わざとじゃないから仕方がない。だろ？土屋」

「お前は知っているくせに！」

「知っているとも。俺が正義のヒーロー時代によくそいつらのサイトに行つて、特殊能力者の情報見ていたからな。ちょうど同い年の女のサイトよ。たしか、フローラとかいったな……」

「うるさいともかくお前は……！」

「幸乃っ」

木の陰から声がした。さっとそちらを見ると、私の親友だった。

加奈だ。足をすりむいているけど、ぴんぴんしている！

「かつ……加奈あっ！」

私は叫んでそっちに駆け寄り、加奈に抱きついた。

「幸乃お……よかった……無事で……」

加奈はいまや泣いていた。

加奈の無事に喜びを感じた。加奈がいてくれるから、わたしは優しい気持ちになれる。加奈がいない人生なんて考えられない。私にとって加奈は、そのくらい大事な存在だった。

加奈……良かった……。

「ぶっはははは！なんだてめえら、ばっかじゃねえの！」

石橋がけたたましく笑い転げ、我に返った。石橋は腹をよじって
餓鬼みたいに私たちを指差している。

「こんな死体だらけのところで友情ごっこしてんじゃねえよ！
『あつ！加奈、無事でよかった！』『幸乃こそ！私たち、これから
もずっと一緒よね？』『勿論よ！加奈っ！』『幸乃っ！』あ
ははは、泣かせてくれるねえ。こっちまでもらい泣きしちまいそう
だよ！」

などと嫌味を言いまくる。小夜子はその脇で身をすくめている。

加奈と私はカツとなって立ち上がり、土屋の横に戻った。土屋は
石橋に呆れ果てていて、苛々と吐息をついた。

「黙んなさいよ！」

私は石橋を拳で殴ろうとした。それほど怒っていたのだ。

でもそれは片手で止められ、払いのけられた。

ようやく笑みを消し、ちらりと市民たちの方を一瞥する。

「あんなにあっさり死んじまうなんて意外だったが、まあいい、今日のところはおいとまするぜ」

私の腹の底で、怒りがたぎった。市民を殺した男。許すものか。

「逃がさないわよ！」

私は絶叫していた。

「よくも皆を殺したわね！」

土屋も本来の目的を思い出し、

「そうだ、お前らは今日、この場でぶっ殺してやる！」

と怒鳴った。

その時点で石橋は逃走を謀っていた。人間のままの小夜子を軽々抱き上げ、すたこらさつさと山の方に走り出したのだ。後で知ったことだけど、石橋は実際瞬間移動はできなくて、音速以上の速さで動いているだけらしい。人間の目には留まらない速さなので、消えたように見えるのだ。

石橋がトップスピードに乗る前に、土屋が何かの呪符を投げつけた。

それは石橋の足首に当たる。

石橋はつんのめって転びそうになり、恨めしげに土屋を睨んでまた走り出した。トップスピードに乗れないらしい。

犬に変化した小夜子が石橋の肩越しに現れ、犬神を放つてよこしてきた。私たちは危うくよけると、二人を追って赤月市を囲う山の方に走り出した。

第二十九話：死

あたりはもう真っ暗になりそうだった。

私たちは返り打とうとせせず、ただ逃げる石橋を必死に追いかけた。

石橋は土屋の呪符を巧みによけながら、とうとう山の中に入った。山の中の草は背が低いので、草に躓くことはない。

しかし、森に入るとあたりは一層暗くなって、視界は非常に悪い。

山の斜面は急だ。しかし訓練のおかげか、体力がついていてそう簡単には疲れない。

石橋は相変わらず闇に見え隠れしながら何とか私たちを振り切ろうとしている。疲れを知らないのか、スピードは一向に落ちない。

加奈と私が息切れし始めたころ、山の斜面が緩やかになり、ほぼ平らな地面になった。

石橋は逃げられないと見たのか、気配がない。ここで迎え撃つ気

らしい。お互いその方が有利だ。

広葉樹の木々が風でざわざわと揺れる。

私たちは足を止め、背中合わせになって暗がり目目を凝らした。

遠くで鳥の飛び立つ音がする。妙に生ぬるい風が私たちをくすぐり、気味が悪くて私は思わず身震いした。

加奈の霊視能力はこういうところでは非常に有利だった。加奈にはきつと、昼間と同じくらいの明るさであたりが見えるに違いない。

証拠に加奈が、「あそこ！」と叫んで、十メートルぐらい離れたところにある紅葉こうようしかけた広葉樹を指差したのだ。

すかさず土屋が支離滅裂に「私にはそう見えた」そこに呪符を飛ばす。私は木の力を借りて、木のつるを伸ばしてそこに殺到させた。

木のつるは何も掴まなかったが確かにそこにいたようだ。何も無い空間から血が小さく噴き出したのだ。数秒後に、その脇に肩から血を流した石橋が現れる。悪態をつく、手刀を私たちに向け、

「急々如律令！」
「いそいそりつりょうしん」

と唱えた。

どうつ、という音がした気がした。石橋のいた方向から空間を切り裂くような突風が吹き、私たちの周りの木々がなぎ倒された。

私たちは何とか靈力でその場にとどまったものの、上から電気を含んだ水の雷が降ってきたときはさすがに逃げた。

透明で、黄色がかった綺麗な雷だった。

私たちは散り散りになった。さっきわたしたちがいた場所にそれが落ちて、水がこちらに飛んでくる。あたったら感電死する。

私は急いで炎を放ち、身を守った。

さっきの場所は黒こげでびしょびしょだった。

仲間の安否が気になり、ぐると辺りを見回す。

加奈は木の後ろに隠れ、土屋はいない。それどころか石橋も小夜子もない。

「どこに行ったの！」

私は加奈に叫び、二人で身を寄せ合った。

はるか後方で白と灰色の光が炸裂した。

私たちは目をかばいながら振り返り、そっちに駆け出した。

なぎ倒された木々で何回も転びそうになったが、さっきよりも視界が良い。

光の源は土屋と石橋だった。呪符を投げ合い、お互いの呪符がぶつかるたびにその光が炸裂している。

土屋のほうが強いはずだった。でもなぜかそのときに限り、互角だった。土屋は疲労しているのだ。

まさに呪符の嵐だった。

すさまじい靈力のぶつかり合いに大気が震え、倒れていない木々までひとりでに倒れていく。

小夜子は石橋の後ろのほうで、ダックスの姿のまま怯えたように震えている。

私は土屋を加勢しようと、一步前に出た。手を前に突き出したとき、小夜子が私の動きに気がつき、シェパードの姿に変化して襲い掛かってきた。

たぶん、犬の霊や犬神を放つ余裕がなかったから直接襲ってきたのだと思う。それほど石橋を守りたかったのだ。

シェパードは私の胸にまともにぶつかってきた。あまりの痛さに悲鳴を上げ、私は地面に仰向けに倒れこむ。

そして、私の左の二の腕にがぶりと噛み付いた。そこから氷水のように小夜子の呪いの靈力が流れ込んでくる。息苦しさがまして、体のところどころが痙攣し始め、視界がぐんと暗くなる。

小夜子は私を呪殺^{じゅく}する気なのだ！

私はめちゃめちゃに暴れまくった。

加奈が動いてくれた。どうしたかは見えなかったが、小夜子を勢いよく私から引き剥がしたのだ。

視覚が戻ってきて、息苦しさがすぐに薄れていく。私は飛び起き、加奈にお礼を叫んだ。加奈は私を涙目で見ていた。私に駆け寄る。

小夜子は一方で、人間の姿に戻っていた。頭を倒木にしたたかぶつけたようだ。弱々しく動いて、立ち上がろうと必死だ。

小夜子を案じてか、石橋の気が土屋からそれた。

その隙を土屋が見逃すはずがない。その一瞬で石橋は土屋の霊力に吹っ飛ばされた。小夜子の脇の倒れていない木に背中から衝突し、骨でも折ったのか、呻いてうずくまる。

やった！

私と加奈は成り行きを見守ろうとしっかり身を寄せた。

小夜子は悲鳴を上げかけて、静かに歩いてくる土屋を見た。殺人鬼の元に駆け寄ってしがみつき、「大丈夫っ？ねえ……っ！」と声を上げる。石橋は何も言わなかった。

小夜子はもう一度土屋を見た。最後まで戦うつもりでいるのか、半ば怯えながらも身構えた。土屋はその三メートルほど前で止まった。土屋の目には石橋に似た残忍さが浮かんでいた。

「やっと追い詰めたぜ。ここまで長かったな。 どうした、肋骨が数本折れたか？いつもの嫌味はどうしたんだよ？なあ」

土屋はとことんいたぶってから殺す気らしい。

おぞましさに私は震え上がり、訴えるように言った。

「土屋！いたぶるなんてマネ、しないでよ！ケリをつけるならさっさとして！」

「なぜだ？」

「土屋らしくないよー！」

「悪いな。これが俺なんだよ」

土屋は平然と言つてのけた。その間も、憎々しげに土屋を睨む石橋を眺め回している。続いて、石橋と土屋の間に立ちはだかる小夜子を見た。小夜子は両足を踏ん張って、土屋を涙目で睨みつけている。

小夜子の両手が前に突き出され、その手が印を結ぶ。土屋の手に呪符が握られた。石橋はソレを見て、半ば哀願の声を上げた。

「宮村やめろ」

小夜子はその声に振り返りもしなかった。私も叫んでいた。

「そくだよ、小夜子に勝ち目はない！だから、もう戦おうとなんてしないで！」

「戦うことをやめたら、あなたたち邪殺屋はわたしたちを殺すくせに！」

小夜子は事実を言った。その通りだと、土屋の目が言っていた。小夜子の手が第二の印を結び、呪文の言葉を唱えようと口を開きかけた。

「やめろって言ってんだろ！」

石橋がとうとう怒号を上げた。小夜子がびくりと肩を上げ、石橋を見る。石橋の目には絶望だけが映っていた。

「勝ち目はない。いたぶられて殺される前に行けよ、お前なら逃げ切れるはずだ」

私たちはその言葉に身構える。小夜子はその言葉に目を見開いた。私たちに背を向け、石橋に食って掛かろうとした。小夜子は土屋がいることを忘れていた。土屋は小夜子の後姿にすばやく飛び掛った。何をするのか嫌でも分かった。

手には小刀を持っていたのだ。

それが小夜子の頸動脈を切り裂いた。

ぱつと血煙があがり、私たちにかかった。

小夜子はそのまま足元から崩れ落ちる。

数秒間、土屋以外何が起こったのか分からなかった。唐突すぎたのだ。

土屋の足元で、小夜子はぴくりとも動かない。

やっと事態を把握したとき、私たち、石橋も含めて愕然とした。

小夜子は死んだのだ。拍子抜けするほど、あっけなく。

まさか土屋がこんなに簡単に、しかも霊力ではない、凶器で人を殺すなんて、信じられなかった。涙さえも出てこない。

土屋は一人、半分狂ったように笑っていた。石橋と全く一緒の、残虐な姿だった。

周りの温度が五度ぐらい下がった気がした。この空間に怒りと悲しみのオーラが下りたのだ。私たちと、石橋はしばらく銅像のように動かなかった。

土屋だけはまだ笑っている。

「どうした石橋。悲しいのかよ。てめえ、今まで人命を虫けらのようにつぶしまくったくせに、コイツだけ特殊なのかよ？この女に会いたいなら地獄におちろよ……」

と狂ったように、悪態を吐き捨てまくる。

石橋は土屋を完璧にシカトしていた。

土屋はまだ何かを言って一人で笑い転げているが石橋は気にしない。立ち上がったかと思うと、力任せに土屋を私たちのほうに突き飛ばす。土屋はようやく我に返り、転びそうになったのを踏みとどまった。怒ったように声を立てる。

「てめえ、何しやがんだよ！」

石橋は私たちと石橋の間の地面に呪符を投げた。その呪符から火柱が上がり、横に広がる。私たちと敵の間に炎の壁ができた。

私たちはあまりの熱さに三步下がった。

炎の壁が邪魔で、向こうで何が起こっているのか少ししか見えなかった。炎が揺らいたときチラッと見えた、その光景しか。

石橋は小夜子の脇にしゃがみこんで、うなだれていた。ひよっとして泣いているのか？

その直後、青い光を見た気がした。

土屋は炎の壁をどうにか消そうとしているらしく、その場を行ったり来たりして手に呪符を持っている。

加奈は目を見開いて、炎の壁の向こう側を凝視していた。加奈にはきつと向こうの光景が全て、見えるのだろっ。何が起こっていたのかあとで聞いてみよう。

唐突に炎が消えた。

炎の向こうには石橋はいない。代わりに仰向けに寝かされ、目を閉じた小夜子の亡骸があった。頸動脈から血が飛び散った拍子に汚れた首の血は、綺麗に拭われていた。

土屋は動揺してきよろきよろした。さっきの狂気が嘘みたいだ。

私も辺りを見回す。いない。どこにいたのらっ？

「おい、どこ見てやがる、てめえら」

ぎくりとして背後に目をやると、私は思わず飛びのいた。

加奈が石橋に捕まっていた。髪の毛を後ろから掴まれ、頸動脈に霊力で伸ばしたと思われる親指の爪が突きつけられていた。親指の爪は鋭く尖っていて、刃物と同じだった。

「や、やめて！加奈を放して！」

私はパニックを起こしそうになりながら絶叫した。

加奈は顔をこわばらせ、怯えきっている。

土屋は石橋のすばやさで加奈が捕まったことに愕然としている。

そのうちポケットから呪符を取り出そうとしたが、石橋の嘲笑で止められた。

「おいおい、この女を殺されてもいいのかよ。それ以上呪符を出したらこいつは死ぬぜ」

石橋はやっぱり石橋だった。少しでも情があると思った私が馬鹿だった。

それでも私は哀願した。

「お願いやめてよ石橋！殺すなら私にして！加奈だけは殺さないで！」

「はッ、お前のお仲間の土屋は俺の仲間を殺したじゃねえか」

石橋は再び嘲笑した。

「あいつ、俺の親友のいとこなんだよな。全く、親友も殺されて、そのいとも殺されるなんて、最悪だぜ」

「お前の親友はともかく、宮村は殺されて当然だよ」

土屋は冷たく言った。

「お前と一緒に特殊能力者じゃない人間も、無差別に殺したんだ

し。だろ？」

「無差別だと？」

石橋の嘲笑に亀裂が入った。

「無差別？まじでそう思ってたのかよ？」

「どういう意味だ」

「俺は無差別になんか殺してねえよ。愚鈍な奴め。そんなことにも気が付かなかったのか」

土屋は分らないと肩をすくめ、気を取り直した。

「いいから井上を離せよ。井上は何もしてないんだから。何の恨みもないだろ？だから……」

「そうだよ！」

私は叫んだ。

「加奈は殺さないでよ！離してあげて！」

「じゃあ離すよ」

石橋が凄惨な笑みを浮かべた。

加奈の首筋から、小夜子と同じように血煙が上がった。

加奈の目が見開かれる。

石橋の顔に血が散らばった。

石橋は壊れたおもちゃを投げ出すように、加奈を離れた。

加奈は小夜子同様、足元から崩れ落ちていく。

このときも、一瞬何が起こったのか分からなかった。加奈がなぜ倒れていくのか、それさえも理解できなかった。

私はその場に根が生えたかの如く、突っ立った。

それは土屋も全く一緒だった。

さっきの再現をしているようだった。

加奈は地面にどさりと倒れた。

「……………加奈……………」

私はおぼつかない足取りで一步踏み出し、力が抜けてへたり込んだ。加奈に手を伸ばしたか、怖くて触れない。

何が起こったのかは分かっているが、頭は受け付けようとしなかった。全てを否定していた。

聞こえたのは森の奥に走っていく音だった。その音の主がイカれた笑い声を上げている。石橋の笑い声を聞くのは、これで最後だろうか。

土屋が悪態をついてその後を追う。

私と加奈、そして小夜子だけがその場に取り残された。

私は震える腕で加奈を抱き起こし、見開かれた目をそつと閉じさせた。

私の腕の中で、大親友はどんどん冷たくなっていく。

「加奈」

私はそつとささやいた。

加奈を力いっぱい抱きしめ、声を上げて泣いた。加奈が死んだ。そんな非現実的なことが起こるなんて、信じられなかった。

だから私は夜の森の中で親友の亡骸を抱きしめ、大声で泣きじゃくった。その声は森にひととき大きく響き渡った。

私の親友の井上加奈は、史上最悪の体育祭の日に、天国へ旅立って行った。

第一部最終話

あの出来事から一ヶ月。

大虐殺のことはニュースになり、赤月市には大量にマスコミが押しかけた。新聞の第一面には毎日のように赤月市のことが書かれた。

巨大ハリケーンが突如発生したと伝えてあったが、回りは怪しいと思っっているようだ。

当然だ。学校を木っ端微塵にするほどのハリケーンなのに、山を挟んだ隣町の大山市の住人はそのハリケーンを見ていないのだから。

しかもよりによって体育祭の日に。

殺人鬼の石橋健は、赤月市の山奥にある崖から自ら転落して自殺した。小夜子の亡骸とともにエクソシストの元に送られた。これで優介の妹の弥生は解放されるだろう。

それにしてもそんなにあっさり自殺するなんて無責任すぎる。

小夜子が壊した中学校は閉鎖され、今は他のところで勉強をして

いる。壊れた家の修復作業は黙々と進んでいた。

市民の数は大幅に減ってしまった。幸い私の家族は無事だったので良かった。

でも加奈は死んだ。

そして殺した本人も死んだ。

ひどすぎる。

私はようやく加奈の死から立ち直ったけどなんだかすつきりしなかった。

土屋はあの夜の次の日からしばらく行方不明になっていたけど、数日後に戻ってきた。

今は土屋と一緒に破壊された学校の校門の前に立っていた。

ここに来るたびに、生々しいあの夜のことが目に見え始める。

土屋は浮かない顔だ。前よりやつれたように見える。

「石橋も死んだし、めでたし、ってなると思ってたいたが……こんなに死者を出しちまうなんて……。俺のせいだ……」

とぼやいている。私はそれを否定した。

「土屋のせいじゃないよ。もとはといえば全て石橋と小夜子のせいだよ。それに唐突すぎたし、仕方がない」

「仕方がない、本当にそう思っているのか」

土屋の言葉が震えた。

「仕方ないじゃ済まされないだろう。こういう事態を避けるのが、俺の役目だったのに……」

私は肩をすぼめた。

石橋への憎しみは、消えなかった。

石橋が死んでもなお。

「でも石橋は自殺したじゃん。もういいよ。できることはもう、
何もない」

そうとも。

奴は死んだのだ。

平穏な日々に戻ればいい。

私はただそれを願う。

邪殺屋生活はもうおしまい。

あとは土屋に任せよう。

きいつ、と私の肩の優介のイズナが鳴いた。

そういえば優介はいまだに外国から戻っていない。

イズナを見ると、いつの間にか白い封筒をくわえていた。

なんだろう。

受け取って、封を開けてみる。

土屋と私宛だった。

なんだかとても嫌な感じがした。

その予感は見事に的中してしまった。

手紙の内容はこうだ。

『邪殺屋、土屋弘様、高橋幸乃様へ この間送ってくれた石橋健と宮村小夜子の遺体の件です。宮村小夜子の遺体は本物と断定されましたが、石橋健の方の遺体は偽物という結果が出ました』

・・・！！

「偽物っ？」

私と土屋は目をむいた。先を読む。

『強力な黒魔術による物ですので、見破れなかったのも無理はないでしょう。しかし、日本魔術士が石橋健をかばっている可能性もあるとして、田中優介様の妹、弥生様の解放はできません。そのことについて話し合いたいので、以下の場所に一週間後の夜十二時に来てください。エクソシスト クリフォード・アンソニー
追伸 石橋健の現在の行方はドイツだと思われます』

そのあとに、集合する場所の住所が書いてある。・

私と土屋は驚愕としたままその場にたたずんだ。

封筒の中にはもう一枚紙が入っていた。

出してみても、私は失神するかと思った。

そいつの新聞記事の切抜きだった。どこかのビルが爆破された写真もついている。破壊されたビルの写真が正面にあって、煙が上がっている。その右側にはパトカーらしき車が、手前には現場を見に来た住人と見られる人々がいた。

その隅の方に、奴はいた。

石橋は私たちを嘲笑うかのごとく、ピースして小さく笑っていた。

《終わり》

《第一部

第一部最終話（後書き）

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

次回から第二部に入りますが、今後ますますよろしくお願いします。

第二部 序章

ここはたぶん、ドイツのどこかだと思う。

日本より立ち並ぶ家々の造形が美しい。今は夜中なので人通りも少なく、日本と違ってあたりは静寂に包まれていた。日本なら悪ぶっている連中がどこかしらいる。街灯の下に俺はしゃがみこんで、たまに前を通る人を眺めていた。

あの争いは、もう何年も前のことのように思えた。宮村小夜子が死んだあの夜、俺は崖から転落死したと見せかけて、とつと逃げた。しばらく外国を転々とし、今、ここにいる。

少なくともこの間までは宮村小夜子がいたが、アイツは死んで、俺は一人になった。光明のいとこは絶対守りぬくと決めていたのに、俺の力不足のためにアイツは邪殺屋に殺されてしまった。

そんなことになるとは、これっぽっちも思っていなかったのです。ヨックは大きかった。復讐のために霊視能力者の女を殺してやったが、いまだに怒りは収まらない。

とはいっても、俺は大量虐殺者なので邪殺屋の怒りに比べればちっぽけなものだろう。

ところで俺はいつかエクソシストとかいう愚図軍団に捕まって、死刑になるのだろうか。死ぬというのはどんな感じなのだろう。即死でも、痛みはあるのだろうか。死んだらどうなるのだろうか。

まあいい。俺には分かるはずもない。なんせ、死んだことがないのだから。

ふと目線をあげると、誰かと視線がぶつかった。女子だ。二メートルぐらい前にたたずんで、俺をじろじろ眺めている。失礼な女だ。無礼にもほどがある。

その女子は、黒いローブを着ていた。ローブの下服は、ミニスカートである。アニメで出てくる主人公の適役の魔導師のような服装だ。むきだしになったひざには黒いあざのような痕がある。暗くてよく見えない。

その女子の上にはカラスのような鳥が旋回している。しかしカラスではない。あれは使い魔……悪魔だ。そしてひざのは恐らく“悪魔のキス”の痕だと思う。悪魔のキスとは、悪魔と契約したときにつけられるものだ。その痕のことは“悪魔の紋章”という。

この女はウィッチだ。悪魔使い、またの名を魔女……つまりデビルサマナーだ。悪魔使いが俺に何の用か。

じろじろ見返していたら、女が唐突にこう言った。

「あら……あなた、石橋健ね？」

疎通の呪符が作動しているので、言葉は通じる。ところでこの女は俺の正体を知っているくせに、なぜ近づいたりするのだろうか。俺のことが怖くないのだろうか。呆れた女だ。

俺は答えなかった。答える気などさらさらない。こいつがエクソシストだったら困る。

「ねえ、そうなの？あの、アカツキ市民を大量に虐殺した？」

女はなおもまくし立て、徐々に顔に笑みを広げていった。

「そうなんでしょうね？ね？」

俺はその笑みが恐ろしくて、眉をひそめた。女は俺が肯定したと思っただけ。街灯の下に明るみにずかずか入って近づいてくる。満面の笑みを浮かべて。

目はかすかに紫がかっていて、一歳年下か、あるいは同い年か。長い髪には軽くウェーブがかかっていた。

「こんばんは、健。ここだなにしているの？」

女は非常に馴れ馴れしい。俺は無視した。女は気にする風もない。

「私あなたの大ファンなの。良かったら私の家に来てくださらない？」

くだらない。殺人犯のファンなどとはざく女のユーモアは、よほどひねくれている。ユーモアがひねくれた女は、俺に無視されたことで、むっとしたらしい。

「ね、聞いている？」

「うるせえな」

俺は吐き捨てるように言った。ほつといてほしい。女は俺が答えたことに気をよくした。

「私はクリスティーナっていうの。ウィッチよ。あなたのことな

ら何でも知ってるわ。あ、私の名字はコルネリウスよ」

「コルネリウス？」

俺はふと思い出した。ハインリヒ・コルネリウス・アグリッパ、という名前を思い出したのだ。クリスティーナと名乗る女は俺が何を思ったのか悟ったらしい、「ええ。そうよ」と再びにつこりした。

「アグリッパの血を受け継いでいるの。さすがね。たいていの人
は私の名字を聞いても気がつかないわ」

アグリッパとは中世期最大の魔術士と言われている。アグリッパ
の情報を詰め込んだはずの脳内ファイルを開こうとしたが、詳しい
ことは忘れてしまったらしく、開けなかった。

クリスティーナは不意に通りに目を通し、カラスの悪魔を見上げ
た。俺には通じない甲高い悪魔語でカラスに何かを命じると、カラ
スはどこかへ飛んでいき、闇夜にまぎれた。

「エクソシストがそばにいるわ。どこにいるのかしら……」

クリスティーナは不安げだ。

「ひょっとして仲間かもしれないけど、分からないわ。ねえあなた、追われているんでしょ」

恐らくそうだろう。

「私の家でかくまってあげるわ」

「断る。ほっといてくれ」

「どうして？ いいじゃない……」

とまでいい、また突然やめた。再び微笑をたたえる。

「じゃあ、土屋弘ってひと、知っているかしら？」

「……そいつがなんだよ」

「そのヒト、今度イギリスにあるエクソシストの住処……悪魔祓い、魔法結社本部に来るらしいわよ」

やはり来るか。そんな予感がした。

「その人の情報がほしいなら、来るといいわ」

「そうだよ、絶対そのほうがいい」

知らない声が背後からしたので、振り返った。もう一人、暗がり
に誰がいる。一体なんなんだ、この連中は。気味が悪い。

そいつが言った。

「ぜひ、クリスティーナのところ……」

「誰だお前」

俺はさえぎって、鋭く尋ねた。そいつは片頬だけで笑った。

「エクソシスト」

通りに冷たい風が吹き込み、頬をなでる。冬はもうすぐそこだっ
た。

魔術士辞典（前書き）

本編に入る前に、魔術士の辞典を作っておきましたので、分からないようになりましたら見てください。

魔術士辞典

1、自然魔術士（高橋 幸乃）……自然の力を何でも操れる。

2、陰陽師（土屋 弘）……主に白い呪符で戦う。他にも紙形の式神や、九字を使ったりする。

3、黒陰陽師（石橋 健）……陰陽師の悪くなったもの。黒い呪符で戦う。陰陽師は作れない”死の呪符”を作れる。幻影、九字なども使う。

4、犬神使い（宮村 小夜子 没）……犬神と犬の霊を操る。犬に変化もできる。

5、霊視能力者（井上 加奈 没）……主に人の心を見透かしたり、透視などができる。

6、イズナ使い（田中 優介）……イズナという動物霊を操る。ねずみぐらいの大きさを、尻尾が二つある。

7、巫女（山口 愛）……口寄せ、お祓いなどをする。清濁合わせて飲むという広い心を持たなければならない。

8、修験者（佐野 健吾）……竜神、鬼神等等を召喚する。

9、ウィッチ（クリステイーナ・コルネリウス）……デビルサマナー。悪魔使い。使い魔を使役し、悪魔を召喚する。

10、ドルイド（クリフォード・アンソニー）……古代ヨーロッパにおいて、最高の召喚術師。天候制御を得意とし、竜などを召喚する。

11、ウォーロック（フローラ・ベックフォード）……四大元素の精霊を召喚する。火の精サランダー、水の精ウンディーネ、風の精シルフ、地の精ノーム。

12、ネクロマンサー（ライナー・クラウゼヴィッツ）……死霊魔術士。主に死体を召喚する。

13、アルケミスト（フィオナ・ミランドーラ）……錬金術師。七つの金属を操れる。（金、銀、水銀、銅、鉄、錫、鉛）賢者の石を作れる。化学変化の言葉を使っているいろいろなものを操る。

14、狐使い（霧林 白稲）……白狐、狐の動物霊を操る。白狐に変身できる。

ル
で
す
*

* 攻撃などはオリジナ

第一話：エクソシスト

私と土屋は空港にいた。

お母さんたちにしばしの別れを告げて、イギリスへ行くことになったのだ。エクソシストと話をつけるために。

土屋は不機嫌真っ盛りだ。なぜかは不明だ。

イギリスへは直行便で行く。私は大はしゃぎだった。飛行機に乗るのは初めてだ。

飛行機に乗り込み、狭い通路を通って自分の席まで行く。外国の人がけっこういたので、土屋には通訳の呪符を貼ってもらっていた。これを貼れば、外国の人の言葉が分かる。

離陸前、いろいろ説明を受け、私たちはシートベルトをしっかりとめた。

上昇するとき機体が少し揺れてびくびくしたけど、無事に離陸できた。窓から外が見える。雲の上だ。よく、雲の上まで加奈が行ったっけ……。

そう思うと悲しくなって、私は少しうつむいた。

加奈。仇はとるからね。

と、こっそりポケットに忍ばせていた優介のイズナが、ちいつ、と小さく鳴いた。私のひざの上に、警戒しながら出てくる。二つの尻尾を振り、私を見上げると、もう一回鳴いた。

私はイズナを両手で包み込むと、どこかへ行ってしまうまいようにした。手の間からイズナは顔を出している。毛並みがふさふさで温かい。

私は呪符をいじっていた土屋に声をかけた。

「ねえ、なんでそんなに不機嫌なの」

「エクソシストと会うのが嫌だからだよ」

「どうして？」

「邪殺屋とエクソシストは代々仲が悪いんだ」

「そうなの。で、どうして」

「奴らのやり方には納得いかない」

「そうなんだ」

「寝とけ。きつと夜は遅くなる」

「分かったよ。じゃあ、イズナを見てて」

私はイズナを土屋のひざの上に放った。イズナはくんくんと鼻を動かし、土屋の捕まえようとする手を逃れ、二の腕あたりに駆け上った。この前つかまれたことをまだ根に持っているらしい。

土屋はイズナがそこにとどまっていることを確認すると、また呪符をいじり始めた。

私は首をたれて、目を閉じた。

エクソシストってどんな人たちなのかな。

私は会うのが楽しみになっていた。

そして、私は始めて異国に降り立った。

私たちは無事、イギリスに入国し、私はさつきよりはしゃいだ。

イギリスには見たことがない店がたくさんあった。

一度は見てみたかったロンドン塔。キングクロス駅。

私はあっちこっちに土屋を振り回し、夜になるまで気分は最高だった。

私たちは夕方になると軽食としてサンドウィッチを食べた。イズナにははさんであったハムをあげた。

夜になるまでぶらぶらし、夜十時以降になると人目につかないように建物の屋根に上った。

夜はぐつと冷え込み、私は持ってきたダウンコートを着た。すぐに帰るつもりだったので、荷物はリュックしかない。

イズナはダウンコートのポケットに入れておいた。

十一時五十五分になった。

私たちは約束の場所に行った。

約束の場所は暗い、人気のない路地だった。

夜は怖かった。寒いし、惨めになる。でも近くには土屋がいたので、ある程度安心できる。

私は静かになった町並みを見渡し、せわしく手をこすった。

十二時十分になると、土屋は苛つきはじめ、二十分になるとカンになった。

「エクソシストはまだか！二十分も遅れやがって！」

「落ち着いてよ」

私は土屋を静めようとした。しかし土屋は静まらない。

「くそッ！何様のつもりだあの連中！よくもこんなに人様を……」

土屋がいきなり黙った。私もつられて黙り、おずおずとあたりに目を通した。一陣の風が私の後ろから吹いた。

そちらを見やると一人の男子が立っていて、こっちを見ていた。

私たちはその男子をじつと見つめた。

男子は黒いローブを羽織っていて、手には櫛の杖を持っている。その男子と同じぐらいの背丈で、てっぺんに拳ほどの大きさの宝玉がついている。それを包み込むように、櫛の木のつるが巻きついていた。

「エクソシスト、か」

土屋が厳しい口調で言った。男子は私たちに黙って近づいてきた。

長身で、髪は少し長めだ。優しそうな面持ち・・・・・・・・ずばり、カッコイイ。

その男子は唐突に、にこっとした。

「こんばんは。邪殺屋の二人、イギリスにようこそ。俺は手紙を送った、十四歳エクソシストのクリフォード・アンソニーだ。よろしく。あ、ちなみにドルイド」

クリフォードの愛嬌のある笑顔に、私は頬を赤く染めた。あわててお辞儀する。

「私は邪殺屋の高橋幸乃です！自然魔術士です！」

「よろしくー」

土屋は自己紹介と挨拶を全て省略した。

「おい、とつとと連れてけ。その、悪魔扱い・魔法結社とやらに」

「なあに、それ」

私はきよとした。クリフォードが説明してくれる。

「エクソシストの住処がある、名前の通り魔法結社。特殊能力犯罪や魔法生物等々を取り締まっているんだ。そこは山奥にあつて、ここからはちよつと遠いんだよね。ちなみに普通の人が見つけないように魔法がかかっている。結社とこの空間をつなぐ作業をしていたから遅くなつたんだ。悪かつたな」

「ほう。納得だな」

土屋は冷たく言った。私はクリフォードにもう一回訊いた。

「空間と空間をつなぐって？」

「まあ、来てみれば分かるよ。ついてきて」

クリフォードはとことこ来た道を戻り始めた。

三十秒ほど歩くと、建物の壁に大きな黒い穴が張り付いているところに到着した。穴といつても、建物の壁にじかにあいているのではない。これは魔法だ。

この中に入れば、結社にワープできるというわけだ。

穴は二メートルぐらいで、大きい。

「さ、入って入って」

クリフォードに促される。私は土屋を見やった。土屋は、とつと入れというように穴のほうをあごでしゃくった。

私は身をすくめながら中に入った。

一メートル歩くか歩かないかであたりの風景が変わった。

周りは森で、目の前には灰色のレンガの西洋風の城がそびえ立っていた。とても大きく、ものすごく目立つ。後から来た土屋は城に一瞥を投げただけだった。

ここが、悪魔抜い、魔法結社本部。

ダウンコートの中のイズナが甲高く鳴いた。

クリフォードが私の前を歩いて、出入り口に向かう。

観音開きの木製の巨大な扉を通り抜けて、中に入る。

中は白い大理石できていた。天井は笑ってしまうほど高く、シヤンデリアがきらきら輝いていた。入ってすぐの両脇のカウンターから、若い女性が「こんばんは」と言ってきた。

玄関ホールにはソファアなどが置いてあり、なんだかダンスパーティー会場みたいだった。広さは大型の体育館三つ分ぐらいだ。

正面には出入り口に匹敵するほどの巨大な扉があった。

クリフォードはその扉の右側を杖で軽く叩いて、一人通れるぐらいに開いた。私たちが中に入ると、同じように杖で叩いて閉める。

ここは大広間だろう。巨大な長テーブルがいくつも並んでいる。ゆうに千人は入れそうな気がする。ここのもは何もかもがでかい。

その隅には、数人の少年少女が座っていた。

イズナがダウンコートのポケットから飛び出し、一人の少年に突進していく。優介だ。愛ちゃんもいる。

私は促されるままに、愛ちゃんの隣に座った。土屋は私のもう一方の隣、クリフォードは私の向かいだ。

クリフォードは咳払いをし、

「これから田中の妹についての会議を始める」

と短く言った。

第二話：会議

私の斜めに座っている美少女が立ち上がり、自己紹介した。

「フィオナ・ミランドーラです。アルケミスト、錬金術師です。はじめまして」

お辞儀した拍子に肩から長いブロンドの髪が滑り落ちる。イカれた石橋でも分かるような、絶世の美女だ。目の色は水色だ。

フィオナは座ると、仏頂面の土屋を気にするようにちらちら見た。その隣の、低くツインテールをした赤毛の少女が立ち上がる。

「フローラ・ベックフォードよ。ちなみにウォーロック。よろしく」

フローラ？聞いたことがある。そうだ。石橋だ。石橋がフローラのブログを見ていたと言っていた。

その次に、茶髪の不良っぽい男子が立ちもせずに

「ネクロマンサーのライナー・クラウゼヴィッツだ」

とそっけなく言った。私も土屋の分も一緒に自己紹介した。

フィオナはどうも土屋が気になるらしく、ずっとちら見していた。

最初に口を開いたのは、優介だった。

「それで？」

と、優介らしくない声で言ったのだ。明らかに苛ついている。

「ほかに僕に何をしろというんだ？こんな会議を開かなくても、僕は弥生を返してもらえればそれでいい。なぜ返してくれないんだ」

「日本魔術士が邪教ではないということがはつきりしたら返す」

クリフォードが穏やかに言い返した。

しかし優介はふんと鼻を鳴らした。

「どうやってはつきりさせるんだ？第一、石橋の死体が偽物だったとしても、もう一人は本物だったんだろう？両方が偽物だったなら僕らが二人をかばおうとしていると疑うのは当然だが、一つは本物だったんだ。つまり一人は殺した。そうだろう、土屋」

優介は土屋を見た。土屋はうなづく。

「宮村小夜子は間違いなく俺が殺した」

「あなたが？」

フローラが目をむいた。

「殺したの？女の子を？」

「ああ」

「どうして？捕まえるだけでよかったじゃない！ずっと疑問だったわ。なぜ日本のエクソシストは殺すの？」

「相手が殺人犯だからさ」

土屋は平然と答えた。

「捕まえようとする」と暴れるし。ていうか、そういうしきたりなんだよ」

「しきたりが何よ！私たちは捕まえてこっちに送ってとは言ったけど、殺してなんて言っていないわよ！」

「だからなんだ？」

土屋はフローラを嘲笑う。

「お前らの命令に従うと、どこの誰が言ったんだ？いいか、俺はあくまで邪殺屋であり、エクソシストとは違う。それにお前らエクソシストだって、日本魔術士全員が邪教なら殺すつもりなんだろう？なぜだ？いままでは単に捕まえていただけなのに、なぜ日本魔術士は殺そうとする？」

「数が多いからよ！決まってるでしょ！そんな数が暴れたら、世界が破滅するわ！でもあんたはたった一人や二人の殺人犯を平然と殺す。どうして？」

「ならそいつらがいくら殺しても放っておくってのか？」

土屋が怒った口調になった。フローラもだ。

「捕まえるだけでいいでしょ！」

「てめえらはな。でも俺は殺す。その何が悪い」

「あんたは邪教決定よ！」

「黙れ！くそっ……これでも食らえ！」

土屋がフローラに向かって呪符を投げつけた。フローラは声を上げてよけると何か言おうとした。しかし優介にさえぎられた。

「エクソシストや邪殺屋のことは今はどうでもいいだろ？僕は弥生のことを話しに来た。そのことを話さないのなら失礼する」

「まあまあ」

クリフォードがなだめると、私を見た。

「何か言いたい事はある？」

「あの、私たちは邪教ではありません。決して。土屋はこんな風に乱暴な時もあるけど、いつもは優しいんです。邪教は、石橋だけです」

「いえ、そうではありませんよ」

愛ちゃんが不意に口を挟んだ。疲れきったような顔だった。

「健も邪教ではありません。確かに健の心には深い闇があります。それは決して邪悪ではありません。誰にでも心の闇があります。健はただ、その闇の部分が多いだけです」

「石橋は邪教ですわ！」

フィオナが怒ったように言った。

「人殺しは皆邪教です」

「殺人者本人が、どれだけ辛い思いをしていたか、貴方には分かりますか」

愛ちゃんがフィオナを見た。

「自分の欲を満たすために人を殺したとか、精神が乱れている人は確かに少し心のケアが必要でしょう。しかしほとんどの場合、殺人者は殺された人によってとても辛い思いをしてきました。だから健もそう……」

「何よ！日本人ってそういうことばかり言うのね！自分を正当化しようとして……」

「私は巫女です」

愛ちゃんの凜とした声がフローラの声をさえぎる。愛ちゃんは澄んだ瞳でフローラを見据えた。フローラは冷水でも浴びせられたように息を呑んだ。

「これが私の教えです」

愛ちゃんはきっぱり言った。

私はそんな愛ちゃんに感心した。優介は、ここぞとばかりに言い放つ。

「これで分かっただろう。僕は君たちエクソシストの言うような、邪教の教祖ではないし、日本魔術士たちも邪教とではない」

土屋がその通りだと言わんばかりにうなづく。優介は続ける。

「その、石橋とかいう男がなんなのか、僕は知る由もない。つまり僕の出る幕はもうないんだ。弥生も関係ないから、もう返してもらう」

「日本魔術士が邪教じゃないっていう、はつきりとした証拠はないじゃねえか」

ライナーが初めて口を開いた。眠そうに目をこすっている。

「証拠？そんなものいるかよ！」

土屋が昂然として立ち上がった。

「邪教じゃないと言ったら邪教じゃないんだよ！何回言ったらわかる！いいか、俺は田中弥生を取り戻しに来たんだ！お前らの馬鹿馬鹿しい低脳のような議論に付き合っている暇はない。訴えるぞ！」

私はその言い草に噴き出した。土屋に睨まれ、私は首をすくめる。

「落ち着け、落ち着くんのだ！」

クリフォードが土屋を座らせようとやけくそになり、土屋はそれを無視した。優介と愛ちゃんは座っていて、ライナーは睡魔に負けてとうとう寝た。

土屋は狂ったように叫びまくる。

「とつとと返さないと、どうなるか分かっているのか！この愚図エクソシストめ、責任者を出せ！」

「うるさい！」

フローラが勢いよく立ち上がり、持っていた杖を構えた。赤い金属でできたような杖だ。背はフローラと同じぐらいで、てっぺん近くにはトカゲが彫られていた。

「こいつらは邪教よ！」

「フローラ！」

クリフォードはおろおろするしかない。

優介がとうとう立ち上がった。優介からすさまじい怒りのオーラがほとばしり、私たちはそれに圧倒されてよろめく。

「もしこれ以上僕を邪教呼ばわりしたら、もう容赦はしない。言っておくが僕にとって君たちを倒すことは、アリを踏み潰すより簡単なことなんだ」

「ゆ、優介！」

私は立ち上がり、悲鳴を上げた。続いて土屋を見る。

「土屋！優介を止めて！」

「場合によっちゃあ参戦」

それだけだった。

フィオナはライナーを起こそうとやけになっている。愛ちゃんは座ったままだ。

フローラが攻撃しようとして前に出た。私は前に飛び出し、叫んだ。

「お願い！やめて！この中に邪教なんていないわ！石橋を止めた気持ちには皆一緒でしょ！」

誰もが動きを止めた。

「私たちは邪教なんかじゃない！私の親友は……加奈は、石橋に殺されたの。私の住んでいた赤月市の住民たちだって……。皆、問答無用だったよ。土屋はずっと、赤月市民が死んだのは俺のせいだって、自分を責めてた。私がやめてたっていても、ずっと。私たちはもう、他の命を奴に奪わせたくないと思ってる。内輪もめしたって、意味ないよ……」

私は泣きそうになった。加奈。

「愛ちゃんは、束縛は許さないって言っているけど、本当は石橋

にやめてほしいって思っているはずだよ。優介だって」

優介は無反応だったが、愛ちゃんの睨がぴくつと動いた。

「皆、石橋のせいで傷ついているの。もう、やめよう。こんなケンカ」

「同感同感」

クリフォードがほっとしたように口を挟んだ。

「こんなケンカは無意味だ。高橋さんの言葉に嘘はないよ。フロラ、下がれ。弥生さんは解放する。日本の特殊能力者は邪教じゃないよ」

クリフォードが私に軽く笑いかけた。

「フィオナ、弥生さんをここに連れてきてくれ」

「はい」

フィオナは出入り口から出て行った。

優介と土屋はほぼ同時にどっかりと椅子に座った。

「最初からそうすりゃいいんだよ」

土屋が吐き捨てるように言った。

「全くだ」

優介がうなずくと土屋もうなずいた。

私は肩をすくめ、ちよこんと椅子に座った。

第三話：人情

フローラが私に近づいてきて、うつむきがちでしょんぼりと言ってきた。

「ごめん……あんなこと言って……」

「いいの。ありがとう、フローラさん」

私が笑いかけると、フローラの顔がぱっと明るくなった。

「あたしのことはフローラって呼んで」

「じゃあ私のことは、幸乃でいいよ、フローラ」

私たちはもう一度笑いあって仲直りした。フローラは実に明るい女の子だった。すぐに意気込む。

「さ、今後、石橋をどうするか、話し合いましょう!」

「うん!」

「今後？」

ふん、と鼻で笑った者がいた。土屋である。

「今後なんてねえよ。なんせ俺らは日本に帰るんだからな。一度日本に帰って計画を練り直し、そして石橋を殺しに行く。つまりお前ら愚図連中とは別行動なんだよ。あくまで俺は、だが」

「土屋！」

私は怒ったが、無視された。クリフォードは朗らかに言う。

「協力して捕まえるほうが早いよ。協力しようぜ。絶対その方がいいって。な！」

「断る」

土屋はきっぱり言った。

「俺は殺し屋だ。エクソシストのように捕まえたりしない。抵抗

した時点で殺す」

「頑固者！」

フローラがそっぽを向いた。土屋もだ。

「俺は帰るぜ。こんなとこいたら、身が腐っちまうぜ」

「ひどいよ！」

土屋は何も言わなくなった。やがて、弥生が走ってきた。「お兄ちゃん！」と優介に抱きつき、泣きじゃくる。よほど怖かったのだろう。優介は愛ちゃんに目配せすると、とつとと失せた。愛ちゃんはお辞儀をして後に続く。

「愛ちゃん！またどこかで会おうぜ！」

ライナーがいきなり起きて、愛ちゃんに言葉を投げた。

土屋は愛ちゃんの後について出て行った。私はその後を追いかける。

「待つてよ！ねえってば！」

「うるさい！」

玄関ホールのソファに座っていた人が一斉にこっちを見た。土屋は私に向き直ると、怒鳴り散らした。

「協力なんてするかよ！いいさ、お前はここでやっていればいい。俺は行く。お前が俺について来ようが来なかるうがどうでもいい！」

その言葉がぐさりと心に突き刺さった。愕然としてみると、後から来たフローラが、聞いていたのか怒鳴り返してくれた。

「なによそれ！あんた、幸乃にどんなこと言ったのか分かってんの？今のでどれほど幸乃が傷ついたか……。あんたなんて、石橋と同類よ！行きたいなら行きなさいよ！」

「行くとも」

土屋は嘲笑した。

「勿論行く。石橋は俺が殺す」

「やめろよそれは！」

クリフォードが割りこんだ。

「奴はいちおう人間なんだ！」

「人間？どこがだよ。第一、特殊能力を持っている時点で人間じゃないだろう」

私たちは目を見開いた。傷ついたので。

「人間じゃなかったら……なんだよ」

「化け物が、あるいは……超人？」

何が面白いのやら、土屋はニヤニヤ笑いをした。

「ともかく俺は行くからな。じゃあな。これっきりかもな……」

「まあまあ、待てよ、土屋」

ライナーがどこからともなく現れて、土屋の肩を馴れ馴れしく叩いた。

「行くんじゃないよ。俺、君の事気に入ったよ。ぜひともここにいてほしい。だってよ、アンソニーといっても面白くねえんだよ。いつもまじめ腐った話ばかりしてよ。君の今の言葉、超気に入ったわ。超人ね、超人。あっはー、それいいね」

私は引いた。

「そうだよな。普通、特殊能力なんて無いもんな。超人だよホント」

「うるせえな」

土屋が案の定冷たく言ったがライナーはお構いなしだ。

「超人同士、仲良くやろうや。な！別にこいつらとは仲良くしなくたっていいぜ」

ライナーは私たちの方をあごでしゃくる。

「こいつら、俺のユーモアあふれるジョークに、にこりともしてくれねんだ。分らず屋共さ」

「知るかよそんな……」

「ユーモアセンスの欠片も無い奴らに君が心を許すはずも無い。なあ！フローラ、アンソニー、フィオナ？」

誰も何も言わない。私も何も言わなかった。というより、言えなかった。

ライナーは力づくで土屋を引っ張り、どこかへ連れて行ってしまった。

私たちは顔を見合わせた。

「ライナーはいつもあなのよ」

フローラが言った。

「じゃあ、俺も行くよ」

クリフォードは私たちに「おやすみ」と言つと、ライナーたちの行った方向に行つてしまった。

フローラは「じゃ」と私の腕を掴んだ。

「私たちも行こつか」

「どこに？」

「部屋よ。自分の部屋」

「そんなのあるの？」

「もちろん！」

フローラが可愛らしくウィンクした。

私とフィオナ、フローラは玄関ホールの隅にあるドアを開ける。ここはエレベーターホールだった。それで四階まで行く。四階にはドアがたくさんあり、天井はさほど高くなかった。ここには個人の部屋があるそうだ。来客用のも用意されていた。一番奥だ。

到着して部屋に入ると中は高級ホテル並みに広く、荷物はすでに運ばれていた。

ふかふかなベッドにバスルーム。テレビ、ソファー。

すごい！

私はキヨロキヨロしながらソファーに座った。

二人もしばらく一緒にいてくれることとなり、私の向かいのソファーに座った。フィオナは全身のメラニン色素が薄いのか、肌が真っ白だった。笑うと一層綺麗だった。

「幸乃さんは何の能力を使うのですか？」

「私は自然魔術だよ。自然魔術士！」

「へー、すごい！始めて会ったわ！」

フローラが身を乗り出した。

「私はウォーロックよ。四大元素の精霊を操るの！この杖で魔法陣を出して、それでね」

フローラが自分の持っている杖を軽く振った。

私はじゃあ、と訊く。

「ライナーさんは？」

「あいつ？ネクロマンサーよ。死霊魔術士」

「し、死霊？」

「ええ。本人は死人使いつて自称しているけど。あいつ、女たらしだから気をつけて。女なら誰にでも手を出すから。変態野郎よ」

「そういえばさっき、愛ちゃんが出て行くときいきなり起きたもんね」

「そーそー。そうなのよ」

「私も何回もナンパされました」

フィオナが眉をしかめて言うと、私たちは三人そろってケラケラ笑った。良かった。二人とは仲良くなれそうだ。

私はとりあえず城の内部のことを訊いてみることにした。

「ねえ。ここは何階まであるの？」

「六階です」

フィオナが答えてくれた。

「六階には娯楽室が。五階には特殊能力犯罪者を収容しておく監房棟があります。四階には個人の部屋……この階ですね。三階には魔術の練習場があります。二階にはエクソシストの年齢ごとの部屋と、結社があります。魔法生物管理部や、結社内新聞部、未確認物

探査部等です。未確認物探査部は、ここに邪悪な心を持った人が近づくと、それを感知するんです。あと、よく分からないものとか…」

「へえ。すごい。全部この中に入っているんだね」

「ええ」

フィオナがにこっと笑った。

「幸乃さんたちとは協力体制に入りましたので、明日は実力テストを行い、それから結社入会をしてもらいます」

「するとどうなるの？」

「自分専用の部屋が持てますし、城内を好きに歩き回れることができます」

「わー！探検したい！」

私は子供のように飛び上がって喜んだ。ここに来て良かった。私は心からそう思った。

しかし心から嫌がっている者もいた。そいつがノックもせず私
の部屋のドアを乱暴に開け放って、最低なことにドアが外れた。な
んて馬鹿力だろう。

「おい、てめえ！高橋幸乃！」

私たちは入り口に立って怒鳴り散らす土屋を振り返った。

「なんで引き受けた？なんで協力体制になんて入るんだ？馬鹿馬
鹿しいと思わないのか！」

「思わないよ」

「お前のせいだな、俺まで巻きぞいを食らったんだよ！もうしば
らくはここから出られなくなっただ！どうしてくれる！」

「うるさいわね」

フローラが耳をふさぐ仕草をした。土屋は無論、無視した。

「なんで俺が……くそっ！何もかもお前のせいだ！」

「いいじゃん。皆心優しいよ」

「優しい、だと？ハッ！なにが優しいだ！第一、こいつらと一緒にじゃあ石橋のこと殺せねえだろ」

「いいじゃない。できれば殺したくないし。あのね、クリフォードさんが言っていた通り、石橋も人間なんだよ。たしかに化け物みたいだけど、それでも人間なの。小夜子のこと大事にしていたし、人間の情は残っているよ。それより土屋が狂ってきているように見えるよ。ていうか、石橋に似てきている気がするの。気のせいかな。もうちょっと人情を持とうよ。殺すなんて言わないで……」

「人情？そんなもの石橋と一緒に地獄に行ってしまう。いいか……」

「土屋うるさい」

クリフォードが土屋の後ろに現れて、どこかに連れて行った。その前に壊れたドアを杖で叩いて直してくれた。

「私たちも寝ましょう」

フローラの提案に私たちは賛成し、二人は出て行った。

私はドアに鍵をかけるとシャワーを浴び、ふかふかのベットにもぐりこんだ。

しばらくうとうとした後、こてつと眠りに落ちる。

私はその晩、夢を見た。

あの夜の、夢を。土屋が小夜子を殺し、同じ手段で石橋が加奈を殺した。殺して二人は喜んでいる。殺して有頂天になり、仲間を殺されて悔やみ、復讐に駆られ、殺してやると決意する。

なんや変わらない。

殺す目的は違っても、殺しは殺しだ。それに殺したときの反応は二人はほぼ一緒だ。

私もそんな風になるのかな。殺すことって楽しいのかな。

ひよつとして、人情がなくなってきたのは……私の方なんじゃないのかな。

翌朝目を開いたとき、私の中の何かが変わっていた。起きた瞬間、胸に激痛が走った。

第四話：試験

朝、フローラとフィオナが私の部屋に来てくれた。

朝食をとる広間まで一緒に行った。そこには大勢の能力者が集合していた。大人ばかりで子供は少ない。昨日のがらんとした広間は、にぎやかになっていた。

テーブルは料理で埋め尽くされていて、私たちは昨日のそれぞれの席に座った。見たことがない料理にはしゃいで、私は手近にある料理を片っ端から食べまくった。お腹がいっぱいになるころ、ライナー、クリフォードがやってきた。ライナーはまだ髪の毛をセットしていなくて、ぺしゃんとしているし、クリフォードの髪型には寝癖がついていた。クリフォードたちに元気に挨拶すると、二人は返してくれた。クリフォードが「よく食べるんだね」と笑って言うてくれたとき、私はなんだか嬉しくなった。

しかし土屋がないことに気がつき、私は訊いてみた。

「ねえ、土屋は？」

「土屋なら練習場にいるよ」

「ご飯は？」

「大勢で食べるのなんてうるさくて鼓膜が切れるから一人で食べる、だって」

嫌な男だ。

「そっか……。いつもは違ったんだけど……。クリフォードさんはいつも皆で食べてるんだよね？」

「うん。あ、俺のことは気軽にクリフォード、て呼んでくれていいから」

「じゃあ私は幸乃でいいよ」

「じゃあ幸乃、朝ごはんを食べ終わったら土屋がいる練習場に行つて、実力テストをするから用意しといて」

「うん」

私たち女子は食べ終わると、早速三階の魔術の練習場に行った。エレベーターの中で、私は試験とは具体的にどんなことをやるのか

聞いてみた。

「大したことはやらないわよ」

フローラが答えてくれた。

「私たちが繰り出す攻撃をよけたり、後は、うーん……いろいろよ」

「ふうん」

エレベーターが三階に着いた。廊下が横に広がっていて、特殊合金と見られるドアが、白い壁に等間隔に並んでいた。それぞれのドアには番号がかいてある。

私たちは三番とかかれたドアに入った。

中は体育館の二倍ぐらいの広さがある。壁は真っ白だ。隅にドアがある以外は何もない。その中心あたりに土屋がいてなにやらぶつくさ唱えながら床に並べた呪符を眺め回している。私たちに気がついた様子はない。

「あたしたちは着替えてくるわ」

フローラとフィオナは隅のドアに入っていった。私は一人、土屋の背後に近づいた。

「土屋、おはよう」

土屋は返事にもならないうめき声を発しただけだった。

「朝から元気そうだね」

私はでまかせを言った。土屋は片手を前に差し出した。すると床に並べられた呪符が浮き上がって、土屋の手のひらにきちんと集まり、土屋はそれを空中にしまいこんだ。私を見ると鼻を鳴らす。

「そうさ、元気いっぱいだよ、俺は」

私は嫌味を無視し、続けた。

「しばらくはここにすることになるから、お母さんたちに知らせなくちゃね」

「そうだな」

土屋は不機嫌に言った。

その後すぐに、部屋にライナーとクリフォードが入ってきた。ライナーの髪の毛はもうセットされている。クリフォードは相変わらずの黒いローブで、ライナーも同じく全身黒い服装だ。しかしクリフォードのようにローブとかではなく、普通の服装だった。髑髏のピアスと銀のネックレスをしている以外は土屋と似たような感じだった。

土屋はもつと不機嫌そうな顔をし、その場に座り込んだ。クリフォードは土屋に告げる。

「実力テストするよ」

「テスト？」

土屋はこの世の終わりの時間を聞いたかのように、目をむいた。

「何で試験なんかしなくちゃならない？」

「結社入会するときは誰でもテスト受けるんだよ」

土屋は「ふーん」とだけ言って、しゃがみこんだまま背を向けた。しばしして、フローラたちが戻ってきた。フローラはオレンジ色の衣装を身にまとっていた。フィオナはシルクのような白い衣装で、天使のようだ。二人ともアニメの中から出てきた魔術士と王女のようだ。

「綺麗だね！」

と二人に言うと、二人は照れたように身をもじもじさせた。

「少し魔力が強くなるのよ」

フローラが言った。私はうらやましく思った。ライナーはふんと鼻を鳴らした。

「いいねえ、十四歳エクソシストの皆様にはいいお洋服があつて」

「ライナーもあるでしょ」

フローラが言った。ライナーはますます鼻で笑った。

「あんな服、誰が着るかよ。コスプレじゃあるまいし。装飾が邪魔なんだよ。俺は俺の実力でやる」

土屋は全員そろったことを確かめるとやっと立ち上がり、のろのろよってきた。

「まずは魔力の強さを確かめるよ」

クリフォードがきびきびと呼びかけた。

「フローラが放つ炎を撥ね返して、どれだけ耐えられるかっての、やるから。限界になったら言って。まずは土屋から」

土屋はいかにも面倒くさそうな、ぶすつとした表情をした。

フローラが元気よく前に出る。フローラは魔術を使うのが好きらしい。

土屋は私たちから離れて部屋の右側の壁に行き、フローラと向き合った。フローラはいくわよ、と合図をする。

フローラは赤い杖を構え、何か呪文めいた言葉を唱えた。

フローラの前に魔法陣が現れた。赤く、直径1、5メートルほどで、私には読めない字がずらりと並んでおり、地面に垂直だ。フローラが魔法陣を杖の先で突くと、魔法陣全体から炎が噴き出した。

炎は土屋に一直線に向かっていく。ここまで熱が伝わってくる。紅蓮の炎がまぶしくて、私は目を細めた。

土屋は自分の前に呪符を一枚投げた。呪符は空中にとどまり、向かってくる炎を撥ね返し、炎は花のように左右上に広がった。呪符はこげずに緑色の光を放って、土屋を守り続ける。フローラは杖を強く握り、魔法陣をもっと強く押した。しばらくすると呪符が煙を上げ始めた。土屋はその呪符に手刀を向けた。呪符は元気を取り戻したかのように、煙を上げるのをやめた。フローラがさらに強くすると、土屋は九字を切った。すると、土屋を守っていた呪符が分身したかのように六枚に増え、すさまじい靈力を放った。ばんつ、という音を立てて炎が消え、フローラの魔法陣がはじけとび、フローラは後ろの壁に背中をついた。ライナーが、「おお、すげえすげえ」と手を叩いた。

土屋の靈力はフローラの力をはるかに上回っている。その事実には私たちは啞然とした。

フローラは悔しそうに何かいい、「次っ！」と叫んだ。クリフォードは赤いノートに何か書いて、土屋に戻ってくるように言った。土屋は呪符を消して戻ってくる。クリフォードが結果を言った。

「お前は、成人エクソシストの高レベルぐらいに強いな」

「すごい」

私は感心したが、土屋は当然だと言いつつ。生まれて間もないころから修行をさせられていたらしい土屋には、確かに当然だ。

次に私がフローラの前に出た。

フローラは、私が用意できたのを確かめると、再び炎を向かわせてきた。私はその炎に突風を当て、押し返す。炎は激しく揺らめいた。フローラがレベルを上げると突風だけでは足りなくなり、両手を前に出して水をほとばしらせた。水蒸気がじゅうつとあがって、湿気が多くなる。しばらくその状態が続く、フローラが力を込めると私はあっけなく倒れてしまった。フローラは火を消すと急いで駆け寄ってくる。

「幸乃、大丈夫？」

「うん……フローラすごいよ！強い！」

「そう？ありがとう」

フローラが照れたように笑った。

クリフォードはすぐに次の試験を言い渡す。

「次は実践のときの判断力や、反射神経を見る」

「え、じゃあ戦うの？」

「うん。幸乃はフィオナと。土屋は……」

クリフォードは戸惑うと、後回しにした。

フィオナは錬金術師だ。どんな攻撃をするのかな……？

私はさっきと同じようにフィオナと向き合った。私はいいよ、と大きく手を振る。フィオナは私が攻撃してくるのを待っているよう

なので、先に仕掛けた。

風を起こして体を浮かせ、二メートルぐらいの高さまで浮く。フィオナに両手をむけ、控えめな力で水を噴射した。手加減などいなかった。フィオナは片手を前に突き出した。一瞬水色で『Fe』という文字が書かれた魔法陣がフィオナの前に現れ、それは正方形の鉄壁に変わった。二メートル四方ぐらいか。水はそれに当たってそこらじゅうに飛び散った。鉄壁が消えると銀色の矢がまっすぐこちらに向かってきた。私は身を翻してよけ、炎の玉をいくつも放った。

「結晶化せよ」

フィオナが歌うように唱えると、なんと炎の玉はその形を保ったままカチンと固まり、地面にぼとりと落ちた。愕然としているヒマもなく、また矢が飛んでくる。私は危うくよけ、新たに攻撃を繰り返そうとしたが、卒然とストップがかかった。

なんだろう？

私は地面に降り、フィオナは私のほうに駆け寄ってきた。

「幸乃さん、反射神経が抜群ですね」

言われたら、私は照れてしまった。

「フィオナのほうがすごいよ。錬金術師ってああいう技ができるんだ。いいなあ、皆強くて」

「ありがとうございます。幸乃さんもやればできます」

私はこくつとうなずいて、二人で笑いあった。

ところで何事だろう？クリフォードたちのほうを見ると、部屋の入入り口が開いていた。

そこから数人の年上のエクソシストが顔を出していた。クリフォードが眉をひそめる。

「どうしたんですか？何か知らせることも？」

「いや。特にはないんだけどさ、邪殺屋ってどんくらいの強さなのかって」

一人の青年が答えた。クリフォードは持っていたノートを見せた。

「そこに座ってる男子が成人エクソシスト高レベルクラスくらいに強くて」

クリフォードが床に座って成人エクソシストには見向きもしない土屋を指差した。

「そっちの子は反射神経が平均の倍ぐらい高いです」

今度は私を指差した。成人エクソシストはざわついて、すごいと言ってくれた。私は「ありがとうございます」と言っただけど、土屋は相変わらず見向きもしない。それどころか気がついた気配すらない。その態度が気に入らなかつたらしい十七歳ぐらいの女子が、土屋に口答えした。

「そっちの餓鬼は礼儀を知らないようですね」

その女子はロングヘアーを後ろに払い、持っていた杖を左手に持ち替えた。ライナーが「お前のことだよ」と土屋の頭を小突き、土屋はようやく顔を上げた。成人エクソシストをじろじろ眺め、挨拶もしない。眼の仇にしているエクソシストに、土屋が礼儀をわきまえるわけがない。なので私は無理にでもそうさせようとして無理矢理立ち上がらせ、耳打った。

「目上の人なんだから、挨拶ぐらいしたほうがいいよ」

「挨拶？なんでだ？」

土屋は鼻で笑った。文句を言ったエクソシスト（アシュリーと言
うらしい）は、案の定もつと怒った。

「態度が悪いですわね。信じられませんわ。あなたのような人が
正義のために戦っているなんて」

「正義？」

土屋の顔にくだらな、と書いてある。どうやら土屋は正義のた
めに戦っているのではないようだ。自分がそうしたいから戦ってい
るだけか、しきたりだから。

アシュリーの目じりが上がった。

「なんなんですよ、その馬鹿にしたような顔は！気に入りません
わ。エクソシストを馬鹿にすることは私が許しません！」

「馬鹿になんかしてない。それに俺はこういう顔なんだ。文句なら俺の両親に言えよ」

土屋はそっぽを向いて部屋の向こう側に行ってしまった。怒ってしまったようだ。成人エクソシストも怒ってしまって、そろそろ出て行った。

取り残された私たち十四歳エクソシスト（土屋、ライナーは除く）は顔を見合わせ、ため息をついた。

第五話：亡霊？

結局試験は中途半端なまま終了してしまった。私は最後までやったのだけれど、土屋は不機嫌真つ盛りで、もう試験はやらないと言
い張ったのだ。

仕方ないので私たちは、土屋抜きで部屋を出て、一階に行った。
一階から外に出て、城の庭に行く。庭というか、草原だ。空は青々
としていて、雲ひとつない。ちなみに庭にはプールもある。

庭に出たらパラソル付きのテーブルがあつたので、私たちはそこ
に円になって座った。わたしは一番初めに謝った。

「あの、ごめんなさい……。土屋があんなに……」

「気にすんなよ。土屋はあれでいいのさ。そのほうが、からかい
があるし。冷たい奴ほどからかうと面白いんだぜ」

ライナーの言い草は、フローラがかき消した。

「土屋は態度悪すぎよ！何なのあれ！まあね、確かにアシュリー
はうざいけど、いちおう年上なのよ！」

「仕方がないよ」

クリフォードが吐息をもらした。

「ああゆう奴なんだろうね」

「だけど、だからってああなる？とつとどこからつまみ出しましょう。そしたらここは平和になるわ」

「おいおい冗談よせ。ユーモアセンスがないお前らといちゃ、俺は身がもたねえぜ」

「ライナーあんたは黙ってて。クリフォード、いい？追い出してよね」

「うーん、本人がああなら、俺がやらなくても追い出されると思うけど……」

クリフォードは肩をすくめ、頭を振った。フローラは満足げになった。

「そうよね、不快なもの」

「俺は不快になりませんが」

ライナーは食って掛かり、私も言ってみる事にした。

「あの、土屋は普段優しいんだよ……」

「でも、幸乃！」

「こっちが呼んだのに出て行けというのは、あまり感心しませんわ」

フィオナが怒ったように言った。皆は驚いたようにフィオナを見た。

「それに、幸乃さんは土屋さんがいなくなると寂しくなるのでは？」

「うん……」

「用がなくなつたから追い出すというのは失礼です。土屋さんはただなじめなだけで、しばらく経てば私たちに心を開いてくれるはずです」

「私もそう思うよ。土屋は最初、すごく嫌な奴だったもん」

私が同意すると、フローラとクリフォードは渋々だけれどうなずいてくれ、ライナーはプールで泳いでいる女子をナンパしに行った。そしてフィオナは私たちに背を向け、城に戻っていった。

私はふうとため息をつき、椅子の背もたれにもたれかかった。フローラがそんな私に首をかしげる。

「どうしたの？幸乃」

「……石橋もどこにいるか分からないし、土屋もあんなんだし。ちよつと私、疲れちゃって……」

「あら。石橋の居場所なら大体分かっているわよ」

え？私は息を呑む。フローラは四つ折にした紙を取り出し、テーブルに広げた。新聞の切抜きだ。右下にはモノクロの写真が貼り付けてある。フローラは記事の内容を説明した。

「ドイツのある工場が爆破されたの。幸いその日は休日だったから死者は出なかったけど、工場は大きいから建て直すのに莫大な費用がかかるって」

「石橋だつて分かるの？」

「ええ。警察の特殊能力者がいて、その人がそう言っていたわ。黒い呪符が落ちていたって。それと、犬の足跡も見つかったのよ。恐らく犬神使いだと……」

「犬神使い！」

私は悲鳴のような声を上げ、クリフォードとフローラがびっくりして飛び上がった。

犬神使い…… 犬神……

頭がくらくらして、私はテーブルに突っ伏した。

クリフォードの心配そうな声がするが、何を言っているのか分からない。

犬神使いといったら一人しか思いつかない。

優しい笑みと悪魔のような笑みを持ち、ポニーテールの髪。肌が白くていつもダックスの姿に変化していた。

宮村小夜子。

目の前が真っ暗になった気がした。

まさか。生きているはずがない。だって土屋が小夜子の頸動脈を切って殺したはず。しかも、目の前で。

エクソシストだって言っていたではないか。死体は本物だって。

ぞくぞくしてきた。まさか、亡霊……？

土屋に言わなくっちゃ。

私は勢いよく立ち上がった。その拍子にひっくり返った椅子には目もくれず、私は土屋がいるはずの練習場に走り出した。

練習場には土屋の姿はなかった。私は亡霊が怖くて、すでに泣きじゃくっていた。小夜子の死ぬ場面が頭の中で何回も繰り返され、そのたびに私はしゃくりあげた。

土屋は広間にいて、昼食を無心に食べているところだった。私は土屋がいたことに感動して、土屋の背中に突っ込んで行った。おかげで土屋は飲んでいた水を噴出しそうになった。

すでに昼食の席にっていたクリフォードたちは驚いたように目を丸くした。

「ねえ土屋！土屋ってば！」

私は絶叫して土屋の背中を力任せに叩いた。土屋は「うるせえよ」と言い、私を払いのけた。

「なんだよ。ていうか、一回呼べば分かるから」

「土屋！あのね、小夜子は死んだんだよね？土屋が殺したんだよね？」

「当然だろう。忘れたのか」

「じゃああの犬神は何？何なの？」

「どの？」

私はあわあわと説明し、何回も舌をかんでむせび泣いた。泣いてくしゃくしゃになった私の顔に土屋はペーパーを押し付け、驚愕でしばらく何もいえなくなった。

やがて腕を組み、こう言った。

「亡霊なんていない」

「じゃああの犬神はなんなの！」

私は興奮したまま言った。

「石橋が新しい仲間を見つけたのかもしれない。犬神使いの」

「石橋の仲間になる奴なんて、いるわけないよ!」

「宮村はなっただろうが。俺には新しい仲間ができたとしか考えられないね」

「でも石橋はドイツにいるのよ。犬神使いは日本魔術士だし、日本にしかないよ」

「ひょっとしたらただの犬かもな」

などとのんきなことを言うので私はふざけるなど怒鳴り散らし、結社の人から「うるさい!」といわれ、私は身をすくめた。

「犬神使いつてのはあくまで推測」

フローラが割り込んできた。

「犬神使いじゃなくても犬は出せるわ。ウィッチとか……ネクロマンサーとか」

私はライナーを見た。ライナーはむしゃむしゃとシェパードパイを食べている。私はたちの悪いジョークだと勝手に思った。

フローラは続ける。

「ウィッチは悪魔使いのことよ。ウィッチが犬の形の悪魔を召喚したのかも」

「ネクロマンサーの場合は？」

「犬の死体を召喚するわ」

「犬神使いと似ているんだね」

「ううん。犬神使いの出した犬の霊は体が透き通っているでしょう？でもネクロマンサーは違うの。動物霊じゃなくて死体そのものを召喚するのよ」

私はぞっとしてかぶりを振ってしまった。

フローラはテーブルの下の鞆からノートパソコンを取り出して、私の横に座った。電源を入れて、私と土屋に画面を見せながら猛然とキーボードを叩く。そして何かのファイルを開いた。

女子の顔写真が画面の右半分を占領していて、その横にはその女子のデータが書いてある。通訳の呪符が作動しているので、英語でも読める。

女子は美人で、軽くウェーブのかかったロングヘアーをしていた。

「ドイツに住んでいるウィッチとネクロマンサーの情報を今から見せるわね。この子はクリスティーナ・コルネリウス。この子は私たちに二回、捕まっているわ。犯罪者の男子を匿って、犯人隠匿の罪で逮捕したわ。今はもう釈放されている。ここ三年、動きはないわ」

「なんで匿ったの？」

「犯罪者の男好きなのよ」

フローラが皮肉った。

「それで、他のウィッチは……犯歴無しよ。犯歴のないウィッチ

にも会ったことはあるけれど、犯罪を犯すような子じゃなかったわ。ちよつと高慢ちきだったけど、石橋とかいうクズ野郎の味方になる可能性はないわね。ネクロマンサーは……フランク・カッシラーとエドガー・アルクインが犯歴有り」

フローラが二人の男子のデータを見せながら説明した。

「カッシラーは路上に死体を召喚し、人々を驚かせて交通事故を起こした罪で一年前に捕まえたわ。アルクインは死人を使って殺人を起こし、三年前に逮捕。二人はまだここに捕まっているわ。コイツラには無理。あとこれ見てくれない？」

フローラが『Enter』を一回中指で叩いた。

画面が真っ黒になり、画面の中心に赤い文字が現れた。

『パスワードを入力してください』

と書いてある。しかし入力するところなどない。フローラが画面を軽く杖で叩くと文字が消え、あるサイトが現れた。

「パスワードは霊力なのよ。特殊能力者であることを証明できれば誰でも入れるサイトよ」

すごい。そんなことができるんだ……。

そのサイトは、黒のバックに白い文字でずらずら書かれていた。
見出しはこうだ。

『特殊能力犯罪者の情報募集中 †201X年度特殊能力犯罪者の
神決定戦を行いますので投票よろしくお願いします！』

「なにこれ！」

私は目をむいた。

「石橋ファンサイト」

フローラのそっけない言葉に土屋が笑いそうにひくひくした。

私は先を読む。特殊能力犯罪の情報がたくさん投稿されていた。
その中には日本語で書かれた書き込みがあった。『こんにちは！日
本人です！この間赤月市つてこの住人が大量虐殺されました。表
向きではハリケーンが来たってことになってますが、調べてみると
違うみたいです。情報 』

私は『情報』を追って、そこを見てみた。そこにはしっかりと石橋の情報が書かれていた。小夜子のこともだ。

その書き込みのおかげで、石橋は神になった。個人情報、住んでいた市までもが書かれている。そんなこと書いていいのかと心配する書き込みもあるが、特殊能力者しか見れないので大丈夫だろう。大丈夫でなかったとしても、私の知ったことではない。

石橋は様付けされ、勝手に神だとあがめられた。サイトの管理人は石橋の大ファンなようで、愛しているだの探しに行くだの、めっちゃめっちゃに書いている。それにあおられ、他の人の書き込みもめっちゃめっちゃになった。

土屋はもう笑うしかないという感じで笑った。

「このサイトの管理人は？」

とフローラに尋ねる。

「さあ、誰かしら。調べてみるわね」

フローラはノートパソコンを抱えて出て行った。

私たちは不安になって、お互い顔を見合わせた。

第六話：結社入会

その日の夜。フロアにサイトの管理人はクリスティーナだ、と報告された。クリスティーナ・コルネリウスは監視の対象になった。

夜十一時半頃、私は二階にあるという十四歳エクソシストの部屋に向かった。特に用があるわけではないが、行ってみたくなったのだ。

二階はまるでビルの中の仕事場のようだった。廊下の壁にはいくつものドアがついていて、ドアには部署の名前が書いてある。

ようやく見つけた私はそのドアを開いてみた。

クリフォードしかいなかった。書類が床に散らばった狭いオフィスには事務机が四つ並んでいて、クリフォードはそんな部屋の中にいた。肘掛け椅子に腰掛け、パソコンとにらみ合っている。

「クリフォード」

私が呼ぶとクリフォードが私を見てくれた。ちょっとときどきしていた。

「幸乃？」

クリフォードは驚いたように目を大きくする。

「どうしたの？」

「なんとなくここに来てみたかったの。何やっているの？」

「ちょっとデータの整理をしていたんだ」

クリフォードはパソコンの電源を落とす。

「ちょうど終わったところ。そろそろ寝ようかと思ってたんだ」

「そっか」

私はオフィスの窓に近づいた。満天の星空だ。とても綺麗だ。

「星、綺麗だね」

私はそつとつぶやいた。星？とクリフォードが首をかしげ、空を見上げる。

「そういえば最近見てなかった」

「どうして？」

「ずっとここにいるから慣れちゃったんだ」

「何歳の時から？」

「3歳のときだよ。親がエクソシストだったから、俺も」

「へえ！ご両親は今でもここに？」

クリフォードは頭を振る。

「俺が九歳のときに、パイロキネシストに殺されちゃったんだ」

私は息を呑み、うつむく。

「じめん……」

「いいよ。気にしなくて」

クリフォードは優しく笑いかけてくれた。

「じゃあそろそろ行こうか？」

「そうだね」

私とクリフォードは廊下に出た。廊下にはもう、ほとんど人がいなかった。私たちは二人で廊下を歩いた。

すると、たった今私が通り過ぎた右の通路から声が聞こえることに気がついた。私は立ち止まる。クリフォードも止まって私を見た。

「どうかした？」

「ううん。まだ人がいたんだなって。声がしたの」

「本当？」

私たちは数歩下がって右の通路を覗き込んだ。右の通路の突き当たりのところに、誰かがいた。設置された公衆電話で誰かと話している。

ライナーだ。茶髪をせわしなくかきあげながら誰かと話している。私たちは思わず耳を澄ました。

「……うん。分かった。でもさ、ちょっと待ってくれよ。あの野郎は……ちつ、分かったよ、代われ。ああ、俺だ。久しぶりじゃねえか……まあまあ、そんな急くなって。それよりフィオナだ……そう、そいつよ。錬金術師で超美人の。哀れな女だよ……そう、分かったな……え？なんだよそれ、ふざけんな、てめえっ……」

「何してるんだ？」

クリフォードが唐突に尖った声を出し、私とライナーは飛び上がった。ライナーは叩きつけるように受話器を置いた。私たちを確認すると肩を落とす。

「なんだよてめえかよアンソニー……お、幸乃ちゃんも。なんだ、ひよっとして今夜お楽しみかあ？」

「今の電話の相手は？」

クリフォードがばしりと言った。ライナーはいつものようにのんきだ。

「親父だよ。あのタヌキジジイ。いくらお前の頭の回転が悪くても、そんぐれーは分かるよな？」

「そう。早く寝ろ」

「はいはい。お休み幸乃ちゃん」

「お休み〜！」

私は元気よく言った。

ライナーが去ると、あ、そうそう、とクリフォードが私を見た。

「ライナーのお父さんがここの社長だって事、話したっけ？」

「え？そなの？」

「うん。ラインハルト・クラウゼヴィッツさんだよ。ライナーは次期社長なんだ」

「へえ。すごい」

ライナーが次期社長か……なんだかイメージ湧かないな。

そう思いながら私たちはそれぞれの部屋に戻った。

あの日から一週間がたった。私はエクソシストたちとともに仲良くなっていた。毎日が楽しい。

だけど土屋は決して馴染まなかった。日が経つごとにどんどん暗いオーラを発するようになり、些細なことで怒鳴り散らし、その拳句に怒ったクリフォードが十四歳エクソシストの部屋を掃除するよ
うに命じた。ライナーは相変わらずのんきで四六時中土屋に付きま

とい、あるいは女子をナンパした。ライナーが女子をナンパしている間は、フィオナが土屋を励まそうと頑張っていた。その成果は出たようで、土屋は多少フィオナと口をきくようになっていた。

私たちは今、ここの社長であるラインハルト・クラウゼヴィッツさんの部屋にいた。二階の一番奥の部屋で、他の部屋よりはるかに広い。赤いじゅうたんに、ピカピカに磨き上げられた事務机。社長はその机の肘掛け椅子にゆったり腰掛けていた。

四十代半ばくらいで、髪の色は薄い茶色。白髪が混じっているが、髪はしっかりオールバックにセットされている。一目見て上等な仕立てだと分かるスーツをしっかりと着ていた。優しそうな顔立ちで、ライナーとは似ていなかった。

「失礼します」

私、フローラ、フィオナ、クリフォードが声をそろえていった。土屋は無言で、ライナーも何も言わなかった。

「この二人が結社入会希望者です」

クリフォードが私と土屋を順番に指差した。社長は私たちを見て、机の上で軽く指先を組んだ。指には恐らく純金の指輪がはめられている。

「君たちが邪殺屋かい？」

ラインハルト社長がにこやかに言った。私は「はい」と答える。

「高橋幸乃といいます。それでこっちは……」

私は社長をじろじろ眺めている土屋を一瞥した。

「土屋弘です」

「すみません社長。こいつ礼儀を知らないんです」

フローラが言い捨てた。社長は笑いながらまあまあ、となだめ、私たちを面会客用のソファアに誘った。私たちが純白のソファアに座ると、社長は向かいのソファアに座った。

社長は秘書と見られる眼鏡をかけた女性に紅茶を用意させると、私たちにクッキーまで勧めてくれた。社長は話を進める。

「君たちの事はクリフォードから聞いていたよ。土屋弘君、君は

かなりの実力の持ち主だそうじゃないか。陰陽師、だったかな」

「はい」

私が代わりに答えた。土屋が返事をするわけがない。社長は紅茶を一杯すすると、気にする素振りを見せずにさらに話を進行させる。

「まず、入会するにはこの規則に従ってもらう必要がある。君たち二人には十四歳エクソシストとともに行動してもらおう。ここでは単独行動は許されない。外に一人で出てはいけないのだよ。内輪もめもできるだけしないように。特殊な場合以外、いくら犯罪者だからといって殺してはならない。これが最も重要な規則だ。人は殺さないこと」

社長の眼光が代わり、土屋を一瞬見た。土屋の反応はなかった。

「たとえ殺人者でも生きる権利はあるからな。日本では殺していたようだが、こちらではそうはいかん」

ライナーが盛大に鼻を鳴らした。社長は無視した。ライナーと社長は仲が悪いようだ。

「いいかね？」

「はい」

私はしっかりうなずいた。社長は紅茶をすするとカップをソーサーに置き、脇にあった書類と万年筆を私たちに差し出した。

「それでは契約書にサインを」

私は渡された書類の一枚を自分の前にきちんと置き、さらっと書いた。しかし土屋は万年筆を取ろうとしない。私は土屋が気がついていないのかと思い、腕を掴んで揺さぶった。

「ねえ、書いてよ」

「一度入会したら出られないのかよ」

土屋が吐き捨てるように言った。クリフォードはすかさず土屋を睨む。

「タメ口を使うな。礼儀を……」

「もし出られないのなら断る」

土屋が社長を見据えた。あまりの威圧感に社長はひるんだ。目つきが悪いせいだろう。

クリフォードがいきりたち、立ち上がった。

「おい、もしそれ以上その口のきき方をしたら……」

「かまわんよ、クリフォード」

「しかし……!」

「いいんだ、座りなさい」

クリフォードは渋々座った。社長が私たちに紅茶を飲むように言うので、ライナーと土屋以外が飲んだ。とてもおいしい紅茶だ。今度なんのお茶か聞いてみよう。

「それで……一回入会しても抜けられるが、それなりの理由が必要だ」

土屋は黙りこくったまま万年筆を手に取り、汚い字でサインをした。勉強をしていないので字が下手なのは当然というものだ。

社長の部屋から出たあとライナーは珍しく私たちについてきて、フィオナは不機嫌な土屋についていった。

クリフォードは憤慨しながら部屋に戻り、フローラも同じように怒っていた。

「ほんと嫌な奴！最低だわ」

フローラは広間のテーブルの桃を引つつかみ、かぶりついた。

「おいおい、そんなこというなよ」

ライナーはリンゴを手に取り、馴れ馴れしく私の肩に触れた。

「あんな成金親父に頭にくるのは当たり前よ」

「ライナー、口を慎みなさい」

フローラが私の肩からライナーの手を振り払った。

ライナーは口をへの字に曲げた。なにかいちゃもんを言おうとしたが、ふと何かを思い出したのか、いちゃもんを飲み込んだ。

髑髏のピアスを引つ張りながら私たちに語りかける。

「そうそう、あの成金ジジイが言っていたけど、今度クリスティーナおじょーさまの家を家宅搜索するって。俺ら十四歳エクソシストが」

「え？どうして？」

「クリスティーナちゃんの家の近辺で石橋の霊力らしきものを感じたらしい。見張っていたエクソシストから連絡が入ったんだとよ」

「石橋かな……？」

「さーな。だったらいいよな。あの小悪魔系美人とできちゃってるかも。あー！羨ましいぜ！」

「それはないと思うよ。石橋はいかれてるもん」

「そんなはつきりイカレてる、なんていっちゃかわいそうだろ。幸乃ちゃんは冷たいねえ」

「でも、本当だよ？」

「そうよ、その通り」

フローラがきっぱり言った。

「あいつはイカレてるわ。はやく捕まえなくちゃ。あたし、ちょっと家宅搜索の計画を立ててくるわ」

フローラが行ってしまうと、ライナーはリングゴにかじりついた。しばらく二人で談笑し、気がつけばもう夕方だった。

ライナーが不意にあたりを確認し、小声で言ってきた。

「幸乃ちゃん、アンソニー幸乃ちゃんに気があるっぽいぞ」

「え！」

私は小さな悲鳴を上げ、赤面した。

「そ、そんなこと……」

「だから気をつけたほうがいいぜ。なっ！」

ライナーが私の肩をぽんと叩き、席を立った。

私はしばらく一人で赤面したままもじもじしていた。

これって、恋なのかな……？ 恋愛について疎い私には分からず、ただ戸惑っていた。

第七話：家宅搜索

私の服は青いチャイナ系の服だった。

アジアといったらチャイナ服、と結社の衣装管理部の女性がきっぱり言い張るのでこれになったのだ。一方で土屋は、服は借りたものの、前と大して変わらなかった。衣装監理部の女性たちは他の服を推奨したが、土屋はシカトした。なんだかんだ言っても、土屋は結社内でももてている。

今日はクリスティナ・コルネリウスの家に家宅搜索に行くのだ。久しぶりの外に出られて嬉しい。私は飛び上がって喜んだ。

私たちは朝一番の飛行機に乗って、ドイツにあるクリスティナの家に向かった。空間と空間をつなぐこともできるのだがかなりの魔力が必要になるので、飛行機で行くこととなったのだ。

あの日から三日。私とクリフォードはもつと仲良くなっていた。

土屋は昨日まではふさぎこんでいたが、今日になると苛ついていないのか、せわしくなくうろちょろしていた。

ドイツに到着すると、私たちはケルンのあたりで軽食をとり、バ

スである山の近くまで行つた。

山のふもとに着くと、なんとも不気味な山だということが判明した。

山の奥に続く山道を歩くと上からカラスのような鳴き声がして、あたりは薄暗くなった。倒木や岩は苔むしていて、山頂に近づくとつれてあたりは深い霧に包まれていった。寒いし、怖い。１メートル先は見えない。

ライナーだけは口笛を吹き、さかんにフィオナをナンパしようとしていたが、横面を張り飛ばされて渋々土屋のほうによって行つた。

クリスティーナはこんな山奥に住んでいるのだろうか？悪魔使いにはふさわしいけど、ふさわしすぎて逆に恐ろしい。

20分ほど歩くとようやく西洋風の豪邸が見えてきた。

黒い鉄の巨大な門扉の奥にひっそりとそびえていて、上のほうは厚い霧に覆われていて見えない。

クリフォードが門扉の脇のインターフォンを鳴らし、それに向かって何かを話した。クリフォードが話を終えると、門扉がひとりで

に内側に開いた。

私たちは顔を見合わせ、入る前にあたりを確認した。

「石橋の霊力の気配は……しないね……」

私はぼそぼそ言った。

「クリスティーナ自身が悪魔使いだから、石橋の霊力と嗅ぎ分けることは難しいと思うよ。悪魔のにおいに紛れちゃって」

クリフォードは解説した。

私はこくと生唾を飲み込み、一步、クリスティーナの家 of 敷地に入った。

すると、あたりの霧が晴れた。そんなもの最初からなかったかの如く、陽光が上から降り注いでくる。不気味に見えた豪邸は、美しい。そして膨大な敷地の庭。庭には果樹園や噴水があり、季節に関わらず花がいつぱい咲いていた。鳥のさえずりが聞こえてくる。

後ろを振り返ると、敷地の外は深い霧に覆われていた。あの霧は

魔法なのだ。

私たちはどやどやと豪邸に向かった。豪邸の正面の観音扉が開け放たれ、一人の少女が登場した。

長い黒衣をはおり、その下の服は黒いミニスカート。右の太ももあたりにはあざのような痕がある。恐らく悪魔の紋章だろう。少女の栗色のロングヘアには軽くウェーブがかかっていて、確かに美人だった。しかし目つきは人を見下している。彼女が、クリスティーナ・コルネリウスだ。

「エクソシストの皆さん、久しぶりねえ。元気だった？」

嫌味つたらしく手を振ってみせる。

「それで、家宅搜索、ですってね？なぜあたしの家が家宅搜索されなくちゃならないのかしら？」

「あんたのブログ、見たわよ」

フローラが強気に言い放った。クリスティーナの目が、くると動いてフローラを捕らえる。

「あたしのブログ、ですって？あら、あなたも特殊能力者の王者が誰なのか、気になるのね？」

「違うわよ。石橋健のことが書いてあったから見ていただけ」

「石橋健？」

「そうよ。あんた、大ファンなんでしょ」

フローラがすごんだ。クリスティーナは涼しい顔で肯定した。

「そうよ。あなたも知っているだろうけど、あたしはああいうタイプが好きなの。あたしは彼のことが、大好き、よ」

クリスティーナが『大好き』の部分をえらく強調した。

「だって素敵じゃない。あの歳で、あんなに人を殺しているなんて。立派な勇気じゃない？まあ、あなたたちには分からないでしょうね。彼の良さが」

「その通りよ。全く分からない」

フロアがきっぱり言った。クリスティーナは背を向けると家の中に引っ込んでいく。

「いくらでも調べればいいわ。残念なことにあたしは彼と会ったこともないのよ」

「お邪魔しまーす……」

そういったのは私だけだった。

床には赤いじゅうたんが敷かれ、玄関ホールの壁などは大理石でできていた。正面には階段があり、壁に沿って上階へと続いていた。見たところ、一階にも二階にも大量のドアがあり、創作するのに苦勞しそうだ。

クリスティーナはもう姿が見えない。

私たちは広い玄関ホールの真ん中に、なんとなく円になった。

「ここは三階まであるね。よし、二人一組で、一組一階を搜索しよ」

クリフォードは真っ先に土屋を見た。

「土屋、お前は俺とだ」

土屋はかなり落ち着きがなかったが、その言葉で動きを止めた。

「は。何でだよ」

「自分勝手にされると困るからだよ。そして、フィオナは幸乃と。ライナーはフローラと組め」

「分かりましたわ」

フィオナが私の横についた。フィオナからは甘いいい香りがした。

「私たちは三階を搜索します」

「よし。いいだろう。俺らは二階。ライナーたちはこのフロアを頼む」

「了解。まかせといて」

フローラが親指を突き出した。

私とフィオナはそそくさと三階に向かった。階段を上ると左右に廊下が伸びていて、廊下の端から端までかなりの距離がある。等間隔で、壁の両側にドアがついていた。階段を上った正面の部屋だけはドアが開いていて、中から上品そうな香りがした。ちょこつと覗いてみると、豪華なベットやタンスがあり、とにかく派手な部屋だった。クリスティーナの部屋だろう。

私たちは一番右側の部屋から搜索することにした。

どうやらクリスティーナの部屋以外のほとんどが、客用の寝室のようだった。一人暮らしらしい。白いシーツのベットと机、椅子、タンスが置いてあるだけの部屋だ。クリスティーナの部屋より狭い。私とフィオナはベットの下やタンスの中、窓の外などを一つずつ順番に確認していった。この階には物置や何もない部屋なども混じっていた。物置には衣装ダンスや得体の知れない盤、薬ビンが入ったタンスがあるだけだった。

結局何も見つからず、すぐに終わってしまった。私たちは仕方なく、クリフォードと土屋がいる二階へ降りていった。土屋とクリフォードはクリスティーナのパソコンを調べている最中だった。私た

ちも手伝つか訊いたが、休んでいると言われた。

私は一人、豪邸の中をうろつく。クリスティーナは相変わらず見当たらない。

私はさっきの物置に行つて、盤とかを観察して暇をつぶすことにした。でもそれも飽きてきて、私は衣装ダンスの中をなんとなく開いてドレスなどを観察した。

ふと気がついた。衣装ダンスの中から、かすかだけど風が吹き込んでくる。

なんだろう？

私は衣装ダンスの中にもぐりこんで、奥の壁を覗き込んでみた。すると、奥の壁の右側のところに取っ手のような丸い何かが飛び出していた。

心臓が早鐘のように鳴り始めた。取っ手を掴んでみる。回す。

そして、奥の壁を両手を使ってそつと押し開けてみた。開いた。

奥は真つ暗で何も見えない。

クリフォードたちを呼んできたほうがいいかな・・・・・・・・。

それでも好奇心が強くて私はその中に入った。

持って来た懐中電灯で足元、左右の壁を照らす。壁はのっぺりとした白い壁で、床は赤いじゅうたん。どうしてこの家のじゅうたんは赤なのだろう？まあいい。私はともかく、衣装ダンスの奥壁のドアを開けっ放しにしたまま、懐中電灯を握り締め、奥に向かって歩いた。そのうち、通路が左右に分かれる。私は右に進んだ。突き当たりにドアがあつたからだ。

どうしてこんなところにドアがあるのだろうか？ここは隠し通路なのか？それともただの、隠しではない通路か？どちらでもいい。どうせ調べるのだから。

私はそのドアの前に立った。フィオナと探した部屋のドアと一緒に、木製のドア。

中から何かの音が聞こえる。何の音だろう？

私は無謀にも、ドアノブを掴んでゆっくり回していた。

第八話：家宅搜索：2

そこは部屋だった。客室用の部屋。なんてことはない、ただの部屋だ。

そう思ったかったがそうはいかなかった。

部屋の中にはやっぱり人がいた。ベットに寝転んで口笛を吹き、黒い札のようなものを眺め回している。

予感があった。あけなければ良かったと今頃後悔した。ベットに寝転がっていたのは私の大親友を殺した、石橋健だった。私のことにはとくに気がついていたらしい。呪符から目をそらし、大して驚きもせず私を眺め回している。

「
石橋っ！」

私は蒼白になって叫んだ。

「っ、ここだなにしているの！」

勿論隠れていたのだろう。でも私の思考はそこまで考えなかった。

石橋はおもむろに起き上がった。あの夜と何も変わっていない。服の汚れが綺麗になっっている以外は、何一つ。石橋は平然と私をじろじろ観察した。殺そうともしない。

とたんに怒りがこみ上げた。加奈を殺した。私の大親友の加奈を！感情が大波のように押し寄せてきて、私は石橋に掴みかかろうとした。でも、結界で1m以内には入れなかった。加奈を殺して、他の人もたくさん殺した石橋には、届きはしなかった。

「とつとと失せな」

無表情にそういったただけだった。

「とつとと失せ……え？」

私は拍子抜けした。殺されると思った。私は感情を押し殺して、少しずつ後退した。

「どうして？殺そうとしないの？」

「ここで殺しちまったら、コルネリウスに迷惑がかかる。だから

今日は見逃す。お前ら、家宅搜索に来てるんだろ？だったらその中のリーダーにでも言いつければいいさ」

「じゃ、じゃあ皆を連れてきてもいいの？」

「ご自由に。そのときには俺は消えている。それどころか、この部屋もな」

「追いかけるかもしれないじゃない。クリフォードって人がいるんだけど、その人は土屋ぐらいに強いんだよ」

「はいはい、土屋。土屋ねえ」

石橋は何が嬉しいのやら、ニコニコした。しかし私にはおぞましいとしか見えない。

「俺は土屋より強くなったんだよ。邪殺屋の女」

私はしばらくわけが分からず、石橋を見つめていた。今のはハッタリか？

「土屋が宮村を殺したおかげで、俺は強くなったのさ。言ってる

意味、分かるか？」

「おかげ？」

私は目をひんむいた。

「な、何てこと言うのよ！ひどいよ！小夜子が死んでもなんとも思わなかったの？あんたの親友のいとなんでしょ？どうしてそんなこと……！」

「そこら辺はお前の想像に任せる」

石橋は無表情に静かに言い、唐突に持っていた呪符を私に投げつけた。

悲鳴を上げる暇はなかった。

私は呪符に当たって意識を失ってしまった。

私は覚醒した。飛び跳ねるようにして飛び起きると誰かと頭がぶつかり、痛さのあまり悲鳴を上げた。どうやらここは、客用の寝室の一つのようだ。

「ゆ、幸乃さん。大丈夫ですか？」

目の前にフィオナがいた。フィオナは私を覗き込んでいたらしい。赤くなった額を押さえ、なみだ目で私を見ている。

私はフィオナに謝ってから、訊ねた。

「わ、私、どうしていたの……？」

「幸乃は物置で倒れていたんだよ」

フィオナの肩越しにクリフォードが現れる。心配そうな表情だ。

「ダンスにのっかった盤が、幸乃の上に落下したみたいだよ。ライナーが発見したんだ」

「そ、そうなの……」

このとき、私はやっと、はっとした。そうだ。石橋だ。あいつはどこへ行ったんだろう？

私はあわてながらも二人に告げる。

「い、石橋。石橋が居たんだよ！」

「へ？」

「だからね！ たんすの中に隠し廊下があって、その中の部屋の中に石橋がいたの！」

「それは本当？」

いきなり私の脇にクリスティーナが現れた。

「あたしの家に。彼が？」

クリスティーナの顔に、薔薇の花のような可憐な笑みが浮かんだ。

「どこにいたの？ぜひとも会いたいわ」

私はクリスティーナを無視した。必死にフィオナたちに訴える。

「居たんだよ！本当に……っ！」

「嘘付けよ。夢でも見たんだろ」

私の目が、寝室の入り口にとんだ。土屋がいた。落胆そのものの表情をし、やつれたように見える。

私は土屋に食って掛かった。

「本当にいたんだもん！話もしたんだよ！」

「どんなことを話したんだよ」

「石橋が、土屋より強くなったって言うてた。土屋のおかげで。」

あとね、小夜子が死んで嬉しいようなことを……」

「なおさら嘘だな」

土屋は断言した。

「俺は石橋を鍛えるようなマネはしていない。それに、奴がそんな短期間で俺より強くなれるわけがない。少なくとも、4年はかかるな。いや、もっとだ」

「……そんな……」

「それに石橋は、宮村が死んだとき、悲しんでいたじゃないか」

土屋は今頃意外そうな顔をした。

「ともかく、奴は宮村が死んだせいですますイカレちまったし

……」

「今までと何が違うの」

「今までとは破壊する規模が違う。だろ？日本ではデパートとかだったのに、今は巨大な工場とか高層ビルとか……」

「……うん。でも、石橋はいたよ！絶対いたもん！来て見てみてよ！」

私は皆をタンスまで案内し、いろいろ調べたが、結局石橋がいたという痕跡は跡形もなく消えていた。それどころか、隠し廊下さえも見つからなかった。

「しょうがないよ。気にすんな」

ライナーが言った。フローラも肩をすくめる。

「こればかりは何とも言えないわね」

「そういうこともありますわ。幸乃さん。気にしないでください」

フィオナもそういつてくれた。クリフォードは肩をすぼめ、何も言わなかった。

なんだか皆との間に隔たりができてしまった気がして、惨めな気

分になった。

でも。

あれは幻覚じゃない。確かにいたのだ。私は拳を握り締める。

クリステイーナ・コルネリウスは間違いなく石橋健を養っている。
クリステイーナを見やると、平然と私たちを眺め回していた。

私たちは帰るしかなかった。クリステイーナは門扉のところまで
嫌味ったらしく手を振りながら見送ってくれた。

私たちはこのとき、化け物に尾行されていることに全く気がつか
なかった。

第九話：遭遇

私たちはドイツに一泊することとなった。ごく普通のホテルで、私は一人部屋を取った。クリフォードとライナー。フィオナとフローラ。この二組はそれぞれ一緒の部屋だ。土屋は当然という態度で一人部屋を選んだ。

私はなんだか惨めな気持ちでベッドの上に座り込み、じっとしていた。

加奈……。

こういうとき、加奈がいてくれたら、と強く思う。加奈がいてくれたら、気にしなくても大丈夫、と元気よく言ってくれるのに。

胸が締め付けられる思いだった。

どうして石橋はいなくなったんだろう？ やっぱり夢だったのかな。

私は窓に近づき、星空を見上げた。

ふと、ドアがノックされていることに気がついた。

「どつぞ」

私はドアのほうを振り返る。

ドアが開くとそこにはエクソシストの皆が立っていた。私は驚いて、皆に近づいた。

「どうしたの？」

「幸乃、なんか元気なかったから、皆で今夜は遊ばない？トランプとかしてさ」

フローラが照れくさそうに言った。私はしばらく目を瞬き、頬が緩んでくるのを感じた。

にこつと笑って「勿論！」とうなずく。皆を中に招き入れる。私はこのとき初めて悟った。さっきのことくらいでは、友情はびくともしないことを。

ライナーは相変わらずくだらないジョークなどを飛ばしていたが、それでも私たちは馬鹿みたいに大笑いした。私たちはトランプとか

で遊びまくり、明け方近くまで遊ぶと計画した。エクソシストの皆は土屋の部屋のドア越しから土屋を呼んだらしいが、返事がなかったらしい。多分、シカトしたのだろう。

しかしそれはシカトではなかったという事実を知るのは、次の日のことだった。

土屋弘はホテルの自室でノートパソコンを操作していた。薄暗い部屋にはキーボードを叩く音だけが響き、時折止まってはまた再開される。

土屋は石橋健の学校の生徒の名簿を見ていた。病気が治り、すっかり元気になったという両親が、メールと一緒に送ってきたのだ。両親は今、九州のあたりで、特殊能力を使って悪さをする暴力団組長を追っているらしい。土屋は両親の病気が治ったことに安堵しながら仕事にはげんでいた。

コンピュータに記録された名簿には、当然石橋健のものもあった。今とは違い、画面上の石橋は明るい顔をしていた。表情こそないがそれぐらいいは分かる。今は暗く目つきが悪い。同じ人間とは思えないほどだ。

しばらくすると知った顔を見つけ、また手を止めた。

北条光明。会ったことはない。写真で見ただけだ。この、明るい活発そうな顔の少年が、あの野郎の親友。

土屋は三秒ほどで女子の名簿に移った。女子の名簿を開くと、一番初めに妙な少女が現れた。髪の一部が白い。そしてわずかに目が黄色がかったいる。

狐使いだ、と土屋は直感した。狐憑きの一族。幼いころに自分に憑いた狐に気がつくと、髪などのメラニンの一部が変化し、奇異な色になる。だいぶ前に父親から習った。

その女子は優しい面持ちをしていた。名は、霧林白稲きりはやしろね。憑いた狐の種類は、白狐びゃっこだろう。最初に出てきたのは、両親が確認してくれたかららしい。

土屋は霧林白稲にチェックを入れると、机の上に散らばった呪符と筆記用具を脇にどかし、休憩しようと机に突っ伏した。

「おいおい、随分と無謀だな。敵の前で休憩しようとは」

背後で声がし、土屋は文字通り、飛び上がった。

土屋はあわてて振り向き、飛びのいてベットに足を引っ掛た。無様にもベットの上にひっくり返る。それを見て、土屋の背後にいた人物は「馬鹿じゃねえの」と嘲笑した。

土屋は幻覚かと思い、その人物をまじまじと見た。本物だと分かると飛び起き、がなりたてた。

「ここで何をしているんだ？」

「何をしてるって？見て分からないのか？偵察だよ。て・い・さ・つ。しかもこんなに至近距離で」

その人物……石橋は土屋のすぐ後ろに、ずっと立っていたのだ。そして土屋は、それに全く気がつかなかった。

土屋は石橋の肩越しの窓の外に、さっと目を滑らせた。敵は一人だ。それにしても俺がこいつの気配に気がつかなかった？この俺が？

攻撃するのも忘れて愕然としてみると、石橋は机の上の呪符を見やり、一枚の呪符を投げた。土屋の呪符は一枚残らず煙となって消

えた。再び土屋を見ると、鼻を鳴らした。

「何も変わっていないな。久しぶりの再開なんだから、ぱあっといこうぜ。ぱあっと」

「だ、黙れ。なんだよお前。用がないなら……」

「用ならある。報告しに来た。ちなみに今夜は戦いは無しだ。なあなあ、感じないのかよ、お前は」

土屋は眉をひそめる。

「何をだ？」

「霊力だよ。俺から発せられる霊力。ほら、分かってんだろ。特殊能力者から出る、微量な気のようなもの。感じてんなら感想言えよ。感想」

土屋はようやく、ある変化に気がついた。石橋は気配の操作がうまくなっている。証拠に土屋は石橋に全く気がつかなかった。そして今。こいつから発せられる霊力は、強くなっている。格段に。ひよっとして土屋よりも強いかもしれない。でもなぜだ？

いや、それは後で考えればいい。……後なんてないかもしれない。
もし石橋が俺より強くなっていたら、俺は殺される。

恐怖より、悔しさの方が強かった。土屋は無意識のうちに奥歯をかみ締め、足がすくんでいた。

「どうよ、俺、強くなっただろ？」

石橋が土屋の顔を覗き込むように身をかがめた。

「何でだと思う？」

「……そんな馬鹿な……」

「馬鹿？はいはい、どーせ俺は馬鹿だよ。でもさ、いちおうお前より強くなっただよな。せめてさ、阿呆にしてくれねーかな」

「まさかお前……宮村から……」

土屋は途中で言葉を切り、二人そろってドアの方を見やった。

ドアがノックされている。

「ちょっと土屋ー。答えなさいよ、いるんでしょう?。」

フローラとかいう女の声だ。

「あのさ、これから幸乃の部屋に皆で遊びに行くんだけど、お前も行かない?。」

クリフォードもいる。ドアの外からは四人の気配がした。エクソシストがそろっているのだ。

呼ぶべきだろうか? 五対一なら勝てるかもしれない。

土屋は呼ばうと軽く息を吸った。

その気配を察したらしい石橋が土屋を見た。目で、やめとけよ、と言っていたが、やめないとわかるとちよつと肩をすくめ、唐突にドアに向かって呪符を投げた。呪符はドアに当たって消えたが何も起こらない。すぐに防音したのだと気づいて、土屋も呪符を空中からつかみ出し投げようとしたが、石橋にまた突然横面を張り飛ばされ、思わずひるんだ。ナマの暴力などするほど馬鹿ではないと思っ

ていたのだ。啞然として自分より背が低いそいつを見てみると、やがてドアの向こうから四人が去る音がした。

目的は単に時間稼ぎだったらしい。呪符を出すまでも無いというわけだ。

「悪いな。お前らをここで殺したくなかったんだ。ていうか、こんなところで殺すなんて、つまんねーし」

「お前、今までどこにいたんだ。クリスティーナ・コルネリウスのところか？高橋が言っていたことは本当だった？」

土屋はちよつと怯みながら、一気にまくし立てた。石橋はうなじをかき、そ知らぬ顔をした。

「クリステ……なんだって？高橋ユキノ？誰それ。知らねーなあ。ところでお前が言おうとしていたことは分かった。正解だ。俺はそれで強くなっただ」

石橋は部屋の中を行ったり来たりした。

「だから、命が惜しけりや追ってくんない。追ってこなけりや殺しはしない。俺は優しいからな。あ、でも、もうちょっと、お前のい

る結社、とやらに留まってくれねーかな？俺の荒らしぶり……
・いや、殺しぶりをぜひともお前に見てほしいんだ」

「荒らしぶり、だと？」

「俺は今度、その結社をぶっ壊しに行く。エクソシストは皆殺しだ」

石橋は堂々と宣言した。土屋は眉根にしわを寄せた。

「結社の場所を知っているのか」

石橋は土屋の問いを聞こえないふりをした。

「それを見て、判断すればいい。追ってくるか来ないかさ。お前のことは殺さないから。じゃ」

石橋は窓の前まで行った。土屋は急いで引き止める。

「おいこら、待て。正気か？たとえお前が強くなったとしても、エクソシストだぜ。結社には大勢いる。それに、なぜ俺を殺さない？」

「その問いにはいずれ答えてやる」

「ちょ、お前、俺を見下しに来たのか？わざわざ？」

「なんだよ。悔しいのかよ。俺に下に見られてよ」

石橋は例の人を不愉快にさせる、「くくくくく」という笑いをした。

「あのさ、もし俺のシモベになりたかったら、いつでもこっちに来いよ。お前なら歓迎してやるぜ」

「なんだてめッ！」

土屋は頭に血を上らせ、石橋に呪符を投げつけた。石橋はそれを払うと窓の外に飛び出して空中浮揚した。嫌がらせのつもりらしいにつこり笑いをすると、夜の闇にまぎれて消えた。

第十話・裏切り者は誰か

「おはよー」

朝は全員でライナーとクリフォードの部屋に集合した。昨夜は明け方四時まで起きていたので、とてつもなく眠いが、飛行機の中で眠ればいい。

エクソシストの皆はすでにクリフォードたちの部屋に集合していた。テーブルにはサンドイッチや、紅茶のカップが並べられている。

皆はソファーに座ってわたしを待っていてくれた。いや、私と土屋を。そして土屋はいまだに現れない。しばらく談笑していたが、そのうち苛々してきて、クリフォードが土屋の部屋に行くことになった。

「あーあ。だりイぜ、ったく」

ライナーが鏡の前で髪の毛をセットしながら言った。

「石橋は見つからねーし、ていうか、本当にドイツにいるのかよ」

「ライナー、まだあきらめるのは早いですわ」

フィオナが柔和に言った。

「きっと見つかります」

「そーかあ？」

「ねえ、訊いてもいい？石橋って捕まったら死刑になるの？」

私が訊くと、フローラが答えてくれた。

「勿論死刑よ！あんな愚図野郎はとつと死ねばいいわ！」

「ちよ、その言い草はないだろ」

ライナーが鏡の中のフローラを見た。

「お前、言うこと怖い」

「悪かったわね。ところでクリフォードたちはまだかしら」

「私見てくるよ」

私はソファから立ち上がり、土屋の部屋に行った。

ドアの前で立ち止まり、ノックしてみる。

「ねえ、クリフォード、土屋、いるよね？入ってもいい？着替え中じゃない？」

「いいよ」

クリフォードの声がしたので私は遠慮なくドアを開けた。

クリフォードはベットの脇に座り込んでいた。土屋はベットの上に胡坐をかいて、なにやら憤慨している。着替えてもない。

私は後ろ手でドアを閉め、ベットに近づいた。

「どうしたの？」

「さあ」

クリフオードは途方に暮れた。

「さっきからぶちぶち言っただけで、質問に答えてくれないんだよ」

私は土屋の肩をぽんぽん叩いた。

「ねえ、土屋、なに言ってるの？」

土屋は私を睨みつけた。私の手を跳ね除け、窓際を指差す。

私は窓際を見た。床に何か紙切れが落ちている。私はそれを右手で拾い上げ、しげしげと眺めた。ただの紙だろう、と思ったが、ふとそれから霊力を感じることに気がついた。反吐が出るほど感じられた、とある男の霊力。

「いいいい、石橋が来たのっ？」

私は慌てふためいた。クリフォードが立ち上がり、目つきを変えて私の手から紙切れを取り上げる。おいをかくように鼻を寄せると、すぐにはつとした表情になり、土屋の胸倉に掴みかかった。

「おいっ！奴が来たのか？」

「そうだ！」

土屋がクリフォードを振り払い、わめいた。

「あの野郎、ほざきやがったんだ！あのゲスめ、ヒトのことを何だと思ってやがんだ……くそっ！誰があんな奴のシモベになんか……！」

土屋の憤慨ぶりを見たところ、恐らく下に見られたりしたのだろう。

土屋は今まで、自分が強いということヒトの優位に立っていた。それが破られたことで、悔しさのあまり、一人でカンカンになって石橋をのしっていたのだろう。

私たちは、土屋を力ずくで引っ張ってクリフォードたちの部屋に連れて行こうとしたが、頑として行かなかった。きっと、もっと頭

にくるからだろう。

結社に戻る飛行機の中でも、そして結社に到着して社長に報告するときも土屋は不機嫌真つ盛りだった。土屋から出るマイナスのオーラで、結社のヒトは土屋が不機嫌だということを悟り、誰も近づこうとしなかった。土屋は結社内でも無愛想なことで強いこと有名なのだ。

しかしいくら他の人が土屋を避けても私たちはそうはいかない。石橋と何を話したのか聞かなければならないのだ。

私たちは二階の十四歳エクソシストの部屋で、紅茶を飲みながら土屋と向き合った。ライナーは書類の山に腰を下ろし、自分愛用のカップに砂糖を入れながら、ぼけっとした視線を外に投げかけていた。

クリフォードは回転式の肘掛け椅子の上にきちんと座って、腕を組み、土屋を見やった。

「それで？」

私の隣に座っていた土屋が顔を上げた。

「何だよ」

「石橋と会ったのか」

「ああ」

土屋はあっさり肯定した。

「どんなことを言っていたんだ？」

「ここを壊しに来るって」

「な、なんだって？」

私たちはそろって目をむいた。その光景がおかしかったのか、土屋がにやっとしたので、私たちはあわてて表情を元に戻した。

「俺より強いからって、自慢してきやがったんだ」

土屋が齒噛みした。やっぱり。私は石橋とあっていたんだ。夢じやなかった。

「俺に日本に帰ってほしいらしい」

「なぜだ？」

ライナーがこっちを見、積極的になった。

「ていうか、なんで現れたわけ？一体全体何がしたいんだ？」

「知らねーよ。見たところのん気だったし、やつは本当に、俺より強くなりやがったんだ……。俺を怖がらないなんて、今までなかったもんな」

「どうやってこんな短期間に強くなったんだ……？」

「宮村の死体から、霊力を吸い取ったんだ。死体から霊力を吸い取ること、吸った奴はあつという間に強くなる。格段にな。宮村は犬神使だったから、石橋の特殊能力の種類は二つになったと思う。黒陰陽師プラス、犬神使いだ」

「じゃあじゃあ、工場が破壊されたときの犬の足跡って言うのは、犬神のだったってことだね？」

私は割り込み、土屋がうなずくのを見てほっとした。でも石橋が土屋より強くなったとなると、大変なことになる。

「それで、石橋はいつここを壊しに来るの？」

質問を重ねると、土屋は小首をかしげた。

「さあな。そこまでは知らない。言ってなかった」

「奴はここを壊せないわよ」

不意にフローラが勝ち誇ったように言った。

「ここの警備は厳重なもの。邪の心を持ったものは入れない。結社に入会しているヒトの許可がない限りはね」

「そのことについてはすでに承知しているのでは？」

フィオナが上品に紅茶を飲んだ。

「ひょっとしたら、他に入る方法を見つけたのかもしれませんが」

「ありえないわ」

フローラはピシッと言った。

「このセキュリティは万全よ。魔法だもの。コンピュータのよ
うにハッキングもできない」

「内部に味方がいるって可能性は考えないのかよ」

土屋が馬鹿にしたように言った。皆の目が動いて土屋を見た。み
んなの顔から血の気が引く。

「最もありえないことだわ!」

フローラが土屋のように憤慨した。

「ここに裏切り者なんて、いないに決まっていますでしょう!」

「どうかな。ここでは何百人ものヒトが働いているんだぜ。いるって可能性は半分以上だ」

「ふざけないでよ！」

フローラが顔を真っ赤にして、がたんと立ち上がった。

「ここに勤めている人たちは、裏切るなんてマネはしないのよ！」

「親から習わなかったのかよ。疑うならまず、味方を疑えって」

「そんなの習うわけがないわ！疑う必要なんてない！そーゆーあなたは日本で石橋を追いかけていた時、幸乃や加奈ちゃんを疑ったことがあるの？」

「当然だろ」

フローラは言い返そうとしたが、言葉が見つからず口がパクパクした。私は土屋を見た。

「私たちのことも監視していたの？」

「怪しいところがないか、な」

「サイテイ！」

フローラが絶叫した。机の上の紅茶のカップを引つつかみ、中身を土屋の顔面にぶちまける。土屋はちよつとしらけた顔をし、手の甲で目元をぬぐった。私はあわてて手近にあったペーパーを掴んで土屋に渡した。フローラがこんなに怒ってくれるなんて、なんだか嬉しかった。

「あんたなんか、石橋より下劣な、卑しい馬鹿よ！石橋が愚図ならあんたは糞だわ！この、仲間を疑う、もっとも醜悪な、頭のいかれた……っ！」

フローラが砂糖の容器を土屋に投げつけようとしたが、クリフォードが「落ち着け！」と言ったので、思いとどまった。ライナーは何が面白いのやら、ケタケタ笑っている。フィオナはフローラを座らせると、おずおず言った。

「あの、私、土屋さんの意見に賛成です」

フローラが目を見開く。

「フィオナっ！」

「石橋健は卑怯なことを平然とやる悪党です。誰かをそそのかしたのかもしれませんが。それが、無理に従わせているか、あるいは…」

「そうそう、そーだよ。あんたら馬鹿かよ」

土屋が呆れたように言った。フィオナがうなずく。

「考えてみてください。可能性は十分ありますわ」

「んー、そうだな」

ライナーが砂糖を紅茶のカップにもう1さじ入れた。

「俺も賛成かも」

「私も」

経験上そうなので、賛成した。

「私も小夜子と仲良くしていたんだよ。絶対裏切り者じゃないって思っていたのに、そうだったし……」

「悪党は演技がうまいんだよ」

土屋はそういい捨てるのと立ち上がり、部屋から出て行こうとした。

「待て。どこへ行く」

クリフォードが訊くと、土屋は「別に」と答えた。音を立ててドアを閉め、私たちは取り残された。

「私も席をはずします」

フィオナが土屋の後に続いた。私たちはしばらく沈黙していた。口火を切ったのはクリフォードだ。

「もし、裏切り者がいるとしたら誰だと思う？」

「……エクソシストの中の誰かだと思っわ」

フローラは決心したように言った。仕方なく認めたらしい。

私はその言葉に衝撃を受けていた。

第十一話：裏切り者は誰か…2

「な、何で？」

私は問いかけた。フローラは難しい顔をしながら答える。

「石橋のことは、エクソシストたちにしか知られていないの。つかまったら、結社全体に伝わるけど」

「そんな……」

「成人エクソシストも含めて、石橋のことは私たちと社長しか知らない。それに石橋が外国へ来てからは、エクソシストと社長以外はここから出ちゃいけないって事になっているの。危険だからって捕まれば他の皆に知らされるけど。私たちエクソシストは皆、幸乃たちが来る前にバラバラでこの外に出ている。ある任務を遂行していてね。だから、その仕事の合間とかに、誰にもばれずに石橋と接触することは可能だわ」

「ああ」

クリフォードは重々しくうなずいた。

「たぶん、裏切るとしたら十五歳以下だろうな。年上の人は皆、忠実だし、裏切るなんて事はないと思う」

「じゃあ、十五、十四、十三ぐらいの人が裏切った……？」

「その可能性が高いな。意見を言ってみようか」

クリフォードはそわそわした。

「あくまで推測だから、怒ったりしないように。な」

「うん」

私たちはこくんとうなずいた。

「俺はライナーが怪しいと思うよ」

とたんにライナーがクリフォードを見、カッとなったように立ち上がった。

「て、てめえ何言つてやがる。俺が裏切ると思ってたのか？ああっ？俺を誰だと思つてんだよ、次期社長だぜ？ふざける、貴様！」

ライナーはたちまち逆上してしまった。

「証拠はあのかよ？物的証拠！証拠がないなら……！」

「しょ、証拠つてほどじゃないよ。推測だつて！」

クリフォードはライナーをなだめようとこたこたし、続けた。

「この前の夜、お前は電話していたよな？社長にしたつて言つてたから、俺、あとで訊いてみたんだ。そしたら社長は来てないってライナーはクリステイーナがどうのこうのとか言つていたし、フィオナやフローラのことを言つていた。電話の相手は実は石橋で、情報を流していたんじゃないかと……。」

「はッ！なめやがつて、あの成金糞つたれジジイが忘れたに決まつてんだろ！あの爺さんはもう歳だからボケてんだよ！言いたくないけどな、俺はてめえ、アンソニーが怪しいと思うね！」

「どうして？」

私は首をかしげた。

「たいていそーいう奴が裏切り者なんだ。お袋が言っていた！」

めちやくちな理由だ。

「私は土屋が怪しいと思うわね」

フローラが割り込んだ。

「第一、おかしいと思わないの？昨夜石橋が土屋に会いに来たつて。もしかしたら石橋は土屋をそそのかしに来たのかも。そこでコを襲うことを決めて、土屋に石橋が結社に入れるように許可してもらったとか」

「ひょっとして、密会ですかア」

ライナーが下品きわまりないジョークを飛ばした。

「土屋は違うよ」

私はあわててかばった。

「土屋は最も石橋を憎んでいるんだよ。それは私がよく分かっている。半年より短い期間しか一緒にいないけど、それぐらいは理解しているもん。土屋は絶対違うもん！」

「そうそう。会ったとしてもやっぱアレよ」

ライナーはまだ言っている。

「少なくとも、アンソニーよりはましだな」

ライナーはクリフォードを睨みつけ、クリフォードは身を縮めてしまった。

私とフローラはとぼとぼ六階の娯楽室に行った。内輪もめしたところで仕方がないと、解散になったのだ。

六階にはチェスをやる部屋や、魔法ゲームをやる部屋などに分かれていた。多くの結社の人が集合してゲームをやっている。

私とフローラはチェスでしばらく遊んだ。チェスのやり方は知らないで、フローラに教わりながらやった。ルールを覚えてしまえば、面白かった。頭を回転させるのは面白いと、私ははじめて知った。

チェスが終わると三階の魔術練習場に行き、七番と書かれたドアに入った。

ここではエクソシストたちが情報を交換したり、年下のエクソシストを鍛えたりするらしい。中にはアシュリーと、その友人のイヴァがいた。

お互い向き合い、実践の練習をしている。

私たちはその部屋の隅っこに座った。見学をするらしい。アシュリーたちはしばし練習を続けていたが、そのうちやめてしまった。二人は私たちをからかうほうが良いようだ。私たちに近づいてくると嫌味ったらしく言った。

「あら、十四歳エクソシストのフローラと、邪殺屋の幸乃さん。お久しぶり。悪いけど、出て行ってくれませんか？あなたたちがいると、練習に集中できませんわ」

私たちはその言葉にカチンと来た。

「なによ。見学されるのが嫌だって言うの」

フローラが噛み付くように言った。

「あなたたちに見せる技なんて、無くってよ」

アシュリーが傲然と言い放つ。私は怒って立ち上がった。

「どうしてそんなこと言うんですか！」

二人はびっくりしたように私を見た。

「私たちはただ、先輩たちの戦いぶりを見たかっただけなのに！」

「石橋」ごときも捕まえないあなたたちに、そんな口はきかれ
たくありませんわ」

アシュリーがばしりと言った。

「たかが十四歳の黒陰陽師相手に、なにを手間取っているのです？」

「仕方が無いでしょう！聞いてないの？石橋はココを襲いに来るかもしれないのよ！さっき社長から一斉に連絡されたはずだけど！あいつはそんな余裕なの！つまり、私たちよりはるかに強いのよ！」

フローラがなりたてた。

「土屋弘よりもね」

その言葉がとどめだった。二人は顔を見合わせ、なにやらひそひそ話し合っていた。

「ほうら見なさい。石橋はそう甘くないのよ！」

フローラも傲然とした。アシュリーは鼻を鳴らす。

「そうでしょうか？こちらが一斉に攻撃すれば、奴はひとたまりもないと思いますけど」

私たちははっとした。

そっだ。いくら奴が強かったって、私たちエクソシスト多数の前ではアリ同然。勝ち目などない。忍び込むことさえも不可能だろう。奴がココに近づけば未確認物探査部がかぎつけて、私たちは外で迎え撃てばいい。そっだ、その通りだ。奴は大馬鹿野郎だ。ざまあみるだ。

私とフローラはその事実気がつくと、嬉しくて飛び上がった。

「そうよ、そうよね！たとえ奴が襲いに来たって、こんなにたくさんエクソシストがいるんだもの。大丈夫よ！」

「よかった！加奈の仇が取れるよ！」

私の言葉がいい終わらないうちに、室内に警報が鳴り響いた。学校で防災訓練をやったときと同じようなサイレンだ。

『エクソシスト全員、大至急広間に集合せよ。繰り返す。エクソシスト全員大至急……』

放送が私の耳の中に飛び込む。

私たちはあわてて部屋の外に飛び出し、広間に疾走した。

第十二話：侵入者

私たちは広間の席について、そわそわしたりしていた。

さつき未確認物探査部が、邪の心を持った者を十キロ東で探知した。それはものすごいスピードでこっちに迫っていたのに、あと二キロというところでセンサーから消えてしまったのだ。

消えてしまったからには手のうちようがなく、私たちは座っているしかなかった。

「やっぱり間違いだったんだよ」

静寂していた広間の中で、土屋が吐き捨てた。

「間違い？まさか」

クリフォードがおどつきながら言い返す。

「いままで一度も間違ったことなんてなかったよ」

「そーそー。間違っわけがない」

成人エクソシストの一人が同意した。土屋の隣のフィオナはせわしなくきよろきよろし、髪の毛を後ろに払っている。

「そうです。間違ったことなんてありません」

「本当かよ」

ライナーがふくれっ面になった。

「あ、もしかしてさ」

ライナーが身を乗り出すと、皆がライナーを見た。

「そいつ、ヘリにでもぶつかって死んだんじゃないね？」

私は思わず嘔き出した。だとしたら情けない最後だ。

皆に睨まれ、亀のように首をすくめる。

ライナーは私しか反応してくれなかったことに気を悪くした。飽きたようで、板チョコレートをポケットから取り出して食べ始める。

「ライナー！」

フローラが信じられないと言うように目を見張った。

「こんなときにチョコなんて！」

「だってなんにも現れねーじゃん。なあ！時間の無駄よ。俺はこんなことで時間を無駄にするほど暇じゃないんだよ」

「ライナー」

フィオナが優しくたしなめる。

「ひょっとしたら石橋かもしれませんが？邪の心を持った者で、ここに入っているという許可があれば、センサーからは二キロぐらいの地点で消えます」

「ホントに裏切り者がいるのかねえ？」

ライナーがピアスを引つ張り、どんなことを思っているのかにやにやした。いつものことだ。

「どうしました？」

フィオナが土屋に声をかけた。私は土屋を見る。

土屋は「別に」とだけ言った。声が怯えていた。顔も蒼白だ。土屋は石橋を怖がっている。それが一層私たちを不安にさせた。

「心配することはありませんよ。私たちが一斉に襲い掛かれば、大丈夫です」

フィオナが甘い声で言った。フローラはその声の直後に立ち上がる。

「ん、もう！こんなところで座っているだけなんて！わたし、もう一回外を見てくるわ！」

「お、俺も」

クリフォードが立ち上がる。

「俺らも行くか？」

ライナーが聞いてきたので、私たちは立ち上がり、外に出て城の周辺を一周した。

しかし石橋の気配もしなければ、暴れた痕跡もない。

私たちはため息をついた。

「やっぱり間違いだったのかな」

クリフォードは迷子の子供のような目をした。

「なんの気配もしないし……」

「そうかもね」

フローラは半ば安堵したように言った。

結果、間違いだっただけということになって、エクソシストたちは解散し、思い思いの場所に戻っていった。

私たち女子は私の部屋で集まって、ファッション雑誌とかを見て暇をつぶした。

フローラはファッションに詳しく、わたしに色々アドバイスしてくれた。

フィオナは飄々と窓辺に近づき、外を見たり椅子に浅く座ったりして落ち着きがない。不安なのだろう。

そこで私はフィオナが落ち着けるようにと化粧品のカatalogを押し付けた。

フィオナは化粧品には興味がないのか、どうでもいいように同じページを眺めている。美しい肌なのに、以外だ。私はそんな透き通るような肌がうらやましくて訊ねた。

「ねえフィオナ。化粧水なにつけてるの？羨ましいなあ」

フィオナは訝しそうに私を見た。

「化粧水、ですか？」

自分の頬を触り、面食らったように私を見つめる。私はきょとんとした。

「うん。化粧水。つけてるんでしょ」

「幸乃。フィオナは教えてくれないのよ」

フローラがむうっとしたように言った。

「自分で作っているか、つけてないかよ」

「ええ〜！いいな、いいなあ！やっぱ美女には秘密が多いなあ。じゃあシャンプーは？フィオナの髪の毛は、いつもいい匂いがするよ」

「そうですか？」

フィオナは可愛らしく小首をかしげた。

土屋がオチるのも時間の問題だ。こんな天使のような子に惚れない人なんて、いるわけがない（石橋は除く）。

フィオナは「それじゃあ」と提案した。

「男をオトす方法なら」

「ええ〜！」

私とフローラはがばつと身を乗り出した。

ものすごく知りたい。

「教えて！」

綺麗に声が重なる。フィオナは微笑をたたえた。

「簡単ですね。あの……私は土屋さんのことが好きですよね？」

「うん」

「たぶん土屋さんは一時間後にはオチているはずですよ」

「なななな、なんでっ？」

「男をオトす方法についてまとめたノートが部屋にあります。今取ってきますね」

フィオナは謎めいた笑みを浮かべると、部屋を出て行った。

それにしても意外だ。フィオナがそんな大胆だったなんて知らなかった。フィオナも案外、はじけた女の子なのかな……？

十五分経った。

フィオナは戻ってこない。

私たちは待ちきれず、フィオナの部屋に向かった。

ドアの前で立ち止まる。

「フィーオナー」

呼んだが返事はない。

不安を覚え、私とフローラは顔を見合わせた。

「フローラ、開けてみる？」

「ええ、そうね」

私はノブに手をかけ、そっと押した。

……開いた。

ふわりと甘い香りが鼻をくすぐる。

誰もいない。どうしたのかな？

ふとベッドの下から金色の糸の束が飛び出していることに気がついた。

嫌な予感がした。もしかあれは……！

私は恐る恐る部屋の中に進入し、ベッドの下を覗き込んだ。

私の心臓が飛び上がった。

ベッドの下にいたのは、フィオナだ！金色の糸はフィオナの髪の毛。

私たちはあわててフィオナをベッドの下から引っ張り出し、ベッドの上に仰向けに寝かせた。肌が紙のように真っ白だ。息はあり、眠っているようだ。

「フィオナ！フィオナあっ！」

私は叫び、フィオナを揺さぶる。フローラは涙目だ。

フィオナは呼びかけに反応してくれた。

うつすらと、苦しそうに目を開く。

「フィオナっ！」

私とフローラはフィオナを覗き込む。よかった。

フィオナは私たちを見ると、何かを伝えようと必死になる。

私はフィオナの唇に耳を寄せた。

「なあに？どうしたの？」

「……………奴が……………」

「石橋？」

「奴が……………私に……………化けて……………いま……………す……………」

浅い吐息とともにその言葉が吐き出された。

フィオナは言葉を切り、再び気を失う。

私たちは顔面蒼白になった。

石橋がフィオナに化けている！

私とフローラは廊下に飛び出していた。

第十三話：プラス犬神

石橋はすぐに見つかった。

一階の玄関ホールでキョロキョロしている。そのうち、広間のほうに向かって悠々と歩き始めた。

私とフローラは迂闊に手を出さないほうがいいと、玄関ホールのカウンターの陰にしゃがみこんで様子をうかがった。

「フィオナ」

クリフォードがエレベーターホールの方からやってきた。フィオナに化けた石橋に声をかける。石橋フィオナはクリフォードを振り返った。

「どうしました？」

よくもぬけぬけと……。腹が立つ。

「あのさ、フローラと幸乃見なかった？ちょっと用があるんだ」

「さあ、見かけていませんわ」

「そつか。じゃあいいよ」

「土屋さんは？」

クリフォードは首をかしげ、

「えーっと、広間の中にいたと思うよ」

「そうですか。ありがとうございます」

石橋はフィオナの微笑を顔に張り付け、恐るべき自然さで広間のほうに向かう。クリフォードはその場にたたずんで、私たちを見つけようとしているのか辺りを見回している。

石橋の演技は完璧だった。どこから情報を手に入れたのか、歩き方、しゃべり方、仕草、全てがフィオナにそっくりだ。誰かに言われなければ誰も気がつかないだろう。

石橋は広間の中に入っていった。姿が見えなくなってしまうたの

で、私たちは右側のソファアの陰に移動し、中を見た。

石橋は足を止めていた。すぐ前にはテーブルに突っ伏した土屋がいる。土屋に何か仕掛ける気なのだろうか。

石橋は土屋の背中を人差し指で小突き、土屋は身を起こした。

土屋は訝しげに石橋フィオナを見上げる。その顔がさつと強張り、息を呑んだのかこくりとのどが動く。

石橋は土屋の足元にしゃがみこむと、土屋のポケットから勝手に呪符を没収した。土屋は石橋の正体に気がついているようだが、動こうとしない。

土屋の口が動いた。ココからでは声は聞こえないが、読唇術でなんて言ったのか分かる。

なんのつもりだ。なぜ殺さない？

石橋は顔を上げると土屋を眺めた。その横顔がにたりとする。たとえフィオナの顔でも気味が悪かった。

お前など仲間の死に様を見て、一生悶え苦しんでろ。

不意にクリフォードが土屋たちの方を見た。フィオナを見て不自然に思ったのか、二人のほうに向かう。

石橋はぱつとクリフォードを振り返り、呪符を投げつけた。

私はそのすばやさに驚倒しながらも「危ない！」と叫んだ。当たる寸前に土屋の鍛え抜かれた瞬発力が反応し、人型の紙を投げる。二つの紙がぶつかり、ばちつと音を立てて派手に火花を散らし、消滅した。

クリフォードはわけが分からず茫然としている。周りにいたエクソシストたちもだ。

石橋は舌打ちしたような醜悪な顔をして立ち上がった。右手をまっすぐ天井に向け、そこから呪符を一枚放った。

すさまじい爆発音と爆風がし、私とフローラ、クリフォード、周りにいたエクソシストたちが吹っ飛ばされた。私たちは玄関ホールに入り口で落下して止まる。煙がもうもうと舞い、壁の破片と見られるものがばらばらと落ちてくる。広間からは何人もの悲鳴がした。

私たちはうめき、よろつきながら立ち上がった。風を操り、埃を吹きとばす。広間の様子が見えた。

テーブル、シャンデリア、窓ガラス、あらゆるものが木っ端微塵になっていた。広間を見る影もなくなっていた。なにもかもスタボ口だ。広間にいた人たちは血まみれになって床に倒れている。しりもちをついているエクソシストもいるが、愕然としていて動かない。土屋は自分を守った動きがないのに、無傷だった。石橋の脇に突っ立っている。石橋は笑顔で土屋に話しかけている。私は前に出て叫んだ。

「土屋何しているの！攻撃して！」

土屋には声が届いていないのか、無反応だった。フローラは二人に五メートルほど近づき、大声で言った。

「胸糞悪いのよ！」

石橋は初めて私たちに気がつき、こっちを見た。

「フィオナの姿に変身するなんて、サイテー！クリフォード、アイツをつぶすわよ、早く立って！」

クリフォードが急いで立ち上がった。私の腕を掴むと後ろに押しやる。

「下がってて」

「う、うん」

私がいたところで邪魔になるだけだろう。クリフォードたちの声に反応したらしいエクソシストたちは、足を踏ん張って立ち上がり、杖を構えた。

フローラが目の前に緑色の魔法陣を出現させ、その中心を杖で突いた。ぶわっと風の塊が吹き出した。風は小石や砂埃をすくい上げながら一直線に石橋に向かう。風はかすかに緑がかっていた。さっきの爆風に匹敵するほどの風、当たった人はさっきのように吹っ飛ばされるだろう。

石橋は腕を組んでこちらを眺め回している。土屋はその傍らでうなだれていた。

風はとつくに石橋に当たっているはずなのに、石橋フィオナの髪は、そよ風に吹かれた程度にしか動かなかった。それどころか土屋の髪もだ。

フローラは目を見開く。唐突に魔法陣が四方にはじけ、消えうせてしまった。

「な、何？何で……」

フローラが唇を震わせた。

私は感じていた。前より何倍も強くなった、奴の邪な靈力を。

石橋フィオナの姿が陰のように揺らいだ。粘土をこねたようにフィオナの姿が歪み、揺らぎが消えると反吐が出るほど見慣れた姿がそこにあった。

石橋健は周りのエクソシストたちを、アリの行列を見るような目で眺め回していた。

いつもの土屋なら、隣に石橋がいたらすぐさま飛び掛って、悪態をつきながら呪符をめちゃめちゃに飛ばしまくるだろう。なのに今は、石橋を捕まえようともしない。

石橋の回りにいたエクソシストが動いた。ある者は杖を、ある者は手のひらを石橋に向け、一斉に電撃やら光線やらを放つ。

その攻撃は結界のような何かに阻まれ、音を立てて撃った本人に跳ね返る。全員同じ動きで戻ってきた攻撃を払いのけた。

クリフオードが横で杖を振り上げた。

私たちの周りに丸い透明の結界が張られた。他のエクソシストたちも結界を張る。結界の向こう側に黒雲がいつぱいに召喚された。その黒雲は轟音とともに青白い雷や、白い光線をほとばしらせる。結界の外は黒雲で見えないけれど、そのぐらいは分かる。何回かチカチカし、黒雲はすうっと空間に吸い込まれるように消えた。

雷に当たれば、石橋は黒焦げになっているはずだ。絶対そうなっている。私は心のどこかで信じていた。

しかし石橋のいたところには突っ立ったままの土屋の姿しかなかった。エクソシストたちは自分の結界から出て、石橋を探そうと口々にわめいた。

一人の若い女性エクソシストの背中から、いきなり血が噴き出した。大量に。そのエクソシストはのけぞり、目を見開いたまま絶命した。私は悲鳴を短く上げた。女性エクソシストのいたところには、一匹の黒い半透明のシェパードが立っていた。犬神。

「さ、小夜子の……！」

私は失神しそうになった。犬神は甲高く吠え、私に飛び掛ろうとした。結界に阻まれ、きやうんと鳴いてはじかれる。

その直後、きちがいじみた声から降ってきた。

「それは俺の犬神だよ。忘れたのか？ 宮村小夜子は死んだんだよ」

私たちは天井を見上げた。ちょっと先の空中に、石橋が立っていた。呪符を一枚私より年下の少年に投げつける。少年は結界を張ったが結界は役に立たなかった。呪符は結界を通り抜け、少年の胸に当たる。そこから血が噴き出し、私は目を背けた。

ひ、ひどい……。

「ひっさしぶりの、」

石橋がその隣の少女に呪符を投げた。また、血。

「大量虐殺だ、」

今度は成人エクソシストに投げる。結界が全く利かない。そのエクソシストは赤い血を吹き上げながら倒れる。

「楽しまなくっちゃ、」

石橋は右手を振りかぶり、大量の呪符を放った。残りのエクソシストたちがどうなったかは見なかった。残酷すぎて。

「なっ！土屋！」

石橋はぼん、と土屋の脇に降り立った。私たちのことはわざと見逃したのだろう。残酷な光景を見せるために。

広間は深紅一色に染まっていた。

奴が強すぎて結界が通用しなかったのだ。私たちは動けず、がたがたと震えるばかりだった。

石橋は広間を一周し、少女の遺体を蹴り上げて土屋の足元に落とした。

「どーよ。己の無力さを知ったかい？土屋弘クン？でももういいよ。お前は充分頑張った。少女はお前のことを憎んじやいないよ。ところでさ、悲しいよな？いままで俺に勝っていたのに、瞬時に無力化して目の前で何人もの人が殺されるなんてよ？」

土屋は少女から目を背けた。石橋は何がおかしいのかニコニコする。

「なあ、悲しいならそう言えよ。土屋クン」

「……うるせえよ」

「はあ？何だその口の利き方は。どこまでも礼儀知らずだな。まあいい。俺はお前に勝ったことで上機嫌なんだ。愉快痛快だな！こーゆーの、有頂天つつーんだっけ？俺めっずらしー言葉知ってんだろ？」

石橋は珍しくもなんともない言葉を知っていたことでさらに機嫌が良くなった。石橋の足がなんとなくという感じで哀れな少女の頭を踏む。

「やめて！」

私が絶叫した。結界から飛び出し、走って一直線に石橋に突進する。

「その子から離れて！」

石橋は私がぶつかる前に脇によけた。なので私は土屋の胸倉に掴みかかった。

「土屋の馬鹿あ！どうして動いてくれなかったの！なんで自分だけ無傷なのよ！土屋は、石橋を止められたかもしれないでしょ！」

「おい、くだらねえことやってんじゃねえよ、ウケすぎ」

石橋が嘲笑した。

「止められるかよ！世の中なめてんじゃねえぞ。世の中はな、こんな小さな女の子が死んじまうくらい厳しいんだよ」

石橋が足元の少女を軽くつま先でつついた。

私の中で過剰な怒りが吹き上がった。脇で握った拳に爪が食い込

み、血が滴り落ちる。でも痛みは感じなかった。それほど、怒っていた。

「……さ、ない……」

私はそうささやいていた。

石橋は「俺が特殊能力者を全て始末した暁には……」とか言っていたがやめ、私を見た。

「あ？なんだ？」

「許さない！」

「許さない？」

「殺してやる！」

私の中で何かがはじけ、霧散した。

石橋は本気にせず、鼻先で笑う。

「冗談だろ。殺せるものかよ」

いや殺す！何が何でもあの虐殺者を殺す！

私は急いでクリフォードたちの所まで後退し、身構えた。

しかしフローラたちは動こうとしない。なんだろう。どうしたのだ？

私のちよつと左側で、誰かがのん気そうに歩いてきた。そつちを見るとライナーがいた。てつきり広間が破壊されたときに巻き込まれてしまったのかと思っていた。でも上階にいらしい。ライナーは人々の死体を見、軽く口笛を吹いた。

「なんだあ、このザマは？エクソシストもやきが回ったもんだな。おいおい、いくらなんでもひどくねえかあ？石橋くん」

石橋はライナーを見やり、眉をひそめた。

「生き残りか」

「まあ？そうかな。俺、ライナー。よろしくな。挨拶代わりに
一丁いつとくか」

「ライナー！」

私が叫ぶのを無視してライナーはゆっくり息を吐いた。

第十四話：死霊魔術

ライナーを中心に霊力が波動となって大気を震わせ、得体の知れない寒気が私たちを覆った。

石橋はライナーを注意深く見つめ、何が起ころうとしているのか把握しようとしている。

床から黒い霧がふわりと出てきた。霧で完全に床が見えなくなり、私は怖くてクリフォードのほうに身を寄せた。

「何が起ころの？」

そう訊いてみると、フローラが小声で

「死霊魔術よ」

と、そのとき私の傍らで、霧の中から何かがつくり立ち上がった。大人ぐらいの大きさだ。それを見て、私は「いやあっ！」と悲鳴を上げた。

だってそれは、まさに大人の死体だったのだ。

開ききった瞳孔、濁った目。顔全体が弛緩し、肌は赤黒く変色している。すさまじい腐敗臭を放ちながら、体を前後にゆすっている。

死霊魔術士の力。死体を直接召喚し、自分の思うままに操る。

死体が霧の中から何体も現れる。全てが違う人の死体だった。

死体が何十体まで増えると、見かけによらない機敏な動きで石橋に向かって突進していった。しかも一斉に。

さすがの石橋もこの魔術にはぎょつとしていた。こんなに身の毛のよだつような魔術は見たことがなかったからだろう。とつさに判断できず、死体にまともに衝突されてひっくり返され、霧の中に消えた。その上にどんどん死体が積み重なっていく。

や、やった……。

私は安堵の笑みをもらした。でもそんなものはすぐに吹き飛んだ。ライナーが肩をすくめ、霊力放出をやめたのだ。

「ま、こんくらいできりゃいい方だろ」

クリフォードが「ああ」とうなずき、杖を構えなおす。

死体の山から犬神が飛び出し、死体を上に弾き飛ばした。死体は黒い霧の中に音もなく落ち、霧は床にしみこむように消えた。死体は一つ残らず消え失せ、代わりに石橋がぶっ倒れていた。

今にも吐きそうな顔をし、立ち上がる。犬神は広間を一周すると石橋の脇に戻り、寄り添った。

石橋の首には、死体の手の痕がはっきりとついていて、Yシャツのどこどろころが破れている。袖が破れ、左腕がむき出しになっていた。思ったより、華奢だった。

「ネクロマンシー……、噂どおりの魔術だな」

目の前の殺人鬼は死体にやられそうになったことで怒り狂っていた。

クリフォード、ライナー、フィオナ、フローラ、そして何ができるか分からないけど私は身構えた。

「おい、さっきの威勢はどうした？とつとかかって来いや石橋
！」

ライナーは戦ってくれる仲間が増えたからか、やる気満々だ。

そういえば土屋の姿が見当たらない。私はちよつと目を大きくして石橋の周辺に目を走らせた。

「土屋は……？」

「土屋はどうやら逃げたらしい。俺サマの強さに怯えちまったのかなア？ははっ！とんだ腰抜けだな！」

石橋が本当にイカレたかのような笑い声を上げた。

つ、と上を向き、天井に呪符を投げる。バーン、という音がして頭上が爆発した。大きな音を立てながら私たちの頭上の天井も崩れてくる。このままでは押しつぶされる！

横にいたクリフォードに引っ張られ、私たちは走って、どこかに転がった。

背後で天井が崩れ落ちた音がし、私はあわてて仲間を見た。

仲間はすぐ横にライナー以外が倒れていた。ライナーは平然と立っていた。

私たちはすぐさま起き上がった。

石橋に対する憎悪、嫌悪が私を支配していた。許さない。こんなことするなんて、人間じゃない。

「追うぞ！」

クリフォードの声とともに、私たちは石橋がいる方向へ走り出した。

第十五話：破壊の限り

*

*

*

天井に大きく開いた穴にジャンプして、穴のふちを掴み、よじ登って二階に侵入する。二階は空っぽで、誰もいない。脇の犬神は鼻をくんくんさせていた。

俺は宮村小夜子の死体から霊力を吸い取って自分のものにした。そのおかげで強くなり、土屋に勝った。しかし今、ざまあみると有頂天になっているヒマなどない。さつさとココを破壊してしまおう。

俺は土屋から没収した呪符を自分の呪符と一緒に等間隔で壁に張り付けながら、廊下を駆け抜けた。廊下の突き当たりまで行ったら天井を破壊し、また一つ上階へ上る。自分が登ってきた穴に呪符を一枚投げ込むと、二階が爆発した。耳を裂くような爆音に眉をひそめる。

後ろから何かの気配を感じ、脇によけると炎が通過した。後ろには数人のエクソシストがいて、杖やら何やらを構えて俺を睨んでいた。そのわりには腰が引けていて、情けない。たかが十四歳の俺に怯えている。いい気味だ。

俺は飛んでくるエクソシストの攻撃を呪符で払いのけ、両手をエクソシストに向けた。両手から大量の呪符を噴き出させる。呪符の嵐で前が見えなくなり、空気の摩擦音が心地よく耳をくすぐる。俺は十秒ほどで呪符を噴き出させるのをやめた。呪符を瞬時に消去し、エクソシストがいたところを見やる。

エクソシストたちの居た所には肉の塊しかなかった。血液が床、壁、天井一面に飛び散り、肉片が血の海の中に散らばっている。誰が誰だか分からないほど細切れにされていた。異臭が漂い、俺は吐き気がしてきた。

血の海の中に足を踏み出す。靴の下で肉がつぶれる嫌な感覚がしたが、無視した。犬神は鼻から進入してくる悪臭を消そうとしているのか、俺の脇にたらした手に鼻を押し付けた。

ところで、ラインハルト・クラウゼヴィッツはどこにいる？奴を殺さなければならぬ。一体どこに隠れたのだろうか？

苛々する。床に積みあがっていた肉片を蹴散らし、せわしく目を動かす。

後ろで悲鳴が上がった。

誰だろう、と後ろを振り返ってみると、穴の近くにさっきの餓鬼

エクソシストがいた。悲鳴を上げた奴はウォーロックだ。どうやら天井が崩れる中を、どうにか逃げ延びたらしい。土屋はどこに行ったのか知らないが、相変わらず不在だ。

俺はドルイド、ネクロマンサー、ウォーロック、自然魔術士の中のうちの一人と、一瞬目を合わせた。俺に『ここを肉片と瓦礫の山にしてしまえ』と命じた、張本人と。

自然魔術士の邪殺屋は、なんだか様子がおかしかった。さっきとは目つきが違った。そして、身にまとっていたオーラも違う。いつもは腹が立つほど温かい、正義のオーラをまとっているのに、今はどす黒いオーラをまとっている。

自然魔術士とはかなり珍しいらしい。自然魔術士は、神に近い存在だということを、あのトロい女は気がついているのだろうか？

俺はとりあえず、言うてみることにした。

「よう。まだ生きてやがったのか。元気そうで何よりだ」

「うるさい！」

ウォーロックが怒りをあらわに吼えた。その女が女の二倍もある

大きな炎のトカゲを召喚する。火の精霊サラマンダーだろう、と思った。魔術書で見たことがある。

サラマンダーは身を翻し、女の後ろについた。

「許さない、よくも皆を……！」

「そのサラマンダーで俺を攻撃する気か？」

「当然でしょ！殺してやるわよ……！」

俺はその場にしゃがみこんで、足元の人肉を素手で掴んだ。自然魔術士以外が、ぎょつとして身を引く。人肉はぬるぬるしていて掴みにくい、何とか持ち上げ、立ち上がった。これ見よがしに人肉を振ってみせる。

「じゃ、エクソシストの欠片をバーベキューにするってことになるな。それを食うのか？」

なんか思いついた。

ここで炎の攻撃をしたら哀れなエクソシストがバーベキューにな

つてしまつ。なんて残酷な女だらう。

女はサラムンダーを見、違つ違つとかぶりを振る。その脇のドルイドが「挑発に乗るな！」と声をたて、ネクロマンサーは吐きそうに顔を歪めている。

「バーベキューになるのは、ひよつとして石橋かもよ？」

自然魔術士がいきなり言った。皆が一斉に自然魔術士を見る。自然魔術士は血の海の中で、にやついていた。

「石橋はさ、女の子みたいに肌が白いから、私が炎で黒くしてあげるよ。そのほうが男の子っぽいし。でしょ？」

女みたい？俺の中で怒りがたぎった。女と言われるのは何年ぶりか。最低な女だ。

「てめえ、殺されたいのかよ」

「どーかな？殺されるのは石橋か・も・ね」

「ゆ、幸乃……？」

ドルイドがおずおずと自然魔術士に声をかける。自然魔術士の幸
乃は無視した。俺は苛つとした。なんだコイツ。いかれたのか？

「お前、狂ったのか？さっきはあんなにブルブル震えていたくせ
に。恐怖のあまり、頭が混乱したとか？」

「まさかまさか。私は震えることで霊力を体に吸収したんだよ。
石橋なんて、怖くないもんね。石橋健、石橋健・設……あ！石橋建
設かな？そんな建設会社を怖いと言う人なんて、よっぽど馬鹿だね
きやはははっ！」

面白くもなんともない。それに漢字も違う。

「ねえ石橋。私、石橋のこと殺すことにするよ。人殺しは悪いこ
となんだよ。知ってるかな？」

自然魔術士の眼光が変わった。

地がぐらつとゆれた。低い地鳴りのような音がして、その音が次
第に大きくなる。それにつれて揺れも強まっていった。ただの地震
ではない。この自然魔術士がやっているのだ。

地底でダイナマイトが爆発したかのような音がし、城が激しく揺れ始めた。そのせいで、自然魔術士以外が無様にもひっくり返った。

コイツに地震を起こす力はないはずだ。弱すぎてそんなことができるわけがない。なのにいきなり強くなりやがった。何事だろう・・・？

ひるんでいると、自然魔術士の手から黒い炎が噴き出した。目にもとまらぬ速さでひっくり返った俺の首に掴みかかってくる。炎の手が俺の首をしっかりと捉え、すさまじい力で締め上げる。熱いし、苦しい。コイツ、俺を殺す気か。このままでは首がへし折られてしまう。

俺は手に持っていた人肉を女の顔に勢いよく押し付けた。女の手が一瞬緩み、俺はそいつの腹を蹴り飛ばしてのけた。

女はよろめいて、顔から人肉を引き剥がし、目元の血を指でぬぐっただけだった。

俺は揺れから逃れようと、近くの縦長の窓を叩き割り、外に飛び出した。落ちる途中で印を結び、空中浮揚すると城から十メートルほど飛びのいた。首に手をやると、コゲがついた。女相手になんてザマだろう。

女は窓から外に飛び出すと体を浮かせ、それとほぼ同時に両手の平から黒い火炎を放射した。

俺は黒い護符を炎のほうに飛ばした。護符は俺の五メートルほど前で炎をさえぎったが、すぐに煙を上げ始める。手刀をそれに向け、護符を大量に増やした。護符の壁ができる。炎を押し返そうとしたのに、ピクリとも動かない。

……互角？そうみたいだ。

俺はもうちょっと高く浮かんで、女が見えるようにした。女は気味悪く笑っている。

「おい！お前！」

護符と炎越しに叫ぶと、女は顔を上げてこっちを見た。早速言い返してくる。

「なによ虐殺男！とつととバーベキューになっちゃえばいいのに。でも石橋には肉があんまりないから食べられないなあ、あははは、ちよつと残念かも！」

「霊視能力者の女はどうなったんだっけ？」

え？というように女が目をむいた。力が及ばないなら徹底的に心を傷つけてやるまでである。

「霊視能力を持った髪の長い女だよ。いつも一緒にいたじゃないか。今日はどうしていないんだ？」

自然魔術士の顔に動揺が浮かんだ。視線がうつろつく。俺の顔に笑みが浮かぶのを感じた。

「……ああそうか。死んだんだっけ？どっかの誰かさんに殺されちゃったんだよな？殺した奴は最低だな。でも救えなかった方はもっと悪いんじゃない？そう、お前だよ。お前が助けなかったせいで、あの霊視能力者は死んじまったんだよ。ひでえな、あんなに友情を分かち合ってたのに見捨てるなんてよ。ありや上辺だけのお芝居だったのか。はー、冷たい奴。井上加奈とかいう奴は、お前のこと親友だっと思っていたというのに。気の毒すぎて涙が出てくるぜ」

女の顔がくしゃっと歪んだ。霊視能力者のことを思い出しているのだ。

炎の勢いが衰えていき、そして消えた。女の手が脇にたれる。俺は自分の身を守っていた護符を消去した。

女は俺を見ると血相が変わった。まず俺を見、下を見、次の瞬間悲鳴を上げる。恐怖のあまりに。

やはり狂っていたらしい。

俺はその女を始末しようと死の呪符を投げたが、いつの間にか女の隣にいたドルイドに呪符をはじかれた。女は失神していた。ドルイドに支えられ、ぐったりとしている。

俺はあまりの情けなさに笑い転げた。

ドルイドはそれをさえぎるように声を張り上げる。

「お前！幸乃に何かしたのか！」

「なんにも」

俺は答えてあげた。

「嘘をつけ！幸乃があんなになるわけないだろう！いつもは優し

いんだから……っ!」

「嘘じゃねえよ。その女は精神科に行った方がいい。入院したら手紙の一枚でも送ってくれよ。病院での生活ぶりを書いてくれ。返事は必ず出してやるからさ」

ドルイドは無表情になり、杖をかかげた。俺とやる気らしいがもう疲れていたのも、とつとと失せることにした。いつまでもこんなところにおいても無意味だ。

俺は破壊できなかった城に背を向けると、音速以上でずらかった。

それにしてもなぜあの女は豹変したのだろう。

俺にとってあの女は、いるかないか分からない空気に値する人物だった。

自然魔術士のくせに、くだらない攻撃ばかりを仕掛けてくる。ちよつとあの女のことは調べてみたほうがいいかもしれない。

俺は冬の空を仰いだ。冬の空はどこか悲しげだった。

第十六話：破壊の後

私は飛び起きた。

頭に激痛が走り、思わずうめく。

恐る恐る辺りを見回すと、医務室だった。周りにはカーテンが引かれていたが、それぐらいは分かる。

白いシート。ふかふかな羽毛布団。私の左腕には包帯がまきつけてあるが、痛くはなかった。

……石橋は？

真っ先に思い浮かぶ。

そうだ。奴はどうなったのだろう。時計を見ると、深夜の二時を差していた。

私はいつの間にか着替えさせられたパジャマの上に、布団の上にあったガウンを羽織った。ベットから降りてカーテンの外に出る。

何十人分のベットは全てふさがっていて、どれもカーテンが引いてあった。時折怪我人のうめき声が聞こえる。カーテンには病人の名前が書かれたプレートがぶら下がっていた。

私のベットの隣は、フィオナらしい。カーテンをめくってみると中にはフローラとクリフォード、フィオナがいた。フィオナは上半身だけ起こしてベットに座り、二人はフィオナを挟むようにしてパイプ椅子に座っていた。二人にも包帯やら顔に絆創膏やらが貼られていた。三人は私を見ると顔を輝かせた。

「幸乃！よかった、起きたのね！」

「フローラ……ね、石橋は？どうなったの？」

「逃げたわ。幸乃のおかげでね」

「私……」

私が何をしたというのだろうか？無様にも途中で意識が途切れた私が。クリフォードはフローラの横に私用の椅子を置きながら、きよとんとした。

「覚えてないの？」

「う……ん」

「疲れてるからだね。後で話せばきつと思ひ出すよ」

私は戸惑いながら座った。三人は暗い顔をしていた。

被害を聞いた。それはとてもひどいものだった。エクソシストの四分の一ほどが殺されてしまったという。城の一階から三階にかけては、ずたボロ。それでも今は魔法で元通りになったらしい。皆は泣きつかれ、もう涙はかれてしまったようだ。フィオナは目を真っ赤に晴らしていた。

結社内は無傷なのは、非難した社長や秘書たち、そして土屋だけなようだ。それまで土屋がどこへ行っていたかは不明。なので私は訊きに言こうと土屋の部屋に向かった。

土屋の部屋の前にはライナーがいた。ライナーは頬に絆創膏を貼り付けている程度で、かなりの軽傷だ。私はライナーに手を振った。

「ライナー！大丈夫だった？」

「お。幸乃ちゃん元気そうだね」

「うん。私は大丈夫だよ。ところでココで何しているの？」

「ヒマだから、土屋と遊ぼうと思って。でも、出てこないんだよね。だから俺は自分の部屋に戻るよ」

ライナーがいなくなると、私は土屋の部屋を勝手に開けた。部屋の中は真っ暗で、土屋らしい影が、ベットの上で動いていた。私は電気をつけた。

「ねえ、何しているの？」

土屋はベットの上で何かを引っ掻き回していた。荷物だ。私を見るといきなり叫んできた。

「失せろ！」

「どうして？」

「出て行け、ほつといてくれ」

「皆のところに行こうよ。そうだ、石橋が暴れている間、土屋はどこにいたの？」

土屋はベットから飛び跳ねるようにして起き、大股でこっちに近づいてきた。恐ろしい剣幕で、私は一步下がった。

「どこにいたのか？聞きたいなら教えてやろう。俺は逃げたのさ。どうせ俺には奴を止められなかった。居たところで無意味だった。だから、お前ら置いて一人だな」

私はその答えに愕然とした。土屋らしくない。土屋は赤月市で、命を懸けて石橋を止めようとしていたではないか。なのに今回、逃げた、と？

「どうして！私たちはあの後、戦ったんだよ？皆で戦えば勝てたかもしれないのに、何で逃げたの？」

「分からないのか。俺が馬鹿で腰抜けだからだ」

土屋がやけくそになった。わたしは応酬する。

「土屋は馬鹿じゃないし、腰抜けでもないよ!どうして……」

「お前に俺の何が分かるっていうんだ」

私はその言い草にまたしても愕然とした。

「いいか、俺に構うな。ほっとけ。俺は日本に帰って地道にマフィアやらをつぶす。第一俺の仕事は日本を守ることだ。奴が日本にいないければ問題ない。外国で奴が何をやるうが知ったことじゃない」

「でも……っ」

「いても無意味だし、他に役に立つことをやるまでだ。うん」

土屋は一人でうなずき、私を部屋から閉め出すとドアを閉めようとした。が、誰かのつま先がドアのすき間に入れられ、こじ開けられた。

フローラ、フィオナ、クリフォードがいつの間にか私の後ろにいた。クリフォードは険しい顔つきで土屋を部屋から引っ張り出した。

向き合つと、怒つたようにわめく。

「お前つてすごく腰抜けだな！奴に勝てないと分かると尻尾巻いて日本に逃げ帰る？馬鹿も休み休み言えよ！」

「なんとも言え。ドルイド、お前なんかな、馬鹿だの死ねだのずっとほざいてりゃいいんだ」

「言つてやるとも。ばーかのろま、イカレたクス。腰抜け野郎が」

「一生言つてろ」

土屋がせせら笑つた。後ろのフィオナはおろおろし、フローラは冷たく土屋を見据えている。

「土屋、お前なんか才能ゼロの阿呆だ。とつとと帰つちまえ。そして一生戻つてくるな」

「誰が戻るかこんなところ。愚図の寄せ集めの城になど戻りたくもない。石橋に壊されちまえ。ここは耐震強度偽装している。俺の家の犬小屋のほうがよっぽど丈夫だ」

土屋は低脳のようなジョークにやっとした。クリフォードの顔にカッと血が上った。

「そんなことがよく言えるな！何人もの人が死んだというのに！」

「だからなんだ？」

土屋は開き直った。

「俺に八つ当たりするな。それにもっと建物を丈夫にしていれば、犠牲者は減ったんじゃないか？俺が見たところ、石橋が一番レベルが低い爆発系呪符を利用していた。そんな低級呪符で壊れるなんて砂のお城と一緒にじゃねえか。壁に鉄板入れるとかしたらどうだ？そうすりゃ瓦礫に押しつぶされる人はいなくなると思うぜ」

「うるさい！」

フローラが怒りをあらわにした。

「あんたのアドバイスなんて必要ないわ！あんたなんてとつとと……！」

土屋の体からどす黒く冷たいオーラが立ち上った。私たちにそれがぶつかり、ひっくり返された。土屋は私たちを盛大に嘲笑した。

「お前らほんとに口先だけだな。今のオーラぐらいでひっくり返るなんて、なんてザマだ。笑い話にもならねえ。俺に勝てる力もないくせに、石橋を倒す？ふざけんじゃねえよ。正義のヒーロー気取ってできないことをやろうとするなんて、そんな奴らただの愚者だな」

土屋は言うだけ言うと、部屋の中に引っ込んで行った。

私たちは吐息をもらし、お互い顔を見合わせた。

第十七話：破壊の後…2

私たちはフィオナのベットに戻り、ちよつとだけ土屋の悪口を言
った。私はその話が一段落すると、さっきのことを切り出した。

「私が石橋を追っ払ったって言ってたよね？それって本当？」

「ええ」

フローラが神妙にうなづく。

「幸乃はすごかったよ。俺、感心した」

クリフォードも私をほめる。私は眉をひそめた。

「どんな風に追っ払ったの、私」

「えーっとね。地震を起こしたり、石橋の首を絞めて、火傷を負
わせたり。俺の見る限りでは、なんか互角って感じだったよ」

地震？私が石橋の首を絞めた？

私は愕然とした。私が石橋と互角？そんな可能性は万に一つありえない。石橋が熊だったら私は鼠。そのくらいの差がある。

それに私の記憶にはそんなの全然残っていない。

私、おかしくなったのかな……？そう思うと怖くなってきた。自分が怖い。

「幸乃さん？どうしました？」

フィオナが私の手を温かい手で包み込んだ。

私は必死に笑みを浮かべる。

「なんでも……ないよ。私だって怖かったんだから」

「私は見ていませんでしたけど、その恐怖は分かりますわ。私も、石橋が来たとき、怖かったですから」

「どんな風にして襲われたの？」

「私は自室でのベランダに出て、森を眺めていたんです。そのとき、警報が鳴ったのですね。すぐに広間に行こうとしたんですが、そのとき後ろから……」

「じゃあ広間にいたのはすでに石橋だったのね」

フローラが齒噛みした。

「おかしいと思った。化粧水のことから分からないわけだわ。男をオトすって方法も、嘘だったのね」

「それは嘘じゃないと思うよ」

私は顔を歪めながら言った。

「だって、土屋は一時間以内に気落ちしたもん。どん底に落ちたってことだね」

なんとたちの悪い冗談か。ユーモアもひねくれているらしい。

「土屋さん、本当に出て行ってしまうのでしょうか」

フィオナが悲しみにくれた声を出した。クリフォードは、さあ、と肩をすぼめる。

「分からない。でもあのままだと確実に出て行くな。邪殺屋もあんなもんなのか」

「でも土屋は」

私の口から言葉が漏れた。皆が一斉に私を見る。

確信があつた。土屋はやっぱり混乱しているのだ。土屋が石橋を放っておくわけがない。妹、加奈、この二人を殺されたのだ。許すわけがない。

「土屋が石橋を放っておくわけないよ。出て行かないもん」

「そうかな？俺はそうは思わないけど」

クリフォードが難しい顔をした。

「さっきの土屋のオーラ、なんつーか俺らに対しての嫌悪が含まれてなかった？」

「なんであたしたちが嫌われなくちゃならないわけ？」

フローラの声に怒りが帯びた。さらに言い募る。

「アイツは勝手すぎなのよ。勝手に何か決め付けるし。人間関係ではどんな風に使っていたのかしら。ていうか、学校とかでちゃんとやっていったのかしらね？」

「土屋は学校に言ったことなんて一回もないんだよ」

私は暗く言った。

「私たちと会うまでは、同年代の人と（石橋は除く）話したことなかったって」

「そりゃ可哀想ね」

フローラが皮肉ると座りなおした。

土屋が私のことを友達だと思ってくれているのかは分からない。私はそう思っているけど、相手はどう思っているのだろうか。

いつの日だったか土屋は、友などアリで充分だ、と言っていた。友達などいたところで邪魔になるだけだ、と。

土屋にとって友達は、それぐらいの重さなのだ。友達なんていなくても生きていける。

私の胸がちくりと痛んだ。土屋に楽しい子供時代などない。だから友達の大切さを分らない。

石橋はどうだ？奴は小夜子を大切にしていたと思う。本人は決してそうは言わないだろうが、思い返してみればそうだ。奴は心の底まで悪に染まりきったわけではないのだ。石橋が小夜子に向かつて暴言を吐くこともあったが、あれは単なる戯れに過ぎないのだろう。

もう考えるのはよそう。考えれば考えるほど、あの殺人鬼が優しく思えてくる。

私はこれからどうするのか皆に尋ねた。

「んー。やっぱクリスティーナ・コルネリウスだな」

クリフォードがポケットからバナナ味の板チョコレートを取り出しながら言った。

「幸乃が見たって言うし。奴ほどの力があれば、気配を消すことなんて造作もないことだろう」

クリフォードはチョコを半分にポキッと折った。

「コルネリウスの家には見張りをつけたほうがいいと思うね」

クリフォードはさらに半分に折ると、包み紙を広げてフィオナの布団のひざの上に置いた。クリーム色のチョコだ。バナナのいい匂いが鼻孔いっぱいに広がった。

「食べて」

クリフォードに言われて、私たちはそれぞれに手を伸ばした。

バナナの味が食欲を湧かせた。風味豊かほど良い甘さ。口どけ

が良い。

「コルネリウスはいかにも石橋を好きそうだし、いや、実際好きだし、匿っているに決まっているよ」

クリフォードがチョコを平らげ、ぺろりと唇をなめた。

「そうでなかったら、他にどこにいますと思っつ」

「私の思いつく限り、ないわ」

「私もですわ」

私も、と首をすくめた。

詳しくは会議で、と言うことなので、この話は終了した。

私は自分のベットにもぐりこんだ。大理石の天井を見上げ、そつと目を閉じる。

私は再び夢を見た。

夢の中には加奈が出てきた。

加奈は白いワンピースを着ていて、天使のようだった。さらさらの黒髪をなびかせながら、私に何かを警告している。でも甲高いノイズで聞こえない。

少しはなれたところには黒い服を着た小夜子がいた。小夜子はひざを抱いて座り、わたしにニコニコ笑いかけ、何かを口走っている。

そのうち何を言っているのか分かった。一言だけ。

『あなたは裏切られるんだよ』

第十八話：離れていく心

あれからもう、二週間が経過していた。

この二週間のうちに、石橋に殺されてしまった人々のお葬式とか、城周辺の修復作業をやった。

お葬式のと、土屋以外の全員が泣いた。

仲間を大勢失った悲しみが結社内を満ち、泣き声は一晩中、途切れることはなかった。殺された人々はさぞかし無念であろう。

あまりの残虐さに人々は打ちのめされていた。

人間らしい思いやりの欠片もない殺し方。情けなど毛一筋もない。非人情で邪悪の結晶としか思えない。

そいつが私と同じ、十四歳の少年だなんて。

一方で、土屋は顔の筋一つ動かさずに葬式に出て、何も言わずに自分の部屋に戻っていった。

私は土屋を責めたくなった。どうして泣かないの。こんなに人が死んだのに。

でも返ってくる言葉は一言だと思う。『赤の他人だろーが』

私の中で、石橋に対する怒りと憎悪が増幅していく。

今、私たちは結社内にいるエクソシスト全員プラス、社長と広間で会議を開いていた。結社内のエクソシスト全員が集まっても広間はすかすかだった。この間石橋に壊されたところはすでに修復されていた。社長は私たちに自分の姿が見えるように、一番前の席に私たちと向き合って座っていた。

社長はおもむろに口を開いた。

「たった一人の少年のために悲しい事件が起きてしまった。今後、二度とこういうことが起きないようにする為の策を練るために、今日、諸君を集めた」

広間は静まり返っている。皆は暗い顔だ。土屋はさして会議に興味がないかのように自分の爪をいじくっている。

ラインハルト社長はテーブルの上に広げた書類に目を通す。

「なんとしてでもあの少年を捕まえなくてはならない。今後、全エクソシスト共同であの少年を追うことにしたいと思っているのだが、異議のある者は？」

最年少エクソシストの十二歳の少女が、おずおずと挙手して発言した。

「あのう……私たちもですか？まだ未熟です……」

「そうですよ」

だいぶ年上の女性が声を上げた。

「全員けしかけてしまうと、他の事件が起こったとき、どうするのですか」

「一理ある」

社長は万年筆で書類に何かを書いた。

「十二歳以下のエクソシストはこの仕事から外す。成人エクソシストの一部もだ」

成人エクソシストは三十歳でここを離れ、単独行動が許されているので三十歳以上のエクソシストは結社には数人しかいない。

「やはり熟練のエクソシストを多数出すのがよろしいかと」

さっきの女性がしっかり言うが、土屋がどうでもいいような声で反論した。

「奴はあんまし強い奴がいると、意地でも出てきませんよ」

「同感同感」

ライナーがリンゴをしゃくりと食べ、おいしそうに目を細めた。こくつと飲み込むと、馴れ馴れしく土屋の方に右手を乗せた。

「いちおうさ、アレじゃん？ 奴あ脳はやられてないわけだし、そんぐれーは考えるんじゃない？ 俺はそう思うがな」

「当然と言っちゃあ当然だな」

土屋がライナーの手をのけた。

「今まではそうだった。勝ち目がないなら決して出てこない。軽蔑されてもお構いなしさ」

「なら見習いエクソシストたちを犠牲にしると？」

女性が噛み付いた。

「まだ成熟していないのに！」

「そりゃそつちで決めてくれ。なんせ俺はいなくなるんだから」

土屋はそういうと黙り込んだ。

しばらくエクソシストたちは隣の人と意見を交換したり、ざわついていたが、それが収まると社長を注目した。社長次第と言うことだ。社長は私たち十四歳エクソシストから二十歳までのエクソシストをざっと見た。

「十四から二十までのエクソシストで少年を追うということ、いいかね？」

「はいっ」

返事がぴたりと重なった。

社長はうなずくと、ふとフィオナを見やった。

「君は外れてもいいんだが……」

ちょっと心配そうな顔をする。フィオナは仲間はずれにされたかの如く、傷ついた顔をした。

「なぜです？私はちゃんと戦えます」

「しかし……」

社長は何か言いたげだったが、ライナーの「ハッ」と言う声にかき消された。ライナーはリングを社長のほうに投げつけた。社長に当たる前にエクソシストが止めたが、ライナーは不機嫌そうな顔で

社長に食って掛かる。

「聞こえねえのかよ、糞ジジイ。フィオナはエクソシストだぜ。立派に戦えるんだよ、そこんどこ、分かってんのか？まあ、どーでもいいけど。差別してんじゃねえよ。あんたそろそろハゲるぜ」

社長の血相が変わった。みるみる顔に血が上り、数人のエクソシストは怒号を上げた。クリフォードは声を張り上げる。

「その通りです。フィオナはちゃんと戦えますよ」

社長はなにやら不満そうだが、渋々うなずいた。書類をめくると次に移る。

「えー、少年をおびき出す作戦についてだが、何か意見のある者は？」

誰も挙手しない。つまり、いないと言うことだ。

皆は顔には出していないけど、怖がっているのが分かる。石橋を恐れている。さらにこの中に仲間がいるのだから……仲間？

そうだ。この中には裏切り者がいるのだ。情報が筒抜けだ。私はエクソシストたちを順番に見る。

アシユリー、その友人イヴァ、隣の青年ゲイリー、そしてその他の成人。あと、クリフォード、ライナー、フローラ、フィオナ。

「人質作戦」

誰かが言った。目を泳がせ、その人物を探す。私の隣の土屋だった。

「人質が一番だと思うね。奴は仲間だけは大切にするからな」

「そんな人の弱みに付け込むようなマネは、エクソシストはしないわ！」

一人の女子がキーキー声で叫んだが、土屋はシカトした。

「人質をとるならこの女が一番だ」

と、テーブルに置いていた土屋の書類の山から紙を一枚引っ張り

出し、これ見よがしに振って見せた。

紙の一部が白い、髪の高い少女だ。

「霧林白稲^{きりばやししろね}。狐使いだ。奴の正義時代の友人、北条光明と同じよ
うな、もう一人の親友だ」

「ねえ、もし人質をとるのなら親とかにすればいいじゃない。何
でその子なの」

私が訊ねてみると、土屋は答えた。

「奴は親とは仲が悪いのさ。殺しの冤罪になってからな。十一歳
の妹がいるらしいが引越しているから居場所が分からない。資料
はここにあるからあとはどうにでもしろ」

「ちょっと待って。妹がいたなんて知らなかったよ」

「言っていないからな」

土屋はむっすりした。

石橋に妹がいたなんて。きっとその子は寂しい思いをしているに違いない。

私は暗い気持ちになった。フローラが拳手し、がたんと立ち上がった。

「その意見に却下。そんな作戦、誰が実行するのですか。第一、そのキリバヤシって子を巻き込むなんて。何の罪もないのに、あたしは嫌」

その後、次々反対の声が起こった。土屋は気を悪くする風もない。最初から賛成してくれるなど思っていなかったのだろう。

ラインハルト社長もその作戦に反対し、その話は終了した。とりあえずクリスティーナの家エクソシスト五人を見張りにつけることにし、解散となった。

土屋は早速わずかな荷物が入ったかばんを引っつかみ、書類をクリフォードに押し付けると正面扉に向かった。

私たちはあわてて後を追っかけた。

「待つて！どこに行くの！」

「決まってんだろ。日本に帰国するのさ」

「そんな……」

土屋は正面の前で足を止めた。私たちと向き合う。

「じゃ。せいぜい頑張ることだな」

「マジで出てっちまうのかよオ。つつまんねえ」

ライナーはあからさまに不安そうだ。強い味方がいなくなることで余裕が持てなくなったのだろう。土屋はお構いなしだった。

「だから、頑張れって言ったじゃねえか」

ライナーは何か言おうとしたが、フローラに止められた。

「こんな腰抜け、ほっときゃいいじゃない」

と語調を強め、クリフォードは資料を抱えながら軽く息を吸い、吐くのと一緒に言った。

「ここから空港までは結構かかるぜ」

「俺をなめてもらっちゃ困る。いちおう十四年は修行してるんだ。音速ぐらいのスピードは出せる」

「……そうか」

「そ。二度と会うことがないことを祈ろう」

土屋は吐き捨てるように言い放った。フィオナはうつむいて、涙をこらえていた。フィオナはなぜだか土屋が好きなのだ。

土屋はとつと外に出て行った。私はしつこく後を追いかけた。

「ねえ待つて。土屋らしくないよ。まさか本当に石橋のことあきらめるの？」

「うるさいうるさいうるさいうるさい……」

連発した。土屋が私にガンを飛ばし、その形相に門番までがざくりとした。

「あんな狂ったイカサマ野郎なんて、もうどうでもいい！俺はもう奴のお遊びに付き合うつもりはないんだよ。そしてお前らの逮捕ごっこにもな。俺は真面目な仕事に戻るために日本に帰る。奴に会ったら伝えといてくれ。俺は降参した。いまですいませんでした。宮村小夜子を殺したことを許してください、とな！　あ、そうそう。お前アイツと互角にやりあったそうじゃないか。とつと殺しちまいな」

土屋は私が瞬きするともう消えていた。

「ま、待つてよ！戻ってきて！今すぐ」

私は一人でわめいたが、戻ってくる気配はなかった。

私はすごすご城の中に戻った。

泣きたかった。まさか土屋が本気で私を置いていくなんで、夢にも思っていなかったのだ。

あんなのもう、土屋じゃないよ。

加奈がいてくれたら、ばしって言うてくれるのに。

加奈……。

第十九話：公然の秘密

ここに来てもう一カ月半ぐらいになると思う。

私たちは不安だった。土屋が去って早一週間。土屋はどうしているのだろう。メールを送っても返事は来ないし、どうしようもない。

私は広間の片隅で、土屋が残っていた資料を眺めていた。

そしてある資料で驚くべき事実を知り、息を呑んだ。

見出しは『ただの人間殺しについて』だ。

石橋はどうやら普通の人間のことは無差別に殺していたんじゃないらしい。

特殊能力の存在に気がつき、蔑んだりあこがれたりしている者たちだけを殺しているのだ。修験者の佐野健吾は、『化け物扱いしてくるだろう人間たちへの復讐』と言っていたが、どうやら違ったらしい。

と言うことは、特殊能力の存在は案外広く知れ渡っていると言う

ことか？特殊能力のことは政府が最高機密情報として保管しているはずなのに。どこかでもれたのだ。

大山市のデパート爆破事件で亡くなった人も、今まで特殊能力者じゃないのに殺された人も、皆特殊能力者の存在に気がついてた……？まさに公然の秘密ではないか。考えてみればそうだ。石橋の親友は、石橋が特殊能力者だからいじめられた。特殊能力のことは公になっていないのに、どうして生徒たちは石橋のことを特殊能力者だと分かったのかなんて疑問、今ままで気がつきもしなかった。

石橋はあくまで特殊能力のことを憎んでいるのだ。

じゃあこの前、石橋が爆破した巨大工場にも特殊能力に関係する何かが？爆破された高層ビルにも、相次いで殺されていくその工場の従業員も。

石橋は特殊能力者や、その存在を知っている者を殺している。特殊能力があつたと言う事実さえも消そうとしているのだ。

私は近くにいたクリフォードを呼び止め、相談した。

クリフォードも普通の人間が特殊能力の存在に気がついていたらなんてことは知らなかった。驚きを隠せない様子だった。

「でも知っているのはごく一部の人だろ」

クリフォードが不安そうに言った。

「石橋がそういう人たちを殺す前に、保護しないと……」

「土屋はそのことを知っていたのかな？」

「土屋がその資料を書いたんだし、知ってるだろ。多分知ったのはつい最近だろう。知ってたなら言ったはずだし」

クリフォードは私の隣に座って、遠くを見るような目つきをした。

「……裏切り者を探そう」

クリフォードがぼつんとつぶやいた。外には冷たい雨が降っていた。私は顔を上げてクリフォードを見た。

「でも、エクソシストの誰かでしょ？探せるかな」

「見当はついているんだ。候補は何人かいる」

クリフォードがひたむきな視線を私に送る。

「土屋のことを見張れないのが残念だな」

「え？」

「土屋が石橋の仲間の可能性だって、あるじゃないか。土屋はここから逃げて、奴と合流したのかもしれない」

「そんな！」

私はくらつとするほどかぶりを振った。

「土屋は違う！絶対違うもん！あんな狂った野郎の仲間になんか絶対ならない！土屋はね、優しいんだよ！エクソシストとかには冷たいけど、日本にいたときは本当に………！」

「幸乃はそういう風に言っているけど」

クリフォードが言いにくそうにさえぎった。

「それが仮の姿かもしれないだろう？完璧な演技かもしれない」

「だけど……！」

「手伝ってほしいんだ」

クリフォードとぴたっと目が合い、私は黙った。

「エクソシストを見張るんだ。今は幸乃しか信用できない。二人でエクソシストを見張る」

「フローラは？ライナーは、フィオナは？」

「その……信用できない」

「どうして？なんで信用してくれないの、皆を！ライナーはピンチのとき、死人を召喚してくれたでしょ！フローラだって戦った！フィオナは私たちのこと心配してくれてた！違う？」

「でも、皆怪しいんだ」

クリフォードは真剣に訴えた。

「ライナーにはあの電話のことがある。そして石橋が広間を爆破したとき、ライナーはどこにいた？俺の記憶だと石橋が爆破する五分前に上階に戻って行った。その前は広間の女子をナンパしていたのに、いきなりやめて。そしてフィオナ。フィオナは警報が鳴ったのでベランダから中に入ったところを襲われた、と言っていた。そもそもなんでベランダにいた？冬なのに。あとフローラ。サラマンダーを召喚したとき、なぜ攻撃しなかったか」

「そ、それは石橋がバーベキューとかいったから……」

「いつもならそれくらいじゃ怯まないんだ。土屋の場合は全てが怪しい。何で俺らをそこまで嫌う？その拳句、日本に帰っていまやメールも通じない」

私はたじろいた。言われてみればそうだ。

クリフォードは私に止めを刺した。

「俺は石橋がフローラかライナーのどちらかと目配せしたところ

を見たんだ」

私は絶句した。

「あの二人のどちらかは裏切り者だ。そして、裏切り者は一人と
は限らない」

クリフォードの声は苦しそうだった。

第二十話：公然の秘密… 2

*

*

*

日本についたのはあつという間だった。

飛行機に乗るのももどかしく、俺は音速で日本に帰った。

関東のある山奥に向かい、頂上あたりの降りたつ。雪が積もっていて、かすかに霧がかかっている。肌寒いが俺は陰陽師なので凍えるほど寒くはなかった。

鬱蒼とした森の中は、眼をつぶって歩けるほど慣れていた。

しばらく歩くと暗い森の奥に自分の生まれ育った家が見えてきた。古い木造建築だ。平安時代の寝殿造りのような形で、先祖代々の家である。

城門から中に入り、庭に出る。庭は呆れるほど広く、小川も流れている。庭に入ると周りの霧は消えた。あの霧はここを隠すための霊力の霧なのだ。

縁側には親父と客と見られるスーツ姿の中年男性がいた。向き合
って何かを話している。親父は相変わらずの羽織袴を着ていた。俺
に気がつく、こわもての顔がぱつと輝いた。

俺は右手を上げて軽く振って見せた。

「弘！やつと帰ったか！てつきり殺されてしまったのかと……！」

「そんな簡単にくたばらねーよ」

見かけによらず、親父は優しく頼もしい。俺は男に会釈をした。
男も愛想良く笑う。幸多そうな温かい笑みだった。

「こんにちは。君が土屋弘くんだね？ちょうど君の話をしていた
のだよ」

「俺の？」

男はにこやかにうなずいた。

親父は「夏見、帰ってきたぞ！」と自分の妻の名前を叫ぶ。俺は

靴を脱いで縁側に上がった。久しぶりに帰った。妹飛鳥が殺されたとき以来だ。

お袋が浴衣姿で居間から出てきた。お袋は最初から俺が生きていることを信じていたようで、少女のような笑みを浮かべて「おかえりなさい」と言う。俺はそっけなく手を振って、風呂にでも入ろうとしたが、親父に押されて居間に入る羽目になった。中は温かく、冷え切った体を温めてくれた。親父は男と座卓を挟んで座り、俺は親父の隣に座った。

お袋は

「お茶を出すわね」

と居間から出て行った。俺はそわそわした。ただでさえ苛立っているのに、次は何だ？

口火を切ったのは男だった。

「私は教育委員会の山下というものだよ」

「教育委員会？」

俺はあまりにも馴染みのない言葉に愕然とした。教育委員会のことは知っているが、なぜここにいるのだろうか？

「親父、教育委員会って、俺を学校に入学させる気か？」

文句を言ったが無視された。親父は淡々と俺に語りかける。

「弘、お前にもやはり、友人と言うものが必要だと思ったんだ。飛鳥のこともあったし、当分は邪殺屋の仕事は休止していい。そして学校にでも行って、友人を作り、骨休めしろ。山下さんのことは、わたしが呼んだ。サイコキネシストだから邪殺屋のことも相談できていいと思ったんだが……」

「ちょ、待て。俺は学校になんぞ行かねえよ。友人もいらん」

俺は猛反発した。

「しかも今さら？勉強追いつけねえし、行ったところで意味ねえだろ！」

「勉強のことはいいがやはり友人は作ったほうが……」

「友ならポチで十分だろ」

俺はせせら笑った。

軽く口笛を吹くと激しく吼える犬の声がし、オスの茶色い柴犬が障子を破って部屋に転がり込んできた。俺の横に座るとばたばたと尻尾を振りまくる。俺は耳の後ろをかいてやりながら、これ見よがしに親父を見た。

「ポチ、あっちへ行っていないさい」

親父が言っと、ポチはすごすごと自分があけたばかりの障子の穴から出て行った、山下さんは俺に向かって真剣に言う。

「しかしね、人間関係の築き方は子供のうちに学んだほうがいいのだよ。君は生まれてからずっと邪殺屋の修行をして、学校には一度も行かなかったそうじゃないか。今はその、楽しい子供時代を取り戻すチャンスなのだよ」

「いや、いいんです。子供時代は楽しかったですし、修行は厳しくも面白いものでしたし……」

「射殺屋の仕事は高校卒業後でもいいだろう」

親父の声が尖った。

「実際、私はそうだった。そこで夏美と出会い、結婚したし、高校の友人とは今でも……」

「知るかよそんなの」

「高橋家の娘はそうするつもりなんだろう。どこにいる？一緒にはないのか？」

「あんなの外国に置き去りにした。奴がどうしようが知ったことじゃない」

「お前のために言っているんだ」

親父の体から苛ついた霊力がほとばしり、俺は黙った。山下さんは息を吞んで身を縮めた。

「いいか。これから先、人と関わる機会が増える。そのとき、何をどうしていいか分からないと、非常に困るんだ。行きなさい」

「はいはい行きますよ行けばいいんだろ行けば!」

「それでいい……山下さん」

山下さんと親父が書類をまとめている間、俺は心の内で毒づいた。

恩着せがましい頑固親父! 腹が立つ。学校など糞食らえだ。

エクソシストと言い、高橋幸乃といい、学校と言い、次から次へと一体なんなのだ?

なんといつてもあの石橋だ。あのツラ思い出すだけで腹が立つ。人を馬鹿にしゃがって。

あのエクソシスト虐殺事件のとき、戦う気力もなくて俺は一人で逃げた。出て行ったところで殺されるだけだった。

勝てない戦いはしないというのが邪殺屋の流儀だ。命を無駄にしない。てはならない。

「弘、石橋健はどうなった」

親父が尋ねてきた。

「あいつは宮村小夜子の霊力を吸って俺より強くなった。魔法結社をぶっ壊そうとして何人ものエクソシストが犠牲になった。俺がいても何の役にも立たない。だから逃げ帰ってきた」

「なるほどな」

「それにエクソシストがどうにかするって言っし、俺の出る幕はもうない」

「弘」

親父の口調が神妙になった。

「この間、政府から連絡があった」

「政府？」

その場はお袋に任せて、俺と親父は縁側に出た。親父は真剣そのものだった。

「石橋健の事件が思った以上に深刻でな。マスコミにごまかしが効かなくなってきたんだ。何かに感づいたんだ。政府は特殊能力公開を考えている」

「何？ふざける、んなことしたら世界中が大混乱になっちまうじやねえか」

「ああ。そうなると大変なことになる。世界中がパニックを起こすだろう。政府は特殊能力者は危険だと言うことで能力者を全て捕らえ、閉じ込めようと計画している」

「閉じ込める？政府がそういつたのかよ」

「政府にそのことを訊ねたら黙秘を決め込んでいた」

「ということは、閉じ込め計画があるってことだな。で、反論はしたのか」

「したが聞き入れてもらえなかった。あくまでも閉じ込められるのは能力者で自分たちではない、そう思っているんだ」

親父が俺を見た。

「なんとしても石橋健を止めなくてはならない。政府たちが怯えているのはあくまでも石橋だ。奴が捕れば全てのことは収まる。わたしが直接行く」

「石橋は出てこねえよ」

俺はイライラを募らせた。

「強い奴がいると、何が何でも出てこないんだ。というか、奴が捕まる前に特殊能力のことが公にされちまったら、俺らも収容されて奴は一生捕まらなくなっちまうよな？」

「そういうことになるな……」

「どうするんだよ」

「捕まらないように対抗するしかない。これ以上、石橋に殺させるわけには行かない。弘、奴に弱点はないのか」

「あるけど、その案はもうエクソシストどもに渡しちまった」

「今は連中に任せるしかないと言っことか……お前はともかくここですじとしてゐる。邪殺屋の仕事はしばらく禁止だ」

「なっ……！……分かった」

親父に睨まれ、しょんぼりした。邪殺屋の仕事ができないなんて、最悪だ。

邪殺屋の仕事をしない代わりに学校に行けと？人笑わせなものだ。情けないったらありやしない。

俺は吐息をつき、ふと思いついた。

「親父」

「なんだ」

「俺が邪殺屋休止になったらさ、親父だけで邪殺屋やるのか」

「いや。親戚が復帰してくれると言ってくれた。邪殺屋は六人だ。あゆみはまだ中学生だから、邪殺屋の活動には加わらない」

あゆみというのは俺のいこだ。

「……そう。それと」

「なんだよ」

「邪殺屋は逮捕屋になった」

「は？」

「殺すのは禁止になったんだ」

親父が苦笑し、庭で遊んでいるポチを見やった。

「殺したら刑務所行きになる」

「なっ何でだよ！」

俺は憤慨した。今までのしきたりがぶち壊しではないか。

「俺はもう、四人ぐらい殺しちゃったじゃねえか！」

「次からは、だ。政府がこう言ったんだ。いくら犯罪者でも生きる資格はある、とな」

「従う義理はねえ！ いままで誰が政府どもを守ってやっていたと思っただよ！ ふざけやがってよ！」

「私もそう思ったんだが従わなければ拘束すると言われてしまってたな」

俺はひるんで何も言えなくなった。そのうちムラムラと怒りがこみ上げ、食って掛かった。

「結局政府のせいになにもかもぶち壊した！ しきたりをぶち壊した拳句、能力を公開にする？ ありえねえ！ ちくしょう、奴らは単に特殊能力者を収容したいだけだよ！」

「かもしれない……」

「なんだって……くそっ、もうどうにでもなれ！」

俺ははだしのまま庭に飛び出した。

第二十一話：ケイティ・バレット

*

*

*

「よう。なにしてるんだ？」

私はびっくりして飛び上がった。今、広間でフローラとフィオナと一緒にマフラーを編んでいるところだった。私のマフラーはピンク色だ。振り返るとライナーがいた。茶髪の一部が赤く染めてある。

「ライナー。髪、ちょっと染めたんだね」

「お、気がついてくれたか」

ライナーは感じのいいニヤニヤ笑いをした。

「そーそー。クリスマスヘアーよ」

「なにがクリスマスヘアーよ。あほくさ」

フローラがくすつと笑った。ライナーは鼻を鳴らす。

「もうすぐクリスマスだろ。だから暖かい色でさ。な、分かんねえかな」

「分かるよ分かる〜！」

私ははしゃいだ。ライナーの眼が動き、私の手元のマフラーを捕らえた。

「幸乃ちゃん、ひよつとしてそれ、俺に編んでくれてるのか」

「自分用だよ〜」

私は網掛けのマフラーを軽く振った。ライナーはむっと唇を尖らせた。

「ちえー。つまんねえの。クリスマスと言ったら恋人だろ。クリスマスは恋人と過ごすに限る。二人きりの熱い夜」

「恋人、かあ」

確かに私もあこがれてしまう。私も恋人がほしい。真っ先にクリフォードが思い浮かんだがかき消した。

ライナーは白いマフラーをせっせと編んでいたフィオナに声をかけた。

「おいフィオナ」

フィオナは手を止め、ライナーを見る。

「どうしました？」

「フィオナはさあ。恋人にしたい人いる？」

広間にいた若い男性たちが一斉に耳をそばだてた。

「わたしは……」

フィオナが言いかけて口をつぐみ、みるみる大粒の涙をその目に溢れさせた。何とかこらえると、マフラーをテーブルの上に置く。

「私はその……」

「ライナー、やめなさいよ」

フローラがむっとした口調で言った。ライナーはフィオナの気持ちに気がつかなかったらしい。フローラと同じ口調になる。

「なんでだよ。ははー、フローラはもてないから嫉妬してるのか
ー」

「うるさいわね」

フローラがそっぽを向いた。フローラはちょっとしたきついところがあるけれど、ちゃんと乙女心がある。私は肩をすばめ、マフラーを編むのを再開した。

私はこの三人を見張ることになっていたので、ずっとここにいればよかった。クリフォードは成人のほうを見張ることだ。仲間を見張るなんて気が進まないが、クリフォードは真剣だった。だから仕方がない。午後はここに収容されているクリスティーナの友人、

ケイティ・バレットの所へ行くことになっていた。クリスティーナについて、何か知っているかもしれない。

ケイティはエレキネシスト、つまり発電能力者。住んでいる都市のコンピューターを破壊し、大停電を起こした罪で、フィオナに捕まったそうだ。

昼食をとると、私とライナーとフローラと一緒に始めての監房棟に向かった。エレベーターで五階に上がり、ドアが左右に分かれる。すると、白い壁が現れた。行き止まりか？

「ここに手を乗せて」

フローラがその壁の真ん中に書いてある正方形を指差した。三十センチ四方ほどの四角だ。私はそつとそこに手を乗せる。フローラとライナーも開いた部分に手を置いた。すると壁が上に上がり、私はあわてて手を引っ込めた。この壁はシャッターだったのだ。静脈認証システムという、ハイテクなセキュリティシステムだ。シャッターの奥は広い廊下だった。天井も壁も床も全てが白い、清潔で無機質な廊下。上には小型監視カメラが設置されており、壊されないように透明の球体の結界で覆ってある。やがて左右に壁同様白いドアが現れた。等間隔に並んでいて、たまに警備員とすれ違う。進むにつれて、通路は右や左に曲がりくねり、入り組むようになっていた。まるで迷路だ。囚人が逃げにくいようにするためだとフローラが教えてくれた。エクソシストたちはここの通路全てを暗記しているらしい。

奥に行けば行くほど、罪が重くなるのだそうだ。死刑囚の部屋は一番奥で、石橋のための部屋はすべて用意してあるらしかった。ある通路に入ったとき、このドアだけ黄色くなっていることに気がついた。ドアにはプレートがそれぞれかかっていて、それには”取調室”と番号がふつてある。

私たちは取調室10に入った。この部屋も廊下と同じく全てが真っ白で、天井の四隅には監視カメラが設置してある。広さは学校の教室の半分くらいだ。部屋の真ん中にはアルミ製の椅子と机があった。その一つには年上と見られる女子が座っている。茶色い髪は高い位置で一つに結い上げられ、服は囚人用の白い服だ。この子がケイティ・バレットだろう。

私たちは彼女の向かいに座った。ライナーが真ん中である。

ケイティが唐突にしゃべった。

「あたしに何の用？」

ケイティは低脳のように語尾を延ばす。脇からはみ出した髪の毛をいじりながらふんぞり返っている。

「ここ、マジで暇なんだけどー。てゆーか、さっさと出せって感じー。で、何？クリスティーナがどうか聞いてんだけど？」

「そうよ。クリスティーナについて聞きたいの」

フローラが強気な口調で言った。

「クリスティーナはよく非行少年をかくまうわよね？」

「そーよ」

「あんた、最近来たばかりなんだしなんか情報持ってない？」

「例えば？」

「誰をかくまいたって言った、とか」

ケイティの目がくると動いて斜め上を見た。

「あー。そういえば日本人のこと言ってた。誰だっけ？」

間違いない。私とライナーは横目で目配せした。ライナーが割り込む。

「な、そいつアレだろ？石橋健」

「ああ！そいつよそいつ！」

ケイティがぱちんと指を鳴らした。

「クリスティーナのやつ、超惚れてんの！どんなやつか知らないけどさ、そうせろくな男じゃないんでしょ？」

「ああ。殺人犯だよ」

「あつはー。やつぱりい？ねえ、写真みせてよ。反逆者ってちょっとカッコよさそうだし、でもあたしはかわいい感じの方が好きだけだね」

ライナーは肩をすくめてポケットをあさり、所持していた石橋の顔写真をケイティに渡した。石橋の顔写真なんて見ただけで反吐が出そうだが、ケイティはしばらく食い入るように見つめ、いきなりサルのような歓声を上げた。手を数回ぱちぱち叩き、騒ぎ立てる。

「えーなにこの子！ヤッバイあたし惚れちゃったあ！なに、こんなにカワイイ子が殺人犯？嘘っ、ますますしびれるう！」

私は石橋の顔写真を覗き込んだ。愛嬌の欠片もない。

「可愛くなんかないよ。うざい顔だよ」

私がきっぱり言うと、ケイティはどれを基準に可愛いかわざわざ簡潔に説明してくれた（無論私たちにはどうでもいい事だが）。ケイティはようやくクリスティーナのことを話し始めた。

「クリスティーナの評判は一部の能力者には結構いいよ。美人だし、特に男に人気ね。でも一部の人には評判悪いわよ。あんたらみたいなエクソシストとか？正義のヒーロー気取ってる連中？クリスティーナは気に入った人には優しいけど、嫌な奴には超嫌味っぽい。見下してるって感じ？それに悪い事を考えるのは得意」

「まじか」

ライナーが眉を寄せた。

「うん。マジよマジ。あたしが大停電を起こさせるって発想も、クリステイナーよ」

それで何をしたかったのかは不明である。

「悪才に長けてるってことかなあ？」

ケイティが斜め上に目を向けた。

「だから、そのイッシーのことも養ってるかもよ」

石橋はケイティに“イッシー”と呼ばれることとなった。わたしとライナーは思わず噴き出した。

「はいはい、イッシーね。俺もそう呼ぶわ」

ライナーが賛成した。腕を組むとふんぞり返る。

「じゃ、君はコルネリウスの家にイッシーがいると思うわけだ」

「うん。でもいなくてもあたしを責めたりしないでね」

「分かってるよ」

ライナーは両手をポケットに突っ込むと立ち上がった。

「じゃ取調べ終了」

「はい」

ケイティが元気よく答えた。

「ライナーくん、また遊びに来てね。あたしはいつでもヒマだから」

「勿論」

ライナーは気取った。ケイティはライナーが気に入ったらしい。

私たち三人は取調室を後にすると、クリフォードたちに報告しに、急いで十四歳エクソシストの部屋に向かった。

第二十二話：絆

部屋に行くと、フィオナとクリフォードが何かを話していた。私たちが来ると話をやめて、真っ先にフィオナが私たちに問いかける。

「どうでしたかケイティ・バレットは？」

「石橋はクリスティーナのところにいるかもだって」

フローラが自分の回転椅子にどっかり座り、私は奥の白いソファに浅く腰を下ろした。

ライナーは自分愛用のカップに紅茶を注ぎ、それを両手で包み込んで私の隣に座り込んだ。クリフォードはそれを一瞥すると、肘掛け椅子の背もたれにもたれかかった。

「じゃあ社長に報告しようか」

とたんにライナーが鼻を鳴らす。

「けっ。なんでもかんでもシャチョーかよ」

私は背を伸ばしてライナーを見た。

「ライナーは社長さんと仲が悪いんだね」

「ああ。俺はね。偉そうなただの親父よ。老いぼれのくせに、まだ社長という職にしがみついてやがる」

ライナーは社長をけなし、愉快そうに笑った。フィオナ、クリフォード、フローラは不快そうだが、ライナーは全然気にしない。この空気を変えたくて、私は割って入った。

「ライナーのお母さんは？」

「あ？お袋か？俺のお袋はね、死んじゃったんだ」

ライナーの顔に寂しそうな微笑が浮かんだ。紅茶を一口飲む。クリフォードがいきなりそわそわしだした。私はあわてて「ごめん」と言う。ライナーはかぶりを振った。

「いいんだよ別に。あーあ。それにしてもイッシー、どこに居やがんだ？ほんと分っかんねー」

「今日本部にクリステイーナの家を見張っていたエクソシストたちから連絡が入るはずだよ」

クリフォードがささず答えた。

「もうすぐ来るはずだけれど……」

その瞬間、構内電話が鳴った。クリフォードは言葉を切り、受話器をとる。

「はい、そうですが……どうしました？……はい、そうですか……分かりました、すぐ行きます」

クリフォードはすぐに受話器を置いた。櫓の杖を手に、すくつと立ち上がる。

「すぐに正面扉に集合だ」

「ど、どうして？」

クリフォードは窓の外を見やった。天気は快晴、針葉樹の森に積

もった雪はキラキラし、見る者を魅了した。それとは逆に、クリフオードの口から出た言葉は、最悪なものだった。

「クリステイーナ・コルネリウスの家を見張っていたエクソシスト五人が殺された。今から成人エクソシストたちとともにクリステイーナの家を家宅搜索する」

私の胸が、どくんと不気味に高鳴った。

正面扉に行ったものの、私の体は変な快感に震えていた。そして、そのことに怯えていた。石橋がいるかもしれないと聞いたとたん、私の体は痙攣していた。冷たい、黒々とした殺意が私の中でうねっている。なんだろうこれ。私の中で無数の何かがはじけて霧散する。心に闇がふんわり広がり、憎しみが最高潮になっていた。

私は扉の前に突っ立ち、馬鹿みたいににこにこしていた。

石橋が殺せる。喜びを感じていた。でも私なんか倒せるわけな

い。なのに笑ってしまう。

「幸乃さん？どうしたんですか」

フィオナが気味悪そうに私を見た。私は分からないと答えようとした。自分が他人にのっとられているみたいだ、と。でも私の口から出た言葉は思いがけない一言だった。

「石橋は私が殺すんだよ」

エクソシストたちが一斉にこっちを見た。私はさらに胸を張った。

「あんなオカマ野郎は私が殺すんだよ。だから皆は手を出さないでね」

「なに言ってるのよ幸乃！皆で殺すわ！」

フローラが怒ったように言ったが私はもう自分を取り戻していた。ふるふるとかぶりを振りまくり、自分がイカレたと訴えようとした。でも吐き気がこみ上げ、しゃがみこんでしまった。

私はどうしたんだろう。胸が痛い。誰か助けてほしい。

殺せ。

不意に心の闇の中で声がした。ぎくりとして私は紗がかかった視界を見渡す。

全ての悪を。

悪？

ああそうかと思った。

私が最も憎んでいるものは悪そのものだ。憎んでも憎みきれない、おぞましい悪。人の心を穢し、操る。石橋はそうなっている。悪者は死ぬべきだ。悪者は全て私が殺してやる。

……でも、私はこの間まで、悪者でも殺しちゃだめみたいなこと言っていたよね？どうしてこんな考え方になったのかな？

ふと思った。私と石橋は似ていないか？

石橋の願望は特殊能力者を全て殺すこと。そして私は今、本気で全ての悪を殺そうと思っていた。

似ている。双子並に似ている。

石橋の顔を思い浮かべる。私は奴と何かでつながっている気がした。それに、親しみと同時に憎しみを感じていた。

そのとたん。周りの誰かが悲鳴を上げた。誰だ？うるさい奴だ。

しかし上げているのは私だった。

周りのエクソシストたちが何か言っているけど、もう何も聞こえなくなっていた。

私の意識がぷつんと途切れた。

第二十三話：絆：2

私は一人でベットの上で泣きじゃくっていた。私はフローラたちにここに運ばれた。エクソシストたちは私のために家宅捜索を先延ばしにした。そして私は約二十分前に目が覚め、私に何が起こったのか医療専門のエクソシストから聞いた。

どうやら私と石橋とかいうくそつたれは、心の中でつながっているらしい。私の中の憎しみと、石橋の中の憎しみの量が、ピッタリ重なった瞬間があったそうだ。重なると、ごくまれにテレパシックスな現象が起こり、自動的にお互いの心にアクセスする。

そうなるとうなるか。

恐ろしいことに相手の人格を持った自分が心の中に現れる。私の場合は石橋の人格だ。普段はいつも通りなのだが、憎しみが吹き上がったときにその人格が表に出て、私は私じゃなくなる。私は悪者と見なした者は皆殺しにするような奴になるんだとエクソシストは言っていた。

なら石橋は憎しみが吹き上がったとき、私のような優しい（多分）人格になるのかと言うと、そうではない。何しろ奴はもともと優しい性格だ。なのでその効果はかき消され、イカれたままだ。

この前皆が、私と石橋が互角に戦ったといっていた。私にはそのときの記憶がない。きっとそのとき、私と石橋の間に”絆”ができたのだ。

最悪の”絆”だ。

おかげで私はエクソシストから疑うような目で見られ、さらに十四歳エクソシストにまでそういう目で見られた。ライナーとは会っていない。きっと私に失望したのだと思う。

泣き面に蜂とはまさにこのことだ。

私は声を上げて泣き、石橋を激しくののしり、思いつく限りの悪態を吐いた。

「よう！幸乃ちゃん」

私のベットを覆っていたカーテンが突如開き、私はびっくりして飛び上がった。ライナーがいつもと変わらぬ姿で立っていた。陽気にリンゴをかじっている。私はかすれた声で、

「ら、ライナー？」

と言った。ライナーはカーテンを閉めなおすと空中からも一つリンゴを取り出し、私に手渡した。赤くて、甘酸っぱいにおいがする。私はライナーがのん気にベットの隅っこに座るのを見て、目を丸くした。

「ど、どうしてここに？」

「いや、どうしてって、ヒマだからだよ。土屋もないし、エクソシストどもは幸乃ちゃんのことですつせえしさ。黙れっつーのに次期社長の言い分はシカトよ」

「で、でもみんなの言うとおりだよ。私と石橋はつながってるんだよ？ライナーは嫌じゃないの？わ、私なんてもう日本に帰ったほうがいいって思わないの？」

「思うわけないじゃないか」

ライナーはリンゴをもう一口食べた。

「だって、幸乃ちゃんまでいなくなったらつまらないし。だろ？ユーモアゼロのエクソシストのことなんか無視しちゃえよ」

私はしばらくして何回もうなずき、うれし泣きした。嬉しかった。エクソシストの皆に見捨てられたかと思っていたのに、ライナーは寄り添ってくれた。いつもと変わらない態度で。ライナーはほんとの仲間だった。困ったときに寄り添ってくれる、上辺だけの友達じゃない本当の友達。

ライナーは私が泣き止むまで慰め、ようやく泣き止むと話題を変えてくれた。

「ところで幸乃ちゃん」

「なあに？」

「あのさ、アンソニーの奴、俺のこと裏切り者って思ってたんじゃない？電話がどうのとかで。あの電話の相手、実は土屋の両親なんだ」

「え？」

私はいまだに涙にぬれた目を大きく見開いた。

「ど、どうして？」

私は頭上にクエスチョンマークをぐるぐるさせながら問いかけた。
ライナーはカーテンの外を確認し、首をすくめた。

「定期的にこっちのレベルとか犯罪の情報を伝えているんだ。最近ちよっと大変だし」

「なるほどね。エクソシストと邪殺屋は仲が悪いから、そーゆー関係がばれるのが嫌で、今まで隠していたのね？」

「そーゆーこと」

ライナーが腕を組んで小首をかしげた。

「にしてもイッシーと絆ができちゃうなんて、運悪いね」

「うん」

私は目を伏せた。

「でもさ、たとえ絆ができたって、いいじゃん」

え？

私はライナーの緑っぱい目に目を移した。

「だって、それほど悪を憎んでいるってことだろ？ いいじゃん。幸乃ちゃんが石橋の人格になったって、幸乃ちゃんは幸乃ちゃんだろ？それに、その人格でイッシーとおんなじくらい強くなれるらしいし」

「……ありがとう！」

私はにつこり微笑んだ。ライナーは軽く笑い返し、ふと思い出したように続けた。

「そうそう、土屋から返信があったぜ」

「え！」

私の胸が飛び上がる。

「なんだって？」

「俺は邪殺屋の仕事を休止させられているから、メールはもう送ってくるな。迷惑千万だ。　　だそうですよ」

「それだけ？」

私はへろへろ声になった。

「ああ。しかしな、アンソニーどもは奴を連れ戻すことを決定したみたいだぜ」

「土屋を？」

「うん。アンソニーどももよ、イッシーが怖いみたいだぜ」

ライナーが「くくっ」と笑った。

「やっぱり土屋が必要、とか言ってるけど、ありや」怖いから助けてください”の間違いだな。行くのは三日後だってさ」

三日後……。

土屋に会える！邪殺屋の仕事が休止だろうがなんだろうが知るものか！

「あ、そうそう。後一つ」

ライナーが人差し指であごをつついた。

「イッシーは、エクソシスト以外の能力者殺しはやめたらしいぜ。ここ最近は公務員とかばっかしらしい」

「エクソシスト以外の能力者を殺すのをやめた！？」

私はぎよつとして悲鳴を上げた。

奴があれば憎んでいた能力者を殺すのをやめただなんて……。ていうかなんで公務員なのだろう？

ライナーはひょいと立ち上がる。

「じゃあ俺は行くよ。あとでアンソニーがうるさいと嫌だし」

私は顔を上げ、こくんとわずいてもう一度お礼を言った。

私は石橋のことを考えながらライナーがくれたリンゴを見つめた。
リンゴを袖で拭くと、私は一口、リンゴをかじった。

第二十四話：日本へ

私たち十四歳エクソシストは、結社の正面扉の前にいた。相変わらず外は雪で、とっても寒い。

目の前には直径二メートルほどの黒い穴が、空中に開いていた。この中に入れば土屋の近くにいけるといふ。そう、私たちは今日、土屋を連れ戻しに行くのだ。あの日から三日後、フローラ、フィオナ、クリフォードは相変わらずよそよそしかった。私は感じていた。三人は怖いのだ。私がおかしくなるんじゃないかと。一方でライナ―は私のことを気遣って、いつも一緒にいてくれた。私と石橋がつながっていることなんて気にも留めず、毎日のようにくだらないジョークを飛ばし、私と一緒にリングを食べまくる。今日もいつものように、私とライナ―ははしゃいだ。

「土屋、何してるのかなあ？」

「さあな。あの顔だし、ハーレムにでもなってるんじゃない？ チツ、うらやましい」

「あはは、そうかもね！ 見るの楽しみだなあ！」

「そんなにはしゃがないでよ。遊びに行くわけじゃないんだから」

フローラが水を差した。私は気まずくってうつむく。ライナーは
気にする風もない。

「なんだあおめーら。つまんねー奴らだな。初の日本来日なの
よ。ある意味では不法入国？てゆーか、幸乃ちゃん親に会ってかな
いの？心配しているんじゃない？」

「そんなヒマはありませんわ」

フィオナがきっぱりと言った。

「すぐに戻ってこないと、石橋が……」

「石橋石橋石橋石橋石橋！てめえら、そろいにそろってうるせえ
ぞ！」

ライナーが突如豹変し、かなりたてた。三人は怯えて一歩下が
り、私はライナーの怒りようにびっくりして飛び上がった。

「確かにそうだけどよ、ちつとは幸乃ちゃんのことも考えてやれ
よ！俺らはいつでも親に会えるけどよ、幸乃ちゃんは会えないんだ
ぜ？親だって幸乃ちゃんのこと心配しているし。それにさ、なんて

いつか？お前ら幸乃ちゃんにきつすぎ。絆とやらができたたんによそよそしくなりやがってよ。エクソシストとの間の絆って、そんなに弱いもんなのかよ？」

私はこんなに言ってくれるライナーに感激して、泣きそうになった。ライナーはカッカしながら続ける。

「お前らの言う通り、イッシーの事も大事だけど、仲間の事だって大事だろ？もし仲間のことはどうでもよくってイッシーのことばっか気になるって言うのなら、いっそイッシーの仲間になっちまえよ！」

「ライナーの言うとおりだ」

クリフォードが頼り無さげな声を出し、視線を私に固定した。

「ごめん幸乃。俺、幸乃を傷つけちゃって……」

「私もですわ」

フィオナは一刻も早く私に謝りたいという様子で言った。

「幸乃さんは幸乃さんです」

「そうよね。ごめんね幸乃」

皆が切なげに言ってくるので私は思わずかぶりを振った。くらつと来たほどだ。

「いいの、いいの。私だって自分が怖い。それに、皆が悲しくなると、私も悲しくなっちゃうから。ね？笑って？」

私たちは仲直りして、無言でニコニコお互いの顔を見つめた。周りから見ればさぞや不気味な光景だっただろうと後々思った。

「じゃあ行こう」

クリフォードが穴に一步近づいた。フィオナが一番初めに穴の中に入る。その美しい姿はすぐに穴の闇にまぎれ、クリフォードが続く。

私はマフラーに口元をつずめ、日本の領域へと足を踏み入れた。

出たところは山奥の峠道だった。

二車線の道路の左右には広葉樹の木々があり、葉の無い枝には雪が乗っかっている。道路一面ぐしゃぐしゃした雪に覆われ、泥と雪の白が交じり合っている。でも泥を残したのは車の車輪ではなく、人だ。靴の跡が無数にある。道路の向こう側はカーブになっていて見えないが、向こうから人が来たと見える。

イギリスよりは寒くなかったが、それでもやはり寒い。空は冬の雲ですっぽり隠れ、今にも雪が降り出しそうだった。

いくら寒くても手袋はしていなかった。手袋をするといざと言うとき攻撃を繰り出せないからだ。

私はもう一度あたりを見渡した。土屋は見当たらない。

皆が穴から出ると、クリフォードは杖を振って穴を隠し、不安そうに私に尋ねた。

「本当にここ、日本？」

私は地面の雪を軽く炎で溶かし、脇の標識を見た。『この先カーブあり』と書いてあることからここは間違いなく日本だ。私はうなずいた。

ちょうど昼ごろの日本に行くようにしていたので、今は一時ごろだろう。

カーブの向こうに誰かが現れたのでそちらを見やると、セーラー服の上にコートを着た中学生二人だった。何かをおしゃべりしながら笑っている。

「向こうに学校があるみたいだね」

私はカーブのほうを指差した。

「そうですね。行ってみましょう」

フィオナが歩き出したので私たちもあわててその後に続く。ヘアピンカーブを曲がると、中学生たちが下校中だった。友人と話しながら、そして私たちをじろじろ見ながら早足で歩みさって行く。

私は三人グループの女子に声をかけた。

「あのお、土屋弘って人、知ってますか？」

三人は訝しそうに私を見つめ、戸惑いながらうなずいた。

「知ってるわよ。ウチの転校生だけど……」

私は目をむいて四人を振り返った。四人とも愕然としている。ただし、ライナーはにやついている。

学校？あの土屋が？信じられない。

「土屋君に何か用？」

三人は警戒するような目つきをした。私はあまりの目つきにひるみ、ライナーの後ろに隠れる。

「わ、私たち、土屋の友達なの」

三人は警戒を解かないまま「そう」とつぶやく。

「多分もうすぐ来ると思うわよ……ほら」

女子の一人が後ろを指差して、三人の下校中の男子を指した。男子三人は深刻そうに何かを話し、たまにひやひやするような笑いをしている。その中の一人が土屋だった。学ランを着ているがコートは着ていない。

私は土屋が友達といることに大いに驚く。あれほど馬鹿にしていたのに。

その指差した女子がその三人に向かって大きく手を振った。

「ねえ！土屋君！お友達が来てるよ！」

土屋がこちらを見たので、私はだだっとな前に出て、思い切り叫んだ。

「土屋！」

土屋の友人もこちらを見た。

土屋は一瞬目を空中に漂わせたあと、もう一度私に視線を固定する。土屋たちの足が三メートルほど前で止まった。私は会えたことが嬉しくて、犬のように飛び跳ねまくった。

「土屋！よかった！」

フローラは挨拶の時間など全くとらなかった。

「あんたなにしてんの？とつと戻ってきなさいよ！」

土屋の友人は訝しげに私たちをじっくり眺め、土屋を見た。

「はあ？ていうかコイツラ、誰ですか？なんかカルト宗教みてえなかんじじゃねえか」

友人のうちの一人のロン毛が自分のジョークに「ぎやははは！」と笑う。もう一人の背の小さい男子は「ひひひ」と笑う。

「カルト、ねえ？ いや、でも見たところ魔術士、てかんじ」

私たちはぎくりと身を固める。特殊能力者じゃない、一般の人間にバレたと思ったのだ。でもフローラとクリフォードの服装からして、誰の目にもそのように映ることを悟り、ほっとした。この二人はコスプレでもしていると思ったのだろう。

土屋はキツと私たちをにらみつけた。

「何の用だよ」

「決まってるだろ。お前を連れ戻しに来たんだよ」

クリフォードがあくまで穏やかに言った。土屋は大仰に目を見開く。

「どうしてだ？ 俺を逮捕する気か？」

「なんであんたを逮捕しなくちゃならないわけ」

フローラの目じりが上がる。

「今は少しでも人材が必要なのよ。たとえあんなのような腰抜けでもね。来なさいよ。石橋健が今、最高潮に暴れまくってて……」

「最高潮？いつものことじゃないか」

土屋が鼻で笑うと、男子二人がニヤリとした。ニュースで石橋のことは全く放送されていないはずなのに、どうしてだろう？

「言わなかったか？俺はエクソシストとやらの結社に戻る気なんてないんだ。協力もしない。いったように、邪殺屋の仕事は休止中で、見たとおり、俺は学校に通っているんだ」

「土屋！」

私は警告するように叫んだ。近くに一般市民がいるのだから、こんなにはつきりと話さないほうがいいと思ったのだ。

「エクソシストのクソは、糞のクソ」

ロン毛のほうは偉そうに言った。

「お前らのことは知ってるぞ。アレだろ？西洋系邪殺屋」

「どうして知っているの？」

ロン毛は問いを聞こえないふりをした。フィオナはさすがのように土屋に言う。

「お願いします。あなたがいなければ私たち、いつかは石橋に殺されてしまいますわ」

「石橋？ああ、石橋ね石橋。あの殺人鬼……」

土屋はさりげなく私たちの横を通って行こうとした。私たちはあわててその前に回り込んで止める。土屋は力ツカした。

「なんだよついでくんじゃねえよ！言ったように、俺は邪殺屋の仕事を休止してんだよ。ていうか、親父にそうさせられた。だからな、たとえば俺が戻りたくっても無理なんだ！」

「そんなの許さないわ！」

フローラが土屋の胸倉を掴んだ。

「うるせえウォーロックが！ほっといてくれ！俺はとつと帰るんだよ！」

「そーそー、ほっといてやろーぜ」

背の低い男子が陽気に言った。

「それがもつとも妥当だよ」

「うるさいアンタは黙ってて！一般市民にどうこうなる問題じゃないのよ！」

「へえ、そうかい」

ロン毛がニヤニタ口を挟んだ。ライナーに匹敵するほどのいやらしい笑みだ。

「なあお嬢さん、俺ら、一般市民じゃないんだよね。俺は、なんと空間移動能力者、テレポーターなんすよ」

「そうそうそうそう！俺はちなみに雪使い。今の時期がいつちばん動きやすいんだ。雪だるま作り放題ってか？ははははは！」

背の低い男子が高らかに笑った。一瞬石橋かと思い、ぎょっとして悲鳴を上げそうになった。フローラは疑問が浮かんだような顔をしたが、すぐに本来の目的を思い出した。

「もしアンタがどうしても戻ってこないって言うのなら、力づくで連れて帰るわ！」

フローラが土屋から離れると杖を構えた。啞然とする私たちをキッと睨む。

「ほら、何してんの！やるわよ！」

「そんな、フローラ……お手柔らかにいこうよ……」

クリフォードの情けない声を無視してフローラは呪文めいた言葉をつぶやき始めた。私は戸惑ってライナーを見た。ライナーは最高に嫌なニヤニヤをして私を見返した。

「ま、やるっきゃないっしょ」

私は土屋を見た。

私は土屋の目を見て、何か違和感がある気がした。

土屋は前にはない何かを持っているように見えた。

第二十五話：日本へ…2

私は戦うのが嫌で、必死に皆をなだめようとした。

「ねえ、やめてよ！フローラたちも！土屋も！皆仲間でしょ？土屋の友達だって、何か石橋の事知っているみたいだし……」

「でも幸乃！コイツはあの糞野郎をほっておこうとしているのよ？許されるわけじゃないじゃない！」

「うるせえな、しかたねえだろうが、親父にとめられてるんだから！」

土屋はフローラに向かってわめき散らした。土屋の友人二人は身構えていたが、それをやめて、雪使いの奴は雪の上に手をかざして雪だるまを作り、テレポーターは木の上にテレポートしたりしている。

周りの生徒たちは気にも留めない。なんでだろう？おかしい。

私はフローラたちの言葉をさえぎるように声を張り上げた。

「土屋聞いて！クリステイーナの家を偵察していたエクソシストたちも殺されてしまったの！」

「だからどうした？俺になんの関係があるってんだよ！」

土屋は昂然としていた。私もそうなり、やけくそ気味に絶叫した。

「それと、私と石橋の間に絆ができたの！」

私の一言で場の雰囲気さがらりと変わった。テレポーターが木からずり落ち、雪使いは雪だるまを粉碎し、土屋は何も言えなくなつて口をパクパクした。

「絆？」

しばらくの沈黙の後、土屋がささやくように言った。土屋の顔に一瞬、怯えに似たようなものが走る。

「そうだよ」

クリフォードがほっとしたように言った。

「だから、ちょっと話だけでも聞いてくれない？状況とか、色々話すから」

刹那、土屋は断るかのように見えた。でも、うなずいてくれた。

私たちは顔を見合わせ安堵した。

土屋に勝てるかどうか、分からなかったからもあるし、乗り気になつてくれたからだ。

私たちは土屋の友人のテレポーターにテレポートしてもらって、土屋の家に行った。

土屋の家は平安時代の貴族が住んでいるような家で、呆れるほど大きかった。広い、雪の積もった庭には、小川まで流れている。

初めてのフローラたちはぽかんとした。

玄関から中に入り、奥の居間に案内される。中は特別温かくて、私の体を温めてくれた。

私たちは座卓を挟んで座り、土屋と向き合った。土屋のひざの上には柴犬がいる。ポチと言っらしい。ポチは土屋のひざの上でまどろんでいた。

ライナーは畳が気持ちいいのか、一人、寝そべってポチと同様、まどろんでいる。

「ねえ、お父さんとお母さんは？」

私の問いに、土屋は一言、「出かけている」と答えた。

「それで？話せよ、そっちの状況をさ。高橋お前、何でアイツと絆ができたんだよ。何を憎んだ？」

「悪を」

「そうか」

土屋の反応は薄かった。もっとほかの事を期待していたかの如く、だ。

「伝えることはそれだけか？」

「戻ってきてくれないのか？」

クリフォードがすがつた。

「というか、さっきの生徒たち、どうして超能力を見ても驚かないんだよ？」

「俺の行っている学校、全員特殊能力者なんだ」

土屋はそっけなく言った。え？赤月市と一緒にではないか。

「ある教育委員会の能力者が作ったんだ。能力者は異様な気を出すから、周りの人から異端視されるだろ？そんな人たちのために作られた学校。生徒数は少ないが、皆仲がいいし、ともかく俺は今、うまくやってんだよ」

土屋は友達と言うものが分かったようだ。

「だから、帰ってくれよ」

土屋はこの話が嫌なのか、テレビをつけた。

ニュースがやっている。

公務員が次々と殺されていくと言うニュースだ。

「なにこれ？ ひつどい」

フローラがむうっとした。

「公務員が最近、相次いで殺されていくんだ」

土屋はそっけなく言った。

「死因は不明。政府から、ここにも電話があつたがどうやら犯人は石橋らしい。石橋は政府が特殊能力を公開すると言つ情報をどこかで拾つて、それを防ごうとしているんじゃないかって……」

「え、えええええつ？！」

私たちはあほ臭い悲鳴を上げた。能力公開？

「どうして？」

「石橋が殺しまくってるだろ？だから、死因不明事件が相次いで起こっているということになるよな？死の呪符は痕跡が何も残らないから。今まではなんとか、マスコミどもをごまかしていたが、もうごまかしが効かなくなってきたんだ。マスコミとかは何かがおかしいと感じている。だから政府は、この死因不明事件の真相を全世界に伝えるため、能力公開を決定したんだ」

土屋はショックを受ける私たちの前に、どこから持ってきたノートパソコンを開いた。電源を立ち上げ、一つのファイルを開き、画面を私たちのほうに向ける。

「これは政府の特殊能力者についての機密情報をハッキングしたものだ」

「ハッキング？」

フローラが目をむいた。

「あんたハッキングなんてやってんの？」

「呪符でな」

土屋はどうでもいいように言った。

「ともかく見ろ」

私たちは画面を見た。何かの設計図が書いてある。

「この設計図のものは地下に作られている。もう九割は作り終わってんだろーな」

「この建物はなんなのですか？」

「特殊能力者収容所。政府は特殊能力者を危険視して、世界中の能力者全員を、閉じ込める気なんだ。収容所の一つがここだ」

私の体にまっすぐ電流が走った気がした。

「連中は最先端のセキュリティシステムなどをここに導入した。入ったら一生出られないし、進入も不可能だ」

「でも超能力だよ！」

私の声にポチが飛び起き、怒ったように吼えたが無視した。

「超能力に不可能はない！エレキネシスパイロキネシステレポトもある！コンピュータの破壊なんて簡単じゃない！」

「世界中のあらゆるところで特殊能力者が行方不明になっているんだ。多分政府にかかわりのある学者とかが人体実験に使ったりしているんだと思う。それで見つけたんだろう。閉じ込める方法を」

「ひどい……」

私の中で怒りがたぎる。握った拳が震える。

「でも土屋さん」

フィオナがそつと言った。

「それは石橋にとって好都合ではないでしょうか？特殊能力者を憎んでいるわけですから閉じ込められるのをいい気味だとも思う

はです。それなのになぜ石橋はそれを阻止しようとするのでしょうか？どうしていきなり特殊能力者殺しをやめて、公務員のほうに殺意を向けたのでしょうか？」

「さあな。知らない」

土屋はポチを抱き上げ、立ち上がった。

「アイツの行動は理解不能だ」

土屋はテレビの電源を切るとパソコンを閉め、キッチンに向かった。眠りこけるライナー以外は後に続く。土屋はキッチンでポチにジャーキーを与え、早いことに夕食の準備を始めた。野菜を切り始める。

その間、クリフォードはなおも言った。

「なあ、戻ってきてくれよ」

「だからなんでだよ」

「そりゃあ……怖いからだよ」

クリフォードはとうとう白状した。

「土屋がいれば何倍も有利になる」

「奴のために俺が命を捨てるとでも言うのか」

「飛鳥ちゃんは捨て身の覚悟であいつと戦ったじゃない！」

私は叫び、土屋は黙り、三人は生唾を飲み込んだ。

「結果、命を落としちゃったけど……土屋はどうして逃げてばかりなのよ？飛鳥ちゃんを見習いなよ！飛鳥ちゃんの仇をとりたくないの？！」

「うるさい！」

土屋が持っていたナイフを急に私に投げつけた、私は悲鳴を上げた。ナイフは私のすぐそばをかすめ、後ろの食器棚に刺さった。土屋は自分のしたことに一瞬動揺し、何かをばそぼそ言いながら食器棚からナイフを抜いた。

「俺が戻りたくても親父に禁止されてるし、まあ今の生活も嫌じゃないんだ。無理矢理協力っていう手段もあるが、俺はエクソシストにそこまでする義理はない。俺の案だって却下されたじゃないか。霧林白稲を人質に取るっていう最高の案を」

「分かった。その子のこと、俺ら人質にとるよ」

土屋がびっくりしたようにクリフォードを見た。

「それでお前が戻ってきてくれるのなら」

「クリフォード！」

フローラが叫んだ。

「だめよ、そんな……！」

「いいだろう、戻ってやるよ」

土屋がばしりといった。

「両親は三日間仕事で家に帰ってこないし、その間に出て行けば問題ない」

土屋は料理をするのが面倒になったようで、呪符で仕上げ始めた。

「ただし、俺を信用しないほうがいい。俺は何かあればとっとと家に帰る。あんまし頼るなよ」

土屋はそう厳しく言うと、あつという間に出来上がった料理をライナーのいる部屋に運んでいった。私たちは不安げに顔を見合わせた。

第二十六話：霧林白稻

次の日、私たちは朝の三時に土屋の手によってたたき起こされた。そう、私たちは土屋の家に一泊したのだ。

土屋はなんと、女の子が寝ている部屋にノックもせずになぞか入り込み、私たちの布団を片っ端からはいで、バンバンやかましく手を叩いたのだ。私は仰天して悲鳴を上げたが、土屋は見向きもせず、起きたと分かれると部屋を出ていった。

私たちは飛鳥ちゃんの洋服を借りていたので、その服をきちんとたたんでいつもの服に着替えた。外はまだ真っ暗で、恐ろしく寒い。

私たちは居間でテレビを見ていたライナーに訊ねた。

「一体何事ですか」

「ああ、もう白稻^{しろいね}ちゃんを捕獲しに行くんだってさ。物質変化能力者からわざわざ車を作ってもらったから、それで行くってさ」

「飛んでいかないの」

「政府たちの目が厳しいし、下手に動かないほうがいいって。荷物まとめといたほうがいいぜ」

「うん」

私はこくんとうなずいた。土屋とクリフォードはすでに外にいるようで、さっきから音がする。

私たちは用意されていたご飯と味噌汁をすすり（フローラとフィオナは箸の使いかたが分からなかったので、スプーンが用意してあった）、荷物をまとめた。ライナーはテレビの電源を切ると、障子を開け放った。冷気がどつと流れ込み、私とフローラは悲鳴を上げた。

「寒い！閉めてよライナー！」

「寒いかー。ネクロマンサーの俺はいつも冷気をまとってっからあんまし感じねーなー。なあ、教えてくれよ。ちゃんとパジャマは着て寝たか？」

ライナーがにやついたので私はきよとした。

「どうして？」

「土屋が朝起こしにいったら？大丈夫だったかなってよ」

フローラはライナーを思いっきり睨みつけた。

「ちゃんと着て寝たわ！っていうか、ノックとかしてくれないわけ
アイツは！」

「さあ。俺だって止めようとしたんだぜ」

ライナーが首をすくめた。

私たちはとりあえず、荷物を用意して、表に出た。土屋はポチに
何かささやいて、ポチを家に入れると、とっとと歩き出した。どこ
へ行くのかと訊ねたら、車のある道路、と答えられた。

物質変化能力者作の車は近くの峠道にあるらしい。

行くまでがとても寒かったが、なんとか車までたどり着いた。夜
の森は真っ暗なのに、土屋はすいすい歩いていた。

車は黒い大型車で、座席が三列だ。運転席に座るのは土屋で（一番大人に見えるからだ）、助手席がフィオナだ。土屋が運転席に座るからといって、土屋が運転するわけじゃない。土屋の呪符が、ハンドルを操作するのだ。二列目には私とフローラが、三列目にはクリフォードとライナーが座った。

車の中はすでに暖房がきいていたのでありがたい。私たちは車に乗り込むと、ひたすら東京方面に向かった。ハンドルは土屋が握っていないけれども無論、ちゃんと動いている。

まだ朝早いし、人もあまりいないので、握っていないなくても怪しまれないだろう。

何時間も走っているうちに、私は寝てしまい、起きたときにはもう明るくなっていた。田舎と都会の真ん中ぐらいの町のコンビニの前で車を停車させると、私たちはもう一回朝食をとった。

私は大好きな卵サンドイッチだ。エクソシストたちもそれを食べた。土屋はちなみに食べなかった。気がついていたらけど、土屋は朝から落ち着きがなかった。不安そうに私たちのほうを見、たまに窓を開け閉めしている。

再び発進し、都会に近づくにつれ雪がなくなり、土屋の家のほうほど寒さは厳しくなくなった。クリフォードは霧林白稲ちゃんを捕まえるための作戦を私たちに話した。

「とりあえず、放課後を狙う。霧林さんの学校は都会の近くの町にあつて、路地がたくさんある。彼女が路地に入るかは分からないけど、とにかく人気のないところで捕まえるんだ。俺たちは二つある校門のそれぞれを見張り、彼女が出てきたら追跡し、もう一つのグループと連絡を取って合流する。見張るのは二人一組のグループ二つだ。残りの二人は車で待機。いいかな？」

「分かった」

そしてその数時間後に、私たちは霧林さんがいると言う、学校に到着した。その学校は、何の変哲もない、ごく普通の学校だった。古いのだらう、学校の外壁のペンキがはげている。

私たちは今日は午前中授業と言うことを知っていたので、あとちよつと、待てばよかった。

生徒たちが校門から出てくると、私とライナー、土屋とフィオナは車から出た。

クリフォードとフローラは車で待っているといことになる。

私とライナーは正面の校門を見張ることとなっていたので、まっ

すぐそこに向かった。フィオナたちはもう一つの校門だ。私たちはさりげなく校門の脇の電信柱に寄りかかり、自販機で買ったココアをちびちび飲んで生徒たちのほうを眺めた。目は必死に霧林さんを探す。見失ったら最後、明日まで待つしかない。

しかし運のいい事に、霧林さんは私たちの目の前を通った。

霊力で隠しているのか、髪が白かったり目は黄色かったりはしなかった。長く美しい髪で、白い肌。彼女はひとときわ暗い顔をしていた。彼女は一人だし、ちょうど良い。

さつそくライナーが、青い、拳ほどの大きさの人だまのようなものを土屋たちのほうに飛ばして合図をし、霧林さんの後ろ、十メートルほどを歩いて尾行した。霧林さんは生徒たちを避けているのだろうか、生徒たちのいないほうに向かっていく。

途中、都会のほうに出てファーストフード店に入った。でもすぐに出てきて、さらに運のいい事に、近くの路地に入っていた。人氣のない、捕まえるには格好の路地。

私とライナーはうなずき合って、霧林さんの後に続いた。

第二十七話：霧林白稻：2

ここの路地は入り組んでいて、人氣がほとんどなかった。霧林さんはそんな怪しい路地の中をずんずん歩いていく。意外とあつけない、路地の出口が見えてきた。私たちはもう一度顔を見合わせた。

どうやって襲うかなんて、話し合っていなかった。でも襲うのは今しかない。

私たちは足早になって、彼女との距離を詰めていく。そして土屋とフィオナが先回りしてくれたようだ、霧林さんが向かう出口に二人の姿が現れた。私たちは霧林さん越しに目を合わせる。

霧林さんは土屋とフィオナを通そうと、脇によけた。その瞬間。

土屋が空中から突如呪符を取り出し、霧林さんめがけて投げつけた。霧林さんはびくつと体を震わせたが機敏な動きで呪符をよけ、身震いした。土屋たちに怯え、さつと踵を返したが、私たちに挟まれていることに気がつき、とっさに右側の路地に飛び込んだ。あまりにも狭い路地だったので、見過ごしていたのだ。

「くそっ、追え！」

土屋が私たちに叫び、はじかれたように彼女のあとを追う。霧林さんは右に曲がったり左に曲がったりして何とか私たちをまこうとしたが、私はともかく後の三人は強者だ。見失うはずがない。やがて、広い路地に出た。これで思いっきり走れる、と霧林さんはスピードを上げようとしたが、突如目の前の逃走路を鉄壁でふさがれ、壁にぶつかってしまった。

フィオナだ。

私たちは霧林さんの三メートルほどまで迫り、扇形に広がった。これで逃げ道はない。でも、霧林さんは気の毒なほど震えていた。なので私は霧林さんを落ち着かせてあげようと、こう言った。

「霧林さん！変なことしないから……」

逆効果だった。私たちが霧林さんを捕まえようとしていることに彼女は気がつき、確信させられた。

霧林さんはぎゅっと目を閉じた。

土屋はすぐさま呪符を投げつける。呪符はまっすぐ霧林さんに向かって飛んでいく。当たる直前、霧林さんが目を開いた。バチツツという音がし、呪符が上に跳ね返る。ぎょつとした。霧林さんの頬にたれた髪の毛が銀色に変化していた。そして、栗色だった瞳は黄

色くなっていた。

「嬢ちゃん俺ら、手荒なまねしたくないんだよ」

ライナーが苦しそうにいった。

「とくに君のような天使のように清らかな子には……」

「ライナー！」

フィオナがたしなめた。

「こんなときにやめてください！」

「事実なのだから仕方がない」

ライナーは肩をすくめた。一方土屋は霧林さんを眺め回している。私は土屋が霧林さんに何かする前にと、脇に生えていた草をむしつて、前に突き出した。草が蛇のように長く伸び、霧林さんの方にすばやく伸びて絡み付こうとした。霧林さんが白銀の光を一瞬放ち、その場から消えた。草が空中に絡みつき、私は動揺した。

霧林さんのいたところの地面には白い狐がいた。霧林さんは白狐に変化したのだ！

白狐はぴょんつとびはね、私の顔面にむかってきた！私は悲鳴を上げて伏せ、白狐はすたこらさつと後ろの通路から逃走してしまった。ライナーの足元から青い霧が立ち上り、ライナーはそれをまとって消えた。フィオナは八方に靈力を放つを私たちに告げた。

「路地の入り口は全て鉄壁でふさぎました」

土屋はうなずくと、私たちに指示を出す。

「俺は一人で探すから、お前らは二人で探せ」

「分かった」

土屋はライナーと同じく、ふっと消えてしまった。私とフィオナはすばやく顔を見合わせる。

「上から探したほうが早いね」

「そうですね。幸乃さん、お願いします」

私はフィオナと手をつなぎ、体にかかる重力を減らして屋根の上までジャンプした。アパートの平らな屋根だ。この屋根では低すぎるので、私たちは屋根づたいで大きなスーパールの屋根まで行った。ここの屋根はでこぼこしているが、路地全体が見渡せる。

路地の中心あたりにライナーがいた。死体を召喚して、指示を出している。土屋は見当たらないが、どこかにいるだろう。白狐はいた。さっきの場所から一番近い通路の入り口の前をうろつき、鉄壁を引っかけて苛々と尻尾を振っている。私たちは挟み撃ちにすることにした。

屋根づたいでその場所に近づいて、白狐のいる通路の手前でフィオナを下ろし、フィオナはさつと角に隠れた。私は白狐を挟むように反対側に周り、地面に降りた。これで逃走路はふさいだ。

私は心の中で「3、2、1……」と数え、通りに一陣の風を吹かせてフィオナに合図した。

私たちは一斉に白狐に飛び掛った。フィオナはすらりとした手を振りかぶり、魔法陣を投げる。ぎよつとした白狐は間一髪でよけ、魔法陣は代わりに小石に当たった。小石が小さな銀色の檻に包まれた。

私は持っていた草を白狐に投げつけた。草は白狐の背中におち、蛇のように白狐のその体に絡みつく。白狐は転倒し、哀れっぽくなっていた。

「やったあ！」

私とフィオナはハイタッチした。私はふわふわしたその白狐を抱き上げ、フィオナに銀の檻に入れてもらった。白狐は草から解放されてもしまく檻の中で暴れまわり、とうとうあきらめたのか檻の中でぐったりと動かなくなってしまった。

私たちはすぐに土屋たちと合流し、クリフォードたちに近くに来てもらって車に乗り込んだ。

私とフローラの間には檻を置き、シートベルトでうまく固定した。

私たちは高速道路を使って、土屋の家の近くに帰ることにした。そして、クリフォードとライナーが眠りこける頃、今までぐったりしていた白狐が檻の中で起き上がった。

しきりに辺りのおいを嗅いで、ひときわ甲高く吼え、檻の中にスクールバックを出現させてそれを開け、ハンバーガーを取り出して食べ始めた。土屋はその様子を振り返り、不安そうに窓の外を眺

める。ところで霧林さんの両親は旅行好きで、現在グアムにいるらしい。土屋が式神を飛ばして確かめたとのことだ。

白狐は、私たちのほうを睨みつけながら、食べまくる。フィオナが霧林さんのために檻を大きくしてあげた。私はだんだん白狐が気の毒になってきて、土屋に訴えた。

「ねえ、出してあげようよ？何も事情を知らないで閉じ込められるなんて、怖いだろうし、霧林さんは怯えるよ」

「はッ、今も石橋とつながってたら、俺らを殺して逃げかねないだろうが」

白狐は石橋、と聞くと、やかましくなき始めた。ハンバーガーを踏みつけ、檻にしがみついてキーキーなきまくり、じたばたと暴れる。そして次の瞬間檻の中で人間に変化した。しかし檻がきつすぎた。霧林さんはうめき、フィオナがあわてて檻をもっと大きくした。

霧林さんは土屋を睨みつけ、私のことも睨みつけた。次に、フロアたちも睨む。そして、叫んだ。

「石橋っ？健のことっ？健が何したって言うのよ！最近の特殊能力者ってみんな、全て健のせいにするのね！どうしてよ！健が人殺しだから？でもそれは全て回りの人間がいけないんでしょう！冤罪

作って、周りの皆が勝手に誤解して！ひどい！ひどいわ！」

霧林さんは我を忘れて絶叫した。しかしライナーとクリフォードは頑固にも起きない。

「あなたたち、エクソシストと邪殺屋？その臭いがする！だいたい全部、あなたたちのようなエクソシストと邪殺屋がいけないのよ！確かに健はいまでもいっぱい殺しているけどね！それを止めないあなたたちだって悪い！ぐずぐずぐずぐず一体何をしているの？あなたたちが止めないから、健はこれからもずっと人を殺すわ！それに、馬鹿馬鹿しい能力公開？あれだって、あなたたちが対処する問題なんじゃないの？それに、わたしのことだって！健の友達だからって、変な人たちに追われるのよ！この間なんて気違いじみた男子が私をサイコネシスで拷問して、居場所を聞き出そうとしたわ！幸運にも他の能力者が助けてくれたけど……、でも死ぬところだったわ！ねえ！」

霧林さんはわっと泣き出した。

私はそんな霧林さんの背中をなで、慎重に、どうして誘拐したのか説明した。

「私たちだってね？アイツを捕まえようと一生懸命努力しているのよ？それでもアイツが強すぎて手が出せないの。そこであなたに協力してほしいの。人質のふりをして石橋をおびき寄せてほしい。

あなたを逃がす代わりに石橋を拘束するっていうようにしたいのよ。お願い。もう霧林さんしか、あいつの暴走を止められないの」

「それで健を死刑にするの？殺すの？」

霧林さんは涙でびしょびしょになった顔を上げた。私は詰まった。本当は勿論、Yes、だ。でもそんなの言えなかった。だって霧林さんと奴は、友達なのだ。友達が死刑になるって言われたら私だったら嫌だと叫ぶだろう。

「そうよ」

ウローラがしっかりとした口調で言った。

「当然じゃない！あいつは殺人鬼なの！あなただって分かっているでしょう？」

霧林さんはしばらく黙っていた。その間にも、彼女の目からは大粒の涙がとめどなく伝っていく。そして、とうとうこう言った。

「……そうね」

それだけだった。霧林さんのスクールバックから、ひらっと何かが落ちた。

写真だった。その中で、霧林さんと北条光明と石橋健が笑っていた。どこかへ出かけたときに撮ったもののようで、殺人鬼は信じられないほど明るく笑っていた。

今の石橋に、写真の中の石橋の面影はなかった。

第二十八話：計画

私たちと霧林白稲きりはやししろねちゃんは協力体制に入った。私たちは土屋の家に戻ると、すぐさま魔法結社と空間が繋がった場所に行き、結社にもどた。

霧林さんは石橋のことを話そうとはしなかった。何も言いたくないのだと言う。顔は蒼白で、震えていた。自分のために石橋が死ぬと思うと怖いのだ。当然だと思った。

魔法結社に戻ると空間のつなぎ目を消し、広間に向かった。

成人エクソシストや社長に報告し、急遽会議を開くこととなった。そして、その前に結社内部の人が結社外部と連絡が取れないように、電話線とかを切った。特殊な結界も張ったらしいし、超能力でも外部と連絡するのは不可能だ。これは、石橋の裏切り者が奴に霧林さんがぐるだと言うことを伝えさせないためだ。

私たちは広間に並んで座った。霧林さんは私の隣だ。社長はいつもの特等席に座り、立ち上がって集まったエクソシストたちにこう宣言した。

「霧林白稲さんが我々の計画に協力してくれることとなった」

数人のエクソシストたちは人質作戦に不満そうだったが、石橋を捕まえるためには仕方がなかった。

広間の中は、奴を血祭りに上げることができると拍手喝采だった。

「石橋健が捕まったら速やかに事情聴取をし、それが終わった暁には死刑を実行する」

ラインハルト社長がにつこりし、エクソシストたちの間で歓声が上がった。

「石橋健は仲間のことは必ず見捨てないとのことだ。この計画は必ず成功するだろう。私の計画ではまず、外の庭の草原で我々が霧林さんを連れて、奴を待つ。奴が来たら速やかに捕らえよ。実に簡単な計画だ」

私と奴との間の絆が少しだけ反応していた。奴を殺せる嬉しさと同時に、自分の片割れが殺されるような気分で、ちょっと不快になっていた。

「おいおい、ちょっと」

ライナーが不意に声を張り上げた。皆は歓声を上げている最中なので気がつかない。ライナーは思い切り手のひらで机を叩いて皆を黙らせた。ライナーは満足げにリンゴをかじった。

「シロネちゃんを人質にとったってこと、どうやっていつしに伝えるんだよ」

みんなは愕然とした。そんなこと、気がつかなかったのだ。しばらく隣の人たちとかと意見を交換し合ったりしていたが皆お手上げのようだ。指示を仰ぐように社長のほうを見る。社長は困り果てている。

「　　そうよ、土屋がいるわ!」

フローラがいい事思いついたとばかりに声をあげ、土屋を指差した。土屋はミカンに伸ばした手をさっと引っ込め、なんだよというように顔をしかめた。

「さつき、霧林さんの両親の居場所、式神で突き止めたわよね？式神に手紙を持たせて、奴を探させればいいわ!」

「あいにく和紙がない」

土屋は肩をすくめた。

「和紙ならある。すぐに調達できるから心配ない」

社長がきっぱり言い放ち、エクソシストたちは再び歓声を上げた。

「そうか」

土屋は立ち上がった。

「じゃあ、俺が手紙を書いてさっさと奴に送る」

「異議あり！もしお前が裏切り者で、霧林さんがこっちのグルだと言つことをどさくさにまぎれて手紙に書いたら？作戦は台無しだ！」

一人が言うと、土屋がかつとなった。

「俺はアイツに妹を殺されたんだぞ！ふざけんじゃねえよ！」

「もしもの話だ！もしそうだったらどうしてくれる！手紙は皆で

書く！それで決まりだ！」

私は後はそっちに任せることにして、震えている霧林さんを外に連れ出した。霧林さんを客室に案内し、霧林さんはベットに倒れこんでうずくまってしまった。

「大丈夫？」

私はそつと霧林さんの背中をなでる。霧林さんの背中は震えていた。

「……ありがとう幸乃ちゃん。私の親友が死ぬのを、大勢の人が喜んでいるなんて、なんか信じられなかったの。だってね？健が私をいじめから解放してくれたんだよ？リンチにあつてるとき、体をはって守ってくれたんだよ？赤の他人の私を。能力は、人を救うためにあるって、いつてたのに、その能力で人を殺すなんて……」

「そつか……」

「……ごめんなさい。ちょっと一人に……してくれる？」

私は霧林さんを一人にしてあげるため、彼女の部屋を出た。

すると、部屋の前で会議が終わったらしい十四歳エクソシストと土屋が待っていた。私はきょとんと首をかしげる。

「どうしたの？」

「あのさ、幸乃たち、奴が捕まったらどうする？」

クリフォードが私と土屋に尋ねる。

「奴が捕まれば邪殺屋とエクソシストの協力体制は解除される。二人は日本に帰る？」

「帰ると思う」

私はいきなり悲しくなった。エクソシストたちと別れるなんて……。しかし土屋がこう言った。

「奴が捕まろうが捕まるまいが、特殊能力は公開され、世は大混乱に陥る。どこにしようが一緒だし、俺は残るとしよう」

意外な答えだ。私もそのことを思い出し、うん、とうなずいた。

「私もそうするかもしれない。できれば家族も連れて来たい」

そう、私は何より家族が心配だ。家族も能力者なのだ。エクソシストたちといえば心強い。クリフォードたちがにっこりとうなずいた。

「分かった。社長に伝えとくよ。あ、それと明日の朝、例の計画を実行するから、朝八時に庭に集合だよ」

「分かった」

私たちはおやすみなさいと言い合つと、それぞれの部屋に戻つていった。ライナーは土屋の後について、一階に向かった。何か食べに行くのだろう。

私は部屋に戻るとシャワーを浴び、ベットにもぐりこんだ。

明日。石橋が来るかもしれない。私の胸がドクンと鳴っていた。

第二十九話：裏切り者は

次の日の朝、結社内にいるエクソシスト全員と邪殺屋は、雪の積もった広大な庭のど真ん中で、石橋健を待っていた。ここから城まで、ずいぶん距離がある。庭と言うより草原だ。

私たちは霧林さんに手錠をかけ、そわそわした。霧林さんのことは、エクソシストたちがぐるりと円になって取り囲んでいる。

私ははるか前方の森に目を凝らし、石橋の姿が見えないか首を伸ばしていた。さっきまでは。

今はもう、夕方で石橋が来る気配はない。雪は、陽光にキラキラと輝いていてまぶしいし、目がチカチカする。

「本当に来るのかしら？」

フローラが不満げに言った。厚手のコートを着ているが、重くないらしい、うろろろしていた。

「全然来ないわね」

「そー簡単に姿現すかよ」

ライナーが不安そうに言った。

「ところでイッシーが捕まったらクリスティーナはどうなるんだよ、おいアンソニー、そこらへんどうなんだ」

「多分、犯人隠匿とかの罪で捕まると思うよ。証拠が出ればの話だけだね」

「証拠、ねえ」

ライナーはふんと鼻を鳴らした。

「ていうか、クリスティーナよりも、コッチの裏切り者の件のほうが深刻だよなー。いまだに出てきていないし」

「もしかしたら石橋が来たら、そいつは姿を現すかもしれないわよ?」

フローラがエクソシストたちに目を走らせた。

「かもしれないね」

私も警戒するようにぐるっと見回した。土屋は現在、エクソシストの円の周りを飄々と歩き回っていた。

霧林さんは相変わらず蒼白である。怯えたような顔をしているので、石橋にもエクソシストたちに怯えていると見えるだろう。その数分後、ふとフィオナが背伸びをした。

「あそこにいるのはなんでしょう」

フィオナが指す方向に目をやると、私のはるか前の森の上を、巨大なカラスが旋回していた。いや、カラスではない、悪魔だ。ウィッチの使い魔。

その背中にはクリスティーナが乗っているのが見え、エクソシストたちは口々にわめいた。しかし石橋は見当たらなない。

「クリスティーナがいる、でも石橋はいないよ」

私は不機嫌にうめいた。クリフォードは「いや」とつぶやき、目を細める。

「あそこにいる」

私はもう一度、森のほうに目を凝らした。すると、確かにいた。森の入り口の高い木のでっぺん辺りの枝に掴まってこっちの様子を伺っている石橋の姿が見えた。そして、最悪なことにいきなり私の目の前に呪符を投げつけてきた。私は悲鳴を上げてよけ、かつとなった。

「最低！投げるなら警告ぐらいしてくれたっていいでしょ！」

石橋は無視した。エクソシストの一人が石橋のほうに向かって声を飛ばした。

「おい殺人鬼！とつと降りて来い！この女がどうなってもいいのか！」

石橋の顔がそのエクソシストのほうへ向いた。エクソシストはこれ見よがしに霧林さんを前に突き出した。霧林さんは雪の上にどつと倒れる。もちろん演技だ。

石橋は木の上から飛び降り、雪の上に軽やかに着地した。そして百メートル近づいた。私から五十メートルは離れている。エクソシ

ストたちが一斉に後じさりした。それに気がつかなかった私は一人だけ前のほうに取り残され、あわてて下がった。クリスティーナの使い魔がその真上にきて、ますます急旋回する。

石橋はしらけた表情をしている。嫌味も何も言わない。霧林さんを助けるか考えているらしい。土屋は私の隣に来た。フローラとクリフォードとフィオナは石橋を睨みつけ、ライナーはリンゴをかんでいる。石橋が不意に言った。

「冗談だろ」

「何が？」

私は反射的に返した。というか、絆が反応していた。

「エクソシストが人質を取る？馬鹿馬鹿しい。お前らのような正義のヒーロー気取ってる奴が人質を取るなんてさ。ありえねえっつーの。霧林はお前らのグルなんだろ」

石橋は絶対そうに違いないと言うように期待を込めて言い放ち、どんな答えが返ってくるか伺う。

「そう思うか？歴史上もつとも極悪非道な殺人鬼を捕まえるため

なら人質ぐらいとる」

エクソシストが再び偉そうにいい、またこれ見よがしに霧林さんの倒れた頭を足で踏んだ。痛くないように工夫が施してであると、さつき言っていた。石橋の期待が消沈した。

「さすがのあんたでも、オトモダチがこんなんじゃない手も足も出ないでしょう！」

エクソシストの一人が叫んだ。と、ライナーが持っていたリングを石橋に向かって投げつけた。石橋はそれを片手で受け止めると、霧林さんを踏みつけていたエクソシストに思い切り投げつけた。そのエクソシストの顔面にリングが直撃し、エクソシストが悲鳴をあげ、ライナーをたしなめた。

「奴に武器を与えるんじゃない！」

「うるさい！」

とうとう石橋のスイッチが入った。

「下劣な愚図ども！卑しい特殊能力者が！極悪非道な三下！愚鈍！イカれた殺人鬼！」

と、意味のない悪態を絶叫し始めた。気が狂ったかのように暴言をわめき続け、エクソシストに「黙れ！」と言われるまでそれを続けた。エクソシストはどこか残忍な顔で石橋に鋭く命じる。

「両手を地面につけろ、ひざまずけ！そうすれば霧林白稲は解放してやる！」

石橋は意外とあっさりとひざまずいて両手を地面につけた。私たちは目を見張った。そんなにあっさり行くとはまさか思っていなかったのだ。警戒しながら、エクソシストは石橋に近づいて、地面に私の片割れをねじ伏せ、赤い手錠をかけた。

今の石橋に悪意はなく、逆にエクソシストにある気がした。なので私はエクソシストに対していつの間にか憎しみを持っていた。全て絆のせいだ。悪をすべて排除したいというその願望が強い。絆が反応した私は、今ある悪にしか反応しなかった。もう少しで、石橋の人格の私が出てきてしまいそうだ。そうなれば抑制不可能で、悪意のあるエクソシストを皆殺しにしてしまうだろう。本来の悪、石橋健のことは殺さずに。なので、必死にこみ上げる憎しみを押さえ込んだ。

「やめて！」

突如、クリスティーナの声がふってきた。クリスティーナの悪魔が甲高く鳴いて、石橋を捕らえたエクソシストに向かって火を噴く。エクソシストは結界でそれを阻み、叫んだ。

「次は貴様だクリスティーナ・コルネリウス！」

「うるさいわね、気安く健に触らないでくれる？ 離れて！」

クリスティーナは本気で怒っていた。石橋はクリスティーナを見上げるとがなりたてた。

「おい！ とつと逃げろ！ 捕まるぞ！」

「いや！ 誰が逃げるものですか！ ライナー！」

クリスティーナがライナーをきつと睨みつけた。ライナーが首をすくめた。クリスティーナはライナーに向かって怒った声を上げる。

「どうして連絡してくれなかったの？ 分かるわよ、そのキリバヤシって子、グルなんでしょう！ 絶対そうよ、だってその子、全然ケガしてないじゃない！」

霧林さんを見ると、すでにエクソシストに助け起こされ、手錠を外されていた。石橋はクリスティーナの声に目を見開き、霧林さんの方を見た。霧林さんは、自分の頭を踏みつけたエクソシストが謝っているのを、精一杯の微笑で大丈夫だと言っているところだった。石橋の方を見ようとはしなかった。石橋の顔が醜悪に歪んだ。

「警備が嚴重で、連絡できなかったんだ！」

ライナーが情けない声を上げた。

「ごめんよイッシー！今解放してやるからな！」

な、なんだ？

ライナーは啞然とするエクソシストたちを押し分け、石橋の手錠を掴もうとした。ライナーの指先が触れた瞬間、結界のような何かに阻まれ、ライナーの指がはじかれる。ライナーはぎよつとして後じさり、石橋の顔が蒼白になって手錠をガチャガチャやり、悲鳴のような声で「急々如律令」を唱えまくったがどういわけが呪符は現れず、特殊能力は手錠によって封じ込まれてしまった。

私たちの間にノロノロ沈黙が流れた。エクソシストたちは呆然とし、ライナーは石橋の手錠が取れないことに愕然とし、石橋は観念したのかしらけている。

そして、ライナーが不意に言った。

「ごめん。なんか、取れないな。この手錠」

そのとき、やっと悟った。

裏切り者は次期社長、ライナー・クラウゼヴィッツだったのだ！

第三十話：裏切り者は… 2

「ライナーあつ！」

フローラがようやく怒号を上げ、杖を大きく振りかぶって火トカゲ、サラマンダーを召喚し、ライナーに一直線に向かわせた。ライナーはあわてて石橋を右側に突き飛ばして、自分は左によけた。石橋は特殊能力がなくなればただの人間にすぎず、あっけなく雪の上に転がった。石橋はもとは運動オンチらしい。

エクソシストたちは我に返り、怒りの雄叫びを上げながら次期社長へと一斉攻撃を放つ。

霧林さんはへたり込み、私はいまだに信じられない思いでいつぱいだった。だって、ライナーなのだ。たった一人、石橋と絆がつかった私を快く受け入れてくれた人。私のこと、励ましてくれたではないか。どうして？ どうしてなの？

「　　そうか、ラインハルト！」

隣にいた土屋が突如と叫んだ。

「手錠だ！ そうだ分かったぞ！ あのタヌキジジめ！」

私はおかしくなってしまった土屋から離れ、攻撃が飛び交う中へ駆け込んだ。

炎や電撃を隔てて、ライナーが見えた。必死にエクソシストの攻撃から身を守っている。ライナーの右肩に赤い光線が直撃し、血がその肩からほとばしった。ライナーは雪の上に滑りながら倒れこんだ。

「やめて！」

私は絶叫し、ライナーとエクソシストの間に入って両手を広げてライナーをかばった。

エクソシストの攻撃はお構いなしに私に向かってくる。悪意のある攻撃に憎しみが吹き上がる。

私の中で、絆の呪縛が一瞬だけ解かれた。私の体から突風がエクソシストたちに向かって吹き出した。エクソシストたちは一人残らず吹き飛ばされ、私の前五十メートルには人はいなくなった。

私は必死に“橋の人格を持った私”を胸の奥に押さえつける。

エクソシストは不審な目を私に向けていた。

石橋ははるか右方でエクソシストに捕まれ、城の方に連行されていた。

ライナーが私の後ろで舌打ちし、エクソシストたちに罵声を浴びせた。

「糞エクソシストどもが！皆死んじまえ！」

そして、ライナーとクリスティーナが去る気配。

私はライナーの行動に打ちのめされ、とうとうへたり込んだ。エクソシストたちが城へ帰りながら、私につばを吐きかけたりした。でもどうでも良かった。

ライナー。どうして？ただこの言葉が繰り返される。どうして私たちを裏切ったりしたの？

私は一人で泣き叫んだ。

「 高橋」

土屋が私を横から支え、引っ張り起こしてくれた。

「どうしてライナーはっ？」

私は土屋が答えを知っているかのように土屋の胸倉を掴んでガクガク揺さぶった。

「どうしてライナーはエクソシストたちに死んじまえなんて言ったの？ライナーは次期社長でしょ？どうしてなの？なんでライナーは！」

私は土屋にしがみついて泣きじゃくった。嗚咽をもらし、苦しみに胸を痛める。

ライナーのことはエクソシストの中で一番信用していたのに！

私は土屋と一緒に城に戻った。一步一步踏み出すのが辛い。土屋は何も言わず、そっとしておいてくれた。

城の中に戻ると、霧林さんは玄関ホールにいた。大勢のエクソシ

ストが石橋をどうにかしようと思間に連れて行くとするが、石橋はてこでも動かず、霧林さんを罵倒した。

「てめえ！よくも裏切りやがったな！ぶっ殺してやる！」

霧林さんはかつての親友から顔を背け、それでも叫んだ。

「特殊能力は人を助けるためにあるって言うてたじゃない！その特殊能力で人を殺すなんて！」

「特殊能力はなあ、人を殺すためにあるんだよ馬鹿野郎がっ！」

そして石橋はとことんエクソシストたちを嘲笑う。

「てめえらも知ってたろ？そんぐれー。もし違うと言う奴がいるのなら、ぜひとも俺に伝えてくれ。そして答えてくれ。もし特殊能力が人殺しのためにあるんじゃないとしたら、なぜ死の呪符なんてあるんだ？なぜ切り裂きの呪符なんてあるんだ？答えられるかお前。ほーら見る！ひやははははッばあかばあか！」

エクソシストは「黙れ！」とわめいたが、もはや気が狂った石橋の言葉を途切れさせる術はなかった。石橋はこれからリンチに合うだろうがそれでも笑い続けるだろう。

私はその姿をじっと見つめた。私の目にもう涙はなかった。奴と私の間に強いつながりを感じる。私は一歩前に踏み出し、エクソシストたちを肩で押しのけた。

「皆どいてよ」

私は悪意のあるエクソシストを片っ端からにらみつけた。

「リンチなんてしないでとつと殺せばいいのにね」

わたしはそういい捨てるといまだに甲高く笑い続ける石橋の腕をむんずと掴んで引きずるようにエレベーターのほうに向かった。

近くにいたフローラたちは愕然とした。

「幸乃っ？どうして？どうしてそんな奴かばうの！」

「絆があるからだよ！」

私は勝手にカッカした。エクソシストたちを振り返る。

「悪意を感じると私は私じゃなくなるの！皆知ってるでしょ？悪意を感じるとどうしようもなく憎しみが吹き上がって石橋の人格の私が現れる！そして悪意のあるものを皆殺しにしようとする！
本当の悪はコイツだけど」

私はこれ見よがしに石橋の腕を振って見せた。

「コイツにはいま、悪はない。あなたたちにある。絆は今ある悪にしか反応しない。あなたたちがリンチを続ければ、私はきつとあなたたちをどうにかする。だからやめて」

私はそう言った。本当のことだった。

「じゃあ心置きなくリンチを続ければいい。さあお前！エクソシストどもを殺しちまえ！」

石橋は何が面白いのか爆笑した。私は無視した。土屋は私についてきてくれた。エレベーターに乗り込むと私は四階のボタンをポチッと押した。

「監房等は五階だぜ」

土屋は眉をひそめた。

「うん。でも話を聞きたいの。どうしてライナーが裏切ったのか」

「俺も同行する」

「うん。お願い」

「おいお前、いい加減黙れ」

土屋は苛々と石橋をにらみつけると、石橋は土屋のほうを一瞥し、まだ出てこようとする笑いを飲み込んだ。

私たちは四階で降りると、まっすぐ土屋の部屋に向かった。

ここで、ライナーの裏切りの理由を聞くのだ。

そしてそれは驚くべきものだった……。

第三十一話：裏切りの理由

私たちが石橋を放すと、石橋はそそくさと土屋の部屋の白いソファに向かい、どっかり座った。俺様の部屋へよくぞ来てくれた、とでもいうような態度である。

私と土屋はその向かいのソファに座り、石橋をしげしげと観察した。石橋はソファにふんぞり返って口火を切った。

「それで？」

「どうしてライナーが裏切ったのか知りたいんだけど」

私は質問した。石橋はあっさりと答えた。

「ラインハルトと結社の奴がウザいから」

「どうしてウザいの」

私は噛み付くような勢いで問う。

「ラインハルトがあの不良のお袋を殺したからだ」

私たちに衝撃が走った。

殺した……？

石橋は傲然と続けた。

「ヘルミーネって名前だつてさ。立派な錬金術師だつたらしい。ヘルミーネは夫のラインハルトに、賢者の石で作った金のアクセサリーとかをよくプレゼントしていたそうだ。しかしラインハルトはもらったものをどんどん売り払い、カネにした。錬金術で作った金は売ってはならないという法律は知っているよな」

「ああ。特殊能力法第五条二項違反だ」

土屋はすらすら答えた。石橋は威張って続けた。

「ヘルミーネはラインハルトが自分が作っている金を売っていることに気がつき、金を作るのをやめた。ラインハルトはヘルミーネに泣きついて、もう売らないと約束したにもかかわらず、また売った。ヘルミーネはとうとう告訴すると言い出した。それは困るのでラインハルトは暗殺者に依頼してヘルミーネを暗殺し、金を作るの

に必要な賢者の石をまんまと自分のものにしたというわけよ」

賢者の石さえあれば誰にでも金きんが作れるらしい。

「そしてライナーはそのことを全て見ていた。ラインハルトは忘れるといったがライナーとヘルミーネは仲が良かったし、忘れられるわけがなかった。そしてラインハルトは祖父の仕事を受け継いでここの社長になった。ライナーはラインハルトが許せなかったから、エクソシストにそのことを言った。自分の代わりに告訴してくれつて。そのときライナーは五歳だった。自分では何もできないからエクソシストに託したんだ。しかしやるだけ無駄だった。ここは現在、ヘルミーネの賢者の石で作った金きんを、違法で売った力ネで支えられているし、それがなくなればここもつぶれてしまう。だから、エクソシストたちはライナーの訴えを無視したんだ」

ひ、ひどい……。

「ヘルミーネさんのことを知っているのはどのくらい？」

「ここの結社の人全員さ」

「全員っ?」

「ああ、一人を除いてはな。このことについては後で話すとしてよ。ともかく最後まで聞けよ」

石橋は再び傲然とした。

「ライナーはカンカンになって、いつしか結社に勤めている人を憎むようになった。いつか復讐してやろうと思った。でも残念ながら自分では力不足だった。そこで十歳のある日、犯罪者を匿^{かくま}いまくるクリスティーナ・コルネリウスのことを知り、会いに行つてコルネリウスと仲良くなつた。ライナーはクリスティーナに協力してもらつて、結社をぶつ壊してくれるような犯罪者が現れないか待つことにした。そして四年たつたある日。なんとまあ日本での俺の活躍のことを知つた！そしてさらに、その石橋様がライナーの実家があるドイツに現在潜伏しているとのこと！」

石橋は傲慢に胸を張つた。

「そして俺とライナーは出会つた。ライナーにとって俺との出会いはまさにチャンスだった。ライナーは俺に悪魔祓い結社を肉片と瓦礫の山にしてくれと依頼し、俺はその通りにした。ライナーは定期的に俺に情報をくれた。それがバレそうになったときは、土屋の両親に電話してたとか言っていたらしいが、あんなの真つ赤な嘘だ。電話の相手は俺」

私は唇をかんだ。

「ところでヘルミーネのことを知っているのは、結社内の一人を除いた全員とさっき言ったよな？その一人はフィオナ・ミランドーラだってさ」

「フィオナ？」

私は疑問符を頭の上に浮かべた。

「どうして？」

「ヘルミーネの賢者の石の効果は、時が経つにつれ、薄れていつているからだ。賢者の石は作った術者がいなくなると日に日に魔力を失っていくんだよ。んー、なんつーか金きんに不純物が混じっていつていうか？純金が作れなくなる。そのうち賢者の石はただの石ころになるだろうよ。ラインハルトは新たな賢者の石を求めている。賢者の石を作るのは錬金術師だけ。そして結社内には錬金術師はミランドーラしかいない。そしてラインハルトはそいつに目をつけ、賢者の石を作らせようとしているんだ。そして、告訴すると言い出したらヘルミーネと同様に殺す気だ。たぶんミランドーラにヘルミーネの事を知られたら、賢者の石をつくらないだろうし……」

「ひどい！」

私は憤激した。

「そのことは結社全体が知っているの？フィオナ以外」

「うん」

「子供も？」

「うん」

「クリフォードも？フローラも？皆フィオナをいのように利用しようとしているというの？どうしてよ！どうしてなのよ！」

「どうしてもこうしてもねえってんだよ。ともかく奴らはフィオナ・ミランドーラを利用しようとしているんだ。あんまし戦わせようとしたがらないとか、そーいう場面、あつたろ。何回か。結社内全体、ミランドーラにとっては裏切り者なんだよ。都合の良いカモっていうか。俺が結社を破壊したときのこと、覚えてるよな？」

「う、うん」

「ミランドーラに変化していただろ？それもあいつの指示。理由はアイツを戦わせないため。アイツには罪はないからな。奴はベックフォードとアンソニーとかいう奴を含めたエクソシストを始末し、てめえら邪殺屋を意識不明にしたあと、おめおめとミランドーラを結社から連れ出し、そ知らぬフリをするつもりだったのさ」

「ちょっとまってよ。私たちのことはどうして殺さないの」

「お前らにだって罪はないだろうが。俺も殺したくなかったし。お前らなんて仲間の惨たらしい死を見て、もだえ苦しんでればいい。お前もそう思うだろ。エクソシストの死に様は実に美しい。この上ない愉快的な舞台だ。最高の喜劇！俺は感動で泣きそうになった！」

ふと石橋が私たちのほうを見ていないことに気がついた。視線は私と土屋の間を通って、私たちの後ろを見ている。笑って細くなつた目が、誰かをいたぶっているような光を宿していた。私たちは振り返って硬直した。

フィオナが、両手で口元を覆って目に涙を浮かべ、立ち尽くしていた。私たちのことを探しに来たのだろう。私たちの間で、のろのろと時間が流れた。石橋がくだらないジョークを飛ばし、爆笑する声しか聞こえない。

「あなたの言っていることは本当なのですか！」

フィオナは取り乱して絶叫し、石橋の胸倉に掴みかかった。石橋は平然とその姿を眺めている。

「嘘だと思いたきゃご自由に。なんせ俺は虐殺者なんだから」

フィオナは仲間に裏切られた悲しみに打ちのめされ、私はその肩をそつと抱いて、慰めた。土屋は苦い顔をして石橋を眺め、石橋は土屋の首もとの六芒星のネックレスに妙に興味を持ち、軽く身を乗り出している。私はフィオナがある程度落ち着いてくると、さらに質問を重ねた。

「ねえ、どうして石橋はエクソシスト以外の特殊能力者を殺すのをやめたの？どうして公務員を殺すの」

「飽きたからやめた。特殊能力者を殺してもつつまんねーしさ」

石橋はソファアの背もたれに背中をつけた。

「よく考えればさ、特殊能力者は気の毒だ。いりもしねー力を手に入れちまってさ。そして無能力者はすでに不幸な能力者たちを閉じ込めようとし、ますます不幸にしようとしている。残酷つてもんだ。だから能力者を収容しようとしている公務員を殺してんだよ」

「他にも方法があるはずだよ！何か手が……」

「ないない。なーんにも無いって」

石橋はのん気に言った。

「まあ、俺にはもう関係の無いことだ。どうせ死刑になるんだから」

「ライナーは母親を殺された復讐と、私を助けるために裏切ったと？」

フィオナは震える声で訊ね、石橋は「そう」とそっけなく言った。

「感謝してほしいもんよ。ていうか、俺、死の呪符で殺すの、あんま好きじゃないんだよね」

石橋はふとそんなことを言った。

「え？どうして？」

私は眉をひそめる。石橋は悲しそうにため息をついた。

「どうも、殺した感覚がないんだよね。どうせ殺すならさ、感覚が残ったほうがいいだろ？ナイフでグサツとやったときの感覚とか。お前だってそう思うだろ？飛び撮る血液とか感じたいだろ。なあ。よく考えれば今までは……」

「フィオナ……」私は石橋を無視して、また泣き出してしまった。フィオナの肩を抱いた。石橋は構わず殺しについての演説を続け、冷静に己の殺し方を振り返っている。土屋も無視している。

そして、土屋の部屋のドアが開いた。なんだろうと石橋はそちらを見、これ見よがしに耳を小指でほじくった。それを引き抜き、指にふっと息をかける。じじ臭いと思った。私は呆れながら振り向き、硬直してしまった。

フィオナを利用するため、ヘルミーネさんのことを今まで巧みに隠し続けた、フローラが平然とそこに立っていた。どうやらじじ臭い石橋を探しに来たらしい。息切れしていることからあちこち探し回ったと見える。フローラはキツと石橋を睨みつけ、怒鳴り散らす。

「こんなところでなにやってんの？アンタが消えたって大騒ぎになってるんだけど！とつとと監房棟に行きなさいよ！」

石橋はにやにやしたまま何も言わなかった。何かおかしいのだろう。そして、しばらくしてからこういった。

「俺がここに来たんじゃねつつうの。連れてこられたんだ」

フローラはなんと少しでも石橋を責めたいらしいがあいにくこのことに関しては私の責任だった。フローラはフィオナを見ると、ぬけぬけとこう言った。

「フィオナっ？どうしたの？どうして泣いているの？」

「フローラ……どうして？」

私の目からも涙があふれ出てきた。私は立ち上がって、フローラと向き直る。結社が犯罪で支えられているのなら、結社なんてなくなればいいと思った。

「どうしてフィオナを裏切ったの？お金がそんなに大切なのかにそう思うけど、違法のお金だよ？ねえっ！知ってるんでしょ全部！ヘルミーネさんのことも、ラインハルトがフィオナを利用しようとしていることも。そしてフローラ、ううん、ライナー以外の皆はそれに協力しているんでしょ！どうしてそんなことができるの？エクソシストは皆、仲間じゃなかったの？」

「ちょ、なによ、意味わかんない！」

フローラが動揺した。私は絶叫した。

「フィオナを利用して、拳句の果てには殺そうとたくらんでいるなんて信じられない！結社は人一人簡単に殺すような、そんなところだったんだね！石橋と同類だよ！」

「どうしてあたしがこんな奴と同類にされなくちゃならないわけ？」

フローラが目をもいた。

「わけが分からないわ！行きましようフィオナ！」

「とぼけないでください！」

フィオナががなった。すると、フローラが息を吞んで黙り込んだ。

フィオナは泣き腫らした目を裏切り者のフローラに向け、確固と

立ち上がった。

「あなたに、いえ、あなた方に石橋健を責める権利などありません」

フィオナは冷たく、そして悲しげに言った。

「あなたを信じた私が馬鹿でした」

フィオナの声とともに、ドアがひとりでに、勢いよく閉まって、バーンと音を立てた。フロアを締め出してしまったのだ。もう、フィオナと私は限界だった。

私とフィオナは再び、抱き合って泣いた。

ライナーの裏切りの追い討ちをかけるような出来事に。

悲しみに包まれた室内の中で、土屋は黙りこくる。

そして、こらえていたのを吐き出すように笑い出した石橋の声は、まさに悪魔の笑いだった。

第三十二話：内部分裂

その日は私とフィオナは慰めあいながら一緒に夜を過ごした。石橋は土屋に監房等に連れて行ってもらった。石橋はこれから厳しい取調べに合うらしい。多分暴力を振るわれるだろうが私はもう石橋なんてどうでもよかった。

ただ悲しかった。特にクリフォードとフローラにまで裏切られたことが。

そして次の日、私とフィオナは二人で広間に朝食を食べに行こうと降りていった。すると、なんだか広間は騒がしかった。何事だろうと私とフィオナはいそいで広間を覗き込む。

すると、テーブルの上にあつた豪華な朝食が床にばら撒かれていた。そしてシェフハットをかぶった人数人とエクソシストがなにやら広間の中心でもめている。

土屋が広間の隅にいたので、私たちはどうしたのか訪ねようと近づいた。土屋はお若い女の人と話していたが、私たちが来たのを見ると女の人は去っていった。

私は土屋に訊ねる。

「どうしたの」

「料理に腐った肉を使ったらしくつてさ。エクソシストどもともめているんだ。清掃員がそれを冷蔵庫から発見したらしい。でも料理人はこんな肉は昨日までは無かったって言い張ってるんだ。おかしいよな」

フィオナは今度はエントランスの方を見やると、そつと土屋に問う。

「あちらでもなにか騒ぎが起きているようですね」

私はそつちを見る。すると、エントランスの隅にある売店がごちやごちやにされていた。

その売店では結社内新聞が売られている。

私たちはそちらにいつて事情を聞く。すると、結社内新聞を作っている結社内新聞部がガセネタを流したと言う。

そして上階へ続く非常階段からユニコーンのような魔法生物が飛び出してきて、私は危うく衝突されそうになった。土屋はぎょつと

して目をむいた。フィオナは両手で口を覆った。

「上階も荒れているようですわ」

私は怯えた。

石橋が捕まった次の日から、結社が大荒れになるなんて。ひょっとして奴の呪いか？

私は泣きそうになりながらもフィオナをつれてどこかへ行こうとしたが、どこへ行こうが人の怒鳴り声が聞こえてくる。

土屋はユニコーンの角をなでて大人しくし、上階へつれて戻るところだ。

私たちはエレベーターホールでエレベーターを待っていた。

するとその中の一つから、不安そうな顔のクリフォードが慌しく飛び出してきた。

クリフォードも裏切り者。そう思うと胸が苦しい。

クリフォードは私たちを見ると、あわててやってきた。

私はすかさずフィオナの前に出て、クリフォードを睨みつけた。

「何よ」

クリフォードは私の硬い声にびっくりしたようだ。

「ど、どうしたんだ？」

「何の用よ」

クリフォードは悲しそうな顔をしたが、しっかりとこう告げた。

「ちょっと来てくれ。急ぎなんだ。話しならあとで聞くよ」

私たちは渋々クリフォードの後に続いた。クリフォードはまっすぐ二階へ向かった。二階もひどい有様だった。廊下には書類やら何やらが散らばり、ミニ竜が天昇を飛び回り、小人のような何かが結社の壁を破壊しようとしている。それを止めようとエクソシストたちが必死だ。

クリフォードはそれを避けて通り、ラインハルトの部屋に入った。

ラインハルトの部屋ではエクソシストがなにやら騒いで大集合していた。ラインハルトはおらず、ラインハルトの机の上には土足で青年エクソシストが乗っている。

そして私たちが来たのを目の端で確認すると、叫んだ。

「静かにしろ！」

さすがはエクソシストだ。皆は一瞬で黙った。

青年エクソシストは真剣そうに、高らかに叫ぶ。

「結社内での不正が次々に暴かれ、ここは大変なことになっている。すべての部署が大混乱だ。残念ながら我々エクソシストにも不正があった」

え？

青年エクソシストは続ける。

「まず十二歳エクソシスト！結社内の規則を破り、単独行動をした！」

十二歳エクソシストは違うと声を上げた。

青年エクソシストは音量を上げた。

「次に十三歳エクソシスト！それを隠匿！十四歳！十五歳十六歳エクソシストが捕まえない代わりに犯罪者から不正に金をもらっていたことを隠匿！そして十七歳！魔法を手品と称して無能力者に見せつけ、不正に金を収集！以上省略！」

エクソシストたちは違う違うとわめき散らした。私は信じられない思いでいっぱいだった。

しかしそんな不正より、もっと大きな不正がある。フィオナのことだ。

私は決然と前を見据え、エクソシストたちをかき分けて前に出て、青年エクソシストの隣、ラインハルトの机の上に乗る、叫んだ。

「皆聞いて！そんなことよりもっと重大なことがあるでしょう？
フィオナのことよ！」

みんなが一斉に黙った。

私は皆が注目する中、あらいざらいぶちまけた。憎しみを込めて
叫び、必死にその憎しみを胸の奥に押さえつける。

話し終わるとエクソシストたちは隣の人を片っ端から睨みつけ、
「お前もラインハルトのぐるか！」とがなり、社長の部屋はめっちゃ
めっちゃになった。

皆そろいそろってしらばっくれている。私は腹が立ってフィオ
ナと一緒に部屋を出た。

「皆して知らないフリをするなんて！」

私は小人をよけながら憤慨した。

フィオナは真剣そうな顔だ。

「幸乃さん、どう考えてもおかしいと思いませんか？石橋を捕まえた次の日からこんなことになるなんて」

言われてみれば。私はエレベーターホールの前で足を止めた。

「そうだよな。監房等に行ってみよう。石橋に会おう。何か分かるかもしれない」

フィオナは軽くあごを引いた。

私たちは監房等に向かうため、エレベーターに乗り込んだ。

第三十三話：亀裂

死刑囚の部屋は監房等の一番奥の部屋だった。迷路のような監房等をフィオナは一度も迷わなかった。

死刑囚の部屋は他の牢よりも扉が厳重だった。特殊合金の重そうな両開きのドアだ。小さなのぞき窓がある。

私とフィオナはそこから中をのぞいた。中には三人のエクソシストが何かを叫んでいた。防音なので何を言っているかは不明だ。

私がノックをすると、怒りで目をぎらつかせたエクソシストが振り向き、ドアを勢いよく開けた。その中の一人がぶつきらばうに言う。

「なんの用だ。取調べ中だぞ」

「会いたいんです。聞きたいことがあるので」

「聞きたいこと？それは何だ」

「あの、幸乃さんに任せてもらえませんか？」

フィオナが優しく笑うとそのエクソシストは一瞬戸惑った。そしてフィオナに丸め込まれ、出て行った。ただし、フィオナもさっきの話について聞きたいのでと、エクソシストに連れて行かれた。

私は一人で死刑囚の部屋に入った。部屋の真ん中には一脚だけ椅子があった。

その椅子には石橋が座っていた。椅子の肘掛に手首を固定され、足も固定されている。黒い椅子からは白いコードがいくつか延び、後ろの壁の下の方にそのコードがのめりこんでいる。

石橋には散々殴られた跡があるが、当の本人は上機嫌に鼻歌を歌っている。何が嬉しいのか、ニコニコ笑って、楽しそうに私を見ている。

「なに笑っているの？」

私は一生懸命ドアを閉めながら石橋に訊ねた。ドアはとっても重かった。石橋は私を見ていると思ったが、思考は他のところに行っていたようだ。たった今私に気がついてニコニコからニヤニヤにかえた。

「よう、自然魔術士のメス豚。俺になんの用だ？それより見てくれ。いい椅子だろう。俺が暴れると電流が流れる、ハイテク機能のついた椅子だ、すごいだろ」

まるでこの椅子は自分が用意したとでも言うような態度だ。

私はともかく無視した。

「下で起こっていることを知っている？」

「ああ」

石橋はどうでもいいように答えた。

「さっきのエクソシストどもが言っていた。なんか混乱してるんだって？いい気味だな」

この言葉からして、石橋は関係ないらしい。

「俺は見たとおり、このザマだ。何もできやしない。ひょっとして、まだ俺の仲間がいるのかもな。裏切り者がさ」

私はギクリとして身を固めた。すると石橋は愉快そうにケラケラ笑った。

「ま、安心しろ。俺の仲間はずれと、不良だからよ。他にはホントいませんって」

「そうなの」

私はしばらくうつろうつろした。すると石橋は不意に訊ねてきた。

「なあ、今日は何の日か知ってるか？」

「知らないよ」

私は足を止めた。

「石橋の誕生日？」

「バツカじゃねえの。クリスマスだよクリスマス」

あ、と私は声を上げる。今日だったんだ。すっかり忘れていた。だって、まさに狙ったようなタイミングで、結社が崩壊していくから。そっちに気をとられていた。

「俺に誰かプレゼントくれないかなあ、あ、そうだ、人。だれでもいいから10人ほど、ちよっくら連れて来てくれよ。全員殺しておくよ。いいだろクリスマスくらい」

私は無視して、石橋を観察した。

キツイ印象は与えない、切れ長の目に、女のように白い肌。栗色の髪は長く、目にかかっている。そして、どこか寂しげな光がその目に宿っていた。石橋も私のことを観察していたが、飽きたのかやめて、声を潜める。

「お前、霧林はどうした？」

「白稲ちゃんなら帰ったよ」

私は素直に答えた。

「石橋があんなこと言うから、泣きながら。ひどいんだね石橋は。女の子を泣かせるなんてひどいよ」

「本当のことを言ったまでだ」

そう言ったわりには、後悔したような顔をしている。

「石橋はさ、どうして狂っちゃったの？殺しの冤罪になって、周リから見捨てられたから？そうかもしれないけど、変だよ。考えたんだけど、石橋は正義だったんでしょ？友達もいっぱいいたんでしょ？1からやり直せばよかったんだよ。石橋なら乗り越えられたと思うよ」

「ああ」

石橋はふんと鼻を鳴らした。

「お前の言うことには反吐が出るよ」

石橋はばしりと言い放った。なので私はもつと言った。

「どうしてよ？石橋は何かを守りたかったから、殺人鬼になる前から陰陽師の力を強化していたんだよね？なのにどうして、その気持を込めて育てた能力で人を殺すのかな？守りたい人がいなくな

ったの？ねえどうなのよ！」

石橋があらぬ方向を見だしたので私はその胸倉に掴みかかって激しく揺さぶった。

「聞いているの？どうして石橋はそんな風になっちゃったのかな？白稲ちゃんね、泣いてたんだよ？分かってるの？石橋のせいで、白稲ちゃんは変な男子に殺されかけたんだよ？もし石橋が白稲ちゃんのそばにいてあげたら、お互いどんなに楽だったか……！」

「だからどうしたってんだよ？ハッ、知るかよそんなこと。楽？なに言ってやがんだよ」

石橋は本気で私の言ったことを馬鹿にしていた。

「俺に期待していたのか？そりゃ嬉しいな。まっこと嬉しい」

石橋はそういうと、私の後ろに視線を放った。私もつられてそっちを見る。すると、フローラがドアを開けて立っていた。ひどく冷たい目で私を見据えている。

「幸乃、何しているの？」

「何しているのって？こいつを話をしているんだよ」

「どうして内緒話をするみたいにそんなに近づいているの」

私は石橋の胸倉を離した。

「そんなじゃないよ」

「幸乃、いくら絆があるからって、この部屋にあまりこもらない方がいいわよ。あんた、知ってる？疑われているのはあんたなのよ」

私は愕然として薄く口を開いた。その唇が震える。

「どうして……」

「アンタが一番怪しいからよ」

私は瞬時に我に返るとフローラと向き合い、がなりたてた。

「裏切り者はフローラでしょ！フィオナを裏切ったりしてさ」

「何のことだかさっぱり分からないわ。幸乃、アンタはだまされているのよ。その愚図に。コイツの言ったことは全部でまかせ。フィオナのこと。ライナーが裏切った理由はアイツが馬鹿だからよ」

「ライナーは馬鹿なんかじゃないよ！ラインハルトがヘルミーネさんを殺して、あなたたちがそれを隠したりするから……！」

「社長は優しいわ！」

フローラが絶叫し、私は思わず黙った。

フローラが脇で拳を握り締める。

「私たちのために何でも用意してくれる。それに事件が起こればすぐに反応する。これ以上被害を広げないために全力を注いでくれる。それにヘルミーネさんを殺した証拠はあるの？」

「それはライナーの裏切り自体だよ！」

「物的証拠よ！はつきりとした証拠！」

フローラが金切り声を上げて怒りに燃えた目で私を見つめた。

「ライナーは前からちよっとおかしかった！きつとそそのかされて、あっさり裏切ったに決まっている！石橋の言うことなんて全部いんちきよ！今回の騒ぎはきつと……幸乃の仕業よ！アンタは裏切り者だわ！」

「違う！私は裏切ったりなんかしない！」

「うるせえなあ」

石橋が私の後ろでつぶやいた。フローラはしばらく沈黙していた。私もだ。

立ったまま、動かなかった。石橋が鼻歌を歌っている以外、何も聞こえない。

フローラは捨て台詞のようにこう言い捨てた。

「死刑は五日後よ。五日後に、石橋アンタは残酷な方法で殺される。特殊な銃弾で撃たれ、10分間もだえ苦しむのよ。見ものだわ

ね」

フローラはそれだけ言うと、出て行った。

石橋は何が面白いのか一人で笑っている。

私は口を引き結んでその部屋から出た。

広間に戻ると人がほとんどいなかった。皆、荷物をまとめて出て行ったようだ。

まさに内部分裂だ。もう、ここもおしまいなのかな……。

広間の中を眺めていると、不意に冷たい何かを感じた。

私はなんだろうと辺りを見回してみるけど、何も無かった。

第三十四話：謎の封筒

最悪のクリスマスの夜。

私は十四歳エクソシストの部屋に向かっていた。フィオナを探しているのだ。二回の廊下はすでに綺麗に片付けられていた。

エクソシスト以外の人はほとんどいない。

私はその廊下で後ろから土屋に声をかけられた。

「あ、おい、高橋」

私は足を止めて振り返る。

「土屋？どうしたの？」

「あのさ、ミランドーラのことだけど、アンソニーは本当に知らないらしいぞ」

「え？」

私は素っ頓狂な声を上げた。

「どうして分かったの？」

「真実を吐かせるために呪符を使っただ。そしたら、本当に何も知らないって」

「ヘルミーネさんのことも？」

「……ヘルミーネのことは知ってるみたいだった。怖くて何もできなかつたらしい。何かしたら、自分も殺されるんじゃないかって泣いてたぜ。あの歳で泣くかよ、フツ」

土屋はあきれ返っていた。その表情から本当のことらしい。私はクリフォードに冷たく当たってしまったことを悪く思った。私はじやあ、と顔を上げる。

「フローラは？あとの人たちは？」

「さあな。石橋が何か知ってる気がして尋問しにいったがアイツも知らないみたいだし。てか、ニヤけるばかりで何も言わない」

土屋は石橋の笑いが大嫌いらしい。不快そうに眉をひそめている。

「とりあえず、ベックフォード以外は十四歳エクソシストの部屋にいるからさ、行こうぜ」

私は土屋とともにその部屋へ向かった。

私とクリフォードはそこで仲直りして、土屋はそのうちいなくなっただ。

私とフィオナとクリフォードは一緒に夕食を食べて、クリスマスのことを虚しく話した。

就寝時間になると、わたしたちは一緒に自分の部屋がある階へあがった。

別れるとき、クリフォードがふと思い出したようにこういった。

「あのさ、明日、石橋の家族が来るんだけど、俺、付き添いを頼まれてるんだ。誰か一緒に来ない？」

「私、行くよ」

私が言つと、クリフォードは賛成してくれた。

「分かった。明日の昼12時に、広間来て」

「うん」

石橋の家族は一体どんな人なんだろう。

私はそれなりの想像をしながら部屋に戻った。

部屋の前には一枚の白い封筒が無造作に置かれていた。なんだろう？ただ封筒にはワープロで高橋幸乃へ、と書いてあるだけで、誰からのものかは一切書いていなかった。

私は封筒を破ろうとした。破れない。

封筒はなぜか、無駄にしっかりしていて、全くあかなかった。

仕方が無いので部屋に戻るとその封筒をベットカバーの下に入れておいた。

一体誰からのものだろうか？

私は釈然としない気分だった。

第三十五話：処刑日前日

あの日から四日たった。

私高橋幸乃は毎日が憂鬱だった。ご飯はいつもスーパーで買ってきたようなパンだし、なにしろ、拍子抜けするほどこの四日は何も起こらなかったのだ。私は毎日フィオナとクリフォードと庭とかをぶらぶらしていた。

一方で土屋とフローラは部屋から出てこない。

フローラはなんとなく分かるけど、土屋の引きこもる理由は分からない。なんせ、ご飯にも降りてこないのだ。四日前にパンを大量に部屋に持っていくのを目撃した以来、一回も見えていない。

そして謎の封筒もあかなかった。

三日前、石橋の家族は来なかった。

電話をすると、石橋の家族の命を狙っている人がたくさんいるらしく、その護衛をしているらしい優介が出た。優介は、家族は会いに行かないといった。

伝言は無く、ただ妹が泣き喚いていたといっていた。石橋に伝え
ると、つまらなそうに鼻を鳴らしたらしい。

私は明日が石橋の死刑日なので、土屋にそのことを伝えようと、
今、土屋の部屋のドアの前に立っていた。

「ねえ、土屋、いるんでしょう？あけてよ」

私はドアをドンドン叩いたが中からの反応は無かった。クリフォ
ードとフィオナを呼んで、三人で呼びかけたがやっぱり反応は無い。

とうとう、クリフォードが杖でノブをつついて鍵を壊し、ドアを
開けた。

そして部屋の中は真っ暗で、誰かがいる気配は無かった。

カーテンを開け、窓を見るとちゃんと鍵がかかっている。一体ど
こへ行ったのかと私たちはいぶかしんだ。私たちが戸惑っていると、
不意に風呂場の方から音がした。次の瞬間電気がつき、私たちはま
ぶしさのあまりたじろいた。

そちらを見ると、土屋が平然とした様子で立っていた。土屋はや

や尖った声で詰問する。

「ここで何してやがる。不法侵入で訴えるぞ」

「土屋が私たちを無視するから心配したんだよ」

私が言うと、土屋はふんと鼻で笑う。

「無視するも何も、風呂に入っていたんだから仕方が無い」

土屋は悪びれた風もなく言い放つ。フィオナは土屋の机のパソコンを覗き込んでいた。

「土屋さん。コレは何の情報ですか？」

その声にクリフォードと私はパソコンの画面を覗き込んだ。そこには、結社で使われている能力封じの手錠の画像が映されていて、その横にはなにやら文章がずらずら並んでいる。

私たちが読む前に土屋はパソコンを閉めてしまった。

「なんだっていいだろう。で、何の用？」

「明日が石橋の死刑日なんだ」

クリフォードがむすってして告げる。土屋は「ああ」と、どうでもいように言った。

「そうかよ。用はそれだけか」

「何でそんな無関心なの？」

私は不思議に思っ て訊ねた。すると土屋は鼻先でせせら笑った。

「アイツにはもう、興味も無いね。だってさ、どうせ死ぬんだろ？興味を持ったところで意味が無い。俺は特殊能力公開の方が気になるね。ちなみに公開日は一月下旬あたりにするらしい」

「その情報をどこで？」

クリフォードは厳しく追及したが土屋は答えなかった。

「だから、エクソシストもそろそろ動き始めた方がいいと思うぜ。政府たちと何らかの話し合いが必要だろう。ラインハルトは動いていないのか？」

「分からない。社長は最近部屋にこもりつきりなんだ。ところでお前、ハッキングしたんだな」

クリフォードは再び質問した。土屋はあきらめて「それがどうした」と肩をすくめた。

「ハッキングでもしない限りは、こちらには何の情報も来ない。それは嫌だろう。だから、俺はこうしてお前らのために、罪を犯してまで情報を引き出してんだよ」

土屋は誇らしげに言った。私は「その通りかもね」と身をすばめた。

「でもさ、石橋がいなくなるんだよ？だから能力公開の意味も無いんじゃない？だって、政府はあくまで石橋を恐れてるわけで、それが捕まれば政府も安心できるはずだよ……」

「第二の石橋、第三の石橋が現れるのを恐れているんだろう。そんなのが現れるぐらいなら、その前に特殊能力者を一網打尽にして

おきたいのさ。石橋のファンなんてたくさんいるわけだし、アイツが死ねば反乱を起こしかねない、そういう心配もある」

「石橋のファン？クリスティーナぐらいでしょ？」

私は目をむいた。

「クリスティーナのサイトに来ていた人も、冗談めかしの書き込みしてるだけだよ！」

「どうだかねえ」

土屋は嘲笑するように言った。自分のベットに座り、ふんぞり返る。

「本気かもしれないだろ。現に、霧林白稻きりはやしつるねのところに、そういう奴が来たじゃないか。えーっと、サイコキネシストの男子だっけ？会わせてくれって泣きついてきたってさ」

「その人は石橋に身内を殺されたから、石橋を殺したいあまりにそういったに違いないよ」

「アイツのこと、愛してるって言ったらしいけど、それでもか？」

「ならそいつは狂ってるんだよ」

私は怒ったように言った。

土屋は「ほら見る」とそっぽをむいた。

「ともかく石橋が死ねば、あとは無能力者をどうにかすればいい。まあ、石橋のときよりは手こずらないだろう。対能力社用兵器を持ち出したって、注意すれば勝算は十分にある。だろ？ なあもういいだろ。出てってくれないか、俺はハッキングに忙しいんだ」

「ご苦労様」

クリフォードがぴしゃりという私たちは外に出た。クリフォードは土屋のドアを櫂の杖でつつき、壊してしまった鍵を直した。

私たちは土屋の言ったことを考え、かなり不安になった。

「特殊能力公開ですか……今まで忙しくて考えていませんでしたが、思った以上に深刻なものになりそうですね……」

フィオナの言葉に私とクリフォードはうなずいた。

「そうだよ。でも、今は明日の死刑のことに集中しない？ 集中
って言っても見るだけだけど……考えるのはその後でも遅くは無い
と思うよ」

「そうですね」

フィオナがいい、クリフォードはうなずいたが、私たちはどうに
も不安でその夜、あまり眠れなかった。

第三十六話：処刑日当日

私は次の日の朝、怯えていた。

今日は石橋健の死刑日。そして、私と石橋の間には絆がある。

つまり、石橋は私の片割れといっても過言ではない。そいつが今日、十分間の苦しみのおち、死ぬ。もしかして、片割れの私もその苦しみを味わうのでは。そう思うと、怖かったのだ。

死刑執行の時間は9時。あと一時間。普通は皆、執行時の一時間前には死刑執行所に行くらしい。最後の最後まで石橋に屈辱を与えるためだと言う。

私はやっと起きる気になって、ベットからむっくり起き上がった。朝のシャワーをあびて、できるだけおろおろ着替えをし、廊下に出る。廊下には、もうほとんど人はいない。

私は朝食を食べに、広間に下りていった。広間には、まず土屋がいて、クロワッサンをむしゃむしゃ食べていた。本当に石橋の死刑に関して興味が無いらしい。ただ、土屋はとうとう女に興味を持ったのか、アシユリーの親友のイヴァと話していた。アシユリーとは、私と土屋が結社に入会するための試験のときに絡んできた、嫌味ったらしい女だ。イヴァがいなくなると、私は土屋の隣に座って、

「おはよ」と声をかけた。土屋は「ああ」と上の空で言った。だるそうな顔だ。

広間には、もう私たちと十人ほどしかない。エクソシストなのに、死刑囚を死刑の前にいたぶるなんて、なんだかひどいと思った。そしていがいにも、広間にはアシュリーがいた。きついウェーブのロングヘアを後ろに払いのけながら、まっすぐこちらへやってくる。すらりとした体が綺麗で、以外にも美形の部類に入ると思った。

「おはようございます」

私が挨拶すると、「おはよう」と返してくれた。私たちの正面に座り、挨拶もしない土屋をじろじろ眺めている。土屋はなんだよ、というようにアシュリーをみた。

「俺になんか用か？」

土屋は面倒くさそうに尋ねる。アシュリーはしばらくしてから口火を切った。

「あなたは最近、女癖が悪いようですね」

いきなり言ったので、私は飲もうとしていた水を噴き出した。あ

わててペーパーで吹く。土屋の反応はない。アシュリーは続けた。

「おかしいと思いましたのよ。あなたのような嫌味つたらしい餓鬼が、いきなり女癖が悪くなるなんて。理由をお聞かせ願えませんか？」

「うるせえな、思春期なんだ」

土屋はまったくキャラに外れたことを言った。私は愕然とした。

「思春期なんて土屋にあったの？」

土屋は無視した。

「カンケーねえだろ。ほっといてくれ。俺が何しようが勝手だろ」

「ええ。もちろん」

アシュリーはあっさり言った。

「けれど見逃せないのよ。イヴァの親友として言いたいことがあるのよ。イヴァと付き合うのならイヴァ一本にしばってもらえませんか？浮気をしないでほしいの。いいこと？」

土屋はいきなり黙った。しばしの沈黙の後、「そうだな」とあつけなく返した。アシュリーはまだ疑うような目だったが、去って行った。私は土屋に素朴な質問をぶつけた。

「土屋は女たらしなの？」

「馬鹿め。失礼なことを言うな。俺は女たらしなんかじゃねえよ」

土屋は不機嫌そうに言った。私はどうも釈然としなかったが、放っておくことにした。土屋のことは好きだけど、恋愛感情はなかった。どちらかというと、お兄ちゃん的な存在である。

「それよりお前、死刑場に行くか？」

訊ねられたので、私はうなずく。

「うん。行く。行くよ。行かなくちゃ」

「そうか」

土屋は軽くあごを引いて、再び朝食に熱中した。私は手近のクリムパンと、オレンジジュースを飲み、土屋に死刑場はどこか訊ねた。土屋は、監房棟のある五階だと答えた。

八時三十分になると、フィオナとクリフォードが、いつまでたっても来ない私たちを探しに来た。

私たちはもう、朝食を食べ終えていたので、一緒に五階の監房棟に向かった。もう、結社にはエクソシストと社長とその秘書ぐらいしかいないけれど、今日ばかりは今まで結社に勤めていた人が戻ってきた。仲間を石橋に殺された恨みを晴らしたいようだ。当たり前だ。石橋のせいで、結社の人がたくさん殺されたのだから。

死刑場は、監房棟の、一番奥だった。ここまで来たのは初めてだった。クリフォードとフィオナは一回も迷わなかった。死刑場のドアは、あまりにもありふれていた。両開きの、金属でできた灰色のドア。今は閉まっているが、中が騒がしいのが分かる。

「石橋がいま、罵倒されてるんだよ」

クリフォードが教えてくれた。私は複雑な気持ちだった。土屋は平然としている。

「いい気味だな。俺の妹を殺しやがってよ」

そう言った土屋の顔は、無表情だった。

「行きましょう」

フィオナに促され、私は重い足を引きずった。鉄扉を力いっぱい引っ張ってあげる。

中はやっぱり真っ白な部屋だった。

大型の体育館ぐらいの広さで、私たちがいる入り口の扉は、隅っこにある。

そして左奥のほうでは、人々が団子状態になって集まっていた。怒号が飛んでいる。

私はできるだけそちらを見ないようにした。

死刑場にしては、無駄な広さだった。多分、人々が死刑囚をリン

チできるように、こんな広さにしたに違いない。私は吐き気を覚えた。

私たちは人々が集まっているところから、はるか右側の壁に並んでもたれなかった。死刑まであと五分だった。

人々が固まったところから、久しぶりにフローラが現れた。厳しい顔つきで私たちの方に近づき、クリフォードの隣の壁にもたれる。

「あいつのしてきたことに比べたら、あんなのお遊び程度よね」

と冷たく言い放つ。なんだか私に向けられている言葉に聞こえた。

「はやく死なないかしら」

私は落ち着かなくなって、怒号の方から顔を背けた。

第三十七話：死刑日当日：2

「本当にアイツ、死ぬのかよ」

いきなり土屋が言った。私たちは眉をひそめて土屋を見る。

「どうして?」

「呆気なさすぎると思って」

土屋は何か言いたいことがあるらしかった。

私たちは土屋に近づいて、「言ってみてよ」と促した。土屋はしばらく迷う素振りを見せてから、宣言した。

「まだ裏切り者がいる」

私たちの間に衝撃が走った。

すぐにクリフォードが、目つきを変えて追求する。

「なんだと？誰だっ？」

土屋は人の塊の方を見やった。人の塊のはるか後ろの方をうろついている、一人の少女。

さつき土屋が一緒にいた、イヴァだ。イヴァは二つに結った三つ編みが可愛い、ありふれた少女だ。そばかすの散った顔は、どこか馴染みやすく、野原にいる少女という感じがした。

「ま、まさかイヴァ？」

私はおどろきのあまり、両手で口を覆った。土屋はたちまち鼻を鳴らす。

「無駄に今まで過ごしていたわけじゃない。こういう奴がまだ、一人や二人はいるんじゃないかって思って、いろんな人を観察していた。そのなかで浮かび上がったのが、あの女。ともかくあの女は抑えた」

「土屋はだから、イヴァに近づいたんだね？」

私は合点がついた。

「ともかくだ、しっかり見張っとけよ。俺は他のところを見張る」

「私もそうします」

フィオナも申し出た。

「クリフォードと幸乃さんはイヴァを。フローラは私たちと同じように、他のところを見張ってください」

「分かったわ」

フローラは冷ややかに私を見た。絶対ユキノが裏切り者だ、そう確信しているような目だった。

私はその目から視線をそらした。

不意に人の塊が崩れ、皆は壁に沿って広がっていった。時間になったようだ。イヴァはあわててそれに習い、私の正面に来た。

一方で、人々の山が解けたところには、石橋が馬鹿みたいに突っ

立っていた。散々殴られた痕がある。口の端からは血が流れ、なんとも無残な姿だ。しかし当の本人は気にも留めない様子だった。平然と辺りを見回し、自分はどの辺りで殺されるのだろうとキョロキョロしている。

そして、唐突に石橋はキョロキョロをやめた。エクソシストもしゃべりをやめた。

入り口から右側の壁の前に並んでいたエクソシストたちが、その壁から離れて私たちの列に加わる。前に誰もいなくなった壁、つまり私たちのいる壁の隣の面だ。私は一番角だ。

石橋は青年エクソシスト二人にずるずる引きずられながら、部屋を横切って、その面のちょうど真ん中辺りにきた。石橋が私を見て、鼻を鳴らすような音を出した。フローラはそのせいで、ますます私を監視した。

石橋は、私の正面のイヴアの方も一瞥してから、エクソシストにされるがままになった。

青年エクソシストは石橋に何かの魔法をかけたらしい。石橋は再び壁際に馬鹿みたいに突っ立って、何も無い部屋の中心辺りを見ている。

そして入り口から、ライフルを持った男性エクソシストが入ってきた。もうすべての準備が整っているようだ。石橋から5メートルほど離れた地点に立ち、石橋と向き合う。そのエクソシストが低い声を張り上げた。

「何か言い残したいことはあるか」

「ある！ いっぱいある！」

石橋が元気よく叫び、ニヤニヤが復活した。

「家族に愛していると伝えてくれ！」

などと心にもないことを言う。この野郎！と数人が騒ぎ立てたが石橋は無視した。

「あと皆様に。いっぱい殺して、ほんとごめん！ それと、全国の殺人鬼の皆様に。俺がいなくなった後も、頑張つて殺してくれ！ そして霧林に。あんなことって、悪かった」

最後のだけ、本音に聞こえた。最後だけ、しおらしかったのだ。

「まあ、こんなもんでいつかな」

石橋は考えるような顔つきで言った。エクソシストたちは、石橋が恐怖のあまり震えることを期待していたようだ。しかしそんなものは微塵も見せない。石橋は不愉快そうなエクソシストたちを見て、それを悟ったようだ。そして、もっと不快な言葉を吐いた。

「いままでさ、いっぱい殺してきたけど、自分が死んだことはなかったよなあ。思えば。あはははゝなんか楽しみだゝ」

と、ほざいたのだ。

石橋は終わりにしたらしく、黙って、笑いを引つ込め、ライフルの方を眺め回した。

その男性エクソシストは不機嫌そうに標準を合わせ、声を張り上げる。

「これより、石橋健の死刑を執行する！」

私は我に返った。イヴァの方を見て、しっかり見張る。石橋の痛みが私のものになるのでは、という不安が消えたわけではなかった。でももうどうしようもない。これも運命なのだ。

私はイヴァから一瞬目をそらし、殺人鬼を見た。

加奈を殺した石橋。土屋の妹を殺した石橋。とうとう死ぬのだ。でも何の感情も沸かなかった。嬉しいとも、悲しいとも思わなかった。ただ、哀れだった。

壊れた人間とは、まさにコイツのことではないだろうか？

今まで正義を行ってきたのに、理不尽な出来事ですべてが壊れた。哀れでならない。どうしてそんなことが起こったの？私は泣きそうになった。人生って、そんなに厳しいものの？私の人生なんかよ、奴の人生の方が、よっぽど過酷だ。まるで最初からそう設定されていたような人生ではないか。

「大丈夫か」

土屋がそつと声をかけてくれる。私は必死にうなずいて、イヴァと、石橋二人を視界に入れた。

執行人の、引き金にかけた指がぴくりと動く。

そして、死の引き金が引かれた。

第三十八話：第二の裏切り者

何かが爆発するような、バーンという音がした。エクソシストたちが鋭い悲鳴をあげ、私の顔に、生温かい何かが飛び散る。あわててぬぐうと、血だった。

石橋を見る。石橋は撃たれていなかった。ただ。さっきと同じ体勢で、突っ立っている。

え？なんでっ？

死刑執行人を見る。死刑執行人は、死んでいた。爆弾で吹っ飛ばされたかのごとく木っ端微塵に吹き飛んで、白い床にはそこを中心に、血が飛び散っている。肉片さえも無く、バラバラになった白い骨が、血まみれの中に山になっていた。

な、なんだ？銃が暴発したのか？違う、イヴァだ！私たち十四歳エクソシストはそう思って、一斉にイヴァのほうに突進した。石橋の目の前を横切り、突っ立っているイヴァのほうに攻撃を飛ばそうとした。

私の背後でまた爆発し、私たちは吹っ飛ばされて床に叩きつけられた。何事かと振り返ると、さっきまで私たちがいたところの壁が、黒く焼けただれていた。黒煙を風で吹き飛ばし、辺りに目を凝らす。

そして、やっと石橋が居ないことに気がついた。

エクソシストたちが一斉に怒声を上げた。わっと前に押し寄せてくる。私はそれを何とかよけてイヴァを見た。イヴァは平然とした様子で立っていたが、攻撃した様子など欠片も無かった。というか、いつも持っている杖さえも、持っていない。

私はわけが分からず、立ち上がって壁際によけ、土屋の姿を探した。クリフォードたちも姿が見えない。私の目の前には、怒って絶叫し、走り回るエクソシストの姿しかない。

私は不意に、上を向いた。何かの気配がしたのだ。黒い何か落ちてきて、私の真正面に降り立つ。私の横の入り口のドアにすばやく近づいて、あけようとしている。

土屋だった。全くの平然とした様子で石橋を掴み、後ろから石橋が見えないように前にかばっている。石橋の足かせは外れていたが、手錠の片方がとれないようで、石橋は苦戦している。

ドアが開くと、土屋は石橋の背中を押して、出て行った。

私は愕然とした。一体土屋は何を……？

「ユキノ！」

私は誰かに腕をつかまれ、そっちを見た。フローラだった。怒りで顔が真っ赤だった。

「何しているの！裏切り者はユキノでも、イヴァでもない！裏切り者は、土屋弘よ！」

「で、でも……」

私は困惑した。いまいち状況が理解できなかった。フローラはそんな私を厳しく叱りつけた。

「追うわよ！ぐずぐずしているヒマはないわ！」

その声に我に返り、私はすっかりうなずいた。理由は分からないけど、今は石橋を逃がさないことが先決だ。

私とフローラは、ドアから外に飛び出した。他のエクソシストたちはまだ気がついていない。私はさっと左右に目を走らせた。右の方から足音がして、それがどんどん遠ざかっていく。私たちはそれ

を追って走った。走って、走って、全力疾走した。何がなんだか分からないまま、走りまくった。

フローラの方がこの階には精通していた。だから意外とすぐ追いついた。石橋と土屋はなにやら口げんかしていた。石橋は土屋に右手についたままの、能力封じの手錠を外せといい、土屋はそんなヒマはないと文句を言っている。だったら能力が使える土屋が石橋を抱いて、一気に行けばいいのに。しかしそれは石橋のプライドが許さないらしかった。

「ウンディーネ、行つて！」

フローラが叫ぶと、水の精ウンディーネがフローラの青く変化した杖の先から飛び出した。水でできた美女だ。ウンディーネは水の衣から水をほとばしらせながら、二人の背中に襲い掛かった。水も滴るいい女とはまさにこのことだ、と私はどうでもいいことを思った。私もそれに加勢するように、両手を前に出して、そこから水をほとばしらせる。

ウンディーネと水は、二人の背中に見事ぶつかり、二人は唐突の攻撃に無様に前にひっくり返った。

チツ、と土屋の舌打ちの音がして、振り向きざまに呪符を飛ばしてくる。私たちはそれを間一髪でよけた。土屋はすぐ立ち上がったが、石橋はなんだかもたついていた。能力なしでは運動オンチなの

だ。私はどうでもいい優越感を覚えた。

「早くしろ馬鹿野郎！」

土屋が石橋を怒鳴りつけ、石橋の腕を引っつかんでずるずる引きずるように走り出した。二人はびしょぬれのまま、土屋は時折私たちに呪符を飛ばしながら、ひたすら走る。と、また石橋がつまづいて、ひっくり返し、それにつられて土屋もひっくり返った。

私たちは、しめた、と思いながら、二人に追いつき、二人のそばで仁王立ちした。

「もう逃げられないわよ！観念しなさい！」

フローラが吼え、私も叫んだ。土屋は顔も上げない。

「そうだよ！ていうか、わけが分からないよ！どうして土屋は裏切ったの！」

土屋の代わりに石橋が顔を上げ、いきなり言った。

「おいオレンジの服のお前」

フローラが何よ、と眉を上げる。

「下着丸見え」

フローラは悲鳴を上げかけて、スカートのすそを押さえ、飛びのいた。そしてさらに、土屋が私たちに呪符を飛ばし、私は悲鳴を上げて伏せ、フローラはかろうじて杖で呪符をなぎ払った。土屋には、その時間だけで十分だった。土屋は石橋を抱え込むと、次の瞬間つむじ風とともに消えてしまった。

「そんな！」

私は起き上がってあわあわし、すぐるようにフローラを見た。

「どうしようー！」

フローラは顔を真っ赤にしていた。それが、怒りだけではないことが見て取れる。目が、殺してやると言っていた。

「土屋より、私の方がここに詳しいわ。出口に着くのは私たちの方が早いと思う。一気に行くわよ」

フローラは杖を緑色に変化させ、杖の先から風を出した。その風に向かってささやく。

「シルフ、私たちを出口まで運びなさい」

風の精シルフは、私たちを取り巻く。私は自分たちの体にかかる重力を減らし、シルフに加勢して、風を起こした。

私たちの体が浮き、風に乗って、私たちはものすごいスピードで前へ進んだ。

ジェットコースターなみだ。私はどうして土屋が裏切ったのかいまだに分からなかった。

どうしてなんだろう？私たちの何が悪かったというのだ？第一、土屋は石橋のことを憎んでいたではないか。それなのに……。

私の胸が、ずきんと痛んだ。

第三十九話：第二の裏切り者：2

案の定、出口にはまだ、二人は来ていなかった。

私とフローラは、白い出口のドアを開けられないようにロックした後、通路の方に向き合った。白い通路には誰もいない。そして、遠くからはエクソシストたちの怒声が聞こえる。どうやらフローラが出てくるときに、フィオナに裏切り者は外に出たことをつけ、それがやつと皆に伝わったらしい。

そして、しゅっという短い音がし、三メートルほど前に土屋が現れた。石橋は片腕に抱えられているが、石橋は何も言っていない。文句を言えた立場ではないと判断したようだ。

土屋は片手を横に振りかぶり、立て続けに十枚の呪符を飛ばした。私たちはそれをよけるため、伏せ、呪符はドアに当たって爆発した。私たちは強風に耐えて、それがおさまると、すぐに立ち上がった。ドアには焦げた跡があるだけで、大きな傷は目立たなかった。

「やめて！」

私は再び呪符を投げようとした土屋に叫び、ドアをかばうように両手を広げて前に出た。土屋が呪符を投げていたら、命はなかっただろう。土屋は投げなかった。石橋はそれに逆上して、わめき散ら

した。

「何してるんだ？とつと投げろよ！」

と、土屋の耳を思い切り引つ張る。土屋は石橋を突き放して、石橋は結局壁に衝突して、床に倒れた。わき腹辺りを押さえ、そのまま吐血する。石橋の怪我は、思ったより重傷らしい。土屋はそれを見て、あわてて石橋の様子を見に行った。

「いい気味ね」

フローラが吐き捨てるように言った。

「あんたたちは相性が合わなかったってわけね」

土屋はその通りだと言う顔をしてから、他の場所を破壊して脱出する気が、頭上に狙いをつけて呪符を投げようとした。しかしその前に、近くを電撃が横切った。

エクソシストたちがやってきたのだ。

わらわらと土屋の後ろの通路をふさぎ、完全に逃走路をふさぐ。

エクソシストたちは怒りをあらわにした顔で、杖を構え、二人を睨みつけている。土屋は私たちの方を睨みつけたまま動かない。石橋は、ケホツという音を出してから、血を脇に吐き捨て、平然と私たちを見ている。

石橋はどうかやら土屋を信じているらしい。どうにかなると思っているのだ。どこまでも嫌な奴だった。私はともかく、土屋に詰問した。

「ね、どうしてそんな奴の仲間になったの？飛鳥ちゃんを石橋に殺されたのに！どうしてよ！」

土屋は答えなかった。

「答えてよ！」

「そいつが俺の仲間になりたいと言っただ」

石橋が代わりに答えた。土屋はキツと石橋を睨み、「黙ってる殺人鬼！」とかなりたてた。

「土屋が、石橋の仲間に、なりたいと言った？」

私は驚愕とし、周りのエクソシストたちも目を見開いた。てつきりそそのかされたと思っていたのだ。

「悪いか？」

土屋はうなるように言った。

「その何が悪い？お前らの仲間になるなんて、俺は言ったか？言っていないよな。よって俺は、裏切り者でもなんでもない。お前らの不注意が原因だ。仲間でもない奴を結社に入れるとは、馬鹿にもほどがある」

「土屋は仲間だったよ！」

私は叫んだ。もう、涙声だった。

「私と一緒に、ずっと石橋を追って来たでしょ？そうでしょ？私たち、友達なんだよねっ？」

「思い違いだな」

土屋は冷たかった。私はその言葉に打ちのめされた。

「俺の裏切った理由？そんなの簡単だ。お前らが嫌いだからだ。前から気に入らなかつたんだよ、表ではいい顔して、裏では力の無い者をリンチする。たとえ極悪人でも、リンチしていいなんて法は無いだろ？それなのにだ。さっさと死刑にすりゃいいものを、取調べとかどうでもいい理由をつけて、長々と暴力を振るう。そして、笑う。本当はお前ら、相手が石橋だろうがなかるうが、どうでも良かったんだらう。暴力に快感を覚えているんだ。取調べなんて、ほんととしてなかつたらう。まあ俺も一部は当てはまっているが」

エクソシストたちは何も言わなかつた。私はその事実、蒼白になった。

「しかも、霧林を人質にすることに最初は反対したくせに、あとから賛成して俺にすがつてくるしよ。何なお前ら？訳分かんないんだけど。馬鹿じゃねえの、ほんとにエクソシスト？てめえらのような愚図は、いない方がいい。それに、特殊能力公開をさせないために、なぜ政府と戦わないんだ？どうして特殊能力者を守るうとしない？俺はコイツと取引した。特殊能力者を捕まえようとする、つまり公務員とかを殺してくれって。それと、特殊能力者を殺すのをやめろ、そのかわり俺を殺していい、てさ。コイツはあっさりだった。しかも俺もよく分らないが……コイツは俺を殺さなかつた。まったく優しい。特殊能力者の救世主だ。まあ、お前らは結局死ぬだらうが。ライナーの望みで皆殺しだ」

「土屋らしくないよ！他にやり方があるはずでしょ？どうして殺せ、なんていうの！」

土屋は無視した。ほかのエクソシストもキーキー声で叫ぶ。

「人間とは和解できるはずよ！」

「はあ？今更なに言ってるんだよ」

土屋は嘲笑を浮かべた。

「話し合いもしようとしなかったクセに。ヒーロー気取ってんじやねえよ。和解？してみるよ。丸腰のまま裁判所にでも行って訴えればいい。その場で捕まるぜ」

と、突如石橋が立ち上がって、何かを足元に落とした。その何かがカランと音を立てる。能力封じの手錠のわっかだ。外れたらしい。石橋はたちまち威勢を取り戻し、大勢のエクソシストたちに向かってしゃしゃり出るように叫んだ。

「これはこれは皆様おそろいで！エクソシストさんたちは一体何に気を取られていたんでしょうねえ？さっさと捕まえればいいものを。やっぱお前ら、馬鹿か？あはは、そりゃ分かりかったことか。

なあ邪殺屋の土屋弘！お前もそう思うだろ？」

エクソシストたちは、石橋の快活さにひるんで後じさり、土屋は呆れている。石橋はふんと鼻を鳴らして冷たく言った。

「あーあ。痛かったなあ、暴力。死ぬかと思ったよ。でもなんかもう、治っちゃったみたい。でもウザかったから、オシオキするのにするよ。悪い子には、おしおきなくちゃだめよーって、俺のmotherが言ってたんだ。ま、そのmotherにオシオキされてたのはたいてい俺だったな。あーあ、殺しちゃおっかな」

などとほざき、軽く両手を広げて見せた。すると、石橋の周りに何か、嫌なオーラが漂った。黒い霧のようなものが集まってきて、それらが形を成していく。

このオーラを私は知っていた。小夜子のオーラ。そのオーラに一瞬、小夜子が見えた気がした。ダックスに変化した小夜子だ。ダックスは、一瞬石橋の肩に現れ、消えた。

石橋は私たちに背を受けているので顔は見えないけど、何かつぶやいた。それが合図となるかのように、その周りに集まった大量の犬の霊が解き放たれた。血に飢えた犬の霊が、集まったエクソシストたちに襲い掛かった。

第四十話：第二の裏切者：3

痛みの絶叫と悲鳴が、私たちの耳に突き刺さった。私は、犬の霊がエクソシストたちの喉笛に噛み付くのを見た。飛び散る血が怖くて、私は目をそむけた。でも、エクソシストたちにもまれているアシュリーには、犬の霊が襲い掛からなかった。石橋はあくまでもあいこにするようで、自分に暴力を振るわなかった人には攻撃しない。

大混乱に陥るエクソシストたちに背を向け、石橋と土屋が私たちの方を向いた。石橋はなにやらにこにこと土屋に何かいい、土屋は肩をすくめ、うなずいた。

「逃がすもんですか！」

フローラが叫んで、杖を構える。私はそれに習った。

「行かせないよ！」

土屋たちは、もはや私たちなど眼中にも無かった。情け容赦なく、二人して、最大級爆発系呪符を、特殊合金のドアに投げつけてくる。

フローラが、私の腕を掴んで引き寄せ、緑がかった楕円形の結界を張った。音が遮断され、目の前のドアが爆発する。衝撃がきたけ

ど、風とかは襲ってこなかった。まるで音を消したスクリーンの映像を見ている気分だ。

黒煙が上がる。私はそれをすぐさま風で吹き飛ばした。視界が晴れると土屋たちがちょうど、ドアに開いた穴に飛び込んでいくところだった。

「いくわよユキノ！」

フローラが叫びながら結界を破る。すると、外のエクソシストの悲鳴が戻ってきた。私たちは手をつないだまま、土屋たちが入っていった穴に飛び込んだ。

そこには本来、エレベーターがあるはずだった。でも、エレベーターは他の階に行っていたようで、私たちはそのまま落ちた。悲鳴を上げる間もなく、ほんのちよつと落下して、柔らかいものの上に落下する。上からの光があるものの、その光が弱くて辺りがよく見えない。さっき上がった煙などに、光がさえぎられているらしい。どうやら、エレベーターの天井に落ちたようだ。私とフローラはすぐさま立ち上がり、やわらかいものを踏みつけたまま、私は手を、フローラは杖を猛然と振り回して、この中にいるはずの二人を殴ろうとした。

下の柔らかいものがいきなり動いて立ち上がり、私たちは倒れて折り重なって転がった。私は危うくこの狭い空間の壁に頭をぶつけ

そうになった。どうやら二人のことを踏みつけていたらしい。

「おい石橋。どこだ？」

土屋の困惑の声が聞こえる。すると、闇の中のどこからか、声がした。

「ケーブル切って下まで行くぞ」

「や、やめて！そんなことしないで！」

私は悲鳴を上げた。しかし勿論、石橋が聞き入れるわけが無かった。ブチッと音と同時に、エレベーターが急降下し、私とフローラは絶叫した。私とフローラの体がエレベーターから離れ、体が浮いた。これではビルから落ちたと同然だ。床に叩きつけられて死んでしまう！

私は死に物狂いで手をばたつかせ、何かを掴んでそれにしがみついた。フローラは私にしがみついている。その何かは宙に静止しているようだったが、私たちの重みでガクンと降下し、「ひいっ放せ！」と悲鳴を上げた。その声が石橋のものだということに気がつく。どうやら石橋の足にしがみついていたらしい。なんとか空中に留まろうとしているようで、スピードは落ちた。でも、まだ速い。落ちたら間違いなくあの世だ。石橋は私の頭や肩を蹴って落とそうとし

たが、私は何が何でも離さなかった。フローラの手が、私を蹴りつけていた足を掴んで、負けずにしがみつき、石橋は一層激しく暴れた。このエレベーターはどれほど長いのだろう、見当もつかなかった。なんせ、ここの建物は、天井が呆れるほど高いのだ。

「放せ！俺を殺す気か！」

石橋は取り乱している。私は無視した。フローラもだ。そんな余裕は無い。

はるか下で、地の底から響くような、ドゥン、という音がした。エレベーターが落ちたのだろう。

と、私の体も柔らかい何かの上に落下した。衝撃に体が突き上げられたが、激痛は無い。ちょっと腕をひねっただけだ。砂埃が私たちを襲い、私は咳き込む。

土屋が呪符でクッションを作ってくれたようだった。そして脇の壁に、ぼつこんと穴が開き、外の光が真っ暗闇になだれ込む。私の目がくらみ、そこから目をそむけた。

フローラは私の脇に倒れていて、石橋は私の足元辺り立っていた。怒りで燃えた目だ。最悪なことに私の足をげしげしと踏みつけた。そして、土屋とともに穴から飛び出していった。

「追うわよ！」

フロアに引つ張り起こされ、私たちは穴から飛び出した。一階のエレベーターホールだ。そして、正面扉の方に走っていく二人の姿が見えた。私たちはその後を追い、叫んだ。

「待ちなさいよ！」

二人はシカトした。

私の中で、憎悪が噴き出した。そのとたん、石橋の人格の私が抑制を破った。こうなるのは初めてだった。

私の体は誰かに乗っ取られたかのごとく、勝手にジャンプした。その瞬間に、二人の背中まで無重力の道を作り、空中を蹴ってその道を、猛スピードで抜けた。私は二人の背中に激突し、二人は息に詰まって前につんのめり、数メートル吹っ飛んだ。

大理石の壁にぶつかり、二人は床に倒れる。二人はうめいてうずくまってしまった。骨でも折ったのだろうか？

「やったわね！」

フローラが歓声を上げ、私は自分の力に驚きながらも、なんとか憎しみを封じ込め、もう一人の私を押さえ込んだ。自分を取り戻し、二人に駆け寄る。

と、突如石橋がうずくめるのをやめ、私たちを睨みつけた。石橋の周りに螺旋状に黒いオーラがうずまき、ソレが形を成して犬神の姿となり、フローラに襲い掛かる。フローラは悲鳴を上げて、犬神に押し倒された。土屋も動いた。走ってくる私に向かって呪符を投げつけたのだ。私はフローラの方に気を取られていたので、あっさり呪符に当たった。原に衝撃が突きぬけ、私は腹をおさえてうずくまった。失神はしなかったけど、とっても痛い。

信じられなかった。土屋が私を攻撃するなんて！私はそんな思い出立ち上がった土屋を見た。土屋も私を見ていた表情はなかった。

でもその目は、何かを強く私に訴えかけていた。

“俺に近づくな。日本へ帰れ”

そういつている気がした。

二人はすたこらさつさと外に飛び出した。そして、エレベーターの穴から、エクソシストたちが二人の後を追ってやってきた。フローラは犬神をようやく払いのけ、私は痛みをこらえて立ち上がり、後を追う。

怪我しているエクソシストたちもいたが、果敢にも二人の後を追いかける。

外に出ると、結社を包んでいる見えない結界の内部に、クリステイーナ・コルネリウスと、ライナー・クラウゼヴィッツがいた。

あせつたようになにかを叫んでいる。未確認物探査部の装置が壊れていたのも、二人が近づいていたのにも気がつかなかった。

ライナーを見たことで、エクソシストたちが一層激しく怒りの念を発した。一世に、四人に攻撃を放つ。私もやった。だって、あの四人は悪者なんだから。

石橋たちはその前に結界の外に飛び出した。結界の外は、結界を通して見ているので、ぼわぼわしてよく見えない。攻撃は結界に阻まれ、はじけとんだ。

私たちは四人に続いて結界を通り抜けた。

そのとたんだった。私たちは信じられない光景を目の当たりにした。

なんと、私たちの目の前に、いくつもの戦車と、銃を構えた兵がたくさんいたのだ。

そして、一斉射撃を食らった。私は結界を張ったが、なぜだか銃弾は結界を通り抜けた。私はぞっとした。対能力者用兵器だった。あわてて高熱の幕を私の前に降ろし、飛んできた銃弾を溶かす。銃撃が一時停止すると、幕を消し、無能力者たちを見た。雪にまぎれるためか、皆は白い服を着ていた。

特殊能力者收容が始まったのかはよく分からないが、ショックだった。

と、前にいたクリスティーナが、銃弾に当たったのか、雪の上に倒れこんだ。特殊な銃弾なのか、血は見えない。ライナーと石橋と土屋が、一斉にクリスティーナを助けようと手を伸ばしたが、再び銃撃が始まり、二人はあわてて空中に飛び上がり、私も後ろから来たエクソシストに引っ張られ、結界の中に引きずり戻された。

しかしフローラが結界に戻ってこなかった。無能力者たちは結界の中には入れないからいい。でもフローラは外に行っただま戻ってこないのだ。

「フローラ！」

私は悲鳴を上げた。結界の外に飛び出そうとしたが、エクソシストに押さえ込まれる。

「いやあっ！放して！」

私は暴れた。でもみぞおちに衝撃がして、私の意識があっという間に薄れていった。

薄れゆく意識の中で、私はもう一度フローラの名前を呼んだ。

第四十一話：第二の裏切り者：4

私は放心状態だった。

フローラはあのまま結局戻ってこず、エクソシストの話によると、軍に連れて行かれた。結社の場所を、誰かがチクったらしい。本格的な能力者収容はまだなようだ。

そして、土屋も消えた。負傷者35人、死者10人。私は夜の医務室のベットの中で、ただうつろに視線を空中に漂わせていた。

どうして？

その言葉だけが、私の中で渦巻く。

私は自分のベットから開かない封筒を持ってきて、開けていた。土屋がいなくなったとたん、開いたのだ。

この手紙は、土屋からだった。まだ読んでいない。今から読む。

私は目から涙をしたたらせながら、中から紙を取り出した。白紙に書かれた手紙は、妙にそっけなく見える。

こう書いてあった。

『高橋幸乃へ　これを読んでいる時はきっと俺はいない。結社内の不正騒動は、全て俺の仕業であり、実際は何の不正も無い。やった理由は明白だろうが、俺と石橋が逃げやすくするためだ。イヴァは、全くの無関係だ。そして、フィオナ・ミランドーラの件。ラインハルトは確かにあいつを利用しようとしているが、このことについて知っているものは、社長とその秘書、その他数名だけだ。ベックフォードたちは、あいつを裏切ってはいない。石橋が仲たがいをさせるために勝手に言ったんだ。迷惑かけて悪かったな。お前は邪殺屋には向いていないから日本へ帰れ。死ぬぞ。警告はした。お前がその後どうなっても俺は責任を取らない。お前が日本へ失せることを祈る。』
土屋

それだけだった。

フィオナと、皆を傷つけたのに、たったこれだけ。

私がどれだけ土屋を慕っていたか、フィオナがどれだけ土屋が好きだったのか、分かっているのだろうか？

そして、どれだけ皆に信頼されていたか。

私の頬を、とめどなく涙が伝う。

私は虚無の中、手紙を握りつぶした。

「土屋……なんて……」

私の手の中で手紙が燃えて、灰となってベットのシーツに零れ落ちる。

「大ッ嫌い！」

私は絶叫した。

土屋はひどい。冷たすぎる。もう何も分からない。フローラもない。誰もいない。私の心についた傷は、誰も癒せない。

ひどいよ。どうして裏切ったの。なぜ人は裏切るの？小夜子、ライナー、土屋。どうして？みんな石橋のせいだ。石橋なんて死ねばいいのだ。大切な誰かに殺されればいい。あいつさえいなければ。すべては平和だった。私の人生が壊れることは無かった。

初めて会ったあの日がなくなればいい。なんでデパートなんかにいったんだろう？なんで石橋は現れたんだろう？

人生とは理不尽だ。どうしようもなくケチだ。

私のあごから絶望の涙が、ぼたりと落ちる。

私は思いつく限りの悪態を叫んだ。どこに居るかも分からない、石橋健に向かって、憎しみの言葉を吐いた。あいつが十四歳だなんて。あいつが私とおんなじ中学三年生だなんて信じられない。

私はベットに突っ伏して、泣いた。泣いて、泣いて、泣いた。

日本に帰りたい。もう何もかも嫌だよ……！

私は両親が恋しくなった。たまに、小説とかで主人公がピンチのとき、「お母さん！」と叫ぶ。その気持ちは今、やっと分かった気がした。

赤月市に帰りたい。

私は心の中で強く思った。

第四十二話

*

*

*

夜中。

俺、石橋健は、結社から10キロほど離れた、針葉樹の森の中にいた。月と星は夜空で美しく瞬き、森に積もった雪に輝きを与える。

俺は断崖絶壁の上から足を投げ出し、ぼんやりと月を眺める。土屋たちはいない。どこへ行ったかは不明だ。

やがて、背後で二組の雪を踏む足音が聞こえた。肩越しに振り返ると、ライナーと土屋がいた。ライナーは木の上にいる。

ライナーは木の上から飛び降りて、地面に着地し、俺のほうに近づいてきた。

「よっ、イッシー久しぶりだな」

「コルネリウスがさらわれたんだ」

挨拶を省略し、土屋は口を挟んだ。

「人間どもにどこかへ連れて行かれた。どんな武器を装備しているか分からなかったし、手が出せなかった。念のため、コルネリウスにはGPS機能の呪符を飛ばしておいたが……」

「クリスティーナがさらわれるなんてな。対能力者兵器か。ちつ、嫌な武器だな」

ライナーはふてくされたようにいった。俺は近づいてきた土屋を眺め回してから、そそくさと立ち上がってその場を離れ、土屋の右側で止まった。土屋がそれを鼻で笑う。

「なんだよ。俺が突き落とすとも思ったのか？」

「警戒のためだよ。元は敵だったんだ。そんな奴を信頼できるかよ」

俺も鼻で笑った。

「コルネリウスの件はとりあえず後だ。それで聞かせてもらおう

か。あの、魔法結社とやらの結界の破壊方法を。土屋お前、聞いたんだろ？誰かに」

「なんで結社の結界を破くんだよ？」

ライナーは不思議そうに訊ねる。これには土屋が答えた。

「誰かが無能力者に結社の場所をチクっただろ？でも無能力者は結界があつて入れない。でもその結界が破れば入れる。そうだ、つまり結社の破壊は無能力者どもに任せるのさ。結界さえなければ、襲うだらうしな。すぐにでも」

「そっか。いい気味じゃん。無能力者の前に敗北するエクソシスト。見てみたいな」

ライナーは嬉しそうに笑った。

「結界の破り方は簡単なのか？それとも大掛かりなのか？」

「俺らほどの実力があれば、簡単だろう。二時間もあれば片付くさ」

「ほう。そうか」

俺は雪の上にしゃがみこんだ。雪の中から突き出した枝を引っ張り出し、それで雪を叩く。

「早速教えてくれ」

「魔法結社の結界はかなり古いものだ。約500年前、カバリストのピコ・デラ・ミランドーラが神の力を用いて張った結界らしい」

「へえ、フィオナの先祖がねえ」

ライナーが俺の左側にヤンキー座りして、土屋はその正面に座り、なんとなく円になる。

「結界の解き方は？」

土屋は俺から木の枝をひったくると、雪の上に五芒星を描いた。五芒星の真ん中に点を書く。

「これが結社だ。そして」

土屋は次に、五芒星の五つの頂点を順番につついた。

「この六つの地点に、“生命の木”と呼ばれている、霊力のこもった木が植えられている。この五つの木が結社の結界を構成しているんだ。だから、この木を倒せば結界は破れる」

「へーえ」

俺は土屋が描いた図を眺めながら質問を重ねる。

「そんな情報、よく手に入れられたな。最高機密だったんだろう」

「だよな。俺でも知らなかったぜ」

ライナーも感心する。

「どうやって手に入れた？ぜひとも聞きたいね」

土屋は何も言わなかった。こたえる気など無いようだ。しかしライナーはしつこい。

「なあ、教えるよ。まさか女口説いた？やりながら教えてもらった？」

ライナーががぜん、身を乗り出す。目がきらきらと輝いていた。土屋は答えない。俺は下品な話は聞きたくなかったので、さっさと言った。

「とつとと寝るぞ。ライナーお前の話なんか聞きたくないからやめてくれないかな？」

「あつそう。俺は聞きたかったんだけどな」

ライナーはうるさい。

「お前らだって男だろ？性欲が無い男なんて男じゃねえよ」

俺はほとんど無視した。

木の根っこの辺りに座り、三人分の結界を張って中を暖める。呪符を地面に盛って、俺はその上に座り込んだ。ふかふかしていた。

すぐにライナーと土屋も結界の中に入って座る。

「で、どうするんだよ？今から行くのかよ？結界を壊しによ？」

ライナーがあぐらを描いて、誰と無く訊ねる。

「今は森の中にも無能力者たちがうじゃうじゃいる。数日すりゃあちつとはおさまるだろうよ。だから、もうしばらくしてからだな」

土屋は冷静に答えた。それより、と眉をひそめる。

「コルネリウスの居場所を突き止めるのには時間がかかりそうだなぜ」

「何でだよ」

俺は苛々した。

「GPS機能の呪符を飛ばしたって、言ったじゃねえか。無能力者がいなくなるまでのあいだ、そっちを片付けようと思ったのに、無理ってことかよ」

「それはなんともいえないけど。人間たちの兵器のおかげで、呪符から来る情報が激減したんだ。仕方ないだろう。ともかく場所の特定には時間がかかる。恐らくコルネリウスの救出は結界を破壊した後になりそうだな」

「ちえっ。つまんねえの」

ライナーは唇を尖らせた。

「俺の周りは男ばかりかよ。男臭いな」

ライナーは露骨に嫌そうな顔をして見せた。

「男と寝る趣味は無いね」

「そうか」

土屋はどうでもいいようにつぶやいた。

じろじろと俺を見てくるので、俺はにらみ返した。コイツの目つきが悪さにはうんざりしている。

「見てんじゃねえよ」

俺が言い放つと、土屋は唐突に問うてきた。

「お前、何で俺のこと殺さなかったんだよ？」

「は？」

「だから、特殊能力者収容に関わっている人間を殺してくれる代わりに、俺を殺していいって言ったのに、どうして俺のことは殺さなかったんだよ」

「そんなことどうだっていいじゃねえか」

俺はそっぽを向いた。

「別にお前が好きなわけじゃないぜ。言っとくけど」

「そんなことは分かってる」

土屋は真剣そうだ。

「理由を言えよ。またなんかたくらんでんのかよ？おい」

「なにをたくらむんだよ」

ライナーは不思議そうに小首をかしげた。

「何もたくらんでなんかいない」

俺はややカッカした。俺のことは放っておいてほしい。べつに土屋を殺さなかったのに理由は無い。殺すのも、そのときは面倒だったし、べつにこちらの仲間になつてくれるのなら邪魔にはならない。なのでまあいいかと思っただけである。何もたくらんでいない。ただ、殺せといわれたら、殺す。それだけだ。

「本当かよ」

土屋は疑わしげに俺を見つめた。ライナーは好奇心と軽蔑の目を俺に向けている。なんだかんだ言っても、この二人は俺をどうも信用していない。ライナーは殺しに飢える俺を半分蔑んでいるし、土屋は妹を殺された恨みからか、たまに殺意の目を向けてくる。嫌な

連中だ。不快なことこの上ない。

しかし俺にはもつと気に食わない奴がいる。邪殺屋、高橋幸乃だ。どういうわけか、俺と絆ができたというあの女。悪を憎むあまり、いかれた。憎しみに操られたときのあいつは、俺ぐらいの霊力を手に入れるという。ぞつとする。よしてほしい。

俺にとって高橋幸乃は、どうでもいい存在だった。ただ、途中で土屋の仲間になっただけの、俺の計画に支障をきたす力さえも持っていない、空気と同等な存在。少なくとも絆ができるまでは。

しかし最近になって力をつけてきた。明らかに俺の行動を妨害している。邪魔な女だ。この上なく目障りだ。殺してやりたい。

なぜそこまで正義にこだわるのか、俺には到底理解できない。

たとえ正義とか悪とか、他人がいくら言ってもそんなのは無意味である。この世に善悪など存在しない。自分が正しいと思うことをやっていればそれは善。悪いと思えば悪。人それぞれの善悪なのだ。犯罪？そんな言葉は政府が勝手に決めて、勝手に語っているだけだ。最近の人間どもは、法律という鎖に縛られている。俺はそれを哀れに思う。人を殺したいと思っても、法律という忌々しいもののせいで、殺せない。

最近は皆、束縛されすぎている。赤の他人に、やっていい事と悪い事を決め付けられている。しかし世間の連中と来たら、束縛されているという事実にも気がついていない。虚偽の自由の中で生活している事実にも。

しかし俺には関係ない。法律に従うなんて、今までの人生の中で言った覚えは無い。なので俺には法律など無意味だ。俺は人を殺したいから殺す。その何が悪いというのだろうか？せつかく生まれてきたのだから、自由に生きるのだ。

生まれてきた人には、自由に生きる権利があるはずなのだから。そのせいで誰かが死んだって、俺は知らない。その場にいたのがいけないのだ。

俺の人生は崩壊している。これ以上壊しようがない。人生ともいえないのかもしれない。俺にとって、ソレは良いことだったのか、悪いことだったのか、今の自分ではもう分からなかった。

第四十二話（後書き）

*カバリストのピコ・デラ・ミランドーラ、とありますが、実際はピコ・デラ・ミランドラ、かもしれませぬ。私の読んだ本にそう書いてあったのでそのまま書きましたが、ネットではミランドラ、と出てました。

第四十三話：崇拜者

あの日から三日たった。

フローラの件は相変わらず何も解決されていない。それどころか、どこに居るのかさえも分からなかった。

一度結社を出ていった人たちは、あの日から戻ってきてくれた。全て土屋のせいだと分かった今、出て行く理由もなくなったのだ。不正は一つも無い、明るい結社に戻った。でもフローラはいないし、ラインハルトは秘書と部屋にこもったつきり出てこない。フィオナについてのことを責めたいのに、これでは仕方が無い。

あの事件の怪我人はほとんど治り、結社は再び活気付いてきた。

そして今日、私たちはいつものように昼食をとっていた。フローラがいないので、どこか寂しい昼食だ。私はグラタンをスプーンでかき混ぜながら、元気の無いフィオナと、悲しげな顔のクリフォードを見た。フィオナは食事の手を止め、私のちよつと右辺りを眺めていた。フィオナは食事にほとんど口をつけていなかった。

「フィオナ、大丈夫？」

私はそつと声をかけた。確かに結社は活気を取り戻しているが、私たちはどん底だった。十四歳エクソシストのライナー、十四歳の邪殺屋が裏切り者だったのだ。当然のことだ。しかもフローラもいないなんて、最悪だ。

フィオナは寂しげにうなづく。

「はい。ただ悲しくて……。フローラのことにも心配ですわ……」

「大丈夫だよ」

私はフィオナを少しでも励まそうと元気に言った。フィオナは私に微笑んでくれた。

「ありがとうございます。ユキノさん。あなたがいなかったら、私はずっと悲しいままだったと思いますわ」

「当然のことだよ。私たち、仲間でしょ？」

フィオナは嬉しそうにうなずいて、持っていたサンドイッチをぱくりと食べた。

そんなフィオナのとなりに誰かが座った。イヴァだ。イヴァはいつもここに座って、となりのアシュリーと話している。しかし今日はアシュリーはいない。私はもうイヴァの疑いが解けたことを知っていたので、イヴァに声をかけた。

「こんにちは。アシュリーさんは？」

イヴァが顔を上げた。イヴァの表情は硬かった。疑われたのだから当然だろう。イヴァは答えてくれた。

「熱が出たらしいわ。疲れが出たのでしょうかね」

「そうですか……。看病はしたんですか？」

「医務室にいるわよ」

私は、そうですか、と肩をすくめた。

「早く治るといいですね」

「ええ」

「エクソシストたちの魔法だったらあつという間だね」

「そうですね」

フィオナも励ますように笑った。私も言った。

「この間での事件の怪我人のほとんども治ってきたしね。あの石橋とかいうグズ野郎は……」

「グズ？」

イヴァがいきなり持っていたパンを机に置いた。え？とイヴァを見ると、イヴァは恐ろしい剣幕で私を睨みつけていた。あまりの豹変ぶりに、面食らった。

「石橋様の悪口を言うとは、ずいぶん能力に自信があるようね」

イヴァの声は憎悪に満ちていた。私たちは愕然とした。一体どうしたというのか。イヴァは立ち上がり、私を見下ろして、激しい口調でまくし立てはじめた。

「グズはあなたよ。よくも侮辱したわね。許せないわ……っ。どのツラ下げてその口きいてるのよ！」

イヴァは最後の言葉を絶叫した。私はひるんだ。そして、周りのエクソシストたちが一斉に振り返って、あたりはしーんとした。イヴァはそのことに気がついて、エクソシストたちを見回した。

「あんたたちもよ」

イヴァは怒りの矛先をエクソシストたちにも向けた。一人残らず睨みつけて、言い放つ。

「この十四歳エクソシストの餓鬼どもが前に言っていたことは本当よ。あたしは石橋様の脱走に協力したのよ！」

ショックを受けている私たちに、イヴァは満面の笑みを向けた。

「土屋君に最初、口説かれたとき、あたしチャンスだっと思ったの！だってあの有名な虐殺者に協力できるのよ！これって誇らしいことじゃない？土屋君はかばってくれたけど、ばれたって結構よ！」

イヴァは誇らしげに胸を張って、皆がほめてくれるといわんばかりに傲然とした。

「あたしね、そもそもエクソシストって、好きじゃなかったの。ただ、親がそうだったからなっただけで、正義のヒーロー気取ってるの見て、いっつも腹立ってた。本性は暴力好きと来たし、ほんとうんざりしちゃうわよね。ていうか、石橋様を殴ったりするなんて信じられないわ！あの方こそ神よ！」

「うるさい！」

エクソシストの女子が、狂信的な熱っぽさに輝くイヴァに叫んだ。その女子は、がたりと立ち上がり、怒りの声を発する。

「黙りなさいよ！」

しかしイヴァは黙らない。

「あたしの他にも、土屋君に口説かれた女子が何人も協力してるの、知ってた？あの不正騒動はね、あたしと土屋君だけがやったんじゃないのよ！ここには、石橋様のファンが何人もいるのよ！男子も含めて二十人はいると思うわ！あはは、すごいでしょう！ほら、あなたもそうでしょう？知ってるのよ、その二人も！」

と、これ見よがしに十三歳ほどの女の子と、十七歳ほどのイケメ

ン男子、そしてぼんやりとしている十五歳の少女を指差す。三人はビクリと反応し、イケメン男子が「エクソシスト地獄に落ちろ！」という声を発し、次の瞬間には三人は消えていた。イケメンの男子は女子からかなりの人気を誇っていたので、女子たちはショックを受けた。その場で泣き出す少女もいた。

私たちはしばらく呆然としていたが、すぐにエクソシストの少女が叫ぶ。

「イヴァ、あんたを逮捕するわ！」

イヴァはそちらを見るとこれまた気味の悪い笑いを浮かべて、言い返した。

「できるものならやってみなさいよ！エクソシストの分際で、石橋様に勝てると、本気で思ってたの？だとしたらあんたたちはよほどの馬鹿ね」

「崇拜者、か」

クリフォードが私の横で、ボソリと言った。え？と私はクリフォードを見る。その顔は悲しげだ。

「どういこと?」

「石橋の崇拝者だよ。クリスティーナのブログに書き込んだ連中みたいな奴らだよ。殺人犯を神だとあがめるんだ。そして、その殺人犯のかつての所持品とかを高値で取引したりするんだ。この間、あっただろう。石橋の家族を護衛している田中たちがちょっと目を放した隙に、石橋健の所持品がごっそり盗まれたっての。それも崇拝者の仕業だろう」

気持ち悪い。ぞっとする。よしてほしい。

「そうよ!あたしの仲間がやったのよ!」

イヴァは聞いていたらしい、傲慢に言い放って、ニヤニヤする。

「あたしはその一部をもらったわ!すごいでしょう!何をもらったと思う?」

知りたくも無かった。でもイヴァはちゃんと言った。

「日本魔術本と儀式用のペンタグラムのキーホルダーよ!うらやましいでしょう愚鈍なエクソシストども!あんたたちの手には一生回らないでしょうね!なんてかわいそう!」

イヴァは嬉しそうだ。しかし、イヴァの夢を見るような表情を、エクソシストたちはぶち壊しにする。

「黙れ！逮捕してやる！」

と、エクソシストたちがわつとわく。イヴァに突進しようとしたが、イヴァは鼻を鳴らしてジャンプし、三メートルほど上空で静止した。

「あたしは捕まらないわ。私が石橋様に協力できるのは今回で最後で、この先ずっと会えないかもしれないわ。仕方ないわね。あの方は忙しいんだし……。あたしは仲間のところにいくわ。本当の仲間のとことに」

じゃ、というように手を振って見せた。

その直後のことだった。

突如、結社がゆれた。最初は地震かと思った。でも違う。

私はとっさにテーブルにつかまって、なんとなく窓の方を見た。

そして、愕然とした。

空に、亀裂が入っていたのだ。いや、違う。結社を覆っている結界に、亀裂が入っているのだ！

私たちは口々に騒ぎながら、窓の外を見ようと窓の方に向かって駆け出した。イヴァは勝利の高笑いをしたあと、空中に掻き消えた。

結界の亀裂はみるみる広がってゆき、結界の破片がぱらぱらと落ちては消えていく。そして次の瞬間、ガラスを叩き割るような音がして、結界がはじけとんだ。

揺れがおさまり、私たちは茫然とその場に立ち尽くした。どうして結界が壊れたのかとか、馬鹿みたいに考えた。それより重大なこともあるのに。

結界が壊れた今、いまだに結界の外で見張っていた、武装した無能力者たちの進入が可能になる。

そして、案の定、突入してきた。

まずは玄関ホールにいた人の悲鳴が、耳をつんざいた。私たちは一斉に玄関ホールのほうを振り返る。そのときは何が起こったのか分からず、ぼかんとしていた。

人々の悲鳴が徐々に消え、大量の足音とともに、玄関ホールに通じている巨大な扉が開いた。広間の中に武装した軍がなだれ込み、整列して私たちに銃を向ける。

そして、最後のほうに入ってきた屈強そうな男が、前の方に歩いてきて、拡声器のようなもので、私たちに向かっていった。

「異能力者たちは速やかに武器を降ろし、我々に従え！お前たちは連行する！お前たちの能力は危険なものだ！お前たちを殺す気は無いが、反乱を起こす場合、我々は……！」

「反乱を起こす気など無い！」

一人のリーダー的エクソシストがさえぎり、怒鳴った。

「俺たちはお前たちに危害を加えたりしない！」

「黙っている青年！」

拡声器の男が叫び返した。もはや拡声器など無用だと思った。

「現に日本人の少年が、その能力で大量虐殺をしている！今後、お前たちもそういうことをする危険性がある！だから……！」

「私たちは石橋の仲間なんかじゃないよ！」

私は憤慨して、一歩前に出てがなりたてた。

「私たちはエクソシストだよ！石橋を一回捕まえたんだよ！私たちはあなたたちの仲間なんだから……！」

「お前のような石橋の予備軍に言われたくは無い！」

拡声器男は、怒り狂った声でわめき散らした。予備軍とは、石橋のようになる可能性がある人のことだろう。

私は怒りがこみ上げてきた。しかし爆発せずにすんだ。突然、クリフォードに腕をつかまれたかと思うと、次の瞬間私たちは真っ暗な空間にいた。

目の前は闇で何も見えず、寒い。どうやら、誰かの力で瞬間移動テレポートしたらしい。私はほっとしたと同時に足から力が抜け、へなへなとへたり込んだ。

ショックだった。あんなに警戒されていたなんて。まるで私たちまで石橋のような感じではないか。

ひどいよ……。

私たち特殊能力者は異端なのだろうか。世間は私たちのことを、化け物としか見ていないのだろうか？

そう思うと胸が苦しくて、私は知らず知らずのうちに涙を流した。

第四十四話：基地

ぼうっ、と、辺りがオレンジ色の光に包まれた。顔を上げると、ここはとてつもなく広い、広間だった。広間といってもきちんと整備されているわけではない。床は岩、壁も岩、天井も岩。地下を掘って作ったような、ホールだ。エクソシストたちが全員入っても、全然スペースがある。結社の広間の二倍以上のスペースがあった。

「ユキノさん、大丈夫ですか？」

フィオナがそつと私の腕を掴んだ。私はフィオナにすぐるように言った。

「結社はどうなっちゃうの？」

「おそらく、軍に占拠されてしまっでしょう。結社にはもう、戻れませんわ。こういうときのための、避難所ですわ、ここは」

フィオナが広間をぐるりと見渡した。そして、左側の方に、ラインハルトの姿を見つけると、顔をゆがめた。ラインハルトは女性秘書とともに、なにかこそこそやっていたが、やがて私たちに呼びかけた。

「しばらくはここで過ごすことにする。速やかに怪我人の手当てをしなさい」

「あの、社長、フローラの件についてですが……」

クリフォードがおずおずと口を挟む。

「救わないと……」

「フローラのことについては」

ラインハルトはやけにきっぱりとした口調で言い放った。

「騒ぎが収まってから、わたしが交渉して取り戻す」

「そんなの待ってられないよ！」

私はわめき散らした。

「土屋が言ってたよ。無能力者たちは、特殊能力者を捕まえて、人体実験に使っているって！フローラも使われちゃう！」

「裏切り者の言い分を、本気で信じているのかね？」

私は思わず言葉に詰まった。

「いいかい。裏切り者が言った言葉は全て嘘だ。わたしがヘルミ―ネを殺したとか、フィオナに賢者の石を作らせようとしているとか、それらも全てでたらめだ。何一つ、信じてはならん」

「じゃあフローラは？」

「彼女は大丈夫だ」

ラインハルトはそっけなく言った。

ラインハルトはそれっきり、話の続きを一切しなかった。

「そして、外への外出は禁じる。以上だ」

ラインハルトは吐き捨てるように言うと、秘書とともにどこかへ行った。

「私はしばらくたたずんだ。」

「嘘なんかじゃないよ……。」

「ユキノさん、座りましょう」

フィオナとクリフォードに促されて、私はへたり込んだ。

「フローラのことは、社長に任せましょう」

「フィオナさ、社長のこと、信じてるの？」

クリフォードは櫛の杖を握りしめて、フィオナを見た。フィオナはうなだれたまま、つぶやいた。

「今はそのことが問題ではありませんわ」

「……そっか。でも……。社長はフローラを見捨てる気かもしれないよ」

私たちはその言葉にぎょっとして顔を上げた。クリフォードは沈んだ声で、続けた。

「フローラのほかに、連れ去られた人がいるんだけど、知ってる？」

「いるの？」

私はかすかに身を乗り出した。クリフォードは神妙にうなづく。

「クリスティーナ」

私たちは顔を見合わせた。

「俺は土屋がクリスティーナにGPS機能の呪符を飛ばすのを見た」

私たちはその言葉に固まった。

もしかして……。

クリフォードが再びうなずいた。

「その呪符にアクセスすれば、フローラの居場所が分かる。連れて行かれた場所はいっしょのはずだからね」

私たちのなかで希望が溢れた。私は息を呑んで、恐る恐る訊ねる。

「つまりそれは……」

クリフォードは一瞬と惑ったように顔を伏せると、しっかりと、ただし小声でつぶやいた。

「行こう」

第四十五話：脱出

クリフォードが土屋の呪符にアクセスをしている間、私とフィオナは他のエクソシストたちを手伝うことにした。結社に収容していた犯罪者も全員ここに移動させだし、ひとまず全員ここに集まった。

犯罪者たちは広間の隅に集められている。

その中の一人ケイティ・バレットは、石橋が結社にいたことと、逃げたことを知ると、はしゃいだ。

「まじィ〜？会いたかったな〜あたし」

とずっと一人でしゃべり続け、他の犯罪者の少年などは、

「さすがは石橋様！あの方こそ神！」

などと叫んだ。

超能力は手錠で封じられているし、危険はないだろう。

でも死刑囚は別だ。石橋以外にも死刑囚が一人いたらしい。

そいつは四十代ぐらいの男で、ひよろりとしていて目は常に見開かれ、ぎよろついている。そいつは無差別殺人を教徒にするような命じたり、いけにえを必要とする儀式をやりまくったりしたらしい。しかしエクソシストに何をされようが、何も話さないで、能力の種類も不明だし、動機も分からないので、死刑にできないらしい。

そいつは現在、別室に閉じ込められている。

私たちはそいつのことを見張ったり、晩飯の用意を手伝ったりして、クリフォードがアクセスを完了させるのを待った。

アクセスは晩御飯の直前に完了し、私たちは、少なくともクリスティーナの居場所を突き止めた。クリスティーナがいる場所に、フロラもいるはずである。場所は、ここから100キロほど離れた都会だという。土屋が地名を認識していない以上、地名は分からない。

私たちは話し合った挙句、夜中にこっそり抜け出すことにした。

ここからの外出は禁止されているので、出入り口には、誰かが出たら、エクソシストたちに連絡するような結界が張られている。それなら夜の方が抜け出しやすいし、隠れやすいし、いいと思ったの

だ。

私は一刻も早く、フローラを助けに行きたかったが、ここはベテランの二人に任せるしか他ない。

私たちは乾パンや、スープなどを飲んで、広間に布団を敷いた。布団はどこから持ってきたものか知らないが、ふかふかだった。

広間に敷き詰めると、私たちは男女で左右に分かれ、布団にもぐりこんで、光の玉は一つに減らした。

私はふかふかな布団にもぐりながら、機会を待った……。

どのくらい時間がたっただろう？

うつうつとしていた私のことを、フィオナが優しく揺さぶって、起こした。

恐る恐る起き上がると、広間はいびきで満たされていた。

クリフォードは、広間から伸びる通路の入り口に立って、私たちのことを待っている。

私たちはひとまず今は言葉を交わず、エクソシストたちを踏まないようにしながら、クリフォードの元へ向かった。やっとたどり着くと、クリフォードはついてくるように仕草で示した。

私たちは何も光がない、真っ暗な廊下を、壁伝いで進んだ。途中の部屋で、上着を失敬した。クリフォードは黒いコートだ。フィオナはおしゃれな白いダウンコートで、私は茶色のものにした。

やがて、通路は行き止まりになった。クリフォードが杖の先に明かりを灯し、杖で上を指す。縦穴があった。ここが入り口らしい。

上を見れば大して高くない。穴にはふたがしてなかった。魔法で隠しているのだろう。

私たちは備え付けられた鉄はしごを順番に上って、すぐに外に飛び出した。

そこは大自然の中で、とても美しかった。空には星が満天で、私は見とれそうになった。しかしクリフォードに言われて、我に返った。

「今、エクソシストたちに俺たちが出たことが伝わったはずだよ。速く行こう」

私たちはうなずき、南の方角に向かって走り出した。

木々の間を縫うように走り、背後のエクソシストたちの声に背を向けながら。

数人のエクソシストたちはすでに私たちのことを発見し、追ってくる。

私は二人のことを掴んで、重力と風を操りながら上へ飛び上がった。

ソレしか方法がなかった。

さらにクリフォードの風と力をあわせて、私たちはものすごいスピードで、その場から逃走した。

仲間に背を向けて。

そう思うと心が痛んだが、フローラのためなのだ。皆も分かってくれるはずだ。

私たちはただひたすら、飛んだ。

じっと前を見据えて。

第四十六話：特殊能力者収容場

私たちはやがて、都会に到着して、とある高層ビルの屋上にそつと降り立った。

夜中なので人気はなく、道路にたまに車が通るだけである。ここは高層ビルがたくさんあって、どこか排気ガス臭かった。

私たちはクリフォードの魔法で、周りの人から姿を見えなくし、そつとフローラの霊力を探した。かすかだけど、フローラの霊力をを感じる。でも、都会なので、他人の気がたまっていて、探しにくい。

私たちは空からフローラのいる建物を探した。ざつと見たところ、まだ石橋たちは来ていないらしい。できることなら鉢合わせしたくない。だって土屋が向こうにいるのだ。それにライナーも。圧倒的にこちらの方が力が負けている。

しかし石橋の霊力は特殊能力者の中で比べたら、強いランクの下のほうぐらいらしい。しかも小夜子の霊力を吸ったというイカサマだ。

私は何より石橋の信者の方が怖かった。クリフォードによれば石橋のファンの中で、石橋よりはるかに強い奴もいるらしい。そのろくでなしは魔法結社に脅迫文を送りつけたり、エクソシストを襲っ

たりしたらしい。そいつは捕まっただけで、他にもそういう奴がいるのでなおさら怖い。ファンは狂信的で、馬鹿の一つ覚えのように石橋のことを話しまくるらしい。私は気味悪さを覚えていた。どうしてあんな奴のファンになるのだろうか？

私たちはそのうち、一つの高層ビルに行き着いた。

そこは不動産屋とあったが、嘘だろう。中からたかさんの特殊能力者の気配がする。

フローラや、クリスティーナの気配も。

何の変哲もないビルだ。白い、広い駐車場のあるビル。夜なのでもう人はいないと思ったが、中からは無能力者の気配も大量にした。

間違いない。ここにフローラがいるのだ。

奴らは特殊能力者を実験動物にしている。直感で分かった。許せない。

私たちは朝まで待ってから、中に入ることにした。できることから犯罪行為をしたくないので、朝、チチオヤに忘れ物を届ける子供のフリでもして、中に入る。そして、ひそかにフローラを探す。

私たちは向かいの高層ビルの屋上で待機することにした。同じ高さの高層ビルである。ここなら、看板もあるのでそこに身を隠していればよい。

私たちは寒さに身を強張らせながら、身を寄せ合った。能力で体は温かくしているものの、それでもなぜだか寒かった。

これから起こることへの恐怖からきているのかもしれない。

私たちは順番にうとうとしながら、フローラがいるだろうビルを見張った。もしも夜に石橋たちが来て、お構いなしにビルを壊しまくられたら困る。

そうになったら死に物狂いでフローラを救うしかない。

でも来る気配はないので、安心した。

私たちは真冬の夜の中、じっと息を潜めた。

第四十七話：特殊能力者収容場…2

朝の十時頃。

ビルにはスーツ姿の大人たちがたくさん入っていく。たまに高級そうな車がビルの前に止まり、偉そうな人が中に入る。

私たちはビルの入り口に立った。緊張する。はつきり、怖い。でも行かなくてはならない。友達を救わなくてはならないのだから。

私たちはビルのエントランスの中に平然を装って入った。

表向きは全く普通のビルである。白い清潔な床、カウンターには女性二人が客の相手をしている。

隅のソファーでは人々が談笑したり、真剣に何かの話をしたりしている。

右側の壁にエレベーター二つ、その隣には非常階段の扉。左側には奥へと続く廊下がある。オフィスにでも続いているのだろう。

私たちは顔を見合わせた。クリフォードはエレベーターの方に軽

く頭を傾け、私たちはそちらに向かう。

エレベーターの前で止まる。ボタンを押してエレベーターを待つ。

鏡のようなエレベーターの扉だ。

待っているうちに、数人の大人が私たちの姿に気がつき始め、私たちは緊張した。早くエレベーター来て！

しかしそう簡単にくるはずもなく、とうとう一人のスーツ姿の大男に声をかけられてしまった。

「君たち。ここで何をしているのかね」

怪しむような目つきだ。私たちを検品するように、上から下まで見てくる。フィオナが即答した。

「父に忘れ物を届けに来ました。会議で使う、大事な書類だそうです」

と、これ見よがしに私は用意していたファイルを振って見せた。中はカラだ。男は警戒の目を緩めない。

「お父さんの名前は？」

わたしたちはぎくりとして顔を一瞬見合わせた。

考えていなかった。

クリフォードが慌てふためいて、でも平静を装って言った。

「い、イシバシです」

私たちは落胆した。男の目つきがますます厳しくなった。クリフォードはもつとあわてた。

「イシバ……ひろし……」

私たちはますます落胆した。なぜあの二人の名前を使ったのだろう。多分裏切り者のことを考えていたからだだろうが、ここは外国の人の名前を使ってほしいものだ。まあ、人間は追い詰められるところになってしまふものだから、仕方がない。

「わ、私の父親です」

私は補足した。

「この二人は、遠い親戚なんです。冬休みだし、その……」

「そこで待っていないさい」

大男は案外あっさり踵を返してカウンターのほうに向かった。確認を取る気らしい。

私とフィオナは横目でクリフォードを責める。クリフォードは申し訳なさそうに肩をすくめ、エレベーターと向き直った。エレベーターはまだ来ない。私たちははらはらした。

お願い、早く来て……！

男を振り返ると、もう確認を取ったのか、むっとしたような顔でこちらに向かってくる場所だった。

エレベーターはもうこのフロアに来ていた。後はドアが開くだけで開く時間がやけに長く感じた。

早く開いて！

私はエレベーターのボタンに向かって、指先から電撃を放った。バチツと盛大に音が立ち、ドアがやけに早く左右に分かれる。やった！

私たちは飛び込んで、後ろを振り返った。男が走ってくる。

クリフォードが隠していた杖をにかけて、ドアを叩く。すると、ドアががしゃんと音を立てて閉まった。フィオナがドアとドアの境目に指を滑らせてドアを溶かし、密閉した。

私たちはほつとして、ため息をついた。ともかくばれちゃったけど、中に進入できた。後はフローラを探すだけ。

「何階だろう？」

私が誰となく訊ねると、クリフォードが二十階だといった。

「フローラの霊力を感じる」

と、目を閉じてささやく。

「弱ってる。クリスティーナの霊力も……。うん、二十階だと思う」

「分かりましたわ」

フィオナが真剣にうなずいて、二十階のボタンを押した。しかし、唐突にエレベーター内の電気が消え、暗闇に包まれた。何も見えな
い。エレベーターも動かない。止められてしまったらしい。次に、
エレベーターに取り付けられたスピーカーから冷たい男の声が流れ
だす。

『そこにいる子供三名。目的は何だ』

と。目的なんか分かりきったことだ。私は暗闇の中でどこかにあ
るスピーカーに叫び返す。

「フローラを取り返しに来たんだよ！フローラを返して！」

『特殊能力者か』

「だったらどうした!」

クリフォードが昂然とした。

「俺たちを捕まえるのか? やれるものならやってみる!」

『 警告する。ここには軍隊がある。大人しく我々に従えば傷つけはしない。今すぐ……』

ブツとノイズが入った。音声か途切れる。クリフォードがスピーカーを破壊したらしい。暗闇のどこから、私たちに呼びかける。

「軍隊か、とうとう本性を現したか」

ぽつと、黄色い柔らかな明かりが灯った。クリフォードの杖の先に光の玉が浮いている。私はまぶしくて、目をしょぼつかせた。

「幸乃、エレベーターに電気を流してくれる? 俺がコントロールするから」

「うん」

私はエレベーターの壁に触れて、指先から再び電気を流し入れる。エレベーターは普通よりちよつと速い速度で動き出した。私はエレベーターがクリフォードによって止められるまで電気を流し続けた。

やがて、クリフォードが顔をしかめてエレベーターを止め、私にいいよ、と合図する。私が電気を流すのをやめても、エレベーターは落ちなかった。

「どうしました？まだ二十階には到達していませんわ。まだ十五階です」

フィオナの問いに、クリフォードが答える。

「このエレベーターではこれ以上上には昇れないようなんだ。十五階以降は特殊階なんだと思う」

「え！じゃあ一回降りるって事？」

私は悲鳴を上げた。

「軍隊がいるって言うてたよ！」

「大丈夫だよ」

クリフォードが怯える私をなだめる。

「奴らが最新兵器を持ち込まなければ、俺たちにはかなわない。最新兵器を持ち出した場合は、フィオナに任せよう」

「分かりましたわ」

フィオナがしっかりうなづく。

「じゃあ結界を張るから、二人とも、よって」

私とフィオナはクリフォードの横に来て、結界を張ってもらう。

結界は見えないけど、感じた。

「では、行きます」

フィオナが緊張した声を出して、手を密閉されたドアに持つていき、さつと縦に滑らせる。ドアの真ん中に亀裂が走る。

そして、特殊能力者収容場のドアが、開かれた。

第四十八話：特殊能力者収容場… 3

軍隊はまだ来ていなかった。私たちは結界を張ったまま、慎重に外に足を踏み出す。

白い廊下だった。廊下は予想していた通り、無機質であり、壁には等間隔に白いドアが取り付けられている。人の気配はない。

右から左に目を走らせる。すると、ひだりのろうかはすぐに途切れていることに気がついた。途切れていると言うか、大きな合金製の扉でさえぎられている。

私たちはそのドアから特殊能力者たちの苦しい念を受け取った。

私たちはそのドアにそっと近づいた。取ってはなない。ただ、本来取っ手があるところに銀色の手のひら大のプレートがはまっているだけだ。

「静脈認証システムだ」

クリフォードは鼻を鳴らした。フィオナは肩をすくめる。

「今すぐ破壊しましょうか？どうせ居場所はばれています」

「そうだね。そうしよう。フィオナ、頼む」

私はクリフォードに引つ張られて数歩後ろに下がった。フィオナが両手をその扉に滑らせ、何かをつぶやきだす。化学式や元素名のようだが私にはさっぱり理解できない。理科は苦手である。

しばらくすると、グニヤ、という感じで扉が歪んで、外側にしわをよらせながら、やがて1.5メートルほどの穴を開ける。覗いてみると、向こうには再び無機質な廊下が続いていた。

私たちは順番に通り抜け、やっぱり慎重に進んだ。

やがて、廊下が二つに分かれた。私たちはさりげなく右に曲がってみる。……そこを狙われた。

突然、目の前に軍服を着た、そして武装をした軍隊が現れたのだ。

はっと後ろを振り返ると、後ろにも軍隊がいた。さっきの道を見たら、ドアというドアから軍が飛び出してくる。しまった。

私たちは銃口を向けられたまま、ぼけつとした。私は高をくくっていた。たかが無能力者じゃないか。私の特殊能力であつという間に片付けられる。

私は手を軍隊に向けようとした。

結界も張っているし、反撃される恐れはない。

しかしそのとたん、目の前の軍が一発撃ってきた。私の腕をかすめ、私はあまりの痛みに悲鳴を上げてそこをもう一方の手で押さえた。

「幸乃！」

クリフォードが慌てふためき、私をかばうように前に出た。フィオナが、「対能力社用兵器のようですね」と吐き捨てるように言った。

「その通りだ」

軍の一人が言った。声は険しい。

「降伏しろ、そうすれば攻撃はしない。両手を地面につけ、ゆっくり……」

「お断りだ！」

クリフォードが怒り狂った。

「攻撃したくばすればいい！麻酔銃でも撃って、俺たちをラットにでもしろ！」

私はあわてた。「クリフォード！やめて！そんなの嫌だよ！」と声を上げる。

軍は全くその通りにした。私たちに標準をあわせ、次の瞬間引き金を引く。銃口から弾が飛び出した。

私の絶叫とフィオナの呪文の叫びは同時だった。私たちは鉄のペールに四方を囲まれ、守られた。

銃弾が跳ね返る音。軍の悲鳴。

物理攻撃にはやはり無力だったのだ！

フィオナがすぐさま鉄のボールを取り払い、私は体から、クリフォードとフィオナに当たらないように、電撃を放つ。軍がソレに当たり、何人が気絶した。私たちはチャンス逃さなかった。

私たちは起きている敵が少ない方、右側の通路を走った。ひるんでいる軍を押しつけ、全速力で、死に物狂いで走った。

再び廊下を塞ぐようにできた扉が見えてくる。

フィオナの魔法でそれは砂のように消えていった。

中に飛び込むと、そこは無機質な廊下なんかじゃなかった。

まさに、収容場だった

第四十九話：特殊能力者収容場… 4

薄暗い部屋だった。

下はコンクリートむき出し。左右の壁に沿って、鉄格子がはまっている。そして、鉄格子のおくには影がうごめいていた。たくさんの、影。

よく見れば、人だった。

特殊能力者たちが、牢屋の奥にうずくまって泣いていた。赤い手錠がはまっている。

アレには見覚えがあった。

もしかして……！

背後から再び銃声がして、私たちは横っ飛びでよけた。

その薄暗い廊下を駆け抜ける。牢屋は続いた。その中から、特殊能力者たちの「助けて！」とか、啜り泣きとかが聞こえてくる。

訊いているだけでも辛い、悲痛な叫び。家族と引き離され、何も悪いことをしていないのに監禁される。能力を奪われ、無謀な、そして無力な特殊能力者たちの姿が、そこにあった。

私は唇をかんだ。許せない。どうしてこんなこと……！

憎しみを押さえ込んで、必死にもう一人の私を押し込める。

再び、銃声。フィオナが隣で悲鳴をあげ、床にどつと倒れこむ。

私とクリフォードは急ブレーキをかけ、「フィオナ！」と叫んだ。横にしゃがみこむと、フィオナが足首を押さえていた。その指の間から血があふれ出る。

私はキツと軍の方を見据えた。とたん、軍が持っていた銃が、赤くなった。次の瞬間には銃はとけ、軍はあまりの熱さに叫声を上げながら、銃を話して手を押さえる。

私はフィオナにかかる重力を操作して軽くし、フィオナをおぶって走り出した。クリフォードも後に続く。

白いドアが見えてきた。非常口のマークがある。

私たちはソレをふっ飛ばさんばかりに開いてすぐに閉じ、私はドアの境目を溶かして密閉した。すぐにこの部屋は何か確認しようと振り返る。ここは非常階段だった。白い、なんてことはない、ごく普通の非常階段。階段は人が四人並べるほどの幅で、人はいないようだ。

私はフィオナをそつと階段に座らせた。

「どうしよう……」

クリフォードを見ると、クリフォードは下に着ていたロープの中から薬草を引っ張り出したところだった。クリフォードは、「二人とも、傷口を見せて」と指示する。

私たちがそうすると、クリフォードはその傷口の上にそつとその葉っぱを置いて、杖で軽く叩いた。

痛くて目に涙が浮かぶ。

傷口を見ると、ちょうど葉っぱが私の傷口にしみこんでいくところだった。そして、それにあわせるように傷も見事に消えていく。

「すごい！」

私は声を上げてクリフォードにお礼を言った。フィオナも治ったようだ。礼をつぶやいてから、自分のせいで逃げるのが遅れた事を謝る。

「いいんだよ」

私は励ますようににっこり笑って見せた。

「私たち友達じゃない！困ったときは助け合わないとね」

「そうだよフィオナ、気にしないでいいよ」

私たちの言葉にフィオナは嬉しそうにうなずいた。私たちはすぐに表情を引き締め、これからどうするか話し合う。

「この階段から上に上れるんじゃないかな？」

クリフォードは階段を上に向かって指差す。

「現在は十五階。このまま二十階に上がれると思うよ」

「そうだね」

私はしっかりうなずいた。

「フローラの霊力も感じるし。行こう！」

私は二人よりはやく、上階に続く階段に足をかけた。

フローラ、もうちょっとだからね。

心の中でつぶやき、私たちは走り出した。

第五十話：特殊能力者収容場… 5

私たちは白い階段をひたすら上った。

日ごろ、体を鍛えていたおかげか、全く疲れなかった。

現在十八階。あとちよつとでフローラのもとにたどり着く。フロアの霊力も、次第に強く感じられるようになっていく。

もう少し……！

しかし、突如一階下の非常階段のドアが開いた。そこから軍が数人、銃を私たちに向け、怒声を上げる。

「動くな！撃つぞ！」

私たちはすぐに後ろに攻撃を放とうとしたが、その瞬間、近くの壁に銃弾が撃ち込まれたのでやめた。やめるしかない。軍は本気だ。怒りの気を感じる。仲間を攻撃されたことでカンカンになったらしい。

しかし、その軍たちがたつたいま出てきたドアから、突然青い煙

が噴き出した。軍たちの前を横切ると、軍はそのまま倒れ、気絶する。青い煙は消えたが、私たちはぞっとした。

この煙。いや、この能力は……！

「くそっ！ネクロマンシーだ！」

クリフォードが悪態をつき、「走れ！」と叫ぶ。

私たちは死に物狂いで走った。ライナーの能力。私はその力を幾度となく目の前で見てきた。ライナーが私の能力練習に付き合ってくれたとき、よく使っていたのだ。

ということは石橋もいるのだ。土屋も。クリステイーナを救いに来たのだ。こんなに早いなんて思っていなかった。

私たちはすぐに二十階に到着した。非常階段の出口のドアには力ギがかかっていたので、フィオナにノブのところだけ壊してもらった。開くと、溶けたチーズのように、鉄が延びで床に落ちた。

中に入り込むとドアを密閉し、私たちは部屋の中を見回した。この階は、妙な静けさに包まれていた。薄暗く、廊下がまっすぐ続いている。左右の壁にはシヨウウィンドウがはめ込まれていて、その

奥には得体の知れない医療器具が置いてある。誰もいないようだ。

私たちは廊下の奥に白いドアを発見した。私たちは廊下を駆け抜け、そのドアの取っ手を掴んで力任せに引っ張った。

あっさり開いた。

中は学校の教室の四倍ぐらいの大きさで、左側の壁に沿って、円柱が並んでいた。直径一メートルほどの、ガラス張りの円柱だ。ソレは壁と床につながっていて、全部で十本ある。そして、一つ一つの円柱の正面にはパソコンが並んでいる。円柱とは二メートルほどの間隔をあけている。

そして、右側には大きな液晶画面と、謎のコンピューターがいくつも並んでいる。液晶画面の右方には簡単な脳の図が映っていて、脳の側頭部辺りから矢印が引かれ、左側のあいた画面の一つの文章を差している。

私はソレを読む余裕なんてなかった。

一番奥の円柱に目が吸い寄せられたのだ。

その中に、フローラがいた。

機械で体を支えられ、立った状態で。目は閉じられ、フローラの顔は蒼白だ。服はゆったりとした白いものである。私とフィオナは悲鳴を上げかけて、その円柱に駆け寄って、円柱に額をくっつけた。

「フローラ！」

私とフィオナはほぼ同時に叫んだ。

フローラの瞼は開かない。

フローラの両側頭部と後頭部辺りには電極のようなものが貼り付けられていた。

ソレからは白いコードが延びていて、円柱の天井につながっている。

円柱の表面の下の方には、『ウォーロック 四大元素の精霊使役』と英語で書かれている。

クリフォードは動揺して、円柱をそつと撫でた。

「なんだろうこの装置は？下手にいじると危ないのかな……」

「さあ……」

私は隣の円柱を見た。隣の円柱には、フローラと同じ服装のクリスティナ・コルネリウスがいる。私はクリスティナをちよつと見ただけで、目をそらした。

クリスティナは怪我をしていたのだ。腕にナイフでえぐられたような痕がある。石橋の仲間だったので、ひどい目にあわされたのだ。フローラは、顔色が悪いだけで、リラックスした顔をしているけれど、クリスティナの表情は、どこか苦しげだった。

私は他の円柱を見た。でも、見たところ、二人以外、人はいない。

と、突然私の前に立っていたフィオナが、後ろに下がった。私はソレをよけて、「どうしたの？」と訊ねる。フィオナは、出入り口の方を見ていた。

出入り口のところに、誰かが立っていた。勿論言うまでも無い。

土屋弘と、石橋健が。

第五十一話：特殊能力者収容場… 6

誰も、何も言わなかった。というか、土屋は私たちの存在さえもシカトしていた。

私の横を掠めるようにして通り、クリスティーナの円柱を見上げ、正面にあるパソコンを覗き込む。

石橋は私たちのことをじろじろ眺めていたが、仲間を救うほうが先決だと思っただけ。足早に土屋のほうに行き、「このコンピュータはなんなんだ？」と、土屋に尋ねる。

私は震えていた。脇にたらした手が拳を作っていた。さっと振り返り、私は絶叫した。

「土屋ッ！」

土屋は無視した。

その声に押されたクリフォードも、怒号を上げる。

「おい邪殺屋！貴様……ッ！」

土屋はそれでも無視した。代わりに石橋が「うっせーな、こっちは忙しいんだよ、ブタどもが……」と文句を言った。私たちの目には土屋しか映っていないかった。もはや石橋など、どうでもいい。

「土屋、聞いてよ！」

私は土屋に駆け寄って、PC画面を見ている土屋の背中の中のシャツを掴んだ。

「特殊能力者を無能力者から守るためにこいつの仲間になった？土屋、そんなことで、本当に能力者が守れるなんて、思ってるの？なるわけないじゃん！だって、こいつは土屋の妹を殺したんだよ？加奈を殺したんだよ？赤月市のひとをたくさん殺したんだよ？忘れたの？土屋、赤月市の人を守れなかったって、すごく悔しがっていたよね？仇をとってよ！」

「うるせえな！ほっとけ！」

土屋が私を振り払った。その強い力に、私は三メートルも吹っ飛んで、クリフォードに支えられた。

フィオナは土屋のほうを見ない。その目に、涙が溢れるのを私は

見た。私は怒り心頭し、もう一回叫ぼうとした。

でも土屋の言葉にさえぎられた。

「これは洗脳装置だ」

私たちは息を呑んだ。土屋の声は怒っていたが、私に対してのものじゃないことがわかる。

「意識に接続してあるみたいだな。潜在的に特殊能力を封じるように仕向けるために、作られたんだろう。コルネリウスとウォーロツクは、まだ完全ではないこの装置の、実験に使われてるんだ。うまく切断しないと、下手すると死ぬ」

「できるのかよ」

石橋が不機嫌そうに問うと、土屋は、「俺はお前と違ってこっちの分野も勉強してるからな」と答えた。

「そんな……」

フィオナがようやく顔を上げて、フローラの円柱に触れる。土屋

がパソコンを操作し始めると、石橋はぐると部屋を一周し、何を思ったのか、フローラのパソコンの前で足を止めた。何をする気かと見てみると、あるうことが目茶目茶にキーボードをたたき出した。

「なにしてるの！」

私は悲鳴を上げて石橋を押しつけた。画面を見ると、エラーメッセージが大量に出ている。遊んでみた、という顔でにやにやしている。

私は必死でそれらのマークを消し、二人に助けを求めた。

「フィオナ！クリフォード！解除できる？」

「俺、パソコンなんて疎すぎて……」

クリフォードが情けない声を出した。フィオナは、やってみます、と私の隣に来て、慎重に操作し始める。私たちの後ろの巨大スクリーンと似たような、脳の図が書かれている。

そして、右側には、そっけなくこう書かれていた。

「インストール…… 64パーセント？」

私は動揺した。石橋も気になったらしい。

「おい、元邪殺屋、なににインストールしてんだ？」

「脳に、だよ」

土屋は苛々と、返した。

「特殊能力を忘れさせるために、そういうデータを脳に強制入力してるんだ。テレパシーの応用だろう。それをコンピュータ化したんだ」

「じゃ、100パーセントになったら、コルネリウスは特殊能力を忘れちまうってか」

「そうだ」

「だったらそれを……………」

「黙れ！」

土屋が突如叫んで、後ろに突っ立っていた石橋に掴みかかった。石橋は唐突のことによけられず、二人は勢い余って床に転がった。啞然として見ていると、土屋と石橋は喧嘩を始めた。

「さっきから、ごちゃごちゃうるせえんだよ！黙って見てらねえのか！」

石橋と土屋は怒りながら、お互いを蹴飛ばしたり殴ったりして暴れ始める。

「俺に掴みかかっているヒマがあんなら、洗脳装置とやらを解除しろ！邪殺屋の分際で俺に逆らってんじゃねえよ！」

「くたばりやがれ！イカれ野郎！殺してやる！お前なんて地獄のそこで悶え苦しめばいいんだ！いつか、絶対……！」

「STOP！」

出入り口から、ライナーが飛び込んできた。土屋を掴んで石橋から引き離し、土屋は石橋を蹴ろうと暴れ、石橋は「いつか、なんだ？殺してやるってか？ハッ！殺せるもんなら殺してみろバア力愚鈍淫乱能無し阿呆……」と狂ったように悪態をついた。

私たちはもはや三人に関心をなくしていた。フィオナがパソコンを操作し、フローラを救おうと頑張っている。

でも、私はライナーのことがさすがに気になった。ライナーのほうを見ると、ライナーは憂鬱そうに私のほうを見ていた。視線が一瞬交錯し、ライナーはあわてて視線をそらす。

私は悲しくなって、うつむいた。

フィオナの手がぴたりと止まった。インストールを中止したのか、と思ったけど、違った。インストールを中止するにはパスワードが必要らしい。

「そんな!」

私は悲鳴を上げた。再びパソコンを操作し始めた土屋も、同じ場所にとどり着いたらしい。ちょっと動揺したように、後ろに立っていたライナーを見る。

「呪符でできないのかよ」

ライナーは不安そうだ。土屋はかぶりを振る。

「下手なこととしてぶっ壊れたら困るしな。何とかしないと……」

土屋はぐるりと辺りを見回し、パソコンの周りを一周した。私たちはなすすべも無く、その様子を見ているしかない。石橋は、今使っていないパソコンでゲームをしていたが、土屋たちのほうを見かねてやめた。

立ち上がると、土屋たちのパソコンに歩み寄り、パソコン画面に触れるフリをして呪符を貼り付けた。土屋たちにバレて怒鳴られるのはいやらしい。画面いっぱいには黒い漢字が現れた。呪符はそのまましみこみ、パスワード入力のところ、数字と文字の羅列が現れては消え、現れては消え、が高速で繰り返される。土屋がその異変に気がつき、ぎょつとして石橋を怒鳴りつけた。

「何してやがる！おまえ、コルネリウスを殺す気かっ？」

「これしか方法ねえだろ」

石橋はきつぱりと言い放った。ライナーも渋々同感だ。

「そうだよな。今はこれしか方法が……」

「こっちにもやってよ！」

私は絶叫した。フロアを救えるのならなんでもする。石橋はあっさりすぎるほど、あっさり渡した。私がソレを貼り付けた瞬間、パソコンが盛大に火花を散らし、バチツと音を立てた。私は悲鳴をあげた。クリフォードが杖でパソコンを軽く叩くとソレは消えた。

「幸乃、やつを信用するな！」

私はしょんぼりうなずくしかなかった。

と、ライナーが画面を除き、歓声を上げた。

「うっしゃ！解除されたぜ！」

嬉しそうに叫び、マウスをいじって円柱に駆け寄る。土屋は傲然としている石橋を一瞬睨みつけ、ライナーの後を追う。土屋が円柱に呪符を貼り付けると、クリスティーナの電極がはりと取れ、円柱のガラスにまっすぐ亀裂が入った。ソレが左右にわかれ、ガラスが開く。土屋がクリスティーナをそっと抱き上げると、「さっさと出るぞ」と二人に言った。

二人は出入り口に向かったが、石橋は途中で足を止めた。チラリと私を振り返り、ぱつと黒い呪符を投げつける。空気の摩擦音が私に一直線に飛んできた。私が横っ飛びでよけると、フローラのパソコン画面に直撃した。

ドン、と鈍い音とともに、パソコンが爆発した。フィオナが悲鳴をあげ、私はぎよつとし、クリフォードが目を見開く。

石橋はさわやかな笑みを私たちに向けると、さっさと出入り口に飛び込んだ。

なんてことをしてくれたのだろう！

フローラの意識が接続されていたのに！まさか、フローラ、このまま、死……？

絶対嫌っ！

私はフローラの円柱に飛びついた。目から溢れる涙を拭い、両手を円柱にぴったりつける。

私は目を閉じた。

両手に意識を集中する。両手が、パリッと電機の音を立てた。次の瞬間、私は最後の賭けに出た。一気に、ほとんど死んだコンピュータに電気を注いだのだ。

円柱の上部に設置されたコンピュータが、盛大に音を立てた。上から電気の明かりが私を照らす。円柱の中で、フローラの髪に一瞬、電流が見えた。

フローラが、小さく呻いたのを確認した。

私は成功したと見て、ガラスを叩き割り、倒れ掛かってきたフローラの体を受け止めた。フローラの体にかかる重力を減らし、私はフローラを抱き上げる。

「やった……みたいだね……」

クリフォードが、安堵して力が抜けた笑顔を見せた。フィオナも笑ったそのとき、ビル全体がぐらりと揺れた。

クリフォードが蒼白になり、出入り口のほうを見た。

「まずい！奴らがビルを攻撃している！時期に倒れる、早く出よう！」

私たちはうなずき合い、あわてて走り出した。

第五十二話：特殊能力者収容場… 7

私たちは、階段を全速力で下りた。

降りる途中で通り過ぎた階からは、もうもうと煙が立ち込めている。私たちはそれでも走った。走るしか道は無い。無能力者たちも、鳴り響く警報にパニックを起こしながらも、必死で逃げている。

私は特殊能力者たちが閉じ込められている階で、階段を下りるのをやめ、声を張り上げた。

「待って！特殊能力者たちを助けないと！」

「でも、時間が！」

クリフォードが叫び返す。ここに来る途中、ビルは何回も危なっかしげに揺れているのだ。私はフローラをクリフォードに押し付けた。

「先に行つて！私、助けてくる！」

私は答えを聞く前に、特殊能力者が閉じ込められている所に飛び

込んだ。

さっき密閉したはずのドアは、なぜだか壊れていた。

中に飛び込むと、薄暗い中、誰かがせつせと牢屋を壊しているところだった。石橋健である。私は泣き叫びながら出てきた特殊能力者たちの手錠を壊していった。

突然、壁の一部に、二メートルほどの大きな穴が開いた。そこから外の光が中に差し込み、私たちはまぶしさに目を細めた。空けたのは石橋らしい。穴から外をのぞきこみ、聞こえよがしに叫ぶ。

「テレポーター諸君！周りの特殊能力者たちを一人残らず遠くに運びたまえ、早くしないとみんな殺しちゃうよ」

と、につこりする。特殊能力者たちは自分たちを助けていたのが、あの殺人鬼だということに気がつき、全くその通りにした。

悲鳴を上げながら、特殊能力者たちを一人残らず引つつかみ、一瞬のうちに姿を消す。

私は、掴もうとしてくれたテレポーターの手を、そっと押し、皆が逃げたのを確認した。

私の中で、抑えていた憎しみがふわりと広がった。私の胸を中心に、エネルギーが体中にみなぎってくるのを感じた。そして、無性に毒舌を振るいたくなった。これこそ私のもうひとつの人格なんだね。

「石橋君」

私はふざけた口調で、穴の前に突っ立っている石橋に声をかけた。石橋は私がいたことに気がつかなかったらしい。私を振り返り、訝しげに、「は」と声を出す。

「誰だよ」

「幸乃だよ、やだなあ。私たち、親友でしょ」

「ここぞなにしてる」

石橋は私の嫌味を無視した。私はあまりの態度にむっとして、応酬した。

「特殊能力者たちを助けに来たに、決まってるじゃない。石橋こ

そ、なにしているの」

「特殊能力者たちを助けに来たんだ。土屋に言われたんだ」

石橋は答えた。

「へえ、そうなの。てつきり私に会いに来たのかと思ったよ」

「なんで俺がてめえに会いに行かなくちゃならないんだよ」

石橋の声がはじけた。

「死ねよ」

石橋がどうでもいいように私に呪符を投げる。私がソレを見据えると、呪符は焼失した。

私は鼻で笑う。

「ナニソレ、弱っ！私と戦うのが怖いのか？さっさとかかってくればいいじゃん」

私の言葉が目の前の男子のプライドを傷つけた。一瞬、呼吸音が止まり、次には「うるせえ！」と怒鳴る。

私に向かって立て続けに呪符を投げつけ、私はソレを、重力を操ってジャンプでよけた。天井に手をつけ、腕を突っ張って下に押すと、私は恐ろしいスピードで石橋に突っ込もうとした。石橋は飛びのいてよけ、ビルが大きく揺れたのに心配そうな顔をした。

私が足から床に突っ込むと、床に亀裂が走った。大きな亀裂だ。今の振動のせいでここが崩れるのが早くなっただけだと思っただけ、そんなのどうだって良かった。だって、このビルにいる人たちは、罪の無い特殊能力者を閉じ込める、邪悪な人たちでわけだし。

私はすばやく牢屋の鉄格子に手を向けた。鉄格子がみしつと音を立てて壁からはずれる。鉄格子に向けた手を石橋に向けると、鉄格子は一斉に、殺人鬼に向かっていった。石橋は舌打ちして、「朱雀・玄武・白虎・勾陳・帝久・文王・三台・玉女・青龍」という九字を唱え、半透明の球型の結界を張った。鉄格子が結界にぶつかると、ほとんどのものが跳ね返ったが、あるものは結界に亀裂を入れた。

鉄格子の嵐がやむと、石橋は結界を消し、私を睨みつけた。私はにっこり笑ってあげた。

「”絆”のせいかな」

言ってきたので私はうなずいた。

「そうだよ。これは石橋の人格をした私なの。へっへー、どんな気分？私は楽しいよ」

本音だった。石橋はそんな私を前にしても、平然としていた。

「ふーん、そりゃよかった。やっと手ごたえがある相手が出現してたことか……。あ、そうそう、お前、突風とかくだらない攻撃なんかすんなよ」

「え？どうして」

私は眉をひそめた。そんな私に、石橋が嘲笑を見せる。

「自然魔術士なんだぜお前は。思いつく限り、何でもできるよな。爆発させることも、プレートだって動かすこともできる。天候制御、うまくいけば大陸さえも動かす力がお前にはある。前から疑問だったんだ。自然魔術士であろうものが、どうしてくだらない攻撃ばかりするのか。今答えが見つかった。それはお前が馬鹿だからだ」

「なんですって」

「じゃあなんで今まであんなちょろい攻撃ばかりしてきたんだ」

「それは」

私の頬が緩んで、笑みがこぼれた。

「私が馬鹿だったからだよ」

私の体の重力を一瞬だけ無くし、その間に地面を蹴って猛スピードで石橋の前に来て、主力をもとに戻す。相手には瞬間移動してきように見えただろう。

私はすぐさま炎が噴き出す拳を繰り出す。相手に読まれていた。

石橋は一瞬動揺した顔をしたけれど、私の拳を掴んでぱつと払いのけた。私は二メートル後ろの地面に足を突いたが、呪符が何十枚も飛んできたので、転がってよけ、くると飛び起きる。黒い炎で呪符を一瞬で払いのけ、私の片割れと向き合った。

そのとき、もう一度ひととき大きくビルが揺れた。

ビルが倒れようとしていた。

第五十三話：特殊能力者収容場… 8

私はちよつとだけあせつて、声を上げた。

「ビルが倒れそうだよ」

石橋は揺れに気づかなかつたかの如く、顔を上げて、「あー」と意味の無い声を出す。ぼさぼさの髪の毛をかきあげ、さつと廊下に通す。特殊能力者が残っていないか、今頃ながら確認したらしい。

「そろそろ出ないと俺もバラバラになるな」

「髪切った方がいいよ」

私はどうでもいい事を言った。

「私が静電気起こしたら、髪爆発しちゃうね」

と面白くも無いジョークに笑い転げる。石橋は突っ立ったまま愉快なジョークに笑いもしない。

「そこでなんとも言っていればいい」

と冷たく言い放ち、自分があけた壁の穴に向かってその前で止まる。ひよいと外に飛び出そうとしたが、私は行かせてやらなかった。

「逃げるのこの殺人野郎」

私は悪態をついて、石橋を振り向かせた。その顔には静かな怒りが映っている。また行こうとしたので、私はさらに奴の嫌がることを重ねて言った。

「石橋つてさ。趣味悪いよね。罪の無い人を殺してナニが楽しいのかな？ 私には分からないし、ソレを理解する人はこの地球上のどこにもいないと思うよ。それにさ、いつまでも捕まらないでいられるって本気で思っているの？ この世界にはアンタより強い人がいっぱいいるんだよ？ 現時点では、まだ動いていないけど、いつか捕まえると思うよ。全世界が一致団結して石橋を殺しにかかるよ」

「そうなたら自殺すりゃいい」

石橋はそっけない。

「どちらにしたってお前にそこんと指摘される筋合いは無いね」

「へえ。そう。このメイド服の女装野郎」

私の一番最後の言葉に石橋は過剰に反応した。まず、信じられないと言う顔をして私を見つめた。次に体から怒りのオーラを出し、恐るべき目つきの悪さで私を睨みつけた。

「なんだって」

「え？なにが？」

私はきょとんとしてやった。

別にコイツがとくに女に似ているというわけではない。ただ標準よりすらりと痩せていて、肌が白く、目に愛嬌があるというだけだ（コイツはイカれているので今は愛嬌は無いが、普通にしていたら愛嬌があったに違いはないと思う）。でも標準より女に似ているということで、私はそういつてやったのだ。

私は笑顔でこういった。

「そんな顔しないでよ。でも本当にメイド服が似合うと思ったから私はそういったんであって、これは一種のアドバイスだと思ってくれてかまわないよ。だから……」

「てめえこれ以上言ったら殺す」

石橋がさえぎった。私はコイツが暴れたい衝動を必死で抑えているのを読み取り、満足した。

と、ここで再びビルが大きく揺れた。そろそろ出なくてはやばいだろう。心の言葉を聞き取ったかのように、わが救出部隊がやってきた。

クリフォードと土屋が激しく戦いながら部屋に転がり込んできたのだ。盛大に火花を散らした後、私の姿に気がついて、クリフォードたちは一時休戦する。

「幸乃！大丈夫？早く外に出よう」

クリフォードは額からたれてくる血をローブの袖で拭い、私を穴の方に引っ張った。私はその穴の脇にいる石橋の前まで来ると、足を止めてクリフォードを押さえ、さらに狂ったようにまくし立てた。

「ほおら、ここにいる皆も思うでしょう？石橋は潔くメイド服を着るべきなんだよ！殺人鬼から転職できるかもしれないよ？そうなったら私が真っ先にお祝いしてあげるよ！人を何人も殺しといてそんな職に就けるなんて、とっても幸せだもんね！きゃはははは！」

「メイ……ん？」

クリフォードと土屋が同時に眉をひそめ、訝しそうな目で私たちを交互に見つめた。石橋は何も言わない。放心した様に私のちよつと上辺りに目を泳がせている。何かを思い出しているらしい。

クリフォードは私を狂ったと思ったらしい。怯えた顔をして、わたしをつかんで激しく揺さぶる。

「ゆ、幸乃！しっかりしろ！一体何を……！」

その声は石橋がさえぎった。突如「このクソアマが！」とがなりたてて、わたしにつかみかかったのだ。絆の私がこのタイミングで引っ込んだ。石橋に対しての恐怖感が一気によみがえり、私は悲鳴を上げた。掴みかかった勢いで、私と石橋は穴を通り抜け、空中に投げ出され、私の胃が浮いた。

落下の中、私と石橋は支離滅裂に殴りあい、石橋は怒りのあまり我を忘れて文法を無視した悪態をついた。私は地面に叩きつけられ

る、と覚悟した。下は道路。下手したら車に引かれてぺしゃんこになるかもしれない。

しかし地面すれすれで、後を追った土屋に助けられた。石橋のことは完全無視で、私の腕を引っつかみ、宙に浮いてくれたのだ。敵なのに。なんの支えも無かった石橋はアスファルトに突っ込んだ。そのまま死んだら万歳だが、奴の中には小夜子がいた。小夜子の犬神がクツシヨンとなって、激昂中の石橋健は一命を取り留めた。

土屋はすぐに私を放して、何も言わずにはなれていった。私はその背中にすがりたかったけれど、自分を抑えた。泣きたかった。クリフォードはちよつと遅れて追いつき、私を氣遣つてくれながら、訝しそうに土屋を見ていた。一方で、石橋は小夜子に助けられたという事実気づいた様子もないまま、私に向かって呪符を飛ばした。私は悲鳴を上げた。絆の私ではないので、いまや私にはよけることができない。クリフォードがソレを杖でなぎ払い、身構える。通行人などはあわててその場から逃げ出した。

土屋は石橋に訴えていた。

「あんな奴らほつといて、行くぞ！こつちにはまだやることがあるだろ！」

「ああ勿論あるとも！」

石橋は応酬した。

「俺はあのくそ生意気な女を殺さなくちゃいけないんだ！」

「やめて！」

私はヒステリック気味に叫んだ。

「わたし、おかしくなっていたの！」

「おかしい奴は死んだ方がいいんだよ自然魔術士の高橋幸乃！」

私はさっき、なにかまずいことを言ってしまったらしい。

クリフォードがオークの杖をにかけて、私には発音できない呪文を叫んだ。杖が青白い光を発し、次の瞬間電撃がほとばしる。土屋はぎょっとしてすぐさま飛びのいたが、石橋はソレを空中からつかみ出した護符に吸収し、そっくりそのまま返した。私は短く悲鳴を上げて思わずクリフォードから離れ、恐怖のあまりその場から逃げ出した。

クリフォードが背後で「幸乃！」と叫ぶ。

私はビルとビルの間路地に駆け込んだ。

もう何もかも嫌だった。

第五十四話：特殊能力者収容場… 9

私は泣きながら走った。

走って走って、走りまくった。

今すぐ安全なところに行きたい。

私は入り組んだ路地を、ただ疾走した。

涙がとめどなく溢れる。突然、何もかも怖くなった。絆の私でない、石橋には太刀打ちできない。私はホントは一人じゃ何もできないのだ。自分が有利なときでないと、けっして奴を怒らせたりはしなかっただろう。

絆の私は無責任にもほどがあつた。でも、ソレを対処できず、逃げ出した私にも嫌悪を感じた。

自分が強ければ、今すぐクリフォードの元に戻って、戦えたのに。

役立たずの私。自分より強い相手には挑みもしない。

はるか後方で、ビルが崩れる音がした。私は足を止め、路地の外壁に手をついて、息を整えようとした。いつの間にか、誰もいない暗い路地に来ていた。

戻らなくちゃ。

涙を拭いて、顔を上げる。

ひゅん、と空中を黒い何かがよぎった。ソレが何か、しっかり見なくても分かった。私はその黒い呪符が爆発する前に走って逃げた。一秒後、背後で路地が爆発する。私に石の破片が降りかかる。

私は決意して足を止め、こげた臭いと黒い煙がうつすら充満する前方を見た。そこにはやはり、殺人鬼がいた。さっきほど怒ってはいないけど、カッカしている。

「何で逃げるんだ？ 絆の自分が引つ込んだからか？ ケツ、情けないオンナめ、死にたいのか」

「死にたなくても殺すくせに！」

私は食って掛かることにした。いつまでも逃げててはだめだ。そ

れでは何も始まらない。

「そうさ、俺はお前を殺すとも」

石橋は胸を張った。

「殺してみなよ！」

私は叫んだ。

「石橋に私が殺せるの？殺す勇気があるの？」

あるだろう。でも私にはこういう言葉しか思いつかなかった。

「あるよ。当然」

石橋はこの意味のないやりとりに付き合った。

「俺を誰だと思ってるんだよ。このまぬけ。お前なんて一瞬で粉塵さ。絆では強いのに、本当のお前は弱者とかさ、気の毒っつーか、ほんとないわ」

「私は弱くない!」

私はあまりの言い草に涙がにじんできた。ひどい。ひどすぎる。

しかし目の前の殺人鬼は、私の気持ちなんてお構いなしに、言葉でいたぶる。

「ほう。なら訊くが、お前はこの女を救えるのか?」

「どの女?」

石橋はにやりとして、自分の脇の狭い路地に呪符を投げ込む。そこからフィオナの苦しげな悲鳴が上がった。私はぎよつとして蒼ざめ、「フィオナっ!」と叫んだ。

すぐにその路地に駆け込もうとしたけど、石橋がこれ見よがしに立ちふさがった。塀に片方の肩でもたれかかり、死の呪符を構えてみせる。私は立ち向かおうとしたけど、やっぱり怖くていけなかった。足がガクガク震える。

石橋には今まで、口答えをたくさんしてきた。でも、本当の私の

ままで面と向かって能力で戦うなんてこと、なかった。あの時は、土屋やエクソシストがいた。でも今、私の周りには誰もいない。だから、怖い。

でもフィオナが。今どんな状態か分からない。早く助けに行かなくちゃいけない。ひょっとしてもう、手遅れなのかもしれないのだ。私の臆病さのせいで、フィオナを死なせるなんだ、絶対嫌だ。

私は体から、最大限の霊力を振りしぼった。

私の体の周りを炎の筋が渦巻き、私は炎の温かさを感じる。絆の私には、全然届かない。ソレでも私は、その炎を石橋に向かって放った。炎は、炎の壁を作り、覆いかぶさるように石橋を襲う。

石橋が死の呪符を護符に変化させ、その炎をいともたやすく吸収した。予想していたことだった。でも私は悔しかった。泣き伏してしまいたい。

私が唇をかんで、ただ石橋を睨みつけていると、石橋が痺れを切らせてこういった。

「ほらみる、お前は何にもできないじゃないか。畜生。とんだ茶番だ。とつとと死ね」

と、私に呪符を投げようとしたが、誰かが幽霊のように石橋側に現れたのでソレをやめた。ライナーだ。クリスティーナをおぶって、せわしなく目を動かしている。石橋は訝しげにライナーを見た。

「なんだよ」

「な……なあ、もう行こうぜ。別にここで、幸乃ちゃんを殺さなくてもいいじゃねえか。幸乃ちゃんには何の罪もないわけだし……」

「俺を女呼ばわりしたのが罪じゃないかって？ふざけんな」

「で、でもアレは絆の……」

「無駄話もほどにしなさい」

厳しい少女の声がした。私ははっと顔を上げた。

その声とともに、真っ赤な巨大炎トカゲが、フィオナのいる通路から出てきて二人を襲った。私は二人がどうなったか見なかった。ただ、「フローラ！」と叫んだ。

フローラの声だったのだ！きつと目が覚めたのだ！

その声に答え、フローラが「そこにいなさい幸乃！」と叫ぶ。私は嬉しくて狂喜しそうになった。しかし護符で逃れたらしい石橋が怒りをあらわにギャーギャー何かを叫んだので、そっちに意識を集中しざるを得なかった。炎トカゲを護符で消去すると、私に向かって数十枚の、黒い呪符を飛ばす。

私は温度を操ってそれらを必死に摩擦熱で消失させ、急いで逃げた。しかし逃げられるはずもなく、私の目の前に呪符の壁が出現し、逃げ場がなくなる。振り返ると、ライナーと仲間割れをしている石橋が、二たびわたしに攻撃しようと手刀を向けたところだった。

白い半透明の虎が、犬神のように石橋から飛び出した。その虎は美しかったが、黄色い目には凶暴さしか映っていなかった。しなやかな体つきの、白い虎。白虎こびょう。四神のひとつ。

白虎は私の腹に思い切り頭突きをした。私はものすごい痛みに視界を失い、体は壁に叩きつけられて落下した。コンクリートのごつごつと冷たさを頬に感じた。

私は頭をもたげて必死に辺りを見回そうとした。フローラの姿が見える。道の向こうから走ってきて、私に何かを叫んでいる。良かった。ほんとにフローラだ。石橋が振り返り、ライナーを突き放した。今度はフローラに向かって、手刀を向ける。

私は脱力しかけた体にムチをうって立ち上がり、冷たくフローラを睨み、死の呪符を大量に使おうとする石橋に向かって叫んだ。

「もう、破壊するのはやめて！わたしを殺していいから、もう誰も殺さないで！」

「ユキノ！下がって……！」

フローラがぎょつとして叫んだ。でも私は下がらなかった。私たちの間で大量の憎しみと怒りを放つ石橋は、私なんて見なかった。フローラを殺そうとしている。まだ弱っているフローラを。加奈を殺したように。そんなの私が許さない。フローラが死ぬぐらいならわたしが死ぬ。

私にはなぜだか、石橋が寂しげに見えた。

「石橋健！」

私は絶叫した。

「聞こえたの？殺すなら私を殺して！そんなに誰かを殺したいの

なら、私を殺せばいい！私を殺して、あなたの落ちぶれた優越感を満たせばいいよ！」

石橋が私を見た。殺しをしていつも笑っていた顔は、無表情だった。私たちの視線が交錯する。私は視線をしっかりと受け止めた。石橋はふっと視線をそらした。

フローラを殺すことをあきらめていないらしい。私は悪態をついて、生身のまま石橋の背中に突っ込み、呪符を使わせないようにしようと思死に腕を掴んだ。

「やめて！お願いだから私の仲間を殺さないで！」

「ユキノ下がって！」

フローラが金切り声を上げた。その声とともに私の顔面が、血の臭いがする石橋のひじに打たれた。ものすごい力だ。私はその痛みに耐え、放さなかった。

私の頭に激痛が走った。意識を失う寸前、私はエクソシストとという仲間の姿を見た気がした。

第五十五話

*

*

*

俺は俺に殴られて気絶した自然魔術士を見下ろした。

女はぐったり倒れたまま、動かない。なんて情けない女だ。馬鹿にもほどがある。腹立たしい奴である。動きを止めていた“ふろー”が、「畜生野郎！地獄に落ちろ！」と絶叫し、風の精シルフを放つ。俺は“ふろー”を見やると、そちらに呪符を投げてよこした。寝起きの女にはよけられるはずもなく、“ふろー”は足元から崩れ落ちて意識を失った。

しばらく路地は静寂に包まれた。何の音も聞こえない。俺の足元を、茶色の猫が通りかかったただけだ。

俺はライナーはどこに行ったのだろうと辺りを見回し、再び女を見下ろした。ポケットに手をつ込み、持っていた折りたたみ式のナイフを探る。軍が持っていたナイフで、この間なんとなく失敬したのだ。刃を出し、足で女を仰向けに転がす。

自然魔術士の頬から血が出ていた。それが地面に向かって赤い線を引き、コンクリートにしみを作る。

俺はしばらく女を見下ろしていたが、やがてその横に座り込んで、ナイフの側面で頬をぺしぺし叩いた。起きない。

起きないのでナイフは女の心臓に突き立てておいた。ナイフはたやすく刺さった。しばしの間、そのナイフを抜き刺していたが、女はやっぱり起きなかった。

俺はその女を放置して、立ち上がった。“ふろーら”を足で脇によけると、アルケミストがいる路地に入った。アルケミストは俺の術で動けないでいたが、術の効果が切れたのか動き出していた。俺を見ると身構えたが、二人の声が聞こえないと分かると蒼白になった。そして、背後でクリフォードとかいうドルイドの「ゆ、ユキノ！」という悲痛な声。今頃来たらしい。気の毒にもあの女は本当に死んでしまったらしい。

アルケミストは俺の脇をすり抜け自然魔術士のいる通路に入り、悲鳴を上げた。

「そ、そんな！ユキノさん……！」

わっと泣き出す声。いい気味である。自業自得とはまさにこのことだ。

俺は表通りに出た。だるかった。絆を持った相手を殺したからだろうか？どうも心に穴が開いたような気がしてならない。しかしすぐに修復されるだろう。案の定、町を歩いているうちに元気が出てきて、嫌味を言う気になってきた。

まったくくだらない茶番だった。馬鹿馬鹿しいことこの上ない。たかが過去を思い出ただけで何を苛っているのだ。そう思うと同時に、もっとあの女をずたずたにしてやればよかったと後悔した。今ならまだ間に合うだろうか？よし行ってみよう。雑魚しかないければすぐさま黒コゲにしてやろう。

俺はさっきの路地に急いで戻った。すると、意外にも泣き伏すアルケミストと呆然とたたずむドルイド、倒れていまだに意識がない“ふるーら”以外にも土屋たちがいた。

ライナーが攻撃もせずに「そんなまさか、嘘だろ……」とつぶやき、土屋は何も言っていない。唇を噛んだまま、自然魔術士を凝視している。

「おい」

俺は空気を読まずに声をかけた。二人がさっと俺を振り返る。ライナーは怒りに燃えた目だ。自然魔術士が好きだったようだ。残念ながら自然魔術士は天使とともに昇天した。土屋の目からは何も読

み取れない。

「帰る。お前らは好きなだけその馬鹿馬鹿しいカルシウムの塊を見ていればいい。あれ？アミノ酸だっけタンパク質だっけ？まあいい。見やすいように人数分に切り刻んでやるよ」

俺は二人の間を通過して自然魔術士の横に来た。

「切断刀裂、急々如律り……」

せつかく呪文を唱えようとしたのだが、土屋が割り込んできたので何も言えなくなった。俺の腕をむんずと掴むと、とっとと歩き出したのである。自分の手が眼に入る。爪が伸びていた。これではピアノは弾けないだろうと俺はどうでもいいことを思った。

ところで土屋弘は路地を抜け、表通りをずかずか歩きながら俺を放さない。むかつく野郎だ。

「どこ行くんだよ、正義野郎。俺を拉致する気か？できることならその手を離してくれと嬉しいんですが」

しかし土屋は答えない。最高につまらない。振り払おうとしたら、あっさり離れた。今気がついたが土屋の手が震えていた。おかわい

そうに。気の毒である。

俺は飛んでトップスピードにのり、現在住処としている山の中に降り立った。針葉樹の山なので冬でも葉が落ちない。十分住処となる。俺は足元の雪を呪符で溶かすと地面を乾かし、つまらないので横向きで寝ようとした。しかし何を怒っているのだろう、土屋とライナーが一瞬で俺の背後に現れ、唐突に肩甲骨の間を蹴飛ばされた。蹴ったのは二人同時だ。俺はおかげで2メートル転がる羽目になった。

「この野郎！」

ライナーが仰向けになってぼんやりしている俺に掴みかかった。ライナーの背中のクリスティーナがずり落ちそうになった。俺はあわてて飛び起き、横っ飛びでよけた。

ライナーはつんのめったが、土屋はみごと俺の胸倉を捕らえた。

「てめえ、高橋は殺さないって言ってただろうが！」

人はこれを恐ろしい剣幕だと言うのだろう。熊も逃げ出すような、憤激した声だ。俺は思わず首をすくめた。

「何で殺したんだよ！」

「そりゃ、アレだよ」

俺はあまりの怒り様に面喰らって、もごもと言った。

「ウザいから。その、前から殺そうと思ってたんだ。でもほら、機会がなかったから……な。あはは、悪い」

と肩をすくめる。するとライナーが俺を睨みつけ、食って掛かった。

「黙れうそつき野郎！そんなことは聞いてないんだよ！お前が他の奴殺す理由と同じじゃねえか！」

「今まで殺した連中の中の一人っただけの女だろう。女がほしいならどこにでも居るじゃないか。なにカッカしてんだよ」

二人が信じられないとばかりに眼を見開く。俺は訳が分からないと同時に気味が悪くなってきた、土屋の手を払いのけ、一歩下がった。

「お前は幸乃ちゃんに出会ってなんか変わらなかったのか？」

「は？」

なんですと？

ライナーは眼に涙を浮かべていた。そして、痛々しい口調でこういう。

「幸乃ちゃんは、ほんとにいい子だった。一緒にいると癒されて、ほんと……。幸乃ちゃんといるときは、憎しみが消えてた気がする」

「だからどうした？ くだらん」

俺は吐き捨てたが、まさかの土屋にさえぎられた。

「俺だって、アイツからいろんなことを学んだ」

俺は愕然として土屋を眺めた。しかし目の前の奴は正真正銘土屋弘だった。

「人間関係をどう築くかについてとか、……友達の意味とか」

と眼を伏せる。いつも崩したことがない凜然とした目が、ありありと悲しみを浮かべていた。

「お前だってなんか変わったんじゃないの？」

俺はライナーのその言い草にぽかんとし、意味を悟った瞬間盛大に嘔き出し、一人で哄笑した。

自分でもうるさいほどの笑い声は、冬の森にがんがん響き渡った気がした。俺は三分間腹を抱えて笑い転げ、窒息死するかと思った。

「んなわけねえだろ！俺の何が変わるって？ ああ！分かった！殺す意欲がもつと湧いた気がする！なんてありがたい！女神様様だな！」

二人は何も言わなかった。ただ俺を睨みつけるだけだ。俺はあまりの後味の悪さに吐き気までしてきた。とりあえず、言い重ねる。

「なんだよその目は。そんなに俺が憎いのかよ。てめえらだって、俺に殺せ殺せと言っているくせに。こっちはタダ働きなんだぜ？おまえらのお気に入りの命分くらいの仕事はしていると思うんだけど」

ソレでも二人は何も言わない。俺はどこかへ行くことにした。こんな奴らといても、気分が悪くなるだけである。

徒歩で下界の方へ向かい、最寄の田舎町に降りる。

一面雪の、レンガ造りの家々が並んだ道幅の広い住宅地がある。家はほんの数件しかなく、通りには誰もいない。辺りは薄暗く、積もった雪の上には車の通った跡もなかった。しかし家の狭い窓からはやわらかい明かりが漏れている。

俺はそれを見て家族を思い出し、胸糞悪くなった。俺は四人家族で、妹がいる。妹のことはよく可愛がつてはいたが、いまの心の状態で妹を思い出すと、ただうるさいガキとしか思わない。

しばらくの間その住宅地を行ったりきたりしていたら、都会につながる山道の方から誰かが歩いてくるのが見えた。12歳ほどの少女である。

少女はコートもマフラーもつけていなかった。寒そうに身をすくめ、手の中で炎をともしてソレに顔を近づけている。炎使いの餓鬼である。

一回俺の横を通り過ぎた。俺は気にも留めず、雪の上に足を引かずって線を描いていた。少女は道の脇によけ、しばらく俺を見ていた。そして、こっちに向かって歩いてきた。

あいにくライナーとしゃべれるように、疎通の呪符を使っていたので言葉は分かる。

「ねえ、あなたは超能力者でしょう」

正しくは黒魔術士だがあえて指摘したりしない。俺は少女を見た。少女から伝わってくる恐怖に興味を引かれたのだ。俺に怯えているのではなさそうだ。

「ねえ、知らない？超能力者たちが寄り集まっている施設とかないか」

「知らない」

俺は答えてあげた。

「どうして知らないの！」

少女はカツとなったように怒鳴り、俺を睨みつけた。

「あたしは逃げなくちゃいけないの！親に捨てられたのよ！特殊能力がある、化け物ついていわれて！警察が追ってくるの！特殊能力が公開されて、テレビで能力者は出頭しろって言っていたの！“狩り”が始まったのよ！能力者は一人残らず収容場に入れられて……ああもういや！」

少女の言っていることは分かった。どうやら能力が公開されてしまったようだ。能力者は収容場行きになるのだ。一人残らず。少女は俺に向かって「なんでそんなことも知らないの？」と喚き散らし、足元で泣き崩れている。

少女を追うようにして、さっきの道から一台のトラックがやってきた。大型のトラックだ。よくもまあこんな雪の道を走ってきたものである。真っ黒いコンテナはいかにも怪しい。

トラックが目前で止まった。少女が怯えたように立ち上がり、無礼にも俺を盾にした。運転席の方を眺めていると、軍服の男二人が降りてきた。中には他の軍人が残っている。俺たちの姿を確認すると、ホルスターから突然銃を引き抜いてこっちに向けた。撃つが早いか、俺は呪符を投げつけ、そいつらを殺してやった。さらに運転席も小さく爆発させ、中の奴も殺しておいた。

少女は歓声のような悲鳴をあげ、雪の上にへたりこんだ。コンテ

ナの中から特殊の魚力者の気配が大量にしたので、とりあえずそちらに向かい、中をあけた。中には、赤い鉄の手錠をかけられた特殊能力者たちが、まるで物のように詰め込まれていた。狭い、明かりのないコンテナの中で、不安そうに互いの体を寄せ合い、コンテナがあくと悲鳴を上げた。大人もいたのでそいつが俺の正体に気づいて、それで悲鳴を上げたらしい。

なるほど。本当に収容が始まっている。

人々は悲鳴を上げただけで、逃げようとはしなかった。すべてに絶望していると見える。とりあえず、手近の能力者の手錠に呪符を投げた。そいつは悲鳴を上げたが、呪符は俺の命令どおり、手錠を飛ばしただけだった。あとはコイツが他のものの手錠を外すだろう。

ともかく俺は、このことをあの低脳な仲間に伝えに行こうと、踵を返した。

第五十六話

*

*

*

高橋幸乃が死んだ。

俺土屋弘は木の根元に座り込んで、放心したように空中を見ていた。

雪でケツが濡れようが、もうどうでもいい。ライナーもさっきから、向かいの木にもたれかかって、ぼんやりしている。

……高橋、だから日本へ帰れといったのに。馬鹿かよ。

悲しかった。日本でいつしよに過ごした日々、アレはホント言うとか、結構楽しかった。泣き虫で弱くて、のほほんとしている高橋。井上を殺されたのに、あいつまで、しかも石橋の気まぐれで殺されてしまうなんて。

唇をかみ締め、空を見上げる。もう暗くなってきた。

石橋と取引したのは、俺が学校に通い始めてからだった。くだらない学校。この学校の存在はいちおう知っていたものの、どうでも良かった。でも、通ってみれば案外楽しくて、ここでもうやく高橋の言っていた友達の意味が分かった。でもここにいる皆は全員特殊能力者。いずれ、収容場行きになる。そんなの許せる訳がなかった。最初は自分で公務員を殺そうとした。でもできなかった。ただ恐怖に駆られただけの人間を、虫けらのように殺すなんて無理だった。

だから俺は、式神を飛ばして石橋に手紙を出した。深夜2時、お前の学校の屋上で。という短い内容で。自分の名前など書かなかった。奴は俺の字を知っていた。あのクソ汚い字を。

奴は律儀にも2時5分前にやってきた。最初は俺が決闘を挑むと思っただけ。堂々と胸を張って、「さあかかって来い！」と叫んできた。俺はソレをシカトして、プライドも捨て、必死に頼んだ。俺を殺してもいいから、特殊能力者たちを守ってくれ。今思えばまともじゃない。俺はまともではなかったのだ。

石橋はかなり動揺した。帰ろうかまごつき、困惑し、うろろろした。そして、俺は結局仲間になった。石橋が殺すのを黙ってみて、危険があればアイツを守ってやった。石橋は俺が屈服して満足したのか、最近結構上機嫌だった。

しかし、そもそもソレが間違っていたのだ。高橋を死に追いやつ

てしまった。

雪を踏む音がした。顔を上げると、高橋を殺しやがったグズが、傲慢げな顔でライナーの後ろから現れた。そして、さも愉快そうに言い放つ。

「どうしたお前ら？まだ女ん事考えてたのかよ？陰気臭え陰気臭え。ここらへん妙に負のオーラが漂っ……」

「うるせえ！さっきからふざけたこと言いやがってよ、用がねえなら黙って座るか寝ろ！」

ライナーが怒鳴ると石橋は肩をすぼめ、ふんと鼻を鳴らした。

「能力が公開された。もう狩りが始まっているようだぜ」

俺の背筋が凍った。何てことだ。俺の努力は水の泡か。最悪だ。

「で？今後はどーすんだよ、土屋とライナー。奴らは最新兵器を用いているようだし、今までどおりには動けないんじゃないかねえの？」

「なぜだ？」

「はあ？なぜだじゃねえよ。奴らは対能力者兵器を装備した軍隊を動かしてくるだろう。科学の発展は著しいし、霊力探知機とかもそのうち出てくるだろう。やばいよなこれって。前より殺しにくいっーわけで、しばらく作戦を練るか、落ち着くまで隠れてるか、支離滅裂に暴れるか、ってことだ。エクソシストのこともあるし。どうするよ？」

「エクソシストは後でもかまわねえよ」

ライナーはそっぽを向いて、結界を作って俺たちを覆った。結界の中はすぐに温かくなる。石橋は呪符で雪を溶かして地面を乾かし、クリスティーナに呪符を貼り付けた。ライナーはクリスティーナを結界の脇に運ぶと、自分はその隣に寝そべって、背中を向けた。

「っーことだから。二人で考えろ」

石橋は不愉快そうにライナーをにらみ、おれを見た。

「お前は どうしたいんだよ」

「そう簡単に決められるかよ。意見がまとまり次第、報告する。お前もお前で考えろ」

「俺は殺せといわれた奴を殺しているだけだ。意見係はお前とライナーとクリステイーナ。決定は俺がするが、意見を出すのはお前らだ。俺は寝るんだよ」

石橋はライナーとは反対側の結界際により、背を向けた。不意にコイツの背中に殺意を覚えた。完全に無防備な背中。油断しきっている。今ならコイツを一瞬で殺せる。手の中に現れた呪符を握り締める。

高橋や井上、そして最愛の妹、飛鳥の仇を取れる。こんな奴はいないほうがいいのだ。殺そう。殺してしまおう。心拍数が上昇する。

ライナーだって怒らない。石橋など、もっと前に死ぬべきだった。

こいつは小学校のとき、弱くてチビで、女子みたいだと同級生に言われていたらしい。それでも反撃もしなかったという。ただ耐え、一人で泣いていた。誰にも助けを求めず、毎日馬鹿の一つ覚えのように瞑想していた。

そうだ。つまりコイツは、馬鹿なのだ。殺すしか脳がない。生きていてなんになる？死んだって、誰が悲しむ？こいつは、両親に見捨てられ、妹とも引き離され、霧林白稲を捨て、親友を殺され、宮村も殺された。こいつには、誰もいない。

生きている価値さえない。

石橋があつという間に寝息を立て始めた。

寝ている。

俺は呪符を捨て、ポケットからナイフを取り出した。折りたたみのナイフだ。刃をそつと出し、石橋の背中に近づく。ナイフで殺してやりたい。あいつは刃物で、高橋や井上を殺した。俺だってそうしてやる。

ナイフを振り上げ、石橋を足で仰向けに蹴飛ばし、一思いにナイフを左胸に振り下ろす。蹴られて目を覚ました石橋は間一髪で転がってよけ、ナイフは虚しく地面に刺さった。

おれ達はしばらく何も言わなかった。眠りこけるライナーとクリスティーナの寝息以外何も聞こえない。ただ、石橋は「なにやってんだコイツ」と「俺を殺す気か」という目を俺に向け、俺は憎しみを込めてにらみつけ続けた。

石橋はやがて言った。

「寝ぼけてんじゃないよ」

それだけだった。それでさっさと身を丸めて寝てしまった。

拍子抜けしたが、殺す気も失せ、俺はそのまま寝るしかなかった。

第五十七話：赤月市へ再び

*

*

*

「幸乃」

私は名前を呼ばれて、振り返った。

私は真夏の赤月市にいた。私の家の前。私はセーラー服を着て、靴のつま先を地面にとんとんやっている。呼んだのは、勿論加奈。私の親友。学校はいつも、二人で行っていた。

加奈はいつもの明るい笑顔で、私に言った。

「早く学校行こう？急がなくちゃ。遅刻しちゃう。朝練ないと、いつもこうなっちゃうね」

「そうだね」

私は笑い返して、二人で学校に向かった。

いつもの田んぼ道に差し掛かった。生徒はもう、誰もいない。思ったより遅刻しているのだ。大変。一時間目は数学。逃したら分かんなくなっちゃう。

「急ごう」

私たちは足早に学校の方へ向かった。田んぼの道には、なぜだろう。赤い液体がぶちまけられていた。変なの。

「なんだろうね。この赤いの」

「いつもあるじゃん。早く早く」

加奈は私にまた笑顔を向けた。そうだった？あはは、わたし、記憶力悪いな。

学校に到着した。いつもの、古いけど確固と建っている、赤月中学校。私の学校。校庭にはまたなぜか、大きな亀裂が入っている。私たちは気にしなかった。

学校に入った。昇降口で靴を履き換え、階段を上がって廊下へ。

廊下にはたくさんの生徒が転がり、赤い液体が天井にまで飛び散っていた。朝の光でてかてか光ってて、なんだか気味が悪い。

気がついたら、加奈はいなかった。代わりに小夜子がいた。小夜子が赤い液体まみれで、廊下の向こうで立ち尽くしている。

小夜子は私に気がつくと、にっこりと笑って屋上へ続く階段に走っていった。

「小夜子待つて！」

私はあわてて追いかけた。加奈の居場所を知ってると思ったし、今日は小夜子と遊ぶ約束をしている。階段を上がると、屋上への扉が開いていた。

そこから屋上へ飛び出すと、まず、深紅の薔薇のような、真っ赤な空が姿を現した。光も赤い。そして、屋上の床も、赤い液体で染まっている。

そして、生徒の体の山。優に5メートルはある。そのてっぺんに、誰かが何かを抱えて座っていた。石橋だ。私のクラスの石橋君。あの人、とても優しく、それで困ってる人を見ると、すぐに助けた。その人が、どうしてこの山のとっぺんにいるのだろう？

石橋くんが抱えているのは、小夜子だった。小夜子の首は赤く染まり、ピクリとも動かない。石橋くんは、無表情で、小夜子の体を手放した。小夜子の体は山のとっぺんに、横たわった。私の後ろから、誰かが走ってきた。その人を見ると、なんてことはない、ただの茶髪の不良だった。その不良は突然、石橋君に向かってこう叫んだ。

「自業自得だよな、その女が死んだのも、俺が北条を殺したのも、みんなお前のせいなんだぜ、石橋。あはは、ざまあねえな！」

と嘲笑する。石橋は蒼白だった。

「あーあ、霧林とか言う女も、殺しておけばよかったな、俺を殺しやがって。呪い殺せると思うか？」

石橋が一層蒼白になった。その頬に、透明の液体が伝う。そして、叫んだ。

「や、やめろ！殺すなら俺を殺せ！あいつらはなんも関係ないだろ？」

石橋が生徒の山からほとんど転がり降りて、不良の制服にすがり付いて哀願した。私は惨めになってきたけど、なぜかじっとソレを

見ていた。どこでだか忘れたけど、その不良には見覚えがある。

不良が不意に視線を下げ、自分の腹に目をやる。その腹にはナイフが刺さっていた。深々と。石橋が刺したらしい。ナイフを引き抜くと、不良の体は風景に溶け込むように消えた。ナイフを持って突っ立った石橋は、平然とにやにやしていた。さっきの涙なんて、どこにもない。ナイフの刃をしげしげと眺め、どす黒い血のついた刃の側面に、軽く舌を滑らせた。そして、私を見た。私の目むかつて、ナイフが突き出された。私は絶叫した……

「幸乃？」

私の名前が呼ばれた。視界が歪んだ。石橋も、生徒も、ナイフも、何もかも闇に吸い込まれていく。

気がついたら、私はベットにいた。私の顔を、誰かが覗き込んでいる。

「……クリフォード？フィオナ、フローラ……？」

そう、三人の泣き顔が、私のことを覗き込んでいた。次の瞬間には、フローラとフィオナが私に抱きついていて。声を上げて泣いている。

……一体？

ここはどこだ……？

わっと記憶がよみがえってくる。

そう、石橋だ。あいつ、私のことをなぐつて、それでそれで……

「幸乃は心臓を刺されたんだ」

クリフォードがいい、私はぎよつとして、ええっ！と声を上げた。
フローラとフィオナはようやくわたしからはなれ、涙をぬぐう。

「でも、なんといつてもユキノは自然魔術士だからね。恐るべき
治癒力で、ユキノは回復したんだ。体は死んだけど、脳は生きてい
た、そんな状態だったんだよ」

クリフォードが優しく微笑んだ。

私は思わず胸に手を当てたけど、痛くなかった。ようやく辺りを見回す。ここは見慣れた部屋だった。なんせ、赤月市の私の部屋。

久しぶりの、ちょっと埃っぽい部屋だったのだ。

「ここ、赤月市……？」

「そう。ユキノが……その、死んじゃうんじゃないかって、ご両親の元へ……。でも二人は、ご両親はいなかった。隣町に買い物に行ったところ、狩りに合いかけて、逃げたって、近所の人……」

……まだ無事だったことだ。どこかで生きてる。良かった。

赤月市に戻っても、思ったほどの感動はなかった。こんな夢を見たんだし。心臓を刺されたとしても、結果的には生きてたってわけだから。

「ユキノ、いきなり叫んだから、びつくりしちゃって……」

フローラはすっかり回復したようだ。しゃくりあげるのをこらえて、私を見つめている。私も今更ながら泣けてきて、三人と泣き会って友情を分かち合った。

そのあと、私はとりあえず、なぜ叫んだのか答えた。不良のことを話すと、クリフォードは首をかしげた。石橋が哀願し、殺した不良。あとあと、石橋が最初に殺した八人グループのリーダーであつ

たことが判明した。絆のおかげでアイツの記憶が夢となってわたしに流れ込んできたらしい。

石橋はああやって哀願して、多分呪符で殺したのだろうか。今考えれば、プライドもなく、ヤンキーに哀願する石橋は衝撃だった。情けない姿だった。責めるべきの不良にひれ伏し、自分が悪いわけでもないのに謝るなんて、おかしい。あの場面こそ、石橋の人生の分岐点と言えるのだろう。あそこでこらえていれば、今頃学校で受験勉強でもしていたとおもう。

私は三人に、現在の状況を聞いてみることにした。

「ねえ、私はどのくらい眠っていたのかな？ソレと、現在の状況は？」

言ったとたん、三人の表情が曇った。

私は嫌な予感がした。その予感は、見事に的中することとなる。

第五十八話：赤月市へ再び…2

まず、特殊能力が公開された。そして、狩りが始まり、赤月市民も数人、捕まってしまったという。もっと悪いことに、エクソシストたちも襲撃をうけた。

クリフォードたちは合流しようとしたのだが、そのときにはすでに遅く、エクソシストの基地はもぬけの空だった。ほとんどのエクソシストは捕まってしまったのだ。ただし、社長と数人のエクソシストは逃げ延びたらしく、その人たちはいま、こちらに向かっているらしい。

赤月市に軍隊が来るのも時間の問題だと言う。

一方で、石橋たちには何の動きもなかった。どこに居るかも分からない。私は不安でたまらなかった。両親や赤月市民に何かあったらと思うと、いても立ってもいられない。

クリフォードたちも、とりあえず社長たちが来るのを待っているが、恐ろしくてたまらないようだ。世界二位の私の幼馴染、田中優介は、まだ赤月市にいるようなので、私たちは優介の家に行ってみることにした。世界上位の能力者が政府に、「狩りをやめるように」と交渉しているようなので、今どんな状況か訊ねるのだ。

優介は石橋の家族を護衛しているらしい。なので石橋の家族も優介の家にいる。

私はフロアの作ってくれたおかゆを食べた後、四人で優介の豪邸に向かった。

赤月市の道路には雪が薄く積もっていた。学校に行っている生徒が踏んだのか、泥色の雪になっていて、滑りやすい。私は寒さに身を震わせながら、滑らないように優介の家に案内した。

武将の住んでいるような城、優介の家にたどり着くと、優介は家の前に立っていた。私たちが来るのを見こしていたようだ。優介は前より疲れた顔をしていたが、元気そうで、私を見るとそっけなく声をかけてきた。

「やっと目が覚めたのか。体の具合は」

優介は表情こそ無いが、私のことを心配してくれていたようだ。私は笑顔で「大丈夫だよ」と言った。優介はクリフォードたちに軽くうなずくと、無言で玄関に向かった。

私たちは後に続き、中に入る。引き戸を開けて広い靴脱ぎ場で靴を脱ぎ、居間がある三階へ向かう。三人は興味津々に家の中を見回している。私は何回も来たことがある。優介の家はとにかく広くて、

小さい頃はよく迷ったものだ。そのたびに優介のイズナに助けられていたのを覚えている。でも、私はこの広い家が好きだ。木の香りがして、とても落ち着くのだ。

私は、畳の大広間に来て、仰天した。座卓四つと座布団以外の家具は、全て消えていたのだ。ちなみに座卓は広間の隅に、ちんまりと置かれている。

訊いてみると、家族とともに、安全な場所に送った、という返事が返ってきた。ここも壊されると思ったらしい。なのでこの家にはいま、優介と石橋の家族しかないと言うわけだ。石橋の家族は見たらなかった。

私たちは着ていたコートを脱ぎ、優介と向かい合って座った。ここは自然なぬくもりに包まれていて、暖房のように機械的な温度ではなかった。切り出しのはクリフォードだ。

「昨日あったときは聞けなかったけど、現在状況はどうなんだ？ 交渉はうまくいっているのか？」

「ああ、一概にそうとは言えない」

優介は全く持って平然と答えた。

「政府は勘違いしているんだ。能力者が全員危険だと思い込んでいる。その誤解を解けば、何とかなるかもしれない。数人のお偉方は納得はしているが、後はだめだ。なんせ石橋だ。あの外道^{げどう}が殺しまくっているし、全員を納得させるのは、かなり難しい。しかし納得させなければ、狩りは終わらない」

「何か提案はあるのか？」

「石橋を捕まえることだな。ソレが第一だ」

優介はうなずいた。

「生きていようが死んでいようが、石橋を捕まえる。それで多少政府の溜飲は下がると、僕は思う。共犯者、クリスティーナ・コルネリウス、土屋弘、ライナー・クラウゼヴィッツもな。クラウゼヴィッツは前科がある。母親を殺したそうだ」

「ちょっと待ってよ。ライナーのお母さんを殺したのは、ラインハルトだよ」

私は食って掛かった。優介は眉をひそめた。何か言おうとしたが、肩に白いイズナが上ってきたので一時話を中断した。イズナは優介の耳に顔を寄せ、一分後に肩から駆け下りてどこかへ行った。優介

は顔をしかめていた。

「今仲間から連絡があった。そのラインハルトについてなんだが」

エクソシスト三人が身をももぞさせた。ラインハルトは無能力者だが、結社の社長だ。

「ユーフェミアという仲間からの連絡だ。その人がある情報機関から入手した情報に、ラインハルトの名前を見つけたそうだ」

「それで？」

フローラがかすれた声で促す。優介は続けた。

「情報によるとラインハルトは政府から金をもらって、悪魔祓い結社で作られた能力封じの手錠のサンプルを送ったらしい。」

その手錠が無能力者の手に渡ったから、能力者狩りが始まったといっても過言ではない」

私は思い出した。フローラを実験動物にした、あのビルでのこと。閉じ込められていた能力者たちの手には、赤い鉄の手錠がはまっていた。結社にあったものと同じ手錠だった。私は怒り心頭、座卓を両手で叩いてがなりたてた。

「どうして？どうしてラインハルトはそんなことしたの？社長なのに！ひどい！エクソシストを裏切ったの？しかも、政府と裏で手引きをしていたなんて！優介、あのね、ライナーのお母さんを殺したのは、ラインハルトなんだよ？ラインハルトが暗殺者に依頼して殺したんだよ！」

「僕は間違った情報を受け取っていたようだな。ラインハルトが政府と結託しているのなら、ラインハルトはガセを流して息子に罪をかぶせようとしたんだろう」

優介はちよつと黙って、「しかしソレを訂正するのは難しいな」とつぶやいた。

「ライナー・クラウゼヴィッツは石橋の仲間だ。凶悪犯の仲間なんて、誰も信じないようだしな。まあ、伝えておくだけ伝えておこう。ラインハルトに会ったら、捕まえておいてくれ。エクソシスト、いや、能力者への裏切り行為について、訊ねる必要がある」

私はそつとため息をついた。ラインハルトはなんてひどい奴なんだろう。

フィオナは質問を重ねた。

「田中さん。世界の上位の方が動いていると言つのに、石橋はまだ捕まらないのですか？」

「口で言うほど簡単ではないんだ。陰陽師と言つものは、実に厄介だ。呪符一つで気配を跡形も無く消せる。一位が頑張っているが、まだ見つかっていない。僕は明日、ここを出て、他の上位と合流するつもりだ。だから、赤月市のことはこれ以上守れない。頼んだぞ」

「分かった。優介、頑張つてね」

私が言つと、優介は神妙にうなずいた。

「狩りはやめさせるし、石橋健も捕まえる。絶対にな。ところでエクソシストの君らは、赤月市にとどまるんだろっな？」

「ああ」

クリフォードが即答したので、私は安堵した。

「エクソシストのほとんども捕まってしまったし。行くところも無い。それにラインハルトたちを待っていないくちや。ラインハルトを捕まえて、裏切り行為を全て吐かせる。きっとエクソシストたち

を襲撃させたのもラインハルトだ。エクソシストを一網打尽にした後、政府と合流する気だったんだろう。でも、ソレは叶わなかったみたいけど」

「そうか。ここもいずれ軍に襲われるだろう。そのときはくれぐれも気をつけろ。石橋のことは任せておけ。今は自分たちのことを考えろ」

それだけ言うと、優介は立ち上がった。

「外の様子を見てくる」

優介はそう言い置き、窓に近づいた。棧を飛び越え、優介が見えなくなった直後、イズナの鳴き声を聞いた。

第五十九話：凜

私たちは優介の家で、しばらく遊ぶことにした。やることなど何も無い。

外にいつでも良かったのだけれど、もう少し温まりたい。

フィオナは居間で優介のイズナの毛づくろいをはじめ、クリフォードは優介の家に残っていた日本文化の本を読み始めたので、私とフローラは優介の家を探検することにした。

フローラに優介の家を案内するのだ。

フローラと私は、優介の家の最上階に向かいながら、おしゃべりした。フローラはやっぱり楽しくて、なんとなく雰囲気有加奈に似ていて、私ははしゃいだ。加奈に会えたらどれだけいいだろう？

最上階には客室と優介の部屋があり、私はその客室に泊まったことがある。優介の部屋ほどは広くないけれど、私の部屋の二倍はある、いい部屋だった。

フローラは日本の文化に興味を持ち、後で神社に行きたいといった。私は後で案内してあげると約束した。客室のある長い廊下を進

んでいると、客室の一つから、誰かが出てくるところだった。

私たちは足を止め、はっと息を呑んだ。

少女だった。十一歳ほどの、両耳の上で髪を結ったツインテイルの少女。背は愛ちゃんと同じくらい、低かった。その少女は私たちを見ると蒼ざめ、一歩下がった。

目は、優しげ程度の切れ長の目。愛嬌のある顔立ちと、栗色の髪。間違えようが無かった。石橋健の、妹だ。恐怖で目を見開き、その場で固まっている。

フローラが唇をかんた。私の袖を掴み、「行きましょ」と踵を返そうとする。殺人犯の妹だ。どうしてもそういう目で見ってしまう。でも私は動かなかった。少女がとても哀れに見えた。すべてについて、精魂尽きたという感じがして、暗いオーラをまとっていた。

かわいそうだった。

「どうしたの？」

私はそっと訊ねてみた。兄が殺人鬼、でもこの少女はとても、無垢だった。周囲から迫害され、傷ついた少女は、今にも壊れてしま

いそうだった。

少女はさらに一步下がった。フローラにも少女が哀れに見えてきたのか、私の腕を引くのをやめていた。少女の唇が、小さく動いた。

「……誰？誰なの……？」

私はちよつと考えてから、答えた。

「邪殺屋だよ」

言ったとたんだった。少女はさらに血相を変えた。蒼白から、顔に血が上り、次の瞬間叫びだしたのだ。

「邪殺屋！邪殺屋は、おにいちゃんを殺そうと、しているんですよ！知ってるんだから！邪殺屋が、私に、何の用？私が、殺人犯の妹だから、殺しに来たんでしょ！おにいちゃんを殺すなら、凜も殺して！」

私はフローラと顔を見合わせ、少女に目を戻した。少女は金切り声で絶叫した。

「私だつて殺すかもしれない！そうでしょ？私の中にはあの、石橋健とおんなじ血が、流れているんだもの。そうなる前に殺してよ！」

もはや、言っていることもめっちゃくちゃだった。兄に対しての憎しみと愛情がめっちゃめっちゃになって、少女からあふれ出していた。

「なんでおにいちゃんは凜のこと、迎えに来てくれないのかな？凜はおにいちゃんのそばにいたいのに！一緒に殺したいのに！どうして？凜のなにが悪かったの？なんであんな、邪殺屋の男子とかを選んだの？ひどい！殺してやる！おにいちゃんなんて、死ねばいいんだ！」

少女はその場にしゃがみこんだかと思うと、と声を上げて泣き出した。私たちは困り果てた。少女は石橋凜というらしかった。

私たちはとりあえず凜をなだめようと近づいた。すると凜は顔をあげ、すばやく飛びのいたかと思うと突如、「き、急々如律令！」と叫んだ。

凜の開いた手のひらに、赤い呪符が現れた。危険を感じ、フロアが結界をはったと同時に凜が呪符を飛ばした。呪符は結界に張り付いたと言うより、ぶつかった。呪符は何の効果も無かった。ただ、ぶつかった瞬間、赤い液体が飛び散って結界をぬらし、3秒後、液体は透明になって消えた。

フローラは結界を消すと私を見た。

「赤い呪符なんて、みたことが無いわ」

「能力はその人の心に影響するんだよ」

私は小刻みに震えていた。とても悲しかった。

「この子はどうしても傷ついている。きっといまのは、心の血じゃないかな……」

「どうでもいい！」

凜がまた叫んだ。怒り狂っていた。

「とつとと消え失せろ、偽善者ども！グズのお人好しが！殺したいなら殺せ！お前ら全員呪い殺してやるよ！」

凜は石橋健そのものの口調で悪態をついた後、狂ったように笑い出した。私たちはその場で固まっていた。凜は兄の人格の一部を間

違いなく持っていた。

と、凜が出てきた部屋から愛ちゃんが現れた。いつもの緋袴をきていて、手には笹の枝を持っている。凜の声を聞いたのだろう。訝しそうに、かすかに眉をひそめている。私たちを見ると、驚いたように目を見開き、あわてて凜を自分のそばに引き寄せ、部屋に連れ戻した。ドアを閉めると、愛ちゃんは私たちに近づいてきた。

「ユキノさんとベックフォードさん、お久しぶりです」

愛ちゃんは相変わらずの礼儀正しさでお辞儀をした。

「愛ちゃん、今のは……」

私がおそろおそろ訊ねると、愛ちゃんは悲しそうな顔をした。

「あの方たちがここにすることは、内密にお願いします」

「あなたはナニをやっていたの？」

フローラが警戒しながら問うと、愛ちゃんはこたえた。

「カウンセリングみたいなものです。精神の乱れを沈めるために、術を」

と手に持っていた笹を軽く動かす。

「彼らはもうすぐ、優介とともにここを去るでしょう。それまで、そっとしておいてあげてください」

私たちは言われるままに、下の階に戻った。フローラは思いつめた顔をしていた。

私は心の中で殺人鬼に話しかけていた。

凜ちゃんにこんな思いをさせて、いいの？

私は、石橋一家が哀れでなかった。複雑な思いは、私の胸の中で果てしなく渦巻いた。

第六十話：賢者の石

あれから一週間、私はエクソシストを相手に能力の強化訓練を続けていた。

エクソシストが捕まった今、石橋を止められるものは私たちしかない。優介たちも動いているけど、偉い人と会談中なので、下手には動けないのだ。

私たちは一生懸命石橋のありかを探っているけれど、どこにいいのか検討もつかなかった。

そんなある日のこと、山でクリフォードと訓練をしていると、フローラが私たちを呼びにやってきた。

「二人とも、ラインハルトがようやく赤月市に到着したわ。来てくれる？」

私たちは顔を見合わせた。ラインハルトの存在など忘れていたのだ。よくもまあぬけぬけとこれたものである。

私たちは早速、ラインハルトのいる優介の家に向かった。エクソシストの皆は、誰もいなくなってしまった優介の家で寝泊りをして

いる。私もひとりじゃ怖いので、最近は優介の家に泊まっていた。

優介の家に行くと、確かにラインハルトがいた。他、20代前半の男性エクソシスト二人と、十歳ほどの女の子のエクソシストがいる。この人たちが無能力者の襲撃から逃れた人たちか。エクソシストはあんなにいたのに。しかも、エクソシストの居場所を教えたのは、目の前にいる、ラインハルトだなんて。

ラインハルトは不機嫌そうだった。上等な仕立てのスーツが乱れ、ネクタイは緩んでいる。前よりしわが増えたような気がした。なんせ、政府と合流できなかったのだから当然だろう。

私たちはラインハルトの正面に座った。フィオナはラインハルトから一番遠い席にしてあげた。他のエクソシストはしばらく座卓を眺めた後、ラインハルトの横に座った。

ラインハルトはこの期に及んで社長面している。

「エクソシストはあと7人しかいない」

ラインハルトはうなるように言った。

「これからどうするか話し合おう。君たちだけでは大したことは

できないだろうが、手を尽くそう」

いけしゃあしゃあとぬかした。私たち十四歳エクソシストは（十五歳もいるが）すばやく目配せした。ラインハルトを捕まえるのだ。単刀直入に言わなくては。クリフォードは全くその通りにした。

「社長……いえ、あなたにはもうその資格は無いか。ラインハルトさん、あなたを違法取引及び、エクソシストの裏切り行為により、逮捕します」

広い和室は奇妙な沈黙に包まれた。ラインハルトはあんぐりと口をあけ、正面の三人のエクソシストは、訳がわからないと言うように眉をひそめ、私たちは捕まえる気満々で、ラインハルトを見つめていた。クリフォードはしばらくして、続けた。

「もう分かってるんですよ、ラインハルトさん。あなたは色々な裏切りをしましたよね。特殊能力者を撲滅しようと考えている政府側の人に能力封じの手錠を渡したり、エクソシストの基地の場所を教えたり。それに……フィオナのこととか」

「なにを言っているのだね、クリフォード」

ラインハルトは先ほどまではぽっかり口を開け、滑稽な姿をさらしていたくせに、正気に返ったようにばしりと言った。

「魔法結社の社長のわたしがそんなことをするとでも？」

「そうですね。フィオナのことは物的証拠があるわけではありません。でも……」

「口を慎め、アンソニー！」

正面のエクソシストは起こった声を出した。

「僕たちには何を言っているかさっぱり分からないんだが」

「結社は、ラインハルトが亡き妻、ヘルミーネさんの賢者の石によつて作られた金^{きん}を違法に売りさばいて得た力ネで、支えられていたと言うことですよ。さらに私腹を肥やし、口封じのためにヘルミーネさんのことを殺した。でも賢者の石の効果が薄れてきたから、フィオナに作らせようとしている……ラインハルトさんも聞いてますか？」

ラインハルトは逃げ道を探すかのように部屋に眼を通したのだ。

「たぶん社長は、エクソシストのために力ネをつぎ込むのが嫌に

なったから、エクソシストを政府に売ったんですよ？俺たちはそう解釈していますが、どうでしょう？」

他のエクソシストたちは蒼白になって社長を見つめていた。

「ヘルミーネさんの殺しの罪を……ライナーに着せたりしたようですが、無駄ですよ。こっちは証拠を掴んでいるんだから」

優介によれば、そうらしい。わたしはいてもたってもいられなくなり、ラインハルトに向かって喚いた。

「ライナーは確かに、石橋の仲間だけれど、他の罪を着せるなんてひどいですよ！ライナーはヘルミーネさんを殺された復讐に裏切ったんですよ？……社長はヘルミーネさんが錬金術師だと知って、近づいたんですか？」

ラインハルトの顔はいまや蒼白で、脂汗をかいている。言い逃れをしようと策を練っているらしい。

「さらにフィオナに無理矢理賢者の石を作らせようとするなんて……ひどすぎます」

「ささつきから、ななにをいつているのかね?!」

ラインハルトはやっとの思いで言った。

「ヘルミーネのことは愛していたし、エクソシストのことは裏切っていない！フィオナくんの事だっけそうだ！わたしはフィオナくんに賢者の石を作らせようなどとは……」

「宣告しておきますが」

フィオナは耐えられなくなったのか、凜とした声でさえぎった。

「わたしは賢者の石はおろか、エリクサーという霊薬さえも作れません」

「な、何だと……？」

ラインハルトは唐突のことに、思わずそう口走った。その言葉が何よりの証拠だった。三人のエクソシストは愕然とした。わたしたちはもう一度目配せをしたあと、フィオナは冷たい声で続けた。

「いいですか、私たち錬金術師、アルケミストの究極の目的は、賢者の石を手に入れることです。賢者の石を手に入れば生命の変

成も可能だと言われ、それを手に入れるには厳しい修行と年月を必要とします。賢者の石は、単なる知識や原料となる物質だけでは作れません。神の力が欠如していれば不可能で、生涯作れない人だっているのですよ。ヘルミーネさんの術を近くで見ていた私には分かります。彼女は清らかで、女神のような慈愛を持ち合わせ、純真でした。彼女だからこそ賢者の石は作れたのです。強い女性でした」

フィオナは思い出したのか、軽く唇をかんだ。水色の瞳には、涙の膜が張っていた。

「ヘルミーネさんだからこそです。残念ながら私は彼女のように強くありません。強かったとしても、まだ十五歳の身、造れるわけがありません。あなたはどうか、私を買いかぶりすぎているうですね」

ラインハルトの顔が一層蒼白になった。フローラが立ち上がり、胸を張った。

「どう？社長だからって見逃すと思ったら大間違いよ。社長、いえ、ラインハルト・クラウゼヴィッツ、あんたを逮捕するわ」

「待ってください！」

ラインハルトが叫んだ。冷や汗をかいて。顔をびくびく引きつらせながら、なぜか笑おうと必死になる。

「今まで誰がお前たちに力ネを出してやっていた？誰が結社を支えてやっていた？その恩を忘れたとは言わせん！」

「忘れてなんか！」

フローラが大声を出した。フローラは涙目だった。

「忘れてなんかいません。私たち社長のこと、信じていました」

その言葉とともに、ラインハルトはあっさり捕まった。無能力者のラインハルトが、エクソシストになうわけも無かった。抵抗すればするほど、情けないだけである。

ラインハルトは和室のすみに、フィオナの鉄の檻に入れられた。ラインハルトは捨て台詞らしきことを言っていたが、私たちは無論相手にしなかった。

ラインハルトが捕まっても、何かが変わったわけじゃない。石橋は最近、軍の基地をつぶしにかかっているし、能力者たちの暴動は絶えない。私は虚しさを感じていた。そんなときのことだった。

第六十一話：能力者収容

赤月中学校の生徒は、エクソシストたちと仲良くなり、毎日のように優介の家で遊びほうけていた。私とて例外ではない。私も石橋が見つからない煩わしさから開放されたくて、馬鹿みたいに遊びまわっていた。

ちなみに、高校のことは結局何も決められなかった。中学三年生のみならずそのように、しかし特にネガティブになるわけでもなかった。やけくそになっていたのかもしれない。

朝からエクソシストと生徒10人ほどで優介の家出遊んでいたと、きのことである。かろうじて残っていた小型のテレビをつけると、ニュースがやっていた。東京でまだ捕まっていない能力者たちが暴動を起こしたのだ。

サイコキネシス、エレキネシス、パイロキネシス、テレポート、超音波などが都心を飛び交い、軍隊に立ち向かったらしい。能力者狩りの中止を訴えているのだ。生き残るために。

いまや日本中、いや、世界中に軍隊がいる。

私たちは我に返ったかのように、再び石橋の居場所を突き止めようとした。見つかるわけ無いが、インターネットとかで調べた。

こういふのでしか見つける方法が無いのだ。しかし、”石橋健”と検索しても、出てくるのは悪口サイトや崇拝者サイトばかりだった。崇拝者は急増していた。軍をつぶしているからだ。皮肉なことに、まさに戦争がおきそうなのも石橋のせいなのだが。

とにかく地上は荒れ果てていて、赤月市は場違いなほど平和だった。しかし皆怯えていた。いつ、魔の手が襲い掛かるか分からなかった。

そしてその日は何の前触れも無くやってきた。

二月に入ったばかりのある日。能力者狩りが一番盛んになった時期のことだ。わたしとエクソシストとその友達の赤月中学の子達はやはり優介の家にいた。何も動きが無いのでくつろいでいたのだ。このままずっとのんびりできるのではないかと思った矢先。

大山市に通じる山道の方で、市民の悲鳴が上がった。通常なら聞こえないほどの声だったが、何せ私は自然魔術士だ。わずかな空気の振動も感じ取れる。私は何事だろうと立ち上がり、ちょうど三階にいたので、ベランダの方に走って山道の方を見る。何も見えない。

「どうかしましたか」

フィオナが声をかけてきたので、静かに、と周りの人に合図をしてひたすら耳を澄ます。

また聞こえた。さつきより近い。続いて、何かの小さな破裂音。聞き覚えがある。無能力者たちの対能力者用兵器の銃の音だった。私の体に恐怖が突き抜けた。他の子たちも気がついたようだ。蒼白になって、硬直している。

私たちはいざというとき、どうしようか決めていなかった。ラインハルトが部屋の隅の檻の中で嘲笑を浮かべている。とっさなので頭が働かない。

再び、市民の悲鳴。捕まっているのだ。はじめに声を出したのは、クリフォードだった。

「アカツキシの人たちを救おう」

確固と、言った。

「それから逃げるんだ。逃げてもどうにもならないけど……今はそうするしかないと思う」

「……そうだね」

私は同意した。

「戦つて、皆救つて、とりあえず逃げよう！」

「クリフォードさんとユキノ先輩に賛成」

吹奏楽部の私の後輩が立ち上がった。それを合図にしたかのように皆も立ち上がる。怖がつてはいるけれど、市民を見殺しにするなんてことはできなかった。その心は皆同じなようだ。心が一つになったと思つて、私は嬉しくて涙ぐんだ。

私たちはいくつかのグループに分かれて行動することにした。待ち合わせ場所は優介の家の前だ。赤月市民の心に、テレパシー使いの女の子がここに集合するように呼びかけ、残りのものは救いに行く。

私はフィオナと行動することとなった。一見、いつもと何のかわりもない赤月市だったが、間違いなく、無能力者の軍は来ている。

私たちは例の山道の近くにある、住宅街の塀に身を隠していた。角を曲がればすぐの所に軍服を着、武装した人たちがいる。その人たちは、大きなコンテナのついた、迷彩のトラックを守っているよ

うだ。捕まった市民はその中に詰め込まれているらしい。近づこうにも、軍が多すぎて近づけそうに無い。フィオナは不安そうに私に耳打つ。

「幸乃さん。被害が広まらないように、この場はあきらめましょう。軍は、赤月市の奥に少しずつ進んでいるようです」

「そうだね」

私は唇をかみ締め、その場を離れた。慎重に住宅街を歩き、市民を見つけると、優介の家へ急ぐように声をかける。やがて、優介の家の近くで軍二人を見つけた。ブロック塀に背中を付けて角を曲がろうとしている。このままでは優介の家に能力者が集まっていることがばれてしまう。私たちは目配せして、屋根伝いでその軍の近くまで行った。軍は機関銃だか短機関銃だかの銃を持っており、それは対能力者兵器だと分かる。

私は上から電気で失神させようと、軍を見据えた……その瞬間、兵が唐突に私たちのほうを見上げた。間髪いれずに銃口がこちらを向き、かなり抑えられた銃声とともに銃弾が吐き出された。屋根の一部を吹き飛ばし、私たちは悲鳴を上げて下がった。

その音で、家の中に残っていた十歳ほどの少女が無邪気に兵の前に現れたのが見えた。もう一人の兵が、すかさずその子に拳銃を向ける。

フィオナが動いた。一人、屋根から少女と兵の間に向かって飛び降りたのだ。飛び降り様に右手を優雅に空中に滑らすと、厚い鉄のカーテンがなびきながら現れ、放たれた銃弾を撥ね返す。私もフィオナのほうに気を取られている軍の後ろに飛び降り、二人の背中に手を当てて電流を流し、失神させた。

フィオナのほうを見ると、もう鉄のカーテンは消えていて、女の子は泣きながらフィオナに抱きついていて。フィオナは深刻そうに私に目を向けた。

「たやすく失神させられると思ったのですが……レベルが上がっているようですね」

「ウン……ケガは無かった？」

「はい。この子も大丈夫です。クリフォードたちを探しましょう」

私は女の子を優介の家まで送り届け、クリフォードを探した。クリフォードとフローラはたった今、兵を五人、倒したところだった。私たちと同様、油断していたようで、腕にケガを負っている。

「大丈夫っ？」

「うん。さっきテレパシーが届いた。市民は皆、田中の家に行つたそうだ。はやく俺たちも戻ろう」

角を曲がればすぐだった……

しかし、私たちが見たものは、赤月市民ではなかった。まずはじめに見たものは、市民に匹敵するほどの兵だった。市民は一塊になつて地面に座つて怯え、軍はそんな市民に銃を突きつけている。

そして、数人の兵が私たちに気がつき、銃を構えた。

「や、やめて！」

私は悲鳴を上げた。

「降参しろ！そうすれば、傷つけはしない！」

銃を構えた兵が私たちに向かって叫ぶ。私たちは動かなかった。ショックだった。そんな……私たち、捕まっちゃうの……？

市民の塊の中にラインハルトの檻があつた。兵の一人が今、檻に近づこうとしている。私はとつさに近くのテレポーターと目配せした。次の瞬間には檻が消え、私たちの隣に現れた。エクソシストがびっくりして飛び上がり、ラインハルトはナニが起こったのか分からないという顔をしている。

軍は辺りを見回し、私の隣のラインハルトを見ると、小さく息を呑んだ。私は取引を試みていた。

「聞いてください！こいつは、ラインハルト・クラウゼヴィッツ。知っていると思います。私はコイツを解放します、だから、お願いだから、能力者狩りをやめてください！」

すると、軍は切羽詰つたように市民に銃を突きつける。

「今すぐその人を解放しろ！」

私は分かつてもらえない哀しみに満たされた。

「軍の皆さんが、能力者を危険視していることは知っています。でもだからって、無差別に捕まえるなんて！みんな、おんなじ人間なのに！なにも悪いことなんか、しないのに！確かに能力は、使い方次第で危険なものになると思います。でも、私たち石橋みたいにはならない！知っていますよね？赤月市民は石橋によって大量虐殺

にあっただんですよ！」

軍の間に動揺が走ったのが伝わった。

「私、邪殺屋なんです！チャンスをご覧ください、アイツを捕まえるチャンス！あなたたちが行っても、あいつにやられるだけです！命を無駄にしないでください。だから……」

それきり、言葉は途切れてしまった。二十分ほど、間が空いた。軍は無線機で何かを話しているようだった。やがて、私に向かってこう言い放った。

「一ヶ月だ。一ヶ月間、私たちは能力者収容を取りやめることにする。その間に、石橋健を捕まえてみる。そうすれば、能力者収容をやめる。もし捕まえられなかった場合は、能力者収容を開始する」

最後のチャンスだ。その兵が付け加えた。今気がついた。その付け加えられた言葉は、霊力探知機に映らないほど弱いものだったけど、確かにテレパシーで伝えられた。その人も、とても弱いが、能力者だった。

第六十二話：本当の仲間

一ヶ月以内に石橋を捕まえる。

そんなの正気の沙汰ではない。不可能に近い。

ラインハルトは引き渡した。しかし市民は、「一ヶ月間預かる」と称して、結局軍に連れて行かれた。赤月市は、私とエクソシストの三人、それに、赤月神社の愛ちゃんだけになってしまった。

私のことは一瞬で全国に広まった。勝手に取引したと、なじられた。メールが毎日のようにどっさり届く。なぜあんなことをしたのか。不可能だ。君のせいで収容が一生続いたらどうするのか。無責任だ……等等。しかし、逆に慰めのメールも来た。私が言わなければ、一生何も解決しなかっただろう、動いてくれてありがとう、とか。私はそういう手紙に涙した。慰めてくれるのは、とても嬉しい。

確かに誰かが動かなければ、一生この状態が続くだろう。でも、自信が無かった。多分政府は、どうせ無理だと思ってあんなに早く決定したのだろう。

一方で、エクソシストの皆は、私のことを一生懸命手伝ってくれた。能力者収容をやめさせる唯一のチャンス。毎日のようにパソコンに向き合った。

そして、私はひそかに土屋に賭けていた。いま石橋が捕まれば、土屋の「能力者を守る」という願いがかなう。さりげない調子でアイツを赤月市に誘導してくれないだろうか。土屋なら、やろうと思えばできるだろう。

私はパソコンで目撃情報を集めたりしたけど、努力はむなしかった。そんな調子のまま、十五日たってしまった。もう半分も無い。私は脱力した。あいつと会いたいと思うほど、あいつは消え、会いたくないと思うと、出てくる。この法則は一体なんなのだろう。何かで釣ることはできないだろうか。

無理だ。思い切り下品な悪口をばら撒かれようが、妹を人質に取られようが、あいつはもう、出てこないだろう。なんせ、あいつは霧林さんのときに学んだのだ。過去の連中など裏切り者ばかりだ、と。

どうせ絆があるのなら、絆の端を掴んで力づくで引っ張り寄せたかった。

私は自室のノートパソコンを脇によけ、机に突っ伏してため息をついた。あと約十五日間、私はどうやって過ごせばいいのだろう。

もし……私は思った。もし、石橋の中にちょっとでも人情が残っ

ていたとしたら……、アイツは出てくるのではないだろうか？

殺しをやめる、唯一のチャンスだ。あいつにとつても。

でも、アイツは私を刺したではないか。自分を止めようとする存在を殺そうとしたではないか。あんなやつに人情なんて、残っているわけがないと、思う。しかし……望みは捨てきれない。それに、ライナー。ライナーだって、分かってくれるのではないだろうか。

「幸乃」

背後で声がした。振り返ると、エクソシストの三人が立っていた。フローラだ。三人は優介の家にパソコンを持っていつて調べていたはずだ。私はなんだか居心地が悪かったのだ。三人の視線が、たまに私の背中に突き刺さる。あの感覚がいやだった。

「みんな……」

「なにか手がかりは見つかったの？」

どこか、冷やかな声だった。やはり三人は心底では、私のことが無責任だと思っていたのだらう。その通りだと思う。分かっている。それでも、辛かった。私にはもう、この三人しか仲間がいなか

った。

「ううん。まだ……。そっちは何か見つかったの？」

「進歩なしよ。何か他の案を探そうと思って。田中の方も頑張っているみたいだけど、分かったのは五日前に石橋たちがブラジルにいたってことだよ」

「そっか……」

私はうなだれた。優しかったフィオナの目も、クリフォードの温かかった目も、フローラの強気な目も、いまは無い。どの目も冷ややかだった。

「ねえ、私考えたんだけどね」

私は言ってみる事にした。

「土屋が石橋のこと、裏切るかもしれないよ」

帰ってきた答えは沈黙だった。私はあわてて続ける。

「やっぱり、ネットなんかじゃ見つかるわけ無いんだよ。だから、考えてみたの。だって土屋が裏切った理由は……」

「やめてください」

さえぎったのはフィオナだった。

「幸乃さん。敵にかけるなんて、そんな愚かしいマネはしてはいけません。土屋さんは私たちを裏切りました。その結果、どれほど人が亡くなったか、あなただって分かっているのでしょうか？」

「そうよ！それに、見つからないからって敵に賭けて、何も知らないって言うの？あいつの仲間になった奴なんて、みんなくずなのよ、幸乃だって分かっているんじゃない？」

「そんなひどいこといわないで！確かにそうかも知れないけど……私か殺されそうになったとき、ライナーだって土屋だって、私のこと守ってくれたの！フローラは知らないかもしれないけど……少なくとも、あの二人には……クリスティーナは分からないけれど……」

「クリスティーナは前から訳分からなかったわ」

フローラがうんざりしたように言った。

「犯罪者以外の男はクズ扱いするような女だもの。自分がクズだ
って言うことに、気がつかないのかしら。悪魔使いって、たいてい
あんな感じよね、どこか傲慢」

私はその言い草に怒りを覚えていた。確かに石橋の仲間になった
ことは許せない。でも、何か理由があったのだ。クリスティーナに
も理由が。ライナーにだって、土屋にだって、理由があったではな
いか。

「 どうして、皆は元仲間とかにそんなに辛く当たれるのかな
？私だって、一生土屋のこととか、ライナーのこととか、クリステ
イーナのことは許すことなんてできないと思うよ。でも、理由があ
るんだよ。分かってあげようとは思わないのっ？」

「 思わないわ」

フローラは冷たかった。

「裏切り者は裏切り者でしかない。元仲間だろうがね。それがエ
クソシストなのよ」

私の心に氷の矢が刺さった。そこからすうつと冷えていき、私の体温が低下していくのが分かった。気がついたら、立ち上がっていた。

「そっか、エクソシストの間の絆って、そんなもんだっただね？他人のことをわかっていてフリをして、本当は何にも分かっていないんだね。クリスティーナが何であいつの仲間になったとか、少しでも考えたこと無かったの？わたし、不思議に思ってたんだ、クリスティーナはあんなに大きな家に住んでいるのに、どうして親とか兄弟とかいないんだろって。多分、クリスティーナとは別居しているんだよ。両親は、ウィッチが、クリスティーナが嫌いだから！」

私の中で、今度は炎が燃え上がっていた。

「だから、ウィッチを嫌わない犯罪者ばかりと、仲良くなっているんだよ！あくまで推測だけど、クリスティーナが石橋といえるのは、多分石橋と似ているからだよ。能力のせいで、周りから迫害されて、愛する人からも嫌われて！」

誰も何も言わなかった。私は静かに続けた。

「私はさ、土屋やライナーのこと、好きだよ。……あなたたちと違って、二人のことをよく分かっていると思う。石橋と絆ができたとき、皆は怯えて私に近づかなかったのに、ライナーだけ一緒に

いてくれたの。土屋はぶつきらばうんだけど、本当はとっても優しいと思うんだ。だから、二人に少しでもかけてみようって私は思う」

長い長い沈黙が流れた。みんなの呼吸音と、時計の秒針の音しか聞こえない。口火を切ったのはフローラだった。

「あっそう」

果てしなく冷たい声。

「あたし、幸乃に失望したわ。幸乃はお人好しすぎるのよ。なにが土屋やライナーに賭ける、よ。後悔するだけよ。あたしはあんたみたいにお人よしじゃないわ」

エクソシストは私の前から立ち去った。クリフォードは一言も発しなかった。最後まで目も合わせなかった。

私は今度こそ、ひとりぼっちになった。

第六十三話：加奈

私とエクソシストたちは一切口を利かなくなっていた。あの日から顔もあわせなかったし、私も合わせようとは思わなかった。本当は悲しい。とても寂しい。でも、土屋やライナー、そしてクリステイーナのことを思うと、引き下がるわけにはいかなかった。

ただ、私はネットで探すという馬鹿馬鹿しい事はやめた。元からこんなもので見つかるわけが無い。なので、能力の練習に明け暮れた。

毎日朝から山の中で、土屋があの時私と加奈のために作ってくれたあのカリキュラムで。我流のカリキュラムなんかより、土屋が作ったものの方が上達が早かった。

ただ一人、私を慰めてくれたのは、愛ちゃんだった。愛ちゃんは神主さんに頼まれて、赤月神社を一人、守っているのだ。私が山の中で練習していると、お昼頃に昼食に呼んでくれて、手作りの鍋と一緒に食べた。愛ちゃんは、能力者が騒いでいる中、場違いなほど冷静だった。私が石橋を捕まえに探しに行ったほうがいいか訊ねたことがある。すると、愛ちゃんはこう言った。

「闇雲に探し回っても、世界は広いので見つかる確立は皆無です」

そういった声は穏やかで、人を安心させる響きを持っていた。

「健は来ますよ、必ず」

確信しきった声だった。私は不安だったけど、その声になんとかほっとしてしばらくはそのことを気に病まなくて済んだ。

そんなある日のことだった。あと五日、切羽詰っていたときのこと。

私は赤月神社の裏の縁側に座って、一人膝を抱いていた。あと五日。もしあと五日以内に石橋を捕まえられなかったら、特殊能力者收容が再び始まってしまう。私はあきらめかけていた。もう無理だ。石橋は結局来ないのだ。私は能力者の悪夢を現実にした悪魔として、悪人名簿に載っちゃうんだ。

私は加奈を思い出していた。そういえば、加奈はこの神社の裏に臨む山の中で亡くなったんだ。石橋に頸動脈を切られたとき、痛かったのかな？怖かったろうな。辛かったろうな。私、加奈に何もしてやれなかった。加奈に助けを求めるくせに、私は加奈を助けたことなんて、一度だって無いんだ。私は誰も救えないんだ。

加奈に会いたい。もう一度だけ、私を慰めてほしい。あと一度…。

「幸乃さん」

私は背後から呼ばれて、振り返った。愛ちゃんが襖を半分開けて、穏やかな目で私を見つめていた。

「どうぞ、中に。外は冷えます」

「うん……ありがとう」

私は立ち上がって、和室の中に入った。中には暖房は無いけれど、なんだかお日様の下にいるように温かく感じた。神社の中はいつもそうだ。外が荒れようとも、ここだけは静かな時間が流れている。私はなんだか落ち着く。

ふっと顔を上げ、私は目を見開いた。部屋の半分が、たくさんの造花で飾り付けられていたのだ。色とりどりの造花に、私は思わず愛ちゃんを見た。

「これは……？何かの儀式中だったの？」

「口寄せです」

愛ちゃんは造花を背に座布団に座り、その正面の座布団に私を促した。私は向き合って座った。なんだか妙に緊張していた。□寄せ、死者の霊をおろすこと。

「この花は死者の霊を慰めるためのもので、□寄せの一種、花寄せといいます」

私は愛ちゃんの目を見ているうちに、愛ちゃんがこれから何をするのかだんだん分かってきた。嬉しくも、とても緊張して□の中がからからだ。

「これから、井上加奈さんの魂を私におろします。彼女がそう望みました」

愛ちゃんは静かに言うと、両手に数珠のようなものを複雑に巻きつけ、意識を集中し始めた。

私は胸がいつぱいになった。加奈。加奈に会えるんだ！

これ以上なくらいにどきどきしていた。そうだ、愛ちゃんは巫女なのだ。霊をおろすことができるのだ。同時に涙も溢れていた。一生、加奈とは会えないと思っていた。なのに、もうすぐ愛ちゃん

の体を通して会えるなんて！

ふっと、周囲の空気の温度が下がった。愛ちゃんの閉じられた目が開かれ、虚ろな目が私を見つめた。

ひんやりと、でもどこか懐かしいオーラで部屋の中が満たされた。

目の前にいるのは愛ちゃんだけど、加奈だった。加奈が愛ちゃんに乗り移ったのだ。

「……加奈」

私がつぶやくと、愛ちゃんが笑った。愛ちゃんは笑うとき、とても優しい顔で笑う。でも今は、快活に笑っていた。

「幸乃」

その声の響きは、間違いなく加奈のものだった。

私は気がついたら、愛ちゃんを、いや、加奈を抱きしめて、泣き声を上げていた。加奈も私をそっと抱きしめて、泣いた。

会
い
た
か
っ
た
。

第六十四話：加奈：2（前書き）

小説を序章から一部大幅に訂正していますが、読み返さなくてもストーリーに支障は無いので大丈夫です。
戸惑われた方、申し訳ないです。

第六十四話：加奈…2

私たちは泣きやむと、愛ちゃんの着崩れてしまった巫女服を整え、今までのことについて話した。愛ちゃんの体をした加奈の目は相変わらず虚ろだったけれど、きちんと私を見つめ、熱心に話を聞いてくれ、分からないことがあると時折口を挟んだ。

話し終わると加奈はしばらく沈黙した。唇をかで、なにやら考えているらしい。間違いなく加奈だ。外見が違ってたって分かる。本当に加奈なのだ！私は何回も嬉しさをかみ締めた。

「……地上が荒れてるのは知っていたけど、幸乃、まさかそんな辛い立場に立たされていたなんて」

死後の世界のことは分からないけど、いちおう地上の様子は知っていたらしい。

「土屋が裏切り、そして、ライナーくんも裏切り。裏切り大全ね」

加奈は加奈らしく腕を組んだ。

「おまけにエクソシストとも仲たがい。期間は五日、か。あのさ、死人の私がいつてもなんだけど、私はあと五日、待ってみてもいい

と思うよ?。」

「え?でも、私……」

「五日でアイツを探せるとは思わない。あの、クリフォード、フィオナ、フローラって子はやけになっているみたいだけど、無理なものは無理。確かに幸乃が勝手に無能力者に提案しちゃったのはまじだと思う。でも他にやる人がいなかったんだから、しょうがないといっちゃあ、しょうがないわよ。優介の方の話し合いだつて、無理っぽそうだし。それに後悔したつて過去は変えられないわ。私だったら幸乃の言うとおり、土屋にかけてみる」

加奈はしっかり言った。

「私は土屋のことをよく知っているとと思う。だから、あいつが動かないとは思えないのよ。土屋は悪に染まりきれないわ。そういう奴だもの。石橋を捕まえる唯一のチャンス。たとえ仲間になったとしても、アイツは妹と、それと私が言うのもなんだけど、井上加奈、すなわち私を殺されたのよ。うらみは消えていないわ」

「そうかな」

「そうよ!お人よしって思われるかもしこれないけれど、私は信じてる。幸乃。あんたもそう思ったなら、信じなきゃ」

加奈がにこつと笑った。私も笑い返したけど、私は疑問に思っていた。愛ちゃんといい、加奈といい、どうしてそこまで土屋を信じていいと言い切れるのだろうか？なので私は聞いてみた。

「加奈、私は土屋を信じてるよ。でもどうして加奈はそこまで信じられるの？私と同じ理由？」

「それは……」

加奈は肩をすくめ、困惑したように首をかしげた。それから決心したのか、どこか決まり悪げにつぶやいた。

「その……何日前に、土屋が会いに来たのよ」

私は加奈と私のために、愛ちゃんがあらかじめ用意しておいてくれたお茶をすすろうとしていたので、危うく湯気の立つそれを落としそうになった。

「ええっ？嘘でしょ！」

がばつと身を乗り出すと、加奈は、本当よ、と頭をたれた。

「わたし、これでも幸乃より先に邪殺屋になってたじゃない？二人で訓練してたとき、土屋の相談相手になってたのよ。だから今回も……」

「加奈と土屋、そんなに仲よさそうには見えなかったよ」

「見かけによらずって言うでしょっ！別にそういう関係じゃなかったから！とにかく！会いに来たのよ」

加奈はうつむいて顔を隠したまま、大きめの声で言い放った。

「そう、相談よ。土屋は間違いなく、石橋を裏切る！ライナーくんにもあったわよ！ええ、認めるわよ！」

加奈はなぜかすこしむきになっている。

「クリスティーナって子には会ってないけど、とにかく土屋とライナーは幸乃が殺されかけたことにものすごい怒っていたし、自分の考えを改めたのよ。ライナー言ってたよ。エクソシストを殺してもらったところで、何も変わらないって！土屋だってそう！あいつら、絶対石橋を連れてくるわ！」

私は信じていて良かったと、改めて鼻をすすった。土屋とライナ―は、以前と根っこは何も変わっていないのだ。

「じゃあ、四人はこの近くにいるってこと？」

「あいつらの話では、今は日本にいるって。この間聞いたときは、新潟辺りだって。もう移動しているだろうけど。あいつらは石橋が寝ているとき、夜中に来たから急いでた。詳しいことは聞けなかったわ」

「そっか……でも、それだけで十分だよ！」

私は気分が上がってくるのを感じた。根拠の無い自信が、根拠のあるものへと変わった。ずいぶん違った。そして、不意に思った。

「ねえ、石橋が来たら、当然戦闘になるよね」

「それは決定事項ね」

「わたし、石橋のことどうすればいいのかな」

加奈はぽかんと口を開けた。

「それはどういうこと？」

「あのね、土屋たちがいるから勝てると思うけど、そのあと。あいつのこと、殺すのかな」

「そんなの幸乃が気にしなくったっていいわ」

加奈がちよっぴり肩をすくめた。

「土屋たちに任せればいいと思う。ユキノは戦いに備えておいた方がいいわ。それで十分じゃない」

「そっか……」

私は心配だった。もしもの話だが、土屋たちがやられて、私とアイツだけで戦うことになったら、どうなるのだろうか？

加奈はすつと立ち上がって、障子に向かって歩き、それを開け放った。正面は森で、雪が陽光を反射して光っていた。きらきら輝くそれを見ながら、加奈はちよっとおかしそうな、楽しそうな表情で

私を振り返る。

「ねえ、小さい頃見てたアニメ、覚えてる？」

アニメ？あまりにもいきなりで、今度は私が口を開けた。

「中学生の女の子が主人公でさ。普段は普通の中学生に成りすましているんだけど、悪者が来ると、変身して戦うやつ」

私は思い出して、ちょっと笑った。私が一番好きだったアニメだ。

「いつつも主人公が勝つから、そのうち飽きて見なくなっちゃったけど。でも、あたしそのアニメを見て分かったことがある」

加奈のひたむきな視線と、私の視線が交錯した。加奈は明るく笑って言った。

「正義は必ず勝つってこと」

第六十五話：再会

あと、一日だった。

明日中にアイツを捕まえられなければ、特殊能力者収容が始まってしまう。

マスコミからの取材の電話が毎日来た。ひっきりなしになっている電話の電話線はとくに切っていた。赤月市は私とエクソシスト、愛ちゃん以外は誰もいない状態で、赤月市に入ってこようとするマスコミを、私は力づくで押し返した。もしもあいつが来たら、危険だ。

私は最近、エクソシストを見ていなかった。あの日加奈と会った後、土屋たちが裏切ったと手紙を書いたのに。口で直接言う勇氣はなかったのだ。なので、仕方なく今日、優介の家に行ってみた。

しかし、中はもぬけの殻だった。いなかった。エクソシストたちは、五日前にはもう消えていたのだ。私は信じられない思いでいっぱいになった。出て行くなら、一言でも言えればいいのに、何も言わずに。フィオナ、フローラ、クリフォード。誰もいない優介の家で、私は少しだけ泣いた。

その日はそんな感じで一人で過ごし、明日私はどのように過ごせ

ばいいんだろうと考えた。

とうとう夜になって、もっと惨めになった。

しかし、夜中の一時、雨戸も閉めていない私の部屋の窓ガラスががたがた鳴った。はっと身を起こし、私はベットから飛び起きた。

窓に駆け寄ると、そこにはライナーの姿があつた。決まり悪そうに、さやかな月明かりの下にいた。私は一瞬呆然とし、次の瞬間には「ライナー！」と叫んで窓を開け放った。

ライナーが来たということ自体驚きだったが、私は孤独だったから、ひどく嬉しくて涙が溢れた。ライナーはそんな反応をされるとは思わなかったのか、ちょっと動揺した。でも、ライナーはライナーらしくった。涙をぼろぼろ流す私を抱きとめてくれた。ネクロマンサーだからライナーの周りだけ異様に寒かったけど、ライナーは温かかった。特殊能力者収容場以来の再会だった。

ライナーは私を抱きしめながら、「ごめんな、幸乃ちゃん、俺、幸乃ちゃんを半殺しにされたの、止められなかった……」とずつつばやき、ごめんを繰り返した。ライナーも涙声だった。

私たちは五分ぐらいそうしているとようやくはなれた。エクソシストの中でも、本当に私を思っていてくれたのは、ライナーだ。ラ

イナーだけなのだ。

私はともかく涙を拭いて、訊ねた。

「どうして、ここに？」

ライナーは私が加奈と会って、加奈が事情を話してしまったことを悟ったらしい。

「ああ、加奈ちゃんにあっただんな」

「うん！ね、土屋は？今どこにいるの？」

「ごめんな、時間がないから手短に話しまうけど、イッシーはここから100キロほど離れた場所にいる。今は寝ているけど、起き次第赤月市に来るよう説得する。なかなか強情で、来ようとしなくてよ」

「じゃ、ライナーは危険を冒して、加奈と会ったときと同じようにここに来ているんだね？」

「そうなんだよ。加奈ちゃんの時も俺たちが戻ったときには起き

てて、大変だった」

ライナーは肩をすくめた。

「明日。明日必ず来させる。俺……自分が間違ってるって分かってた。でも自分に勝てずに……だから、せめてアイツを捕まえる手助けをさせてくれよ」

私はうんっ、とうなずいた。

「信じてるよ」

「ありがとな、幸乃ちゃん。……ところでアンソニーどもは？」

「エクソシストたちは……」

私は口ごもり、「いなくなっちゃったの」とぼそりといった。事情を話した。

「私が悪いって分かってるけど、でも黙って出て行かなくなっているのに……。私、最初からエクソシストから仲間って思われてなかったんだよ。一度石橋が捕まって、結社が荒れた時だって、

真っ先に私が疑われていたみたい。友達だって、思ってた」

私たちはしばらく黙った。また泣いてしまいそうだった。そんな私の頭を優しくなでたあと、ライナーは言った。

「いたほうが闘いになったとき、有利だったけど、しょうがねえや。もつと幸乃ちゃんの傍にいたいけど、時間がない。俺もう行くけど、気を落とさないでくれよ。幸乃ちゃんが泣くと、こっちまで悲しくなる」

ライナーを見上げて、私はうん、と笑ってみせた。ライナーも笑い返してくれた。

ライナーが去ったあと、私は妙に安心していた。私にはまだ、仲間がいたのだ。

第六十六話

＊

＊

＊

俺は夢の中で宮村小夜子といつものように遭遇した。とりあえず色々話した。夢が変わるといどんな人物が出てくる。今まで殺した連中。最初に殺した八人グループとそのリーダー。

殺したはずなのに、リーダーはしょっちゅう夢に登場する。俺がイジメから開放してやって、その後しばらく友人として時を過ごした奴のはずだった。話を聞いてやり、他の者との間に立って仲を取り繕ってやつたりした。やがてそいつにも他に友人ができて、俺はそれを見計らってそいつから離れ、霧林と光明と仲良くなった。しばらくするとソイツがクズ野郎となって戻ってきた。

最悪だ。久しぶりに会ったとき、あいつはこう言ったのだ。「久しぶりだな石橋。相変わらず人助けばっかしてんのか。正義馬鹿だよ」と。茶髪に染め、傲慢そのものの口調。数週間前まで「いじめられてる奴かばって、お前もいじめられるって思わないのか？」みたいなことを言って、プライドも捨てたのか泣いていたのに、一体コイツに何があったのだ？

俺は何も言わなかった。その場に光明もいたので、光明は楽しそうに「その正義馬鹿が無くなったらこいつには何にも残らないじゃん」と言った。

全くもってその通りだった。そのクズ野郎は本当に何がしたかったのだろう。光明を睨みつけた。「物好きな奴もいるもんだな。こいつ、化け物だぜ」と吐き捨てた。その化け物に助けられたというのに。

俺は今でもたまに思うのだ。何度でもぶっ殺してやる。俺がお前を暗闇から引きずり出してやったんだろが。俺の親友をいじめて殺しやがって。いじめるなら俺をいじめて、俺を殺せばよかったのにな。本心を言いやがれクズが。

という具合に。俺が気に食わないなら俺を殺せばよかったのだ。いじめられても、俺がやる行動といたら一つしかない。自分に関わる者を遠ざけ、巻き込まないようにする。後は従順にいじめられる。以上。アイツだって分かっていたはずだ。

なのになぜだ。いつ思い出してもむかつく奴だ。なので名前は地の底に葬ってやった。

と、俺は眠りから覚めて目を瞬いた。そういえばいま、どこかの山の中で野宿をしている。結界を張って寒さをしのいでいる。まだ夜中らしい。木々の葉が空をさえぎって星は見えない。

すぐ近くでクリスティーナが使い魔のカラス、クロエと呼ん

るカラスを抱いて眠っている。俺は上体を起こして足元辺りにいるはずの奴に目をやろうとした。

いない。ライナー・クラウゼヴィッツがいない。俺は目を上げて、土屋がいるだろう場所を見た。いる。土屋弘はあまり寝なくていい体質らしく、今も起きている。呪符を補給しているらしい。

俺はもう一眠りしようと思身を横たえた。すると土屋が立ち上がる音がして、上から俺を見下ろした。一体なんの用か。

「なんだよ、寝ろ」

「お前、本当に赤月市に行かなくていいのか」

土屋が唐突に言った。俺はむっくり起き上がると、クリスティーナを起こさないように結界から出て、離れたことまで歩いた。土屋はついてくる。俺は足を止めると振り返り、土屋を見た。土屋も俺を見た。嫌でもこいつの長身に見下ろされる。

「ライナーはどこに行った？」

とりあえず訊いた。見当はついていないが。

「あいつは食料買いに行った」

嘘だろう。あの八人グループのリーダーと同じ目をしている。恩を仇で返そうとたくらむ目だ。裏切り者はたいてい、アイツと同じ目をする。いや、どうしてもそう見えてしまうのだ。殺してやりたいが押さえることにした。

「あっそう」

裏切りたいなら裏切ればいい。赤月市とやらで勝負を挑みたいのなら受けて立つ。この目の持ち主を全員殺すまで、俺は気がすまないだろう。つまり土屋やライナーのことだ。どちらにせよ、俺は明日、赤月市に行く予定だ。なぜなら、これ見よがしに高橋幸乃を殺してやりたいからだ。

しかし、土屋のいうことは訊いておく。

「高橋と石橋の間にある絆を利用して何かするかもしれない」だの「自然魔術士は危ない」だのありもしないことを言い並べる。俺は上の空で聞き流す。切羽詰ってもっと気の利く理由が思いつかなかったのだろう。余裕があれば、誘導作戦でもしただろう。これは誘導でもなんでもない。

俺は適当なときに「じゃあ行くよ」といつておいた。

「行けばいいんだろ、行けば」

今度こそ殺してやる。と目で告げると、俺は一人、歩き出した。土屋は拍子抜けしたような顔をしていることだろう。のん気なのも今のうちだ。最後の夜でも楽しんでいればいい。万が一、負けた場合は、それはそれでしょうがない。クリスティーナはいざとなるとどっちの味方をするだろうか。もし、いまのグループの全員に裏切られる羽目になったら。みんなあの八人グループのリーダーの目をしたら。

俺はおかしくなるんじゃないだろうか。本当に狂うんじゃないだろうか。いや、いまでも気違いと自覚している。しかし、そんなレベルではなく、自分が崩壊するのでは。と。

結局俺は最後までアイツに苛まれるのだろう。死んでもなお影響を与えるなんて、すごい奴だ。亡霊とはこのようなことを言うのではないのだろうか。

あいつはあいつらしい情けない最後だった。他の七人をあつという間に始末した後、俺はアイツを殺しにかかるうと呪符を構えた。アイツは他の七人が殺される様子を珍しい実験でも見るように、突っ立って眺めていた。そして、俺を見た。最後の最後でアイツはあの目をしなかった。ただ、自分の保護者でも見るような目を俺に向

けた。アイツは前のように俺が分かってくれると思ったのだろう。
必死な笑顔を顔に貼り付け、ほざいた。

分かってくれよ、北条が死んだのは事故だった、お前、お前なら
分かってくれると思ったんだ、俺の分まで背負ってくれるって、思
ったんだ、実際、お前だって悪いんだぜ、北条と仲良くなってから、
俺のことなんて、ちっとも気に留めてくれなくなったじゃねえか、
話しかけてくれなくなったじゃねえか、俺が悪いとしても無視し
て、北条たちばかりで、だからお前も悪いんだ、俺はただお前が

で、殺した。全くもって情けない。爆笑もんだ。あいつが俺を理
解者だと思っていたのか、友達だと思っていたのか、ただ都合のい
いサンドバックと思っていたのか、または俺をほかの何かだと思っ
ていたのか、今となっては分からない。分かりたくもないと思った。
反吐が出る。

どちらにせよその後に残ったのは、ただの死体。一瞬前の笑顔が
顔に張り付いたまま、まさに無心となって空を見ていた。

土屋やライナーだって、そのように死ねばいいのだ。

空が見えることまで来ると、星空を仰ぐ。都会よりずっと、な
んというか見える。そうだ、きらきらしている。このような感覚を
なんというのか、俺は忘れた。

第六十七話：決戦

*

*

*

私は朝六時に起床し、かろうじて残っていたらしい数人の赤月市民に赤月市から避難するように言った。その人たちは私のクラスメートとかで、一緒に戦いたいと言って来たけど、断った。気持ちはとても嬉しかったけど、そのせいで皆が死んでしまったら嫌だ。

その生徒たちを赤月市を出る山道まで見送ったあと、私は一人になった。でも大丈夫。クリフォードたちがいなくても、私には土屋とライナーがいるではないか。とても不安だけれど、私はその気持ちを押し込め、誰もいなくなってしまった赤月市を歩いてみることにした。

まるでゴーストタウンにでもなってしまったかのようにだった。人口は少ないけれど、いつも優しい空気で包まれていた赤月市は、雪で底冷えでもしたかのように冷たい沈黙を守っていた。

私がなんとなく赤月神社にいつてみると、なんと愛ちゃんが残っていた。愛ちゃんも避難するように昨日のうちに伝えたのに。

「愛ちゃん！だ、だめだよ逃げなくちゃ！」

私が思わず声を上げると、愛ちゃんは静めるように笑んだ。

「私はこの神社を守らなくてはなりません。巫女の結界を張りましたが、万が一のために残ることにしました」

「で、でも……」

心配する私をよそに、愛ちゃんは優しく笑っていた。

「大丈夫です。私は巫女です。心配しないでください」

かたくなに言い張るので、私は渋谷神社から出て、くれぐれも気をつけるように言った。神社に、いや、愛ちゃんに危害が及ばなければいいのだけれど。

私は自分の家に戻って少し睡眠をとり、瞑想をした。前はできなかったけれど、今は無念無想でいることが気持ちよくてここ一ヶ月、毎日続けている。

それが終わると私は落ち着きなく部屋を行ったり来たりして、土屋たちはまだか考えた。

お昼頃、私はスパゲッティを作って食べ、バナナを二本食べた。バナナはすぐにエネルギーになるのだと、母がよく言っていたのだ。食べ終わる頃、私の家のチャイムが鳴った。

誰だ？市民は愛ちゃん以外皆出たはずだ。まさか土屋たちではないだろう。

おそろおそろ玄関に向かい、ドアを開いて隙間から顔を出した。

とたん、カメラのフラッシュが目につき刺さり、ぎょつとした。玄関の前には大量のマスコミが押しかけていたのだ。

シャッターを切る音やテレビカメラが一つ残らず私に向けられる。未成年の顔を報道してはいけないらしい法律は、無視されたようだ。

ドアがあつという間にこじ開けられ、マスコミにマイクを突きつけられる。

「タイムリミットまであと十数時間ですが、今の心境は「責任はどう取るのですか」「能力者収容ではあなたも収容されるということになりますか」「今後のことをお聞かせください」「あなたは殺人鬼とどういう」赤月市民は「どう顔向けを」「邪殺屋という殺し屋は「うる

さい！」

私は体から放電し、カメラを全て壊した。マスコミがしらける中、わたしは怒鳴り散らした。

「何してるの！早くここから出て！」

マスコミは引かない。ノートとペンを取り出し、メモの用意をする。と一気にまくし立てる。

「高橋幸乃さんあなたはこれからどうするおつもりですか」

「待つよ」

私はむきになった。

「来るもん！来るといったら来るよ！さあ早く行って！みんな逃げてよね」

私は命知らずのマスコミに腹を立てながら、全員赤月市の外へ追いつめた。

走って家に帰り、私は家にこもった。

三時ごろになると、晴れていた空が、曇天へと変化した。赤月市は薄暗くなっていき、私の心も時間がたつにつれて、不安になってきた。

テレビをつけて、チャンネルを回してみる。

ほとんどニュースだ。これからの成り行きを皆固唾をのんで、見守っている。私は優介に連絡を取りたかったけど、無理だった。優介もきてくれればいいのに。歴史を変えるかもしれないような日に、世界の能力者のトップレベルがこないなんて、変だ。

チャンネルを回していると、田舎町の風景を写したチャンネルがやっていた。旅番組か？なんだかのん気なものである。でも、あのニュースを見ているよりはましだと、私はそのチャンネルにしておいた。

実況中継だろう。緑豊かな山に囲まれた町である。カメラマンは田んぼにはさまれた道を歩いている。雪の積もった田園風景が広がっている。雲行きが怪しいが、晴れていればさぞや美しいだろう。

そして、カメラの端に映っている黒髪の若い女性アナウンサーは

肩越しに映る住宅街の方を手のひらで示した。

『リミットまで9時間をきりました。この住宅街のどこかに、救世主且つ破壊者と呼ばれる高橋幸乃さんがいるというわけですが、今後一体どうなるのでしょうか。高橋幸乃さんは14才の大量殺人鬼を捕まえることができるのでしょうか、それとも失敗し、特殊能力者の未来を破壊するのでしょうか、今後のことが気になります』

私はうめき声を上げていた。赤月市だ。皆追い出したと思ったのに、まだ残っていたらしい。いい加減にしてほしい。

と、アナウンサーがひときわ驚いた声を上げた。私は今すぐ追いつくぞと玄関に向かっていたので、その声に思わず振り返る。

アナウンサーの50メートルほど後ろに、誰かが現れたのだ。何の前触れもなしに、沸いてでもきたかのように。

目を細めなくてもそいつが誰かなんて分かった。どんな馬鹿でも分かる。なんせそいつは私が死ぬほど会いたかった、殺人鬼だったのだから。

クリスティーナたちは見当たらないが、ともかくそいつ、石橋がアナウンサーに向かって呪符をつまらなげな表情で投げつけた。アナウンサーたちが悲鳴をあげ、画面が激しくぶれた。

私は外に飛び出していた。

第六十八話：決戦：2

私はアナウンサーたちがいた、私たちが通学路として使っていたあの道に走っていた。

あそこの道でわたしはたくさん、友達と笑いあったり、ふざけあったりしていた。もう手遅れかもしれないけれど、そんな思い出の道で、人を殺させるわけにはいかなかった。

住宅地を抜けてすぐのところ、私はその道に辿り着いて、100メートルほど向こうに見える石橋健の背中に向かって叫んだ。あいつの名前を。

石橋の横にはクリスティーナがたたずんでおろおろし、正面には土屋とライナーがいて、なにやら激しく言い争っていた。

私の声に反応して、皆が一斉に振り返った。私は四人の5メートルほど手前で急ブレーキをかけた。雪が積もっていたので、その拍子に私の靴下に雪が散った。

アナウンサーとカメラマンは怯えきった様子で、土屋とライナーの後ろの地面に腰を抜かしていた。どうやら土屋たちは、石橋が殺そうとするのを阻止し、それで言い争いとなったらしい。

石橋は私を見たたん、なんだか晴れ晴れとした笑顔を見せて、
こういった。

「おやおや、これはこれは自然魔術士の高橋幸乃さんじゃあない
ですか、死にぞこないが俺に何の用力ナ？ いやいやそれは分かるけ
ど」

私はシカトした。ライナーと土屋と目が合う。二人の怒っていた
目がかすかに穏やかになり、私は少しだけ安心した。良かった。間
に合わせてくれた。クリスティーナは石橋の袖を軽く掴み、警戒し
たようにつぶやく。

「田中優介たちが来るかもしれないわ。早いとこけりをつけたほ
うがいいんじゃない？」

「まーまー、そう焦んなさんなってダイジョブダイジョブ。あつ
ちはなんか一人だし、すぐ終わる」

な、というようにクリスティーナを見やり、クリスティーナは不
安を隠せないままこくんとうなづく。私は少しだけ、惨めになった。
クリスティーナには、石橋しかいないのだ。小夜子と同じように。
ライナーたちはこっちの仲間で、クリスティーナの本当の仲間では
ない。

土屋が私を見て、口パクでなにか伝えてきた。フィオナたちのことと聞いているらしい。私はばれない程度に肩をすくめてみせた。あの三人は結局戻ってこなかった。

石橋はその仕草に気がついたのか、少々眉をひそめた。それから、軽く笑って唐突に後ろの二人、ライナーと土屋を振り返って呪符を飛ばした。呪符は危うく二人に当たりそうになったが、あらかじめ警戒はしていたらしく、すばやくよけた。土屋がカメラマンたちに呪符を飛ばすと一陣の風とともにカメラマンたちが消える。どこか安全なところに転送したのだろう、とにかくこれで心置きなく戦えるわけだ。二人はさらに飛んできた呪符を何とかよけると、私の背後辺りに降り立った。石橋は相変わらず笑っている。

クリスティーナは愕然としてライナーたちを見つめていた。私はさらに安堵がこみ上げ、二人を振り返った。ライナーが私に笑いかけて何か言おうとしたが、その前にすさまじい殺気を感じて慌てて振り返った。と同時に石橋の前方の空間から大量の呪符が噴き出していた。私はあまりの唐突ぶりに悲鳴をあげ、ライナーの死霊の結界で危うく守られた。

すぐさま自分の結界の中にいた土屋がジャンプし、空中で呪符を石橋に投げつける。石橋も投げ、呪符同士が当たって火花が散った。ちょうど土屋と石橋の間に、突然黒い雷が音もなく落ちた。土屋が地面に降り立って鋭くクリスティーナを見る。クリスティーナがやったらしい。

私とライナーがクリスティーナを見たとき、彼女は蒼白だった。石橋はクリスティーナを再び見やる。

「なにすんだ、危ないじゃないか」

と大して気にしていなさそうに言うと、クリスティーナが震える唇で、弱々しくつぶやいた。

「どうして……？ ヒロシ、ライナー、どうして裏切るなんて……」

初めて訊いた、悲しげで怯えた声だった。いつもの傲慢さの欠片もない。いつの間にか持っていた黒い金属の長い杖を握り締めながら、目を見開いている。

私はおもわず、クリスティーナに呼びかけた。

「クリスティーナ、今なら間に合うよ！ こちら側について！ そんな奴じゃなくても、クリスティーナと友達になってくれる子なんていっぱいいるから！」

逆効果だった。

ピクリと指を動かし、目じりを上げた。

「何を言っているのかしら？友達なんて！」

持っていた杖が揺らいで、刃の黒い小刀に変わる。

「殺してあげるわ！アグリッパの血を継ぐものとして全力で！」

と怒鳴り、すつと腰を落とした。それが合図となったかのように、私たちと石橋はお互いに攻撃を放っていた。

第六十九話：決戦：3

私たちの放った炎、呪符、死霊はまっすぐと石橋たちに向かった。クリスティーナは猛然とぬかるんだ地面に小刀で何かを書きなぐっている。なので身を守るすべがない。

しかし当然のことにように石橋がクリスティーナの前に出て、護符を投げた。

小さく爆発音がした。護符が耐えられなかったのか、それとも私たちの攻撃が霧散したのかは分からない。足元が黒い霧で覆われ、白かった地面を隠す。私の前に立ちはだかるように、ライナーの死霊魔術の死体が立ち上がる。ライナーが周りの霊から力を借りているのだとしたら、この死体たちは赤月市民ということになる。だれか見たい気持ちが起こったけど、そんな余裕はなかった。ライナーと土屋は、黒い霧などお構いなしに、石橋がいた辺り、いま煙で蔓延しているあたりに突っ込んで行ったのだ。私も加わらないわけには行かない。

死体たちの間から、クリスティーナの姿が見えた。いまだに小刀で何かを書いている。何をしているのか分からないけれど、危険を感じて私はそれをやめさせようと、クリスティーナのほうに走った。重力を操って死人の肩にジャンプし、もう一度高く飛び上がったクリスティーナに足から突っ込もうとする。

クリスティーナの使い魔、カラスがどこからともなく飛んできて、私の顔面に突っ込んできた。目を狙っていた。私はとっさに腕で顔をかばい、カラスのくちばしが私の腕を突いて、そこから血が流れるのが分かった。

着地をしそこねて、雪と黒い霧の上に転がり落ちる。狙ったようなタイミングで頭上に石橋が現れ、私の上に落下して私の胸を蹴ろうとする。もし蹴られていたら、あばらが折れて、それが心臓につきささっていただろう。しかし土屋がよこから石橋に掴みかかり、私の頭上を横切ってどこかに消える。ライナーが私の横に走ってきて、私を助け起こしてくれた。

ライナーの腕や頬は早くも血で濡れていた。そんなときでも、私の心配ばかりをしていた。

「大丈夫か幸乃ちゃん」

「う、うんライナーこそ……」

私はあたりを見渡す。

目茶目茶だった。かき乱された地面。土と解けた雪、黒い霧でぐしゃぐしゃだ。もう道も畑もどこか分からない。

そのときだった。クリスティーナが立ち上がった気配がした。そして、甲高くこう叫ぶ。

「諸惑星の7精霊の施術！」

それを聞いたとたん、ライナーがすつと蒼ざめた。クリスティーナを振り返る。クリスティーナの足元には円形の複雑な魔法陣が描かれており、魔法陣の線が今、薄紫色に光っている。クリスティーナはその中心に立って、耳障りな声で私には発音できない呪文を唱えだす。辺りには、不思議なお香の香りが漂っていた。

私は慌ててライナーを見ると、ライナーの横には土屋がいた。土屋は息切れしていて、額から血を流し、苦しげに腹を押さえている。私があたりを見回すと、石橋の姿はどこにもない。右方で死人がごった返し、爆発音がするだけだ。どうやら死体にてこづっているらしい。

「やばいのか」

土屋はウィッチの魔術に詳しくないようで、眉をひそめた。ライナーはうなずく。

「クリスティーナは地獄の魔将を呼び出そうとしている。そうな

ればここの帯は吹き飛ぶ。しかもそいつあ四大精霊か、封印の術式か、魔将の二倍の魔力がないと倒せない」

「四大精霊、フローラ！あ、いないんだった！」

私は悪態をついた。

「ならその前に倒すまでだ」

土屋がきつぱりといい、ライナーとともにクリスティーナの方へ向かって走る。

が。

クリスティーナの足元の魔法陣がひときわ明るく光った。ライナーたちは結界に阻まれたように弾き飛ばされ、私の横に着地する。

魔法陣から、地獄の風が吹き上がったのを感じた。

私たちは硬直した。魔法陣から黒い光の束が一筋、空に突き上がり、灰色だった雲が一瞬で黒雲に変わる。さらに視界が悪い。

黒雲から雷鳴が響いた。それとともに、巨大な翼の羽ばたく音。

まず雲から、私の身長くらいありそうなかぎ爪が姿を現した。続いて、黒光りするウロコで覆われた翼のある巨体。どちらかというと、トカゲに翼の生えたような姿に似ていて、尻尾からは何本もの赤いとげが生えている。黄色い目は爬虫類、そして、ひときわ大きく吼えたときに見えた、赤い牙。

ドラゴンだった。メフィストフェレス、地獄の魔将。

私たちは恐怖のあまりすくみ上がった。ドラゴンに睨まれた瞬間、もうおしまいだと思った。だれがあんなのに勝てるって？

しかし私たちには選択肢はない。やるしかないのだ。

クリスティーナはメフィストフェレスをいとおしげに見上げている。石橋は相変わらず死体にてこづっていた。

「くっそ……ともかくやるぞ！」

土屋は半ば自棄になりながらわたしたちに怒鳴る。

土屋とライナーがほぼ同時に呪符と死霊を大量にメフィストフェレスに向かって放つ。私もあわててドラゴンに真っ赤な熱戦を放って加勢した。

それはドラゴンのわき腹辺りにあたり、ドラゴンは怒りの雄叫びを上げた。私たちに対抗して上空から黒い炎を吐く。私たちの攻撃と当たるとすさまじい音をたてて爆発し、私たちは爆風に吹っ飛んで泥の上にベシヤツと落ち、ドラゴンもよろめいた。

互角。二倍なんて、無理だ。クリスティーナは思った以上に悪魔を操ることができるのだ。

ドラゴンがあぐり口を開いた。また炎を吐く気かと思ったけど、ドラゴンは突如急降下してきて、私たちに迫ってきた。私は悲鳴を上げて、死に物狂いで逃げた。土屋たちも心配だけど、振り返る勇氣すらない。

恐怖で胃が縮む。逃げ出してしまいたい。実際逃げているが、この場から去って、二度と戻ってきたくないとさえ思った。しかしそういうわけにはいかない。

ドラゴンは地面すれすれで飛び、私たちを蛇のように追いかけた。ドラゴンにとって私はアリのようなものだ。音速以上のスピードで逃げれる土屋やライナーなら逃げ切れるだろう。しかしその力を獲

得していない私には無理だ。ましてや混乱の中でできるわけもない。

しかも、ドラゴンは足の遅い私を追っていた。

と、私は最悪のタイミングで畑の土に足を取られ、無様に転んだ。あわてて立ち上がるうとしたけど、足が震えてうまく動かない。

後ろからドラゴンが吼える。

もうだめ……！

私は固く、目を閉じた。

第七十話：決戦…4

私の頬に、水滴のようなものが散った。

私は痛みを待ったけど、一向に襲ってくる気配がない。

何事だ？どうして襲われないんだろう……？ドラゴンの怒り狂った声はするのに……。

そつと目を開くと、ドラゴンが上空へのたうちながら戻っていくところだった。

私は啞然としたが、何がともあれラッキーだ。

私は足を踏ん張って立ち上がろうと自分の足の方を見、頭が真っ白になった。

土屋とライナーが血まみれになって倒れていた。血が、かろうじて残っていた雪を深紅に染めていく。

私は悲鳴を上げそうなのをこらえ、二人の方に這っていき、震える手を伸ばした。

私は不思議にも、あのときと同じ感覚に陥っていた。加奈を石橋に殺されたとき。世の中のすべての光が消えたような、それなのに、どんな感情も受け付けられないような感覚。

二人に触れ、そつと揺り動かして名前を呼ぶ。限界だった。

私は気がついたら、二人の名前を絶叫していた。なんの意味もないのに、否定の言葉を叫ぶ。

「こりゃ幸運だ」

嘲るような声に、私はがくがく震えながら顔を上げた。石橋がところどころから血を流しながら、私の右方に立っていた。勿論、笑っていた。石橋の後ろあたり、クリスティーナはこれ以上ないくらいに蒼白になっていた。まさかこんなことになるとは思っていなかった、という表情をし、私と同様、震えていた。

「お前のへまのせいで、二人は逝っちまったみたいだ」

石橋はお笑い番組でも見ているかのように声を立てて笑った。

「死んでなんか、！」

私は泣き叫んだ。

ドラゴンが頭上で吼えた。反射的に見上げると、ドラゴンがのた打ち回っていた。そんなドラゴンを取り囲むように、火トカゲ、水の美女、緑と茶がかった風が攻撃している。

……あれは……。

「四大精霊か」

石橋はつぶやいた。ドラゴンは苦悶の咆哮を上げ、とうとう逃れるように黒雲の中に消えた。その瞬間に黒かった雲は、もとの灰色に戻る。

私のはつと振り返ると、そこにはいなくなったはずの三人がいた。フィオナ、クリフォード、フローラだ！

なんで？しかし今はそれが問題ではない。

「み、皆！」

私は狂喜した。嫌われたと思っていた。しかしフィオナは笑ってくれた。他のときなら、なんて都合のいい連中だと思っただろう。しかし、ともかく来てくれたのだ！

フィオナの頬が、涙で濡れていた。私は頭がうまく動かなくて、どうしてフィオナが泣いているのか分からなかった。真っ先に私に駆け寄った。まず私をちよつと抱き寄せ、すぐに倒れている二人の上にかがみこんだ。

「土屋さん、ライナー！」と叫び、必死に二人の脈を取る。フィオナにとって、二人は特別だったのだ。ライナーはフィオナにラインハルトについて警告し、守ろうとした。そしていつだったか言っていた。フィオナは土屋のひたむきな視線や、力強い意思が好きだった。裏切った後、それでも捨て切れなかった思い。

「内臓が破裂しているんだろう。まともにメフィストフェレスとぶつかり合い、おまけに最大の靈力でそのヘタレ女を守ったからな。かなりの負担だ。死、確定だ」

石橋が冷静に言ったが、フィオナは怒鳴り返した。

「死んでなんかいません！」

これ以上にないくらいの憎悪の目で、石橋を睨みつける。クリフ・オードとフローラが私たちの前に立った。そして、私に前をむいたまま声をかける。

「ユキノ……ごめんな。俺たちのせいだ。俺たちが持ち場を離れたから……」

「急いできたら、こんなことに。もっと早く来ていれば……！」

フローラが唇を噛む気配がした。私は精一杯首を横に振った。

「でも来てくれたもの……いいの。本当に、いいの……」

「おいおい、メインはこっちだろ！」

石橋は相変わらず元気そうに言った。きっとその顔には嘲笑が浮かんでいるのだろう。

「わざわざエクソシスト三名様が、裏切り者の愉快的追悼式にご出席なさるとは、手厚くお迎えしなければな！」

「黙れ！お前……お前、よくそんなことがいえるな！お前にとつても一時的な仲間だったというのに！殺しかけても平然としやがって！」

「殺したのはメフィストフェレスだ。俺じゃないしクリスティーナでもない」

クリフォードは石橋に人情が残っているなど最初から期待もしていなかったようだ、改めてその残虐性を知り、ぞっとしたようだ。石橋はさらに嫌味を重ねたが、もうだれも聞いていなかった。

攻撃は唐突だった。まずフローラが、四つの魔法陣を召喚し、四大精霊を全て、一気に石橋とその後ろのクリスティーナに向かって放った。続いてクリフォードが杖を強く握り締め、頭上に雲を渦巻かせてハリケーンと雷を落とす。私のほうに風は来ないけど、音と気配で分かった。二人は最大限の霊力で、石橋たちを袋叩きにしよう、結界に閉じ込めていた。

フィオナが立ち上がると、私に「二人の傷の手当てを！間に合うかもしれません！」と叫び、加勢した。

私は涙を拭くと、そっと二人の首筋に手を当てた。冷たい。しかしかすかに、生命の鼓動を感じる。早くしないと手遅れになる。

私は二人の体の治癒力を活性化させようとした。しかし二人が余りに弱っていて、私の霊力じゃきかなかった。活性化するどころか、弱まっている。

私は混乱しかけていた。わたしの力じゃ二人を治すのは不可能だ。エクソシストたちはこれまでにないくらいの強い霊力を体からみなぎらせて、殺人鬼をつぶそうとしている。それに比べて私は一体なんなのだろう？

二人が死に掛けているのは私のせいだ。石橋の言うとおり、私はヘタレ。なにもできやしない。私は血まみれの二人に手を当てたまま、自分の無力さを知ってうなだれた。

あきらめるのはまだ早い。

不意に頭の隅で声がした。紛れもない、私の声。でも決して私ではない。絆の私。石橋の人格を持った、強い私の声。

私は我に返った気分だった。私は今まで、絆の私を抑制しようと精一杯だった。絆の私とは絶対分かり合えない、無理もなし、絆の私は悪を殺すことに飢えている。絆の私とはいつも意見が違い、ばらばらだった。でも、今は違った。私ともう一人の私は、いま同じ意思だった。二人を救いたいという意味でつながっていた。

そのとたん、私の中にものすごい力が沸き起こってくるのを感じた。もう一人の私の分の霊力が目覚め、私の中に流れ込んでくる。だるかった体がふわりと軽くなり、強い意思が私の心を強くする。

私はもう一度、二人を見た。ずっと手を軽くこすり合わせ、二人の腹辺りに手を当てる。

もうやることは分かっていた。どこをどう治せばいいのか、その後何をすればいいのか。

内臓修復。

私と、絆の私が心の中で同時につぶやいた。

私の胸辺りが熱くなり、その熱が腕を伝って二人に流れ込んでいく。二人の死に掛けていた細胞が活性化されていくのが不思議にも分かった。私は二人の腹から胸の方にゆっくり手を滑らせ、全神経を集中させて二人を救おうとした。大量の霊力の消費に、私は目を閉じた。

二人の内臓が徐々に修復されていくのを感じながら、私は瞼の裏に不思議な映像を見た。二人の記憶だ。

ライナーの幼少の記憶を見た。ヘルミーネさんだと思われる人と遊んでいた。とても綺麗な人だ、その人がさび付いたものに手をかざせば、たちまち本来の輝きを取り戻していく。そしてその後、ヘルミーネさんの血に染まった部屋と体。エクソシスト三人の顔。ライナーはどんな思いでかつての仲間を見ていたのだろうか。

土屋の記憶には、かわいい女の子が出てきた。土屋と同じこげ茶色のロングヘアの少女。土屋と同じ強いまなざしを持っていて、笑うととてもかわいい。人目で土屋の妹だと分かった。土屋飛鳥。土屋のことが大好きで、どんなに厳しい修行でも土屋の隣で頑張り、修行が終われば二人で家に戻る。とても、とても微笑ましい光景だった。仲のいい兄妹。次に見た光景では、飛鳥ちゃんもういなかった。目の前で、死んでいた。土屋はそれをじっと見ていた。

私の目頭が熱くなったのを感じた。ライナーと土屋の視点から見ているから二人自身を見たわけではない。しかし、どうしようもなく辛い。石橋はそういう光景を何度も何度も作ってきたのだ。石橋は何も感じなかったのだろうか？

感じなかっただろう。石橋にそんな感覚、残ってなどいやしない。大切なものを失うことに慣れすぎて、もう他人の気持ちなど分からないのだ。

私は思う。なんて……

私の体に激痛が走った。

第七十一話：決戦：5

私はあまりの痛みに悲鳴をあげ、二人から手を離れた。何かと目を開けると、私はいつの間にか空中に舞っていた。落下する前に残り少ない霊力を使って衝撃を減らし、慌てて振り返る。

フローラとクリフォードが私の横に倒れていた。失神しているようだ。ぱつとあたりを見回してフィオナの姿を探す。フィオナは数メートル先の地面に倒れていた。私が手を離れた二人を守ろうとするかのごとく、必死に起き上がろうとしている。

クリスティーナは瀕死の使い魔を抱えて、傷だらけになってその近くにへたり込んでいた。クリスティーナはうなだれていて、表情は伺えない。

そんなフィオナの前方に、石橋が突っ立っていた。さっきとは違ってかわって、全身血まみれの状態だ。もう嘲笑も浮かんでいない。確かに笑ってはいた。しかし自分でもなぜ笑っているのか分からない、そんな感じの笑いだった。三人は石橋をかなり追い詰めていたのだ。そりゃそうだ。最大限の霊力を振り絞った三人のエクソシストに襲われれば、石橋とてただではすまない。

石橋は呪符を空中からつかみ出した。私はそれを見て、「やめて！」と叫んだ。フィオナの前に立ち、石橋に訴えるように言う。

「お願いやめて！」

「幸乃さん」

フィオナが力強い声で私を制止した。ゆっくり立ち上がるとぼろぼろの体を懸命に張って、石橋を見据える。そんなフィオナはきりつとしていて美しかった。

「私が相手です。幸乃さん、その隙に二人を」

「でもフィオナ……っ！」

「急いでください！」

その声に思わず口をつぐむ。

「お願いですから、二人を助けてください……」

こらえたような声だった。そして、石橋に向かって凜とした声を飛ばす。

「よくも皆を……！あなただけは、一生許しませんわ！」

「ああ。その一生はここで終わるかもしれないな」

石橋は軽く後頭部をかき、フィオナニに向かって呪符を飛ばした。

私はそれがどうなったかは見なかった。フィオナに言われた通り、二人に再び霊力を流し込んでいたのだ。二人の呼吸はさつきより穏やかだが弱々しいことに変わりはない。爆発音にも振り返らずもう一度細胞を活性化させていく。

しかし霊力がもう足りなかった。二人を治せるほどの力は私の中には残っていない。再び訪れる混乱。このまま放っておけば、近いうちに必ず二人は死ぬだろう。

私は混乱した中で見た。私の顔面に向かって、真っ黒い呪符が向かってくるのを。空気の摩擦音を立てながら、私を殺そうと矢のよう近づいてくる。

フィオナが「幸乃さん！」と絶叫する。私は動けず、目を見開いた。

バチツ、という音がした。呪符が当たる寸前、呪符が薄紫色の花を散らしてはじけとんだ。悲しげで不吉な香りがふわりとあたりを満たしていた。

私の横に、杖で体を支えたクリスティーナがいた。呪符を止めたのが精一杯なのか、私の横にどっと膝をつく。頭から血を流しながら、震える冷たい手を私の手に重ねる。私の中に、クリスティーナの冷たい霊力が流れ込んできた。冷たいが、二人を救うであろう霊力。

「勘違い……しないで……」

クリスティーナは血で紅色になった涙を頬に伝わせながら、切れ切れに言った。

「あたしはこの二人に……生きていてほしいだけ……」

「クリスティーナ……」

私はクリスティーナを見つめた。再び治癒能力が力を増していくのを感じながら、私はクリスティーナの声に耳を傾ける。クリスティーナの涙が、私の手に何粒も何粒も落ちていく。

「あたしは、間違っていたの……」

「え？」

「あたし……嬉しかったの。世間から冷たく扱われて、少しでも認められなくて、犯罪者を匿ったりして。でも、誰もあたしを認めてくれなかった。健が初めてだったの、初めてあたしを認めてくれたの。でも、違った。あたしが周りを認めなかっただけで、本当はあたし……」

クリスティーナはもう言葉にならないようだった。私は二人からそつと手を離れた。治せるところは治した。もう完了だ。

そしてその空いた手で、クリスティーナをゆっくり抱きしめた。クリスティーナの霊力が、なぜか私の心も癒していた。私はクリスティーナの使い魔に手をかざして、驚くほどすばやく傷を治していった。やがて使い魔は目を覚まし、クリスティーナの頬に頭をこすり付ける。

私は泣き顔のクリスティーナに、笑いかけた。

「大丈夫だよ。クリスティーナは認められていなくなんかない。私はクリスティーナを見捨てないよ。同じ能力者だし、いまから友達じゃない」

クリスティーナはそんな私に、かすかに笑い返して、何かつぶやいた。ありがとう、だと思う。

「クリスティーナ、この二人を病院に運んで。まだ完全な状態じゃないから」

私が立ち上がると、クリスティーナは驚いたように目を見開く。

「あなたは……？」

「あいつを止める」

私は石橋を振り返った。とうとうフィオナを倒し、フィオナはフロアの近くに倒れこんでいる。ちょうど、私を振り返った。クリスティーナはびくりと肩を上げ、恐怖を発する。石橋は今度こそ、笑みを捨てていた。フィオナとの戦いの最中に何があったのかは知らないが、石橋の瞳の奥で得体の知れない何かが蠢いていた。私はその瞳に反射的に恐怖を覚えたが、不思議にもかえって自身を落ち着かせた。

「クリスティーナ！行って！」

私が叫ぶとクリスティーナがはっと立ち上がり、二人に手を添えた。そして、一瞬迷ってエクソシストたちも振り返り、次の瞬間には皆、黒い霧となつて消えていた。ふわり、と黒い霧の余韻が私の目の前に漂う。私は相手の栗色の瞳を見つめた。

石橋はもう、嫌味を言わなかった。きっと仲間全員に裏切られ、舌も回らないのだろう。ただ、何かを口の中でつぶやいた。

みやむら

たしかにそうだった。聞こえたわけではないけれど、間違いはないだろう。私には、なぜ今石橋が小夜子を思い出したのか分からない。ただ一人、最後まで自分と戦ってくれた相手を思い出して過去に浸っている、わけではないだろう。

石橋は殺意に満ちていた。多分、本人はその名を口にしたことさえ覚えていないのではないだろうか。

石橋は完全に、狂気に支配されていた。もはや人間ではない。ただ目の前の相手に食らいついて殺す、別の生物。

あいつを止めなければ。沈めなければならない。

私の体に霊力がみなぎる。

私は石橋に向かって走り出していた。

第七十二話：決戦：6

私の体の周りを紅蓮の炎が激しく渦巻き始めた。それがやがて翼のように広がり、私はそれを解き放って相手に差し向けた。心地よい熱風が私の体を温める。この調子で霊力を使ったら、十分くらいしか持たないだろう。しかしそれは相手も同じだ。相手だってさっきまでエクソシスト三人と戦っていたのだ。霊力の消耗は著しいはずである。

さっきまでの私では絶対こんな強い炎は出せなかった。だからといって動きは前の私のままで。スピードでは相手にはとうていかなわない。相手は護符も使わず、すつと脇によけた。私の炎はそれを追いかけて、石橋に掠める。

石橋は不自然な行動を取っていた。よけた拍子に片足を引きずって地面に線を描いたのだ。偶然そうなったのかは知らないけれど、私は重力を操って空中に飛び上がった。

一気に10メートル上空に上がり、石橋を見下ろす。相手の姿を認めると、すぐに私は大気に片手を滑らせ、大量の風を呼び寄せる。大気の流れが渦巻き始め、やがて下の土と雪を舞い上がらせる。

ものすごい爆風が目の前で渦巻き、とうとう竜巻を形成した。風が土を舞い上がらせるので、竜巻の形をはっきりとさせた。私は満身の霊力を込めて竜巻を石橋のいた方向に押し出した。私はさらに

上空へ上り、石橋がどうなったか見ようとしたが見えない。自分のことは風から守ってはいるけれど、土や石などが大量に巻き上げられて視界を邪魔し、相手の姿が見えないのだ。

突如背中にも衝撃が来た。その拍子に結界が破れ、私の体があつという間に爆風に捕まった。私は自身の作った竜巻に恐ろしいスピードで吸い込まれていく。かろうじて自分のいたところを見ると、石橋が平然とした顔で、軽く手を振っていた。気味が悪いことに、その顔は笑っていないかった。

私は竜巻に巻き込まれ、ぐるぐる回った。体を丸め、必死に顔をかばう。風を制御しようとしたがなぜかできない。小石が私の皮膚を傷つけていくのが分かる。私は目をこじ開け、やっと竜巻が黒くなっていることに気がついた。呪符だ。石橋は竜巻に呪符をばら撒いて、自分の物にしたのだ。しかもその呪符は、かまいたちのように私の体を見るみる血に染めていく。

私は思い切って痛覚を半分に切った。痛みで戦いに集中できないという自体は避けたかった。そして、やっとの思いで炎を一筋放つ。炎は呪符に燃え移り、すぐに他の呪符にも引火して炎の竜巻へと化した。石橋の制御が利かなくなったところで、私は今度は水をほとばしらせて火を消し、竜巻を消滅させた。

服がこげただけ、気にしているほどヒマではない。私はかなり高いところに舞い上げられていたようで、思ったより上にいた。落下しながら畑のかき乱された土に目を凝らし、石橋を発見する。一体

なにをしているのだろう。足で地面に何かを書いている。

こんなときに何を、と腹を立て、かなり加速したとび蹴りを食らわそうとした。石橋がとび蹴りというより落ちてくる私に気がついて、その場からすばやく退く。私が足から地面に突っ込むと足が30センチ以上のめりこみ、こげた土が衝撃で跳ね上がる。私は土を操って、それを銃弾のように石橋に向けた。

予想外だったのだろう。石橋は何とか腕で顔をかばったものの、いくつか着弾した。私が見た限り、わき腹と肩に掠めた。血がほとばしったのを見た。

石橋が舌打った。傷を押さえて呪符を何枚か吸収させ、そのままその手を空中に滑らせる。呪符が十数枚出現して、私に放たれた。私は慌てて地面から足を引き抜き、ジャンプでよける。急によけたせいで、私はひっくり返った。起き上がろうとしたが近くの地面を爆破され、さらに吹っ飛んで地面に転がり落ちる。

そんな私にさらに呪符が投げられ、私はかろうじて熱の壁を作って呪符をやいた。相手の隙を作ろうと氷の槍を飛ばす。槍は呪符とぶつかって、音を立ててはじけとんだ。

私は畑の土の中に手を突っ込んで、必死に土の巨大な蛇を作った。土の蛇が畑の中で蠢き、下に沈んで石橋の背後に回ろうとしているのが分かる。

私は立ち上がると、石橋を見た。石橋は数メートル先で、まだ何かを書いている。私に気がつくとすぐに呪符を飛ばしてきた。私はよるけるようによけて、相手が土の蛇に気がつかないように、他の攻撃を飛ばした。私は炎を操るのが得意なので炎を、さらに電撃を。

石橋は電撃が苦手のような。よけても電撃の本流からいくつも枝のように電流が伸びてくる。石橋は呪符で防がざるを得なかった。どんなに傷ついても、相手の表情はほとんど変わることはない。

初めて変わったのは、今。驚きに目を見開いたのだ。私も最初、何が起ったのか分からなかった。石橋の背中から血液が吹き上がったのを見て土の蛇が攻撃し、それがまともに背中に当たったのだと悟る。

石橋はそのまま地面に勢い余って転がった。私の近くにうつぶせに倒れ、私は慌てて飛びのいて重力で押さえつける。

私は石橋の背中が土の蛇によってひどくえぐられているのを見て、目を背けなくなった。私が傷つけたと思うと、怖かったのだ。人をおんな風に傷つけたことなんて、一度もなかったから。それでも私は目を逸らしたりはしなかった。血液が、シャツにしみていくのを見て、私はさらに攻撃しようとしていた能力を消失させた。もう終わりだと思ったのだ。こんな傷で誰が動けるといふのだ？ 重力はかけたままにしておいて、私は石橋を上から見下ろした。

意識ははつきりしているようだ。自分がやられたことに驚きを隠せない横顔があり、その中の冷ややかな瞳だけが私を見上げる。

私は急に同情の念に襲われた。こんなやつに同情の余地はない、それでも。私は優介たちが来るまで、静かに石橋に語りかけることにした。

「石橋は可哀相な人だよ。皆に裏切られて、殺しの冤罪にされてでも、だからってそんなに人を殺すなんて、あんまりだよ……。なんにも罪のない人が、北条光明くんみたいに、突然死んじやう。残された家族がどう思うかな？ ねえ、思い出してみてよ。石橋は北条君が死んだとき、どんな思いをしたか」

少しでも、前のような人情を取り戻してもらいたくて、私は必死に思いを伝えた。

「皆もそんな気持ちになったんだよ？ 石橋が殺した人たち、その残された家族たちは……。石橋は憎しみに突っ走って、周りには理解できない行動を取ったよ。自分の問題に全く関係のない人たちを巻き込んだりした。ひどいと思う。私は、一生許さない。石橋は向き合わなくちゃいけなかったんだよ……」

私の頬に、涙が伝っていた。私はまた、泣いている。人のために

泣くのはこれで何回目だろう？石橋のせいで何回も泣いたこの一年間。辛いことが走馬灯のように駆け抜けた。加奈を失ったとき、小夜子、ライナー、土屋にまで裏切られたこと、フローラたちと喧嘩したときのこと。しかし……少なくとも今はもう、どうでも良かった。石橋は捕まえた。もう戦いは終わったのだ。

優介たちの霊力がせまってくるのが分かる。あと10分くらいで到着するに違いなかった。

「石橋は死刑になると思うよ。そうでもしないと、みんなの恨みは晴れない。分かってるよね？」

「……分からないな……」

石橋は不意に思慮深げな声を出した。私が、え？と思う間もなく、視界が暗転した。

第七十三話：決戦：7

私の視界がぐるりと回った気がし、次の瞬間私は背中から地面に叩きつけられた。

さらにわき腹を鋭い何かに打ち付けられ、私の体は宙に舞っていた。鋭い痛みを意識が薄れかけ、そしてまた、土の上に落ちる。うめいてそこを押さえ、私はなみだ目で石橋のいる方向を見た。何で……？石橋は動けないはずなのに……。かけていた重力は解除してしまっていたが、動けないようにちゃんと押さえつけていたのに……。

石橋はゆっくり立ち上がりながら、怪我をした背中に呪符を貼り付けていた。それを確認したとたん、目の端に赤い何かがよぎり、私を掠めた。私はそれで再び地面に突っ込みそうになり、何とかこらえて辺りを見回した。

私の頭上に、美しい赤い鳥、朱雀と、青龍が優雅に飛び回っていた。さらに後ろに、獰猛な目をした白虎、そして、黒い亀に蛇が巻きついた玄武。

石橋がなにを書いていたのかやっと気がついた。

魔法陣だ。六芒星をかたどり、さらに他の模様、四神に関係のあ

る漢字が、書き込まれている。四神のことは詳しくは知らないが、それぞれの方角を司る神様みたいな何かで（土屋は霊獣とか言っていた）、陰陽師にいろいろ関わっているらしい。土屋によると、四神を同時召喚するには魔法陣を書かなければならないし、実践ではあまり役に立たないといっていた。魔法陣を書く時間がないからだ。上級者となれば、一瞬で半透明の一匹くらいは召喚できるが、4匹いっぺんは無理だそうだ。

しかし、その魔法陣は今、完成している。実体化した、白虎、朱雀、玄武、青龍が、今にも襲ってくるに違いない。そしたら、ひとたまりもない。

「向き合わなくちゃ、いけなかった、ねえ」

私ははっと、石橋を見た。石橋は手近の玄武の蛇をそつとまで、虚無しか写さない瞳で私を見ていた。

「本当にそうかな、俺はそうは思わない」

私は涙があふれるのを感じた。石橋の口調の変化に気がついたのだ。あの、安っぽい暴言、嫌味しか言えないかの如くの口調ではなく、普通の中学生の口調だった。もはや石橋に中学生という階級が合うのかどうかも不明だが、中学生のまだ幼さの残った口調。石橋は私の話を、とりあえず聞いたのだ。ちらとでも昔を考えたのだ。それが、嬉しくも恐ろしくもあった。

「俺は正直、向き合っても無駄なこともあると思う。もし俺が向き合おうとしたとしても、いったい何に向き合えばいいのか分らない。現実を受け止めて、世間から受けのいい態度をとり、光明の両親に謝罪する、ということか？ いや違うよな、やっぱりよく分からない」

石橋は本当に分からないらしくった。

「分からないといえば、俺は基本、すべてのことが分からない。一番よく分からないのは自分のことだよな。一番よく知っているはずの自分のことが分からないって、おかしいか？」

石橋は思い出したように空を見上げた。曇天を舞う朱雀と青龍のほうに手を伸ばし、ずっと私のほうに振り下ろす。ああ、と思った。石橋はやはり、私を殺す気なんだ。私を再び見たときには、勝手に合点していた。

「あー、そうだ。俺はもともと、おかしいんだっただな。忘れてたよ」

その言葉と同時に、青龍と朱雀が、玄武と白虎が私に襲い掛かった。私の体に今までに感じたことのないような衝撃が突き抜けた。

悲鳴を上げる暇もなかった。体をずたずたに、爪や牙で傷つけられ、もう痛みさえも感じなかった。

私は真っ赤に染まった視界の中で、とうとう意識を手放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5819h/>

暴挙な天使と優しい悪魔

2011年11月17日21時30分発行